浮世絵町　孫と孫の血を継ぐ者

朧月　琥珀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
浮世絵町　孫と孫の血を継ぐ者

【Ｎコード】
Ｎ３１１０Ｐ

【作者名】
朧月　琥珀

【あらすじ】
京の都にある陰陽師　花開院家。
東の京にあるもう一つの陰陽師　安藤家。
少年陰陽師　晴明の孫、安倍昌浩の血をひくオリ主がぬらりひょんの孫の世界に舞い込んだ。
ゆらとともに闇に巣くう悪を祓え。

基本は原作沿いで行きます。作者が単行本派なので少し情報が遅い

です。すみません。

※ＰＶアクセス二十八万、ユニークが三万を突破いたしました。
いつも読んでいただき、ありがとうございます。

オリ主　紹介（前書き）

本作は漫画「ぬらりひょんの孫」と小説「少年陰陽師」のクロスオーバー作品です。（少年陰陽師の方は十二神将がメインです。昌浩は出ません（過去話では出る可能性があります）。ファンの方にはごめんなさい）

オリ主が出ますので苦手な方はご注意ください

※ＣＰはオリ主×ゆらです。気に食わない方はブラウザバックでお戻り下さい。

なおこの作品の設定は単行本十三巻時点で作成しております（鵺＝安倍晴明が判明する以前）。
その点の矛盾は目をつぶっていただけると嬉しいです。

オリ主　紹介

時は平成・・・
妖たちの動乱の中、陰陽師たちも動き出す
闇を祓い、悪を滅ぼす・・・
今ここに裏歴史の幕が開く

オリ主設定

名前：安藤（あんどう）（花開院）昌彰（まさあき）
年齢：１４歳
容姿
身長　１７１ｃｍ　体重　６２ｋｇ
御先祖の安倍昌浩にそっくりな顔立ち
黒髪で長髪（一束に括っている）

好きな食べ物：ＴＫＧ（卵かけごはん）…昌「ゆらが作った奴は格別だ」
特技：料理全般…ゆら「お兄ちゃん、男やのに…自信なくすわ～」

安倍家直系帝守護陰陽師
現在は東京に本家を置く陰陽師　安藤家本家の子

訳あって十歳の時からゆらの許嫁として花開院家に養子に入っている。
ゆらのことは妹としても、婚約者としても可愛がっている。

生まれは東京であるが京都で生活しているため、標準語と関西弁の混じった独特なしゃべり方をする。

式神：安倍晴明が使役した十二神将の分御霊（わけみたま）
霊符に封印されている。本体と同じく意思を持つ存在。分御霊といえど十分な力を発揮する。
原作開始時に使用可能なのは白虎、青龍、朱雀、玄武、六合、天后（最大で三人まで）
※四国編にて天一を召喚可能になった。
※四国編終了後、勾陣および太陰が召喚可能になった。

その他設定もありますが、ネタばれを含むので随時たしていきたいと思います。
※１１／６／４　設定の変更などにより追記・改正
※１１／８／３０　更新によって追記

オリ主　紹介（後書き）

どうも作者ですm（．＿．）m
いやー、ホントは孫×孫をやりたかったんですが・・・
陰陽師側の視点で書くとゆらと絡まないのはおかしいし・・・
でも昌浩には彰子がいるだろ！的な考えが頭から離れず・・・ならその子孫でオリ主をという感じになりました。
オリ主の名前の由来はもちろん昌浩と彰子から一文字ずつつけさせていただきました。

実際、平安時代から現代にトリップしたら色々大変でしょうしね（笑）

あくまで原作沿いで無理をせずにやりたいと思います。はい

第一夜　浮世絵町へ（前書き）

時系列的にはゆらの転校前日からスタートします。

※ゆらはオリ主をお兄ちゃんと呼びますが実の兄妹ではありません。
この点重要です。

第一夜　浮世絵町へ

「浮世絵町か…久しぶりだな」

駅に降り立った少年は束ねた長髪を翻し、大きく伸びをした。

「実家に帰る機会もそうそうなかったし、一度顔を出しとくかな？」

そう言いながら携帯を取り出し、時刻を確認する。現在午後三時過ぎ…

「とは言ってもこの時間じゃだれもいないだろうし…その前に手続きだ。ゆらの奴勝手に決めるんだもんな…」

そう言って少年は鞄を背負って改札へと歩き出した。

†††††

書類を提出したゆらはぼんやりと手続きが終わるまでの時間、窓の外を眺めていた。一年生だろうか？何人かが校庭でサッカーをしている。ワカメ頭の男が派手に頑張っているのに対して隅の方から女子の歓声が上がっていた。

「楽しそうでいい学校だな、ゆら」

「お兄ちゃん！？ななな、何しに来てん？！」

「随分な御挨拶だな。かわいい義理の妹兼婚約者が心配で来たんだが？」

「なっ?!」

妹の後に続いた婚約者という言葉にゆらは顔を真っ赤にして固まった。

「だいたい、修行に行くなら俺にも言えよ。浮世絵町なら俺の実家からでも遠くないんだから」

「そやかて修行に行くんやもん。そんなに甘えとったらあかんおもて…」

「まぁいいさ。アパート借りたんだろ?土産がある、俺も書類出してくるからそれまで待ってろ」

昌彰はそう言って持っていたバッグをゆらの傍に置くと事務室へと入って行った。

(お兄ちゃんが来てくれた…嬉しいけど、また頼ってしまいそうや…)

「終わったぞ、ゆら」

(自立するために一人暮らしを選んだんに…)

「おい、ゆら?」

「(だいたいお兄ちゃんは優し過…)はっ!今、私なんかしゃべってた?!」

「いや、小さくて何言ってるかまでは…」

昌彰のその言葉にゆらは大きく息をついた。実際はほとんど聞かれていたわけだが…

「それより帰るぞ、ゆら」

「うん…ってどこに？」

ゆらを放って、昌彰はゆらの荷物も抱え上げ、下駄箱の方へと向かっていた。

「おまえんちだ」

「うちって…ええっ？！」

ゆらは今度は驚きで固まった。

「なに凍ってんだ？言っちゃーなんだが俺の方がお前より生活力はあるぞ？」

「そんなことない！私かて料理くらいできるもん！」

言外に世話をするという意味を含ませたのだが、ゆらには届いていなかったようだ。

「それなら、夕飯をリクエストしても構わないかな？」

「ええよ！って、ええっ？！」

「どうした？料理くらいできるんだろ？」

昌彰はニヤリと笑みを浮かべた。

「うっ…わかった何がええの？」

言ってしまったからには引っ込みがつかない。

「そうだな…」

そう言って昌彰はゆらの傍へ身を屈めた。

「久しぶりにゆらの作った卵かけご飯が食べたいかな？」

「へっ？」

思いがけないメニューにゆらは目が点になった。

「ほら、当主秘蔵の溜まり醤油も持ってきた」

昌彰はバッグから黒い液体入りの瓶を取り出し振って見せた。

「…おじいちゃんに怒られるんとちゃう？」

「気にするな。少し減ったくらい気付かんだろ」

実際は気付かれて、本家に居る全員が取り調べを受けたことを昌彰とゆらは帰ってから知るのであった。

「ほら、急ぐぞゆら！」

「うん！（ほんとにお兄ちゃんは優しいんやから…）今行く」

第一夜　浮世絵町へ（後書き）

・・・・・・・・

テスト前で追い詰められているというのに突発的にネタが浮かんだので書き始めました。

ぬら孫で陰陽師側視点ってないな～というのが発端です。

しかし・・・これどうみてもラブコメ（妹萌ｒｙ）ですよね（；＾｜＾Ａ

推敲も不十分かと思いますが楽しんでいただけたら幸いです

第二夜　清十字怪奇探偵団加入（前書き）

ようやく原作に入ります。
何気に昌彰がモテてます。

第二夜　清十字怪奇探偵団加入

「ゆら、起きろ。遅刻するぞ」

「うぅん…あ、おはよう。お兄ちゃん」

ゆらが目を開けて最初に見たのは紺色のエプロンをつけた昌彰であった。

「おはよう、ゆら」

「ふぁ…なんでエプロンなんて着けてん？」

「似合わないか？」

そう言って昌彰はエプロンを外した。既に制服に着替えており、後は学ランを着るだけだ。

「べ、別に似合わんとはゆうてないやん…それにまだ七時半にもなってないやん。もう少しゆっくりできるやろ？」

時計を確認してみればいつも目覚める時間にすらなっていない。

「転校初日だぞ？職員室に挨拶に行ったりするから八時過ぎには来いって昨日言われただろう？」

「あ…」

「いいからまずは飯を食え。片付けられないから」

そう言って昌彰はゆらを布団から追い出した。

「朱雀、布団の片づけを頼めるか？」

肌身離さず持ち歩いているお守りを握り、式神を喚ぶ。

『毎回毎回、雑用に呼ぶな…』

外見が十七歳くらいに見える燃えるような赤毛の短髪に金色の瞳を持った少年の神将が顕現する。戦闘時には大剣を用いるが今は外しているようだ。

「嫌か？それなら仕方ない。天一に…」『俺がやる』

主の言葉を遮って朱雀は布団を畳みにかかった。

「相変わらずだな…そうだ、湿気がこもらないように乾かしておいてくれよ？」

布団は起きてすぐに畳むと湿気がこもって虫がつきやすくなるのだ。

『いちいち細かいな』

朱雀はそう言いながらも炎の神気を解き放ち、布団を乾燥させ始める。

「言うな。性分だ」

昌彰はそう言って台所へ向う。

ゆらは既に席について朝食をかき込んでいた。

「うまいか？ゆら」

「ふっごふふまいふぉ、ふぉみいふぁん！」通訳（すっごくうまいよ、お兄ちゃん！）

「そうか、ならよかった」

そう言って昌彰も自分の椅子に座る。箸を手に取り黙々と食べ始めた。

ちなみに今日のメニューはご飯に味噌汁、目刺の干物を炙ったもの、もやしとほうれん草の胡麻和えである。

さすがに毎日ＴＫＧでは栄養が偏ってしまうから仕方ない。

「ふぅ～、ごちそうさま」

食事を終えてゆらが一息ついた。

「食べ終わったら食器を片付けて着替えて来い俺はもう準備終わってるから」

「わかった」

食器を台所へ片付けてゆらは自室へと戻った。朱雀は既に隠形し、霊符に戻っている。

「さてと、天后」

『お呼びですか？』

銀髪翠瞳のたおやかな女性の神将が顕現した。

「ああ、後片付けを頼む」

『かしこまりました』

天后がそう言うと同時にシンクにある皿に水が絡みついた。

瞬く間に表面の汚れは水に吸い取られ、一分もたたないうちに皿洗いは完了した。

『終わりましたよ昌彰様』

「さすがだな」

『もう慣れましたよ…』

天后は軽く息を吐き出した。最初に頼まれた時は思わず聞き返したほどだ。

『初代以来ですね、こういうことをさせるのは…』

「初代って晴明様か？」

食器を棚に仕舞いながら昌彰が訊く。

『ええ、最初の方こそ我らの力をむやみに使おうとはなさいませんでしたが、慣れてくると随分と色々なことをさせられました…』

天后は昔を懐かしむように視線を宙に漂わせた。

「いろんな事って？」

『ご結婚なさる前は炊事洗濯を、奥様の若菜様が亡くなられてからはお子様の吉平様と吉昌様の子守りもさせられましたか…』

「子守りか…天后だけが？」

『ほとんど全員でしたね。主に私と天一がつくことが多かったですけど。青龍も手伝ってくれたことがありましたけど…』

「…ああ、なんとなくわかるよ…」

天后が言葉にしなかった部分を昌彰は正確にくみ取った。

見ていてほしいと頼まれて本当にただ「見ていた」だけだったとかいうそんなオチだろう…

「皆赤子の世話などしたことがなかったものですから…お孫さんができてからは…』

そう言って天后は一旦言葉を切った。

「どうした？」

『いえ…一人だけ意外な者が子守りをしたことがありましたね…』

「へぇ、気にいられたのかもな。誰だ？」

『騰蛇です。そしてその子供は私達十二神将の二代目の主…安倍昌浩様です』

「トウダ？騰蛇ってあの十二神将最強にして最凶といわれた…」

未だに自分が召喚できない十二神将最強の男の名に昌彰は驚いた。

分御霊の継承の際に一度見たきりだが、あの凄まじいまでの神気の波動はよく覚えている。

『ええ、昌浩様を最初に後継と認めたのも騰蛇でした…』

「お兄ちゃん！準備できたよ、ってまだ片付いてないん？」

ゆらがドアから顔を出した。

「あ、悪い。すぐに片付ける。天后、昔話はまた今度聞かせてもらっていいか？」

『もちろんです』

そう言って天后も隠形した。

昌彰は急いで残りの食器を棚に仕舞い、自分の部屋に戻って鞄を取って来た。

部屋を出て鍵をかける。

階段を降りたところでゆらが待っていた。

「すまん、ゆら急ぐぞ」

「うん！」

二人は揃って駆けだした。日ごろから鍛錬を積んでいるだけあって速い。

瞬く間に駅への道を駆け抜ける。

†††††

「案外余裕だったな」

校門をくぐったのは八時前。十分間に合うはずだった…

「あれ、職員室ってどこ？」

普通なら事務室の側にあるはずなのだが…

「あらへんね？」

一階にある事務室の隣は倉庫であった。

「え～っと」

「あの・・・ごめんなさい。職員室はどこですか？」

昌彰が昨日もらった校内案内図を必死で思いだしているとゆらがその辺にいる女の子に職員室の場所を聞いていた。

「勝手がわからなくて」

「ああ…二階だよ、この棟の」

「おおきに…行こ、お兄ちゃん」

「ああ、ありがとうな…ええっと」

「あ、私カナって言います。家長カナ、一年です」

昌彰が礼を言おうとして名前を知らないから詰まっていると向こうから名乗ってくれた。

「家長さんか。俺は安藤、安藤昌彰。二年で転校してきた。でこっちが…」

「ゆら、花開院ゆらです。クラスは違うみたいですけどよろしくおねがいします」

「こちらこそよろしくね、ゆらちゃん」

「っと、てな訳で職員室に顔出さなきゃいけないんだ。またね家長さん」

「はい、また」

そう言ってカナは自分の教室へと向かって小走りに駆けて行った。

「助かった、ホントにゆらは人見知りをしないな」

「そら、そやわ。小さいころからいつも家にたくさん人がおったんやから」

「それもそうか…失礼します」

そうこう言っているうちに職員室についていた。

「ああ、安藤君に花開院君か。入ってくれ。職員の皆さんにも紹介しておきます。京都から転校してきた安藤君と花開院君です」

昨日も会った眼鏡をかけた白髪交じりの教頭が招き入れて教員その他の職員に紹介してくれた。

「安藤昌彰です。今日からお世話になります。よろしゅう頼みます」

特に何の反応もないいたって普通だ。

「花開院ゆらです。兄ともどもお世話になります。どうぞよしなに」

『…？』

兄という単語に部屋の空気がざわめいた。

「ゆら…」

できる限り兄妹であることは伏せておいた方が何かと都合がいいのだが…

「何？お兄ちゃん」

「ああ、そうそう。お二人は名字こそ違いますが兄妹ですので」

教頭が思い出したように付け加えたせいで確実に兄妹だと認識されてしまった。

「まぁいいか」

教職員なら守秘義務もあるし迂闊には漏らすまい…

昌彰はそう考えて何も言わずに口を閉じた。

「それでは二人は担任の先生に…「ちょっとよろしいですか教頭先生」…何でしょうか管野先生？」

「いえ、少しばかり安藤君の髪型が気になったもので」

（うわ、やっぱりいたよ。こういう奴…）

昌彰は顔にこそ出さないが心の中では相当な渋面を浮かべた。

「これですか？」

そう言って昌彰は学ランの中に隠していた髪を取り出して見せた。

背中の中ほどまで伸びたくせのない髪の束が翻る。

「随分と長いですね…悪いがここの校則では…「宗教上の都合ですが何か問題でもありますか？」…なに？」

発言を途中で遮られて管野とかいう教師は昌彰を睨みつけた。

「うちは代々神社の神主をしています。神前に出る際には髷を結って烏帽子を被るのが正装です。それでも髪を切れと仰いますか？」

昌彰も負けじと睨み返す。こんなもの妖怪との睨みあいに比べたら屁でもない。

「花開院君。そのことは本当かね？」

管野はいちいち細かかった。完全に傍観者になっているゆらに唐突に質問をぶつけてきたのだ。

「え、あ、はい。本当です」

今度はゆらも空気を読んでくれたらしい。素早く合わせてくれた。

「管野先生、確かに安藤君の家は神社の神主です。宗教上の都合ということで問題はありません」

事情を知っている教頭も援護射撃をしてくれる。

（さっきは気が利かないとか思ってごめんなさい…）

昌彰は心のなかで教頭に対する評価を改めた。さっき兄妹だとばらされたのを少し根に持っていたようだ。

「…そうですか。なら結構です」

やや憮然とした表情で管野は椅子へ座った。

「では、中山先生、安達先生。よろしくお願いします」

『わかりました』

女性と男性の教員がそれぞれ応じた。

「よろしく。安藤君」

「よろしくお願いします。安達先生」

昌彰は随分と上にある顔を見上げながら言った。昌彰も身長は１７０ｃｍはあるから決して背は低い方ではない。むしろ中学生としては高い方だ。

だが、向かい合う安達は間違いなく１９０ｃｍ近くあった。それでも威圧感が無いのは顔に浮かぶ微笑みのせいだろうか。教師というよりむしろ友人として生徒達に接しているような雰囲気があった。

「それじゃ、お兄ちゃん。また後でね」

「ああ、帰りにな」

そう言ってそれぞれの担任に連れられ、昌彰は四階の二年の教室に、ゆらは三階に向かった。

「それにしても、君もやるね」

教室に行く道すがら安達は昌彰に感心したように話しかけた。

「何がですか？」

おそらくはさっきのやり取りだろうなと思いながらも一応聞いてみる。

「さっきの管野先生とのやり取りだよ」

わかってるでしょ？的な視線で微笑まれた。

「まずかったですか？先生の面子丸潰れにしちゃいましたし…」

昌彰がすまなそうに言うと安達は思わず吹き出した。

「君は優しいな…あれくらいでちょうどいいよ。何かとあの先生は生徒に難癖をつけることが多くてね…ここだけの話、教員たちの間でもよくは言われてないからね」

「はぁ…そうですか」

そんな話をぶっちゃけられたところでどう反応すればいいのかわからない昌彰である。

あまり他人のゴシップには興味がないのだ。

「まあ、気をつけた方がいいよって話だ。結構執念深いからね。あいつ」

「…気を付けときます」

昌彰がそう返した時にはもう教室の前についていた。

「ここで待っていてくれ、呼んだら入って来るように」

それなりにがやがやと騒がしいクラスのようだ。話声が漏れ聞こえてくる。

「おはよう皆」

あちこちから、おはようございますと声が上がる。

（あの性格なら生徒からも好かれてるだろうな…）

昌彰はいい担任にあったなと心の中で喜んだ。

「…では、最後に転校生の紹介をする」

ええぇ～と驚きの声が廊下にも聞こえた。まあ、昨日の夕方急に決まった転校だ、連絡は何もなかったんだろう。

「入ってくれ」

昌彰はその声と同時にドアを開け、教室へと足を踏み入れた。

翻る黒髪に女子からは羨ましそうな視線が、男子からは奇異の視線が降り注ぐ。

「京都から転校してきました。安藤といいます。フルネームは安藤昌彰。どうぞよしなに」

昌彰はゆらを真似て締めてみた。京都から来たといった手前、少し方言を混ぜた方が効果的だという判断からだ。

「ちなみに以前の学校では剣道と薙刀と合気道をやってました。この学校にどれだけの実力者がいるかとても楽しみにしています」

にっこりと一見爽やかな、しかし相手を威嚇するような笑みを顔に張り付けた。

女子は大抵好意的に受け止めたようだが、一部男子は思わず目を逸らした。威嚇の面を感じ取ったのだろう。

「それじゃ、皆仲良くするように以上で朝礼終わり」

定番の台詞を言って、安達は教室から出ていった。

「さてと…手始めに図書館にでも…」

そう言って昌彰が席を立とうとした瞬間、周りを他の生徒から囲まれた。

「ねえ、安藤君。質問していい？」

大半が女子生徒なのは何故だろう？

聞かれたら殺意を抱かれそうな考えを昌彰は心の中で呟いた。

「構わないよ（まあ早く溶け込めるならそれに越したことないか…）」

そう思いつつ、昌彰は次々に浴びせかけられる質問に応えていった。

「何月生まれ？」

「四月十六日で牡羊座」

大体一年生の時は友達から祝ってもらえない誕生日だ。誕生日の早い人たちは結構わかってくれるだろう。

「血液型は？」

「B型だ」

「うそ～」とか「そうは見えない」とかいう言葉が周りから聞こえた。

「別に俺は血液型占いは信用していない」

昌彰はぶっきらぼうにそう言った。

「占いとか嫌い？」

「いや、きらいじゃない…」

むしろ本職だと思わず言いそうになってしまった昌彰である。

「じゃあ好きな女の子のタイプとか？」

「…特にない。強いて挙げれば自分の背中を任せられるやつがいい」

思わずゆらを思い出して背中を預けられるやつと口にしていた。

「好きな料理は？」

「…卵かけごはん…」

微妙に笑いを漏らした男子がいたので睨みつけておいたら静かになった。

「じゃあ、彼女とか前の学校にはいなかったの？」

「前の学校には彼女はいなかったな…」

きゃっとか言う悲鳴が漏れたのは何故だろう。

ざわざわと騒がしいうちに時間になったのか先生が入ってきてその話は打ち止めになった。

―放課後―

「安藤君。一緒に帰らない？」

何人かの女子が連れだって誘ってきた。

「悪い、今日は用事があるんだ」

「ええ～」とか不満そうな声が上がるが、そうはいっても俺にも事情がある。

今日の夕飯の買い出しに行かなければならないのだ。

素早く教室を脱出し、下駄箱へ向かう。

「ん？あれは…」

一年の下駄箱に連れ立って歩いていく一団があった。

「行くぞ。清十字怪奇探偵団！」とかいう声が聞こえてくる。

「あれが噂に聞く清継とかいう奴か…」

昼休みに色々とこの学校の事を聞かされていた。その中に一年で才能があるくせに趣味と髪質が残念な男がいると聞いていたが何やら奇妙な団体まで結成してしまったようである。

「あんまりお友達にはなりたくないタイプだな…」

そう言ってさっさと買い物に行こうと靴に履き替えていると…

「花開院君という新しいメンバーも加わったことだし、今日は幸先がいい！」

「！（花開院か…この名字がこの学校に二人もいるわけがない…よな？）」

溜息を吐きつつ、一年の下駄箱の方を振り向いてみればそこには案の定ゆらの姿もあった。

怪奇と銘打つくらいだ。妖怪関係の話でもしてたんだろう。ゆらとしては聞き過ごすことができなかったに違いない。

「俺も混ぜてもらっていいかな？」

「もちろん！って誰だい君は？」

勢いで頷いた清継が改めて声のした方を振り返った。ゆらも昌彰に気付いたが、素早く唇の前に人差し指を立てると黙ってうなずいた。

「二年の安藤昌彰という。君の噂はよく聞いているよ、清継君」

「二年生？ということは先輩ですか？」

一応年長者には敬意を払うのだろう、清継は敬語で話しかける。

「まぁそうなるね。ああ、敬語は使わなくていいよ。面倒でしょ？よろしく」

昌彰はそう言って手を差し出す。

「そうですか…そう言えば噂って？」

「うん、なかなか妖怪に詳しくて色々やっている人だってね」

主に残念なことが多かったが…

「それは嬉しいな。こうして活動の輪が広がっていくことはいいことだ！ぜひとも安藤さんも我が清十字怪奇探偵団に参加してほしいんだが」

「構わないよ。面白そうだしね」

こうして、昌彰は清継が率いる清十字怪奇探偵団に加入することになった。

（清十字怪奇探偵団ねぇ、ネーミングセンスは最悪だな。まぁ、下手なことやって妖怪に襲われたら目覚め悪いしな…）

第二夜　清十字怪奇探偵団加入（後書き）

・・・・・・

やはりラブコメ臭が強いですね（＾＾；

しかし昌彰、料理の腕前凄いですね・・・

ゆらは卵かけご飯とか、タイムセールのお惣菜とかから料理できないだろうという作者の独自解釈です（笑）

第三夜　露見と邂逅～陰陽師と魑魅魍魎の主～（前書き）

テストの重圧から解放され、少々頭のネジが緩んだ状態で書きました・・・
文章の構成が甘いかもです・・・

第三夜　露見と邂逅～陰陽師と魑魅魍魎の主～

ギィィィ

バァァ…ン

いかにもな音をたてて両開きのドアが開いた。

「で、ゆら。一体何があるんだ？」

さりげなく後ろの方を歩きながら昌彰はゆらに問いかける。

「『友人の怪奇蒐集マニアから買い付けた呪いの人形と日記がある』てゆうてたけど…」

そう言いながらゆらはぐるりと辺りを見回す。

「これだけ集めて全部それっぽいだけで本物が一つもないのがすごいな」

展示ケースや棚の一角を占領して置かれているのは確かにオカルト関連の品物ばかりだ。

だが、それら全てが霊性の欠片もない偽造品ばかりなのである…

「ある意味才能かも知れへんね」

来る途中に如何に妖怪に対して執着しているかを聞かされ続けていたが故に、清継がそれなりに哀れに思えてくるゆらと昌彰である。

「さてこれがその問題の日本人形なんだが…」

少し離れたところに置かれていた日本人形に全員の視線が集まる。

「…これは、当たりかな？」

今までの偽造品とは違い、確かに妖力を持っている。とはいっても微々たるもの、害をなすほどの力を持たないなりかけだ。

「本当に呪いの人形なん？」

ゆらもそれを感じ取ったのか清継に質問している。

「信憑性は高いと思う。一緒に持ち主の日記がある」

「日記？」

「読んでみよう」

そう言って清継はその日記を取り出した。

（日記か…嫌な感じがするな）

昌彰はさりげなく袖に仕込んである霊符を探った。

「二月二十二日…引っ越しまであと七日。昨日、これを機に祖母からもらった日本人形を捨てることにした…」

清継が日記を読みあげていく。

（なりかけとはいえ付喪神を…これだから現代人は…）

昌彰は心の中で苦い顔をした。こいつくらいでは祟りとまではいかないが、体調を崩すほどの呪いにはなるだろう。

「雨が降っていたが思い切って捨てた…」

そこまで清継が読み上げた時、昌彰の背後から何かが駆けだした。

「うぉっ?!」

昌彰は突き飛ばされそうになりながらも辛うじて避ける。

「すると今日、なぜか捨てたはずの人形が…」

その言葉が終らぬうちにリクオは人形にダイブしていた。

「どぉしたー!!リクオー!」

その素っ頓狂な行動に島が驚いて叫ぶ。

（今微かに妖気が…）

昌彰はリクオが飛び出した一瞬前に今までは感じなかった妖気を感じ取っていた。

「ったく、名誉会員から外してしまうよ…まあいい、次だ」

昌彰がその気配を確実に掴む前に清継は日記の続きを読み始める。

「二月二十四日、彼氏に言って遠くの山に捨ててきてもらった…」

（まただ。微かだけど妖気が…）

「（お兄ちゃんこれって…）」

ゆらが傍によって囁いてきた。

「（ああ、結構ヤバい類かもしれない…）」

そう言っている間にも清継は日記を読みあげていく。それと同時にほんのわずかだった妖気が徐々に濃密さをましてきた。

「（若…これ…）」

「（あぁ…まずいぞ…）」

昌彰からは人形の真正面にリクオと氷麗がいて直接見ることができない。

それでも漏れ聞こえてくる二人の会話から確実に何かが起きていることがわかった。

（なんでこんな急に…まさか…）

「二月二十八日　引っ越し前日　おかしい…仕舞っておいた箱が開いている…」

「（まさか…！）清継！日記を…「読むのを止めてぇぇ――――！！」

思い当って清継を止めようとする昌彰の声にリクオの絶叫が被った。
その背後には小さな刀を振りかぶり、憤怒の形相を浮かべたあの日本人形がいた。

「…！ゆら！」

無言で頷いたゆらは財布から人型の呪符を取り出し、人形に向けて放った。

ゴッ

爆音と爆風が吹き荒れる。

「浮世絵町…やはりおった」

皆がそれに驚いているところでゆらが呪符を構え、静かに宣告する。

「陰陽師　花開院家の名において…妖怪よ、あなたをこの世から…滅します！！」

「…お…陰陽師だって?!け…花開院さん?!今…確かに…」

清継が詰まりながらも何とか事実を確認する。

ゆらは無造作に頷いた。

「じゃ、じゃあ…今のこいつは…」

シャァアア

ゆらの霊符に囚われた人形が蛇のような威嚇音をあげる。

「うわっ?!」「やっぱり妖怪なんだぁ!!」

島とカナが慌てて人形の側から離れる。

「ええ、本当に危ないとこでした」

（もっとも責任の大半は無造作に日記を読みあげ続けた清継にあるといってもいいがな…）

昌彰がちらりと清継に視線を向けると…

「ほ…」「ほ?」

一音だけ発して固まる清継に皆の視線が集中する。

「本当だったんだ!!!い…いたんだ!!陰陽師…ということは…妖怪も…!!」

…何故か感激に打ち震えていた。

「うぉぉ素晴らしい!」とか「ボクの持論は間違っていなかった!!」とか叫んでいるが、傍から見たらただの危ない人だ…

（それから…）

先程の妖気を感じた時から感じた行動の違和感。昌彰はその大本であるリクオに視線を向けた。

「（若…逃げましょう…一刻も早く…）」

「（雪女？…しっかりー！！）」

隣にいる氷麗は顔が完全に青ざめていた。唇にはチアノーゼが出ている。

「私は…京都で妖怪退治を生業とする陰陽師、花開院家の末裔…」

ゆらが説明を続ける。妖怪の主が住むという言葉が出たところでリクオと氷麗がギクゥッと硬直した。

「青龍…一応確認したいんだが…」

昌彰が呼びかけると青龍は昌彰にだけ見える程度に顕現した。

『間違いなく妖だな…もっとも男の方は半分以上人間のようだが…』

「半分以上？…それって…『ぼんやりしてると足元をすくわれるぞ？』…え？」

青龍はその言葉を最後に隠形した。

昌彰が急いで人形の方を見てみると、人形は霊符の拘束を解き、暴れようとしていた。

「ガアァァ」

「チィッ！」

昌彰は舌打ちした。ゆらでは間に合わない…なら…。拳から人差し指と中指を伸ばし、刀印を組んだ。

人形の正面に立ちはだかり、空中に力ある五芒星を描く。

「『禁！』」

「グギャァァ？！」

不可視の障壁が飛びかかって来る人形の動きを止めた。

「『必神火帝、万魔拱服』！」

ゴァッ！

魔を滅する焔が人形を包み込み、灰すら残さず焼き尽くす。

「油断したな、ゆら。雑魚とはいえ、止めを刺さずに敵に背を向けるな」

昌彰自身も青龍からの忠告で気付いた訳だが…余計なことは口に出さない。

「お兄ちゃん…」

「「「「「え？え…えええぇっ？？！！！」」」」」

ゆらと昌彰を除く五人の絶叫が資料室に響き渡った。

「皆に改めて名乗ろう。俺の名は花開院　昌彰。ゆらと同じ陰陽師でゆらの義理の兄…そして…」

「私の許嫁や」

昌彰が一瞬言うべきか躊躇った瞬間、ゆらが続きを口にしていた。

「「「「「「はい？」」」」」」

今度は五人の時間が止まった。

特にリクオと氷麗の反応が見物だった。

（まあ、そうなるわな…いきなり陰陽師が出てきたかと思えばもう一人陰陽師が登場…しかも兄で婚約者）

前の学校では突っ込みに徹していた昌彰でもどこから突っ込むべきか判断に迷うところである。

「安藤は俺の旧姓。今は花開院家に養子に入っている…下手に花開院の名を出すと強硬派の妖が狙ってくるから一応名を伏せておいた、それだけだ」

ぽかんとしていた清継他四名だが、どうにか気を取り直したようだ。

「…で、いつまでゆらの手を握ってるんだ。清継？」

さっきまで清十字怪奇探偵団本格始動だとかどうこうやっている時に掴んでいた手を清継はまだ放していなかった。

「はっ?!いえ、忘れてました。他意はありません!」

これが、昌彰が清十字怪奇探偵団の力関係の頂点に立った瞬間だった。

†††††

その後、清継はゆらと昌彰を質問攻めにしていたが、昌彰が帰って夕飯の支度をしなければならないと言って、今日のところは解散と相成った。

清継は二人を夕食に招待しようとまで言ったが、昌彰は清継の人格形成によろしくないと思ったので断った。

「ゆら、今日は先に帰ってろ」

「え?なんで?買い物いくんやろ?」

ゆらは怪訝そうな視線を昌彰に向けた。

「家計は俺が預かる。さっきの縛魔術が破られたのは、呪符とレシートが混ざってたからだろ？」

「う…」

ゆらの術がその辺の付喪神のなりかけごときに破られるはずがない。昌彰が不審に思って調べてみれば、人形に張りつかずに落ちている数枚のレシートがあった。

「普通、財布に呪符を仕舞うか？」

しかもレシートに混ぜて…と続ける昌彰にゆらは顔を赤くして反論した。

「し、しゃあないやん。この財布は魔除けの効果もあんねん。そうそう変えられへんのや」

ただの悪趣味な財布では無かったわけである。

「なら今度、ましな呪符入れを作ってやるから。それまでは家計を俺に任せろ。いいな？」

「…うん、それなら…」

ゆらはさらに顔を赤くして、頷いた。

†††††

そんなやり取りを経て、今昌彰は一人で行動していた。

視線の先にいるのはカナとリクオ、氷麗である。

「それより次の日曜日、忘れちゃダメよ！」

じゃあね～、と言ってカナがリクオ達と別れた。

「若～、大丈夫なんですか？日曜日…清十字怪奇探偵団は奴良組本家に集合って！！」

「大丈夫だよ…たぶん…」

「奴良君、及川さん…だったかな」

昌彰はそう話している二人に背後から話しかけた。別に意図したわけではないが…

「「！！！」」

背後から聞こえたその声にリクオと氷麗は凍りついた。

（この声、さっきの…）

（若、ここは私が…）

（だめだって、さっきの焔を出されたら…）

（それは…）

こそこそと囁きかわす二人に昌彰はできる限り柔らかく話しかけた。

「あ～、そんなに硬くならんでくれるとありがたいんやけど…」

「え、あ、すみません…」

「それで、何の用ですか…え～っと…」

氷麗がリクオを庇うように前に出た。

「好きなように呼んでくれていいよ、及川さん。それとも雪女って呼んだ方がいいかな？」

「っ！！…陰陽師…あなた…！！」

氷麗の瞳には先程までの怯えた様子は見受けられない。

リクオを護るためなら今ここで戦うことも辞さない構えだ。

「ちょっと待って氷麗！安藤さんも！…ここじゃなんですから場所を変えましょう」

リクオが間に割って入る事によって一触即発の空気は四散した。

「そうだな。夕方とはいえ人目は多い」

「…若、それと陰陽師もこっちへ」

昌彰が同意すると氷麗は二人を近くにある公園にまで連れて行った。

すぐ近くに神社があり、そこも奴良組傘下の土地神がいる。

「…で、何の用ですか？陰陽師」

氷麗は未だに臨戦態勢だ。相当雪女と呼ばれたのが気に食わなかったらしい。

「まず最初に確認しておきたい…君達は妖だね…？」

昌彰は一角に設置してあるベンチに座っていた。

「そうだと答えたなら滅しますか？」

昌彰の単刀直入な質問に氷麗がそう問い返す。

「そう言うということは認めるということだね…次の質問だ。君達は人に害を為す気があるかい？」

「…ボクは…」「…どういう意味です？」

リクオと氷麗には昌彰の意図が読めなかった。

「言葉通りの意味だが？」

「妖怪を？滅する〃のが陰陽師の仕事じゃないんですか？」

氷麗は理解できないというように昌彰を睨みつける。

「それは花開院の考え方や。？うち〃の元々の仕事は帝に害為す敵を排除すること。敵意のないやつは放っておく」

昌彰は薄く笑みを浮かべて、氷麗の視線を受け流した。

「うちって…どういうことですか？」

昌彰の言葉を聞いて、リクオが前に出てくる。

（若、危ないですって！）

「俺の父親は安倍家直系、帝守護陰陽師、安藤昌樹。帝を護る盾であり、剣でもある安藤家の人間や」

花開院と対となるもう一つの陰陽師。それが安藤家。

帝に害為す敵を排除するために存在する、それ故に敵を増やさぬよう害意のないものまでは討ち滅ぼさない。さらに言えば利用できるものは利用する…妖であろうと。

「やから、妖怪やゆうていきなり滅したりはせぇへん。安心しい」

「…そうですか」

明らかに安堵の息を吐きながらリクオは応えた。

「もっとも…人に、ゆらに害を為そうというのなら躊躇いなく討つ。それだけは覚えておいてくれ」

先程までの柔和な雰囲気は一掃され、冴え冴えとした圧倒的な霊力の奔流が巻き起こった。

「若！」「ん？」

公園の入り口から新たな声が聞こえた。

「てめぇ！若に何しとんじゃ～っ！！！」

怒鳴りつけながら青田坊は昌彰へと拳を振り上げた。

「あ、青！落ちつい…」

リクオが止めようと声を発するがそれは最後まで言うことができなかった。

「…てめぇ…「下手に動かない方がいい。腕が折れるぞ…」っく…」

昌彰はまさに神速に等しい青田坊の拳を受け流し、手首を掴んでねじりながら引き倒して地面に抑え込んだ。

「安藤さん！彼を、青を放してください…」

「…」

昌彰は無言で青田坊の拘束を解いた。青田坊は右肩をさすりながら昌彰を睨む。

「大丈夫、青？」

「若、すみません。しかし…あいつは？」

駆け寄って来るリクオに青田坊はまだ昌彰の方を睨みながら訊いた。

「安藤昌彰。陰陽師だよ、青？でいいのか？」

「誰が青じゃ！？我が名は青田坊！かつて千人の武士を屠った破戒僧よ！」

青田坊は陰陽師と名乗った昌彰に怯むことなく名乗りを上げた。

「（元人間か…それにしては人間に対しての怨嗟や恨みが見受けられない…）…そうか、覚えておこう」

昌彰は睨む青田坊の視線を軽く受け流した。

「…昌彰…さん。さっきの質問に答えます…青も氷麗も聞いてほしい…」

「若？」

リクオの静かな声音に氷麗も駆け寄って来た。

「昌彰…確かに俺は四分の三は人間だ…だから…好き好んで人に害をなすような真似はしねぇし……させるつもりもありません」

（夜…妖怪の血が活性化したのか？）

既に日は落ち、周囲は闇に染まっていた。公園の街灯が頼りなく輝く。

「若？！それは…「それは君に流れる血にかけてかな？」

氷麗が声をあげるが昌彰はそれを遮る。

「ああ、ボクの祖父　ぬらりひょんの血にかけて誓おう」

そう言うリクオの姿は髪が白くなり、瞳は緋色に染まっていた。

「若!?そのお姿は…」

「それと…」

リクオはそこで一旦言葉を切った。

「?どうした、奴良」

「ボクの事はリクオと呼んでいい…俺も昌彰と呼ばせてもらう」

青田坊と氷麗は驚いた。このような状態は見たことが無い。まるで普段のリクオと覚醒したリクオが混ざり合っているようだ。

「いいだろう。リクオ、その誓い確かに聞いた…」

昌彰はどこか嬉しそうに微笑む。

「それじゃ、これで失礼させてもらおう…ゆらも待ってるだろうしな」

そう言って昌彰は踵を返した。

「昌彰!この事は…」

リクオの言葉に昌彰は足をとめた。

「ゆらには言うつもりはない…それでいいか？」

「ああ…じゃあな、昌彰」「じゃあな、リクオ」

第三夜　露見と邂逅～陰陽師と魑魅魍魎の主～（後書き）

あとがき

いや～随分早く出しちゃいましたね。

夜と昼の混ざった姿！

言い訳させてもらうと、清継の家であれだけ派手に動けばバレないハズもないし、必ず対話しなきゃいけないと思ったんですよね・・・で、そのまま見逃すんじゃ変だし・・・けどここであんまりリクオが決意しちゃうと牛鬼が・・・

ってな具合で、昼夜バージョンを持って来た訳です。

ちなみにリクオはこの時の事をうっすらとしか覚えてません。

というわけで琥珀でした。

感想、ご指摘等がありましたら書いていただけると嬉しいです。

第四夜　一番街へ～誓いを果たすために～（前書き）

いかんいかん・・・
ついモンハンにのめり込んでいました・・・
すみませんｍ（．．）ｍ

第四夜　一番街へ～誓いを果たすために～

―日曜日―

「帰りはいつごろになる？」

「わからん。清継君の気合次第やと思う」

「そうか…あまり遅くなるなよ？」

玄関先で交わされる二人の会話。これだけ聞いているとどこの新婚夫婦だと突っ込みたくなる義理の兄妹の会話である。男女逆転ではあるが…

…まぁ、昌彰とゆらは婚約者だからあながち間違ってはいないとは思えるが…

「わかってる。一緒に行けたらよかったんに…」

昌彰と一緒に行けない事実にゆらは表情を曇らせた。

「仕方ないだろ？今日、俺の荷物が届くんだから」

昌彰はいきなり修行に出たゆらを追いかけてきたため、必要最低限の荷物しか持ってきていなかった。

故に花開院本家から今日、荷物が送られてくることになっている。

「終わってからでも来れへんの？」

「昼過ぎに届くはずだからな…片付けが早く済めば行くかもしれん」

パァッとゆらの顔が明るくなる。

「ほなら、私も手伝う！」

「いや、待て。清継はお前もしくは俺のどちらかから話をしてもらいたがってるんだぞ？二人とも来れませんじゃさすがに可哀そうだろ」

「あ…そやな」

ゆらは見た目にもわかるほどシュンとなった。

「ほら、そろそろ出ないと遅くなるぞ？」

玄関に置いてある時計を目で示しながら昌彰はゆらを促した。

「あ、うん。ほな行ってきます！」

「いってらっしゃい。リクオのところに迷惑かけるなよ」

「わかってる。それじゃ」

そう言ってゆらは制服で出かけていった。

（すまない、ゆら…）

ゆらを見送りながら昌彰は心の中で謝った。

昌彰は最初から奴良家に行くつもりはなかった。行けば氷麗や青田坊とも会うだろう。今会えば無用な諍いを起こしかねない。そう考えたのだ。

「さてと…天后、手伝いを頼む」

『承知いたしました』

†††††

―その頃の奴良家―

『だから…若、な～んでワシらがそんなコソコソせにゃ～ならんのです?!』

『人間の友達が来るから…隠れろだぁ?!』

『はぁん!?』

『ワシらは妖怪一家なんですがね――――!!』

リクオは必死で家にいる妖怪を説得していた。当然納得されるはずもなくブーイングが起こる。

「事情はわかるけど、頼むよ…君らのためでもあるんだ」

『ワシらは人間からおそれられてナンボ!そいつらが何者だっちゅーんですかい?』

さらに激しくなる抗議の声。だがそれはリクオが発した次の言葉で水を打ったように静まった。

「陰陽師の末裔…」

『さーみんな、隠れるぞ！』

『そうだな！あ、若。他の連中にも言っときますんで！』

『急げ！若の命令だ！』

掌を返したように慌てて隠れ出す妖怪たちにリクオは思わず深い溜息を吐き出した。

「若、陰陽師というとあいつもくるんですかい？」

横から青田坊が訊ねてきた。

「あ、いや。来るのは花開院さんだけみたい。昌彰さんは、なんか引っ越しの荷物が今日届くとか言ってたから」

†††††

「さてと…青龍、段ボールを運ぶのを手伝ってくれ」

運び込まれた段ボールは十数個。衣服などは軽いが陰陽術関連の書籍やらもごまんと詰め込んであるのでそれらはかなりの重さがある。

『…なんで俺だ？』

青龍は深い蒼の瞳をすがめた。

『私がお願いしました』

『天后…ふっ、お前も変わったな』

青龍は軽く天后を睨みつけたが不意に口元を綻ばせた。平安の時代より千年。悠久の時を生きる十二神将も多少なりとも変化を示すようである。

『あなたもですよ、青龍』

かつてなら即座に謝ったであろう天后も今は穏やかに微笑んで青龍の視線を受け流すことができる。

「…二人とも終わってからにしてくれるか？」

ちなみにこの二人も天一と朱雀ほどあからさまではないが恋仲である。

朱雀曰く、「千年くらい前からそういう空気はあったけどお互い意地っ張りだったからな～」

最近になってようやく恋仲であると認めるようになったらしい。

『承知いたしました』『言われるまでもない』

二人の神将は揃ってそう答えて荷物を運び始めた。

「…こう考えると身の周り、恋人同士が多いな…」

天一と朱雀しかり、青龍と天后しかり、他にも騰蛇と勾陣、玄武に太陰あたりか…

昌彰は自分も段ボールを一つ抱えて自分の部屋へとはいって行った。

未だ天一と騰蛇や勾陣、太陰は召喚できていないため、実際に揃ってみたのは青龍と天后だけだが、朱雀の天一との惚気話や、玄武の太陰との苦労話を聞くになかなか個性的なカップルであることは想像に難くない。

勾陣と騰蛇に関しては勾陣の親友である天后から聞きかじった程度だが最強とそれに次ぐカップルとは…

思わず、喧嘩したらすさまじいことになりそうだなと漏らすと天后は笑って、騰蛇が勾陣に手をあげることはないと言った。

あの二人には他の者にはない絆があると千年前は騰蛇を嫌悪していたらしい青龍までがそう言うのだから相当なものなんだろうなと昌彰は感じていた。

『昌彰様、この服は?』

「えっ?」

作業しながら思考に没頭していた昌彰は不意に後ろから声をかけられた。

『何故か女物の服が入っておりましたが…』

「ああ、それはゆらのだ。あいつパジャマ以外私服持ってきてなかったみたいだからついでに送ってくれるように頼んだんだ」

女装趣味があるなどというわけでは断じてない。

†††††

…一方、奴良家では…

「なんかものすごい妖気を感じるの…でもわからない…」

ゆらは清継達を連れだって奴良家の廊下を歩いていた。家のあちこちから微弱な妖気が漂っているので感覚が狂ってしまっているのだろう。

「え？ど…どういう意味だい？」

清継がそう問うた時にようやくリクオが追いついてきた。

「この家って妖怪屋敷なんじゃ…？！」

「（既にほとんどバレてる――――？！そんな…ぼくの平和生活が～～）みんな～戻って妖怪の話しよ～よ～。あ、それよりゲームしようよ。古今東西妖怪でやる～？なんて～」

「だめだ！奴良君…君にはあとでじっくり話を聞かせてもらう」

必死にリクオは戻らせようとするが、清継がバッサリと切り捨てた。

「大浴場…水場か…奴良君、失礼を承知でのぞかせてもらうわ」

「え！！」

止める間もなくゆらは脱衣所を抜け、大浴場の扉を開けはなった。

「…」

ゆらの目の前に広がるのは温泉顔負けの大浴場。それだけで何もいない…

「ね…っ、ホラいないでしょ？」

実際には浴槽のなかやら飾りの岩の陰に色々と隠れているのだが…

「いない…ですね」

ゆらも多少の違和感を覚えつつも素直に引き下がった。

だが、それで留まるはずもなく…

「ここからあやしい臭いがする！」

次は仏間の戸を開けはなった。

「おぉ：すごい」「金ピカの仏像が…」

清継達が感嘆の声をあげる。

「うん？この仏像…」

その中の一体にゆらは目をつける。

（！！！）

リクオの背中を冷や汗が流れる。その仏像の中に納豆小僧や小鬼が隠れているのが感じ取れたからだ。

「う～ん？」

ゆらは何かを感じるようでしきりに唸っている。

「す…すごいでしょ、それ…」

悪趣味だよね～と続けるリクオであるが実際はゆらが気付かないかヒヤヒヤしている。

「触るとじいちゃんに怒られるからさ。ね、ほら何もいないじゃない。戻ろうよ」

リクオはゆらを押すようにして部屋から出そうとした。

「そうやね…とりあえずお札はっておく…」

（ひぃぃ！若ぁ、はがして下さいぃ）（あ、後でねぇー！）

中にいる納豆達の悲鳴が聞こえたが後でどうにかするとしか言えなかった。

「ここは！」

（そう言えば…前にもこんなことがあった様な…）

家の中をあちこち探し回るゆらと清継達にリクオは前回の旧校舎探検を思い出した。

「なんだいないじゃないかー」

「お…おかしいなぁ」

（昌彰さん！助けてください！っていうか何で来てくれなかったんですか～？！）

†††††

「ん？」

『どうした？昌彰』

不意に声をあげて本を並べる手を止めた昌彰に青龍も段ボールを開ける手を止めて訊ねる。

「いや、誰かに文句を言われた気がして…」

†††††

（無事に終わった～～）

清継達四人を見送った後、リクオは大きく息を吐いた。

座敷には先程まで隠れていた妖怪たちが精根尽き果てように転がっている。

「まったく…ワシを見習わんかい。たかが陰陽師の小娘一人に大あわてしよって」

一段高くなったところでリクオの祖父、ぬらりひょんがぼやいた。

「ワシなんか大昔は陰陽師の本家に行ってメシ食って帰って来たこともあったぞ」

「それは総大将しか出来ません」

側に控える木魚達磨がツッコんだ。

「とはいえ、みなも妖気ぐらい消したり出来なくては…付喪神ならモノに戻るとかいくらでも方法はあるだろうに…」

木魚達磨が言うとその辺に転がっている妖怪が一斉に喚きだした。

（あぁ、疲れた～）

「リクオ、ちょっと来い」

毛倡妓に団扇で扇いでもらいながら安堵していたリクオはいきなりぬらりひょんに呼ばれた。

「なに、じいちゃん？」

「青と雪女から報告を受けたんじゃが…正体がばれたんじゃと？それも陰陽師に」

「！…」

「何ですと？！それでは…「最後まで話を聞け、達磨」…申し訳あ

りません」

ぬらりひょんの言葉に木魚達磨が声をあげるが、ぬらりひょんはそれを制した。

「で、どうするんじゃ？リクオ」

「え？」

祖父の意外な言葉にリクオは反応に困った。てっきり責任を追及されるとばかり思っていたからだ。

「バレっちまったもんは仕方ない、問題はそいつをどうするかだ」

「どうするって…」

「見逃してくれるように頼むのか、脅してでも口止めするのか、最悪口封じに殺すのか。もっとも、そうなるとこちらにも被害が出るじゃろうがのう」

殺すという単語を口にしてはいるがぬらりひょんはそうするつもりはなかった。

既に、その陰陽師とリクオが和解していると聞いていたからだ。だからこれはその時に言ったリクオの言葉「人に害を為すつもりはないし、させない」、その真意を確かめるための問い。

「なっ！？殺すなんて…昌彰さんはボクが人間に害を為さない限り手を出すことはないっていってくれたんだ！」

リクオの言葉に木魚達磨は一瞬ぽかんと固まった。ぬらりひょんは驚いてはいないが何か引っかかるような顔をしていた。

「な、何を生ぬるいことを！相手は陰陽師ですぞ？！」

「待て、達磨。」

声を荒げる木魚達磨を再びぬらりひょんが抑えた。

「総大将？！「リクオ、その陰陽師の名前は？」…」

なおも抗議の声をあげる木魚達磨をぬらりひょんは黙殺した。

「昌彰、安藤昌彰だけど…どうしたのじいちゃん？」

名前を聞いた途端黙り込んでしまったぬらりひょんにリクオは怪訝そうに声をかけた。

「総大将？」

先程まで声を荒げていた達磨もぬらりひょんの態度を疑問に思ったのか静かに次の言葉を待った。

「安藤か…」

氷麗と青田坊からの報告には陰陽師の名前が無かった。

「リクオ、その言葉は信用に足りるのか？」

「総大将？！」

「え…あ、うん」

陰陽師の誓いは言霊だ。決して違えることはない。そう言ったのは昌彰であった。

「ならいい。達磨、話は後でする。もういいぞ、リクオ」

まだ何か言いたそうな木魚達磨を黙らせてぬらりひょんはリクオを下がらせた。

そのまま木魚達磨を連れて奥の私室へと入った。

「総大将…一体?」

「昔の話じゃ…」

――――

「どうしちゃったんだろ。じいちゃん」

「若~、ご飯ですよ~」

「あ、今行く~」

祖父の態度に困惑しながらも氷麗が自分を呼ぶ声に応えて座敷へ向かおうとした。

『若…リクオ様』

リクオはそれとは別に自分を呼ぶ声が聞こえて振り返った。

「ん…？（ネズミ…の妖怪？）」

『お初にお目にかかります。私、旧鼠組の下っ端の使いでございます…』

ネズミは小さな頭を下げて名乗った。

「旧鼠組…？（知らないな…）」

『ハイ、浮世絵町の一番街に住む者です。実は…』

†††††

一話はここで少し遡る一

（あかん、なにやってんやろ私…）

ゆらは一人で繁華街を歩いていた。

あれだけいると思って探し回って、結局何も見つけられなかった。

ゆらはそう考えながら普段見慣れぬ道を歩いていた。

（お兄ちゃんからも迷惑かけないように言われとったんに）

そのことも相まって、少し一人で考え事をしたくてワザと遠回りして帰っていたのである。

「お譲ちゃん制服着てどこへ行くの――――？」

（…どこやここ？）

無駄に派手な男から声をかけられてようやくゆらは思考の海から帰還した。

派手なネオンに彩られたビル。あんまりいい雰囲気ではない。

「どうしたのー？」

（あかん、はよ帰ろう…）

軽薄そうな優男が再び声をかけてきた。ゆらは極力無視して歩く。

「ゆらちゃん！」

「あ…家永さん」

ゆらが聞き知った声に名前を呼ばれ振り返るとそこにはカナがいた。

「この時間は危ないよ。この辺」

確かに女子中学生がうろつく場所ではない。だが何故、カナもここにいるのか？

「いこっ。どこ住んでんの？あ、お兄さん、昌彰さんも一緒だっけ」

「……。私って…まだ修行が足りひんわ」

屈託なく話しかけてくれるカナの態度が今のゆらにはありがたかった。自己嫌悪に陥りかねない状況では少しでも誰かに話してしまった方が楽になれる。

「本当にいると思ったのに…奴良くんに失礼なことしてもーた…」

「…ゆらちゃん」

「わっ、女の子が落ち込んでるよ～～」

突如として別の声が割り込んできた。金髪に派手なスーツ、どこからどう見ても夜の街の華（笑）、ホストだった。

「ひーろった。オレの店まで持って帰っちゃおーっと」

「えっ」

ゆらは素早く身を引いた。

「それともどっか行く？いーねそれも!!ボクと一緒に遊ぼうよ～」

「……いこう…ゆらちゃん」

カナはそのホストを睨みつけ、相手にしないようにそっぽを向いて歩きだした。しかし、

「え…ちょっと…何よ…」

カナとゆらはホストの取り巻きたちによって周りを囲まれてしまう。

「下がって…家永さん」

「ゆら…ちゃん…？」

ゆらの声音が固くなった。微かに漏れ出る妖気…それを感じ取ったのだ。

「つれなくすんなよ、子猫ちゃん？」

ニヤニヤと最初に話しかけてきたホストが笑いかけてくる。

だが、その顔は徐々に人のそれから変わり始めていた。

「アンタら…三代目の知り合いだろ？夜は長いぜ。骨になるまで…しゃぶらせてくれよォォ？」

「か…顔が…化物ッ…」

カナが目の前にいるネズミに悲鳴を上げた。

「さぁ、長い夜の始まりだ」

満月をバックにそのネズミ一旧鼠は告げた。

「ひっ…あ…いやぁぁあっ！」

カナは耐えきれずに背を向けて逃げ出した。唯一塞がれていない背後の裏路地へ。

「家永さん！ダメッ！」

ゆらはそれが相手の狙いだと気づいてカナを止めようとするが一瞬及ばず、カナは路地へと飛び込んでしまう。

「っく！」

ゆらも急いで後を追う。

「逃がすな」

旧鼠は罠にかかった獲物をいたぶるように追い込んで行った。

路地はさほど長くなく、すぐに行き止まりに追い詰められてしまう。

「キャッ、いや…！なに…何なのこれ…？」

「家長さん落ちついて…こいつらは昼間話した獣の妖怪や…」

知性はあっても理性はない。ただの血に飢えた邪悪な存在。

「おとなしくしてりゃあ…痛い目見なくてすむぜぇー」

ジリジリと旧鼠の配下のネズミたちが詰め寄って来る。

「…ねずみふぜいが粋がるんちゃうわ」

ゆらはその脅しを鼻で笑った。

「何？」

人間の姿なら旧鼠の額に青筋が浮いたであろう。

「後ろに下がって、家永さん」

「え！？」

ゆらは財布を取り出しながらカナを下がらせた。

「やれ、お前ら」

シャァァアッ

旧鼠の命令が下り、配下のネズミたちが一斉に襲い掛かる。

「『禹歩、天蓬』」

ゆらが前へと足を踏み出す。

「『天内、天衝、天輔、天任』」

独特の足運びで一歩ずつ言葉に合わせて。

「『乾坤元亨利貞』出番や！！私の式神！！」

ゆらは人型の呪符を放つ。

「『貪狼』！！」

名前と同時に召喚されたのは巨大な狼。その圧倒的な威圧感に配下のネズミたちは二の足を踏んだ。

「ゲッ」「うわっ」「わわわ…」

一瞬にして正面にいたネズミたちは吹き飛ばされる。

「貪狼、あいつらネズミや。食べてしもて」

ゆらの命令の下、貪狼はネズミたちに牙をむいた。

「くそっ！」

鉄パイプを振り上げて応戦しようとする鼠だが…通じるはずもない。

「ギャァアアア――――！」「ひぃぃいいっ！」

瞬く間に三匹ほどが貪狼の牙にかかって消しとんだ。

「なんだこいつぁ――――!?」「翼ー！優ー！！」

路地の闇にネズミ妖怪の断末魔が響き渡る。

「こいつ…式神を使ってやがる…術者だ！」

ようやく気付いたのか、旧鼠は一旦配下のネズミを退かせる。

「陰陽師だ！！それも…生半可ねぇぞぉ！！」

その声をＢＧＭにして、貪狼は目の前に残っているネズミを余さず喰らいつくした。

「いい子やね、貪狼」

その声に貪狼はゆらの下へ舞い戻る。

「兄貴～」「聞いてねぇぞ」「旧鼠さん。この女一体…」

取り巻きも下がって口々に旧鼠に問いかける。

「旧鼠か…仔猫を喰う大ねずみの妖怪…人にバケてこんな路上に出るなんて…」

ゆらはネズミ一旧鼠を睨みつけた。貪狼も再びその牙を突きたてんと身構える。

「こいつぁ…三代目はそうとうな好き者だな…」

そう言いながら旧鼠は顔を人間に戻した。長めの前髪をかき上げる。

「そんなぶっそうなモノはしまいなよ」

文字どおりの猫なで声でそう言いながら旧鼠はゆらの頬へ手を伸ばした。

「さわるなネズミ」

そう言ってゆらはその手を払いのける。

「……あ?」

その瞬間再び旧鼠の顔が一瞬ネズミに戻った。コートのポケットか

らハンカチを出してゆらに叩かれた手を拭った。

「…？（なんなんやこいつ？）」

「あぁ…やべえな…こいつ終わったわ」

ゆらがその行動が理解できないでいるところに旧鼠はぼそりと呟いた。

パチン

無駄にかっこつけて指が高らかに鳴らされる。

「キャアア！」

「家永さん？！」

背後のカナの悲鳴にゆらは驚いて振り返る。

「いやっ…ネズミが！？」

その辺にいるようなネズミがカナにまとわりついていた。

「その娘に何するんや！！貪狼！」

咄嗟にゆらはカナの下へ貪狼を向かわせる。しかし、一瞬後にその判断を後悔した。

（！しもた）

背後から首筋に旧鼠の爪が突き付けられていたのだ。

「やめとけ…ネズミはいくらでも増やせる。おとなしく…式神をしまえ」

「いやっ…ちょっと…ど、どこ入って」

（ぐっ…）

目の前ではカナがネズミにまとわりつかれている。

「もちろん違う式神もだめだ」

「……」

無言でゆらは式神を解いた。

ゴッ

旧鼠の拳がゆらの頬を捉える。

「グゥッ…」

ゆらは倒れたはずみで持っていた財布を取り落とした…

「なんで…私たちを…」

「ゆらちゃん!?」

人気のない路地裏にカナの叫びが木霊する。

「おまえら丁重にあつかえよ…こいつらは大事なエサなんだからな…」

「…禄…存…」

ゆらは薄れゆく意識の中、小さくその名を呟いた。

その呟きに倒れた時に落とした財布から一枚の呪符が反応する。

「ゆらちゃ…」

必死に呼びかけていたカナも腹部に拳を叩き込まれ、声も無く崩れ落ちる。

「ちっ、よくもここまでてこずらせてくれたな…」

旧鼠は吐き捨てるように呟いた。

「行くぞ。次はいよいよ自称三代目・・・・のお出迎えだ」

旧鼠がそう言うと配下のネズミ妖怪たちはカナとゆらを担ぎあげ、その後に続いた。

（三代目…？何の…ことや…？）

担ぎあげられた状態で霞みゆく思考の中、ゆらは必死で考えを巡らせた。しかし、それ以上何の言葉も聞き取ることはできない。

（禄存…どれくらいかかる…？）

ここがどのへんかはっきりとはわからない。禄存の足で家まで辿りつけるか…

（あかん…ゴメンね…お兄ちゃん…）

その言葉を最後にゆらの意識が途絶えた。

†††††

（お兄ちゃん…）

荷を解き終え、片付けを神将達に任せた昌彰は夕食の支度にとりかかっていた。

「…？何だ？」

昌彰は挽肉を下茹でしたキャベツに包んでいた手を止めた。

『昌彰様。段ボールは…どうされました？』

報告のために天后が台所に顔を出す。後ろには黒髪に黒曜の瞳を持つ少年の神将、玄武が控えていた。

「いや…誰かに呼ばれた気がして…」

昌彰は手を拭いながら辺りを見渡した。

辺りにそれらしき気配はない。気のせいだろうかと昌彰は呟いた。

『本当にそうか？昌彰』

玄武は納得していないように訊ねる。陰陽師の直感は何物をも超越する。現に彼ら十二神将は傍らでそれを見てきたのだ。

「…違う、と思う。やっぱり誰かが呼んでた…」

少しの間目を閉じて考えていた昌彰はおもむろにベランダに出た。特に考えての事ではない…強いて言うなら直感だ。ここは二階、誰もいるはずがない。

「いるわけないか…ん？」

昌彰の視界の隅に白いモノが微かに映った。

「…これは…」

それは、ゆらの式神一禄存を宿した呪符だった。

「まさか…ゆらに何かあったのか？」

式神は術者が倒れれば召喚を解かれる…何かを伝えようとここまで式神を飛ばしたと考えるのが妥当だ。

「…リクオの家で何かあったとは考えにくい…だとすると、帰る途中で何かあったか…？」

昌彰は冷静に考えられる可能性を列挙していく。

「くそっ、式盤（ちょくばん）は別に送られてくるからまだ届いてねえし…星占は

…ここじゃ無理だな…」

繁華街にほど近いこのアパートの周りには住宅や街灯が多い。夜といえど必要以上に明るいのである。こうなっては星が見えにくい。しかも、それなりに雲が多く、間の悪いことに満月だ。月の光で星が翳ってしまう…

「…なら虱潰しに『昌彰』…どうした六合？」

滅多なことでは口を出さない六合が隠形したまま今にも飛びだしていきそうな昌彰に待ったをかけた。

『その式神…禄存といったか…召喚できるか？』

「できないことはないだろうが…」

他人の式神を召喚するには多少無理がある。例え召喚できても全能力を引き出すことはできない。

『ならば問題ない』

その言葉と共に六合は顕現した。昌彰と違い低い位置で束ねた鳶色の髪が風を受けてなびく。

「どういうことだ？」

昌彰は六合に問いかける。

『その式神に訊けばいい』

「へ？」

禄存は元々エゾシカの式神。人語を解することはない…はず。

『通訳する。早く喚べ』

「できるのか？」

急かす六合に昌彰は確認する。

『騰蛇はかつてしていた』

「…わかった」

あの騰蛇が…と昌彰は一瞬想像してみたが今はそれどころじゃないと打ち消した。

「来い、式神『禄存』！」

ブワァッ

風圧を伴って召喚された禄存はベランダの柵の上にいた。

「…小さ！？」

思わず昌彰は叫んだ。ちょうど手乗りサイズのシカがこちらを見上げている。

『…構わんだろう。禄存、お前の主はどうした』

六合はたいして表情を変えずに禄存に問いかける。

『…何だと?』

キュィーとかカゥッとかが入り混じった声で鳴かれても昌彰にはさっぱりだったが神将達にはわかったようだ。六合だけでなく後ろにいる玄武や天后まで顔色を変えている。

「一体何があったんだ?」

しびれを切らした昌彰が訊く。

『ゆら様が…拉致された、と』

「なっ?!どこでだ?!」

『案内すると言っています』

再び泣き声で答える禄存とそれを訳する六合。向こうは人語を聞くことはできるらしい。まぁ、そうじゃなければ命令がわからないか…

「わかった。天后、戻ってくれ。白虎を喚ぶ」

『承知しました』

即座に天后が隠形し霊符に戻る。

「白虎!風を頼む」

『承知した』

亜麻色の総髪にくすんだ灰色の瞳を持つ壮年の神将が顕現した。昌彰、玄武、六合の周りで風が渦巻く。

「禄存！案内を頼む！」

昌彰の声を聞くと禄存は闇夜へと跳躍した。小さくなっても脚力は健在なようだ。

「白虎！」

『御意！』

白虎の風を駆り、昌彰は禄存に続いて夜空を舞った。

†††††

（ホスト…？何それ…？拉致〃…？）

その頃、リクオは夜の街を駆けていた。先導は先程家に来たネズミである。

（なんでそんな…あの二人が！？何したっていうんだ？！）

――――

『実は私…見てしまったんです。御友人の花開院ゆら様と家長カナ様が…』

旧鼠組の使いというネズミが告げたのはゆらとカナがホストに拉致されたというものだった。

「なら、組のみんなに頼んで…」

『ダメですリクオ様…カナ様はともかくゆら様は陰陽師。みなが進んで助けるはずがございません』

「ならどうしたら?!」

『大丈夫…私の組の者がおりますからどうかお一人で…』

ネズミにそう言われてリクオはただ一人で誰にも告げずに一番街へと向かったのだ。

――――

『あ!ここの店です!!』

その声にリクオは視線をあげる。その目に映ったのは派手なネオン、そしてホストクラブの看板だった。

「大人の店だ…どういうこと?」

ガッ

「え…」

一瞬呆気にとられたリクオは背後から先導していたネズミに殴られ、気を失った。

†††††

「ここか…」

昌彰は禄存の案内で白虎の風を駆り、リクオより先に一番街に到着していた。

『昌彰よ、どうするんだ?』

白虎が訊いてきた。派手に突っ込んで暴れ回ってもいいのだが、こういう場所にはそれなりのスポンサーが付いていると後々面倒なことになる。

人間相手では十二神将はその理によって手を出すことができないから下手に荒事を広げたくはない。

禄存からの情報でゆらとカナをさらったのが旧鼠という大ねずみの妖怪であることは分かっている。

ただ、その目的が分からなかった。ゆらはまだわかる、天敵の陰陽師を仕留めるいい機会になるのだから。だが何故カナまで…

『昌彰、考え込んでいるところ悪いが…どうやら招待客が来たようだぞ?』

向かいのビルの入り口を見張っていた六合が昌彰を呼んだ。

「どういうことだ?」

『あれを』

そう言って六合はビルの前にいる人影を指差した。

「リクオ？なん…なっ！？」

昌彰が見下ろす目の前でリクオは背後からネズミ妖怪に殴られて気を失った。

†††††

「う…ん…」

しばらくしてリクオは眼を覚ました。

「ここは……？」

最初に目に入って来たのは無駄に派手な装飾が施された部屋だ。

「よぉ、お目覚めかい。自称…三代目さんよぉ…」

次にリクオが目にしたのはその部屋にふさわしく無駄に派手なスーツを着た優男だった。

ご丁寧に座っているソファーの隣にシャンパンタワーまで作られている。

「誰だ…？君…（三代目…？）っ、まさか君、妖怪？奴良組のひとな…ガッ！」

リクオが思い当って問いただそうとした途端取り巻きにいた黒スーツの男に思い切り蹴り上げられた。

「いたい…」

「今てめー旧鼠様を?下〃に見やがったな!誰がてめーなんかの?下〃につくかよバーカ」

痛みを堪えるリクオに蹴り上げた男が罵声を浴びせる。

「旧鼠様はこの街の夜の帝王なんだよ!!」

「帝…王…?」

配下のネズミ妖怪が喚く。

「おいガキ…よく聞け」

旧鼠が威圧的に語り出した。だが、その言葉はリクオの耳に入っていない。その後ろに囚われている二人の人影に気づいたからだ。

「カナちゃん!花開院さん?!」

「組のためだぜ。てめぇの率いる古い妖怪じゃこの現代は生き残れねぇ。俺たちが奴良組を率いてやる。おめーは手を引け…三代目を継がないと宣言しろ!!」

いいな!と旧鼠がすごむがリクオの耳には聞こえていない。

(三代目…そんなことのために花開院さんを…無関係のカナちゃん

まで…）

「おい！聞いてんのか？！」

何も言わないリクオにしびれを切らしたのか旧鼠がソファーから立ちあがりリクオの方へ歩いてくる。

リクオはそれを睨みつけた。静かな怒りを燃やしながら…

「ふざけるな…」

その身体から微かに妖気が迸り始めた。

「なにっ！？」

予想外の言葉に旧鼠は足を止めた。

「ふざけるなと…」ガシャァッァァン！

リクオの言葉を遮るように、窓ガラスを打ち破り、突風がなだれ込んできた。

「何もんだてめぇ！？」

旧鼠の周囲を囲むネズミたちが色めき立つ。風を纏って飛び込んできたのは亜麻色の髪を持つ屈強な男。だが、当然人間ではありえない。

『雑魚がほざくな。リクオ殿！』

「えっ？」

いきなり名を呼ばれて何が何だかわからないリクオにその男は駆け寄って来た。完全にさっきまでの気配は霧散している。

『リクオ殿、ここはお引きください』

「ちょっ、待ってよ、君は一体!?それにカナちゃん達が！」

そう言っている間にもリクオは壮年の猛者の腕に抱えあげられていた。

『我が主、昌彰の命です。いずれ必ず助けます。今はどうかお引きください！』

「……わかった…」

「おめおめと逃がすか！」

とりまきのネズミが飛びかかって来るが、

『行きますぞ！』

その男とリクオを取り巻いた風によって散り散りに吹き飛ばされてしまう。そのままの勢いで、男とリクオは夜空へと駆け上がった。

「チッ！忘れんな！こいつらが人質だ！」

「っ！」

それでも旧鼠の遠吠えがリクオの耳朶を抉ったのだった。

†††††

『昌彰よ、これでよかったのか？』

白虎はリクオを奴良組本家へと送り届けた後、再び一番街一昌彰の下へ帰還していた。

「ああ、世話をかけたな白虎」

『構わん。だが、何故ゆらともう一人の少女まで助けん？』

白虎は自分に命じられた「リクオを助け出せ」という命に従った。本心としては二人も一緒に助けたかったのであろう。言葉に出さずともその憮然とした表情に全て出ていた。

「お前が言ったろう？あいつらはゆら達を取引の材料にしようとしているって」

昌彰は白虎に風読みで窓から漏れ出る中の会話を拾わせていた。

「つまり、身の安全は保障されているわけだ。少なくとも今夜一杯は大丈夫だろう。それと…」

『それと？』

「リクオの力を見てみたいじゃないか。組むにしろ滅するに相手の力を把握しなきゃならない」

口元に薄く笑みを湛えて次に昌彰が漏らした言葉は風に紛れた。

「リクオ…あの時の誓い…確かめさせてもらうぞ」

第四夜　一番街へ～誓いを果たすために～（後書き）

†††††††

あとがき

うーん、今回は筆が進みませんでした。

何故かオリジナルの部分だと早く書けるのに原作からの引用部分で筆が遅くなるのは何でだろう・・・？

それでも楽しんでいただけると嬉しいです。

感想、ご指摘などは常時受け付けておりますのでお気軽に書いて下さい。

あ、自分はアニメの方を見てませんので色の描写等の間違いが多いかもです・・・

第五夜　再び一番街へ～百鬼と神将を率いて～（前書き）

少し遅くなりました。
冬休み前でなにかとばたついてまして・・・
これから試験の関係で恐らく更新速度が落ちます。ご了承ください。
ここまでがお詫びと今後の方針です。
今回は戦闘シーンが入ったのです・が・・・正直言って微妙です・・・

余りにもあっさりし過ぎです。
最後の方はかなりグダグだです・・・
ごめんなさい、石投げないで！
作者が理系だから仕方ないと思ってくださいｍ（．＿．）ｍ
では、それでも楽しんでいただけると幸いです。

第五夜　再び一番街へ～百鬼と神将を率いて～

（昌彰君は必ず二人を助けると言った…このままボクが何もしなくても、さっきの式神を使って二人を助け出すだろう…）

リクオは白虎と名乗る昌彰の式神によって奴良組本家に帰ってきていた。

（でも…あの二人がさらわれたのはボクのせいだ…このまま何もしないなんてことはできない…それに…）

リクオは屋敷の縁側に座った。もう食事時は過ぎたのだろう。だいぶ静かだ…

（あの時の…）

リクオは昌彰と公園で対峙した時の事を思い出していた。

「若！どちらに行かれてたのですか！？」

氷麗がいち早く駆けよって来るがリクオは思考に没頭していて気付かない。

（あの二人を助けるには…みんなを…百鬼を動かすしかない…）

「若！リクオ様！！」

「え、あ？氷麗？」

「もう、いくら呼んでも返事をしないんですもん…目を開けたまま寝てるのかと思いましたよ？」

「あ、ああ…ゴメン氷麗。ちょっと考え事してて…それよりじいちゃんは？」

リクオはずっと氷麗に謝りながらも祖父の姿を探した。

「おう、リクオ。話がある、来い」

「じいちゃん」

ぬらりひょんは座敷に入ると側に控えていた猫の妖怪を残して他の妖怪を閉めだした。

「じいちゃん…「旧鼠か…リクオ」！？なんで知って…」

リクオがゆら達を救うために百鬼を動かそうとしているのを読むかの如く、ぬらりひょんは旧鼠の名を出した。

「良太猫からの報告じゃ」

リクオの後ろに控えていた三毛猫の妖怪一猫又が前に進み出る。

「お初にお目にかかりますリクオ様。奴良組系『化猫組』当主　良太猫でございます」

良太猫はそう言って頭を下げた。

「まず最初に謝らせて下せぇ、若」

「どういうこと?」

「実は…一番街を総大将から預かってんのはワシらなんですわ」

化猫組は奴良組がこの地に本拠を構える前から一番街で博徒として悪行を積んできた古い妖怪である。

奴良組がこの地に来てからは配下として街の支配権を与えられた。それ以来、賭場として規範を守り、奴良組の畏の代紋を守って場を構えてきた。だが…

「あの街は今、ドブネズミに支配されちまってんですよぉ」

そう言って良太猫は堪え切れずに拳を畳に叩きつけた。

旧鼠たちは現れたと思ったら瞬く間にその勢いで街を変えてしまった。武闘派ではない化猫組は必死の抵抗も空しく、街を追われる形となった。

「あいつらを野放しにしておいたらどんなことになるか…そう思って本家に助勢を願おうとしていたんですが…その矢先に…」

もちろん化猫組も何の手も打たなかった訳ではない。旧鼠たちの根城となったホストクラブに監視を置き、本家に応援を願い出ようとした。

その監視役からゆらとカナが拉致されたとの連絡が入り、急ぎ本家へ馳せ参じた訳である。

「奪われた身でこんなことを言うのは厚かましいかもしれません。でも若、御友人を助けるついでででも構わねぇ！どうか、あの街を救って下せぇ！！」

血を吐くような良太猫の懇願。リクオは静かにそれを見ていた。

「リクオ、これは組の問題だ。シマでおさまりのきかねぇただの暴徒をのさばらせるわけにはいかん。…だが、お前の問題でもある。ケジメをつけて来い！」

「じいちゃん……　鴉天狗、皆を集めてくれ」

まだどこか頼りないが、その言葉にはしっかりとした意思が感じ取れた。

「行かれるのですか。リクオ様」

「うん。きちんと…ケリをつける」

――――

「出入り？！」

「じゃあ、あの女を…助けるってことですか？！」

「お願いだ。みんな力を貸してくれ！」

そう叫んでリクオは集まったみんなに頭を下げた。これに慌てたのは集まった妖怪たち、特に側近として仕えている者たちだ。

「若、頭をあげてください！リクオ様が行くというのならこの青田坊、どこへなりともお供しますぞ」

最初に青田坊が名乗りを上げる。

「お前だけではないぞ、青！若、この黒田坊も参りますぞ！」

負けじと黒田坊も続いた。

「頼む。青、黒…」

「俺たちも行きますぜ！若！」

小鬼や納豆小僧も声をあげる。氷麗や首無は静かに頷いてついていくことを示した。

「ありがとう…皆…（けど…これじゃダメなんだ…）」

ついてきてくれると言ったのはほんの一部。いつも身近にいたりお供として付いてくれたことのある者だけだ。

残りの者達は陰陽師を助けに行くということかなりの難色を示している。

（せめて、今だけでも力があれば…旧鼠を倒す力…百鬼を従えられる力が…）

ドクンッ

『力がほしいか？』

「え？」

リクオは自分の中で何かが蠢くのを感じた。

『力ならお前はすでに持っている』

「ど、どういうこと？」

その声にリクオは庭のしだれ桜を振り仰ぐ。

『本当は知っているはずだぜ？自分の本当の力を』

リクオが見たのは先頃の夢に出てきた人物－闇夜に生きるもう一人の自分。

『もう　時間だよ』

そして昼と夜が入れ替わった…

「おまえら…」

昼の姿とは打って変わったリクオに先程まで喚いていた妖怪たちも静まる。

「うだうだうるせぇよ…陰陽師だから？それがどうした？天敵に貸し作るのも…悪くねぇぜ」

夜のリクオが纏うのは確かに百鬼の主たる畏。その場に集う全ての妖怪はそれを理解した。

「行くぞお前ら…夜明けまでのねずみ狩りだ」

†††††

「…ん…うん…」

ゆらは頬に当たる木屑のような感触で目を覚ました。

「な…ここは…!?」

慌てて周りを見回すと金属の格子に覆われていた。まるで檻のように…

（いや、これは檻というより…カゴや…）

みれば壁の一面には回し車があった。ちょうどハムスターを飼うようなカゴだ。

「うん…」

「家永さん!?」

一緒に閉じ込められていたであろうカナもようやく目を覚ましたようだ。

「こ…このカゴは一体…」

それに外？と呟くゆらに檻の外から声がかかった。

「よう、陰陽少女」

ゆらがそちらを見ると旧鼠が悪趣味で派手な椅子に座っていた。

「どうだ…？ネオンの光の中…処刑される気分は…？」

「な…処刑…？（あれからどれくらいたったんや？…禄存は？）」

星の位置からみておそらく夜明け前。

「そうだ…あの三代目のガキが約束を破ったらな…」

旧鼠配下の取り巻きたちがニヤニヤといやらしい笑みを浮かべる。

「三代目…？何のことや…？旧鼠…！アホなことはやめるんや！！ええかげんにしい！！」

ゆらは格子を掴んで叫んだ。

そんなゆらを旧鼠は無言で睨みつけた。

「おい女…その名で呼ぶなや。この街ではな…」

配下の一人がゆらの胸ぐらを掴みあげる。

「星矢さんって呼べや――――！！！」

ビリィッ

そのまま制服の胸元を引きちぎられた。

「な…」「ゆらちゃん…」

ゆらは咄嗟に崩れ落ちた。

「式神もってないてめーはただの女だよ」

その様子を取り巻き達は嘲笑する。

「さて…そろそろ時間だな。ま…来ないなら来ないで俺はかまわんがな…」

旧鼠は腕に巻いている時計を見ながらそう言った。

「知ってるか…？人間の血はなぁ…夜明け前の血が一番ドロッとしててうめぇのよ」

ちょうど今くらいのな…という旧鼠の言葉と同時にカゴの中へ取り巻きのネズミどもが入って来る。

「ひっ…」「いやっ…」

ゆらとカナは必死でそいつらから距離をとる。

（…こ、これが妖怪…こん前の付喪神なんかとちゃう…）

「へへ…オレこっちが好みだな～」

ホストの姿をしたネズミ妖怪の下品な笑いが響く。

（倒さないと…私は陰陽師なんやから…）

ゆらは必死で己を叱咤した。しかし、身体はネズミから離れようと後ずさる。

その様子を見て、旧鼠の冷ややかな笑みがゆらを射ぬいた。

（式神さえあれば…こんな奴ら…）

追い詰められたゆらの目に涙がにじんだ。

「いやぁぁあ…（誰か…　助けて…　お兄ちゃん…昌彰！）」

モァ…

突如として、空気に濃密な妖気が混じり、霞みが一番街を覆った。

「ん…」

「なんだ…？ありゃ…」

その異変に気付いた旧鼠と配下の妖怪たちは動きを止める。

霞みを切り裂き、現れたのは妖怪の群れ一百鬼夜行。

その先頭を歩くのは着流しに羽織を纏ったぬらりひょんの孫一リクオだ。

「星矢さぁん！！こ、これは！？」「化猫組の奴らがいますぜ！！」

その圧倒的威圧感に動くことができなかったネズミたちが慌てて動

き出す。

「化猫組よ…あいつらか？」

首無が良太猫に訊ねる。

「あぁ…憎い…ねずみどもだ」

†††††

「うそ…（なんで…百鬼…夜行？　まさか…じゃあ…あの男が…妖怪の…総大将？）」

ゆらの戸惑いに関わりなく、話が進んで行く。

「またせたな…ねずみども…」

「何者だぁ！？テメー」「本家の奴らだな…三代目はどーした！？」

リクオの台詞にねずみ達が喚きだす。

「（若、この隙に御友人たちを…）」

首無がさりげなくリクオに囁いた。

「（いや、余計な世話だ）」「（若！？）」

首無は驚くが、リクオはどこかに昌彰がいることを確信していた。

自分が来るのを待っていたのだと。

「（いいから見ていろ。首無…お前女に甘いな）」

「（…わかりました）」

首無は納得してはいないようだがリクオの口ぶりから何かしら感じ取ったのであろう。素直に引き下がった。

「いや…あんなガキはどーでもいい…」

旧鼠は覚醒したリクオに気付いていない。

「宣言はちゃんとしたんだろうな？『三代目を継がない』と！」

「黙りな。おまえごときに言われる筋合いはない」

リクオは旧鼠の言葉を一刀のもとに切り捨てた。

「…ならば約束通り殺すまでよ！」

一瞬旧鼠は何を言われたかわからないような顔をしていたが、そう言ってカゴを叩く。

「さぁ、できるかな？」

その行動をリクオは馬鹿にしたように笑った。

「なに？」

ズバァッ

旧鼠が疑問の声を発するうちにカゴの一角が綺麗に両断された。

「遅くなってすまない。ゆら…それと家長も」

カゴを切り裂いたのは六合の銀槍による一閃。切り開かれたカゴから昌彰はゆらとカナを連れ出した。

「お兄ちゃん！」

ゆらは思わず昌彰に飛びついた。

「っと…怖かったか、ゆら？」

フルフルとゆらは首を振った。

「へ、平気や！（信じとったもん…昌彰兄ちゃんが助けに来てくれるって）」

その様子を微笑ましげに見ていたリクオは旧鼠に向き直った。

「どうする夜の帝王。人質はもういないぜ？」

昌彰達の方には六合と青龍が顕現し、三人を守護するために佇んでいる。

「旧鼠とかいったな。我が妹が世話になったようだ…」

そう言いながら昌彰も前に進み出る。

「青龍、六合。向かってくるねずみだけを相手にしろ下手に前に出るな」

『承知』『御意』

昌彰の命令に青龍は徒手のまま、六合は再び銀槍を構えて応じた。

「陰陽師、安藤家の名において…旧鼠よ。汝を滅する！」

昌彰は袖から呪符を取り出し、刀印を結んだ。

――――

「陰陽師だと!?」「若！大丈夫なんですかい!?」

昌彰の登場にリクオの百鬼夜行に動揺が走る。

「何ビビってやがる?あいつも標的は旧鼠だ…なら利用してやれ」

リクオの言葉でまだ完全ではないが百鬼夜行の混乱は最小限に収まった。

リクオは疑っていなかった先日の誓いを。昌彰の言葉を。

――――

「陰陽師だと!?（聞いてねえぞ！そんな話…）」

旧鼠たちも同様に混乱の最中にいた。既に人質は奪還され、自分達の優位は失われつつある。

しかも前方には百鬼夜行、後方には式神二体を従えた陰陽師…退路は既に無い。

「くそっ！てめぇら皆殺しだ！陰陽師もろとも喰いつくしちまえ！」

その言葉が開戦の合図となった。

†††††

うおあぁぁおぁ！！

まさに人外の奇声を発しながら百鬼夜行とねずみ妖怪の集団がぶつかりあう。

ズガッ　バキッ　ズシャッ

骨を砕き、肉を切り裂く音。罵声と怒声、絶叫と嘲笑が響き渡る。

昌彰の視界の隅に先日リクオと共にいた鉄紺色の法衣を纏った青田坊と漆黒の法衣を纏い、笠をかぶった僧の二人が奮戦している様が映った。

無数の槍が、剣が、刀が、錫杖が、剣戟が舞う。

拳がネズミを砕き、潰し、薙ぎ払う。

「やれやれ、この前は随分と手加減してくれていたんだな…」

その無双ぶりを見ていた昌彰は最初に相対した時、青田坊が加減を

してくれていたのだと感じて思わず溜息を漏らした。
その隙に正面からネズミが飛びかかる。
「っと！『百鬼破刃』！」
向かってきたねずみは昌彰が放った氷の刃に貫かれた。
昌彰は気付かなかったがその様子をみて氷麗は人知れず安堵の息を漏らした。最初に見せた炎はそれなりの恐怖を氷麗に与えていたらしい。
「呪いの吹雪　雪化粧！」
氷の息吹にてネズミを凍てつかせ、木っ端みじんに打ち砕く。
ザシュッ
六合は銀槍で、
『剛砕破！』
青龍は神気を叩きつけて昌彰とゆら、カナに近づいてくるネズミを片っ端から切り裂き、粉砕していった。
†††††
「なんで…」
旧鼠は既に追い詰められていた。物理的にも、精神的にも。

「てめーら誰の命令で動いてやがる！百鬼夜行は主にしか動かせねーんじゃ…（それに陰陽師だと…！？あの方からは何も…）」

パニックになっていて旧鼠の思考は正常に働いていない。

「何言ってんだ。目の前にいるじゃねーか」

その様子を良太猫は蔑むように睨みつけた。

「この人こそが！ぬらりひょんの孫！！妖怪の総大将になるお方だ！！」

良太猫は誇りを持って叫ぶ。リクオこそがこの百鬼夜行の主であると。

「そいつが…あのガキの覚醒した…姿…！？」

歯牙にもかけなかった甘ちゃんのガキ。そいつが覚醒して目の前にいる。百鬼夜行を引き連れて。

「やっぱり…あんとき殺しときゃよかったじゃねーかぁ！」

絶叫と共に旧鼠が本性を現す。鋭い牙と爪を有した巨大なネズミ。先程までの配下と比べれば体格は二周りほど大きい。

「追い詰められて牙を出したか…だが」

リクオは酒を湛えた深紅の杯に息を吹きかける。

「たいした牙じゃないようだ」

その言葉と同時に旧鼠の身体を青い炎が覆った。

「ガッ…」

旧鼠はその身を焦がす灼熱の炎に耐えきれず身をよじる。

「てめぇらが向けた牙の先…本当に闇の王になりてぇんなら…歯牙にかけちゃならねぇ奴らだよ」

（馬鹿な…四分の三は人間のこいつに俺が負けるはずが…）

旧鼠は死力を振り絞り、この場から逃れようと比較的に破りやすいと思われる人数の少ない方…昌彰達の方へと走り出そうとした。

「『その行く先は我知らず　足を止めよ　アビラウンケン』！」

その呪文と共に旧鼠は自分の体が硬直するのを感じた。

「逃がすとでも思ったか？」

昌彰は静かな笑みを口元に湛えて言った。

「ふ…おめぇらは俺の“下”にいる資格もねぇ…奥義・明鏡止水？桜〃」

リクオの言葉と共に炎が勢いを増した。

「『必神火帝、万魔拱服』！」

昌彰も魔を滅する炎を放ち、二つの炎が溶けあった。

「「夜明けと共に塵となれ」」

リクオと昌彰の炎は全てを、灰すらも残さず焼き尽くした。

†††††

夜が明け、ゆらとカナは一番街の端の広場にいた。
カナはどこか嬉しそうに、ゆらは自分の無力さに打ちひしがれるように。

――――

「終わったな…帰るぞ」

旧鼠の消滅を見届けて、リクオは踵を返した。

「ま…待ってぇ！」

ゆらは思わず目の前の妖怪に声をかけていた。

「お前が妖怪の主か！！」

ゆらの問いにリクオは静かな視線を向ける。

「お前を倒しに来たんや！！次に会うときは絶対…「ゆら、待て」お兄ちゃん！？」

ゆらが絶対に倒すと宣言しようとしたところを昌彰が割って入った。

「まずは礼を言わせてもらおう…ありがとう「お兄ちゃん!?何を…」」

昌彰の言葉にゆらは驚愕した。

「珍しいな。陰陽師が妖怪を見逃すか？」

リクオはいたずらっぽく笑いながら言った。

「人を助けに来る妖怪に言われたくないな」

昌彰も笑ってそれに答える。

「ふっ…精々気をつけて帰れ。そいつらの面倒はお前に任せた」

そう言ってリクオは闇へと消えた。

――――

「ほい、二人とも。一晩中何も食べてないだろ？」

そんな二人に昌彰はコンビニの袋を差し出した。

「あ、ありがとうお兄ちゃん」「ありがとうございます」

中にはお茶のペットボトルとおにぎりが数種類。味気ないが空腹の二人は文句も言わずに瞬く間に胃に収めた。

「ふ〜、ごちそうさまでした昌彰さん」「…ごちそうさまでした」

カナはあんな事があった後にも関わらず元気そうに、ゆらはやはりどこか思いつめたように言う。

「カナちゃん、家の人も心配するだろうから早く戻った方がいい」

「あ、はい。それじゃ、また学校で」

昌彰はゆらが落ち込んでいるのを見てカナを先に帰らせた。

「天后、念のため警護を」

『かしこまりました』

天后を念のために護衛に回しておくことも忘れない。

そうして昌彰はゆらの隣に腰を下ろした。

「どうした…ゆら」

静かに肩に頭をもたれかけさせながら昌彰は声をかけた。

ピクリと六合の霊布をかけた肩が震える。

「…ごめんね。お兄ちゃん…」

ゆらは蚊の鳴くような声で漏らした。

「どうして謝る…」

「私、何もでけへんかった…陰陽師なのに…」

ゆらは自信をなくしていた。陰陽師であるのに妖怪に助けられた。もちろん昌彰にも助けられた。そのことがゆらの肩に重くのしかかっていた。

「謝るのは俺の方だ…（いくら安全がある程度保障されているとはいえ…人質として放っておいたんだからな…）」

昌彰は俯いているゆらの頭を撫でながら言った。

「あまり自分を責めるな。お前がいなかったら家長が一人で苦しむことになったかもしれないんだぞ?」

その言葉にゆらはゆっくりと顔をあげた。

「お前の存在が家長を救ったかもしれないんだ。お前はよくやったよ」

「お兄ちゃん…」

ポンポンと背中を撫でられて、ゆらは安心したように眠りに落ちていった。

第五夜　再び一番街へ～百鬼と神将を率いて～（後書き）

――――
あとがき
いかがでしたでしょうか？
原作に比べるとリクオが早いうちに決意を固めつつあります。
このまま牛鬼のクーデターはなくなり・・・ませんよ？
リクオの覚悟はまだ完全じゃないですから。
次回の更新は年明け・・・下手すればテスト空けですね・・・
それではまた次回お会い出来ることを。琥珀でした。

以下はちょっとした独り言です。
※微妙に原作のネタバレ含みます。
コミック派の人はご注意を

・・・しかし問題発生ですよ。
今日、友人宅で先月末のジャンプを読んだんですが・・・晴○様出てきた～？！　しかも○で！！
自分が書いてるこの小説の根幹に関わる大問題ですよ。これ・・・
その辺をオリジナルに転換するか原作通りにいくのか・・・
目下検討中です。
何故かそれ一冊しかなくて前後の状況もはっきりしないので・・・

幕間　２０１１年　書き初め企画（前書き）

新年ということで書いてみました。
はっきり言って駄文です。
お時間をとらせて申し訳ないです。
まあ、暇つぶし程度にどうぞ。

幕間　２０１１年　書き初め企画

作者：新年あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願いします。

昌彰「あけましておめでとう。しかし、なんで正月早々こんなところに呼びだされているんだ俺は？」

仕方ないだろう。テストやらなんやらの関係で本編を執筆する時間が裂けないんだから…

昌「それは仕方ないだろ。たしか前回のあとがきで今度の更新はテスト明け…とかいっていただろうに」

たしかにそう言ったよ。だがな…そうすると二月の中頃まで完全にこれを放置してしまうことになるのだよ。

昌「何だよそれ？て言うかテストは二月にあるのかよ？まだ一カ月ちょっとあるじゃないか」

……昌彰くん…はっきり言うがけっこううちの学校の試験は厳しいのだよ。そりゃあ現実逃避をしたくなるくらいに！

昌「それは薬学部なんかに進んだお前の責任だろうが」

くっ…！確かにそうだよ。この学校を選んだのは自分だよ。国家試験の合格率がいいというのが選択の根拠だよ。

昌「ならいいじゃないか。そのまま頑張れば薬剤師に一直線だ」

わかって言ってる？合格率が高い＝内部で容赦なくしごくってことだよ？めちゃくちゃ厳しいんだよ。容赦がないんだよ。以下愚痴が続く。

昌「わかったわかった。要するに試験勉強したいけど二カ月近く放置することになるから新年にかこつけて、何かを書いておこう。そういう魂胆か」

まぁ、そういうことだよ。

昌「で、具体的には何を書くんだ？」

さあ？

昌「さあ？じゃない…「あけましておめでとうございます。琥珀さんに昌彰さん」…ってリクオ！？何故ここに」
それは自分が呼んだからに決まってるじゃないか。というわけで今回のゲストは奴良リクオ君で～す！
昌「…まあいい。それでなんでリクオを呼んだんだ」
ん？キミが介入して原作と改変されたキャラについての話を少々…
リ「その第一号がボクなわけ？」
まあ、原作の主人公だし。
昌「ちょっと待て！第一号ってことは他にもいるのか！？」
けどリクオくん、どう？だいぶ早いうちに正体ばれちゃったけど？しかも本来なら敵の陰陽師に。
昌「無視するな！！」
リ「昌彰さんが出てきた時はびっくりしたよ。まさか二人も陰陽師が出てくるのにそれが義理の兄妹でしかも婚約者ってなると」
ネタ要素満載ですよね（笑）
昌「お前が言うか！？」
いや～色々設定考えていったらゆらとくっつけるのには婚約者ってのが妥当かな？って思っちゃって。
昌「…それに関しては深く追求しないでおいてやる。なんかネタばれしそうな気がするからな」
おや、気がきくね。
昌「（こいつぬけぬけと…）…まあいい。それでリクオと作者」
リ「なに？」
はい？
昌「リクオの台詞の中に少々気になるのがあるんだが…」
…気付いた？
リ「どれ？」
昌「旧鼠と対峙した時、それと夜リクオへの覚醒の時の二つだ…」
『ふざけるな…』と『力がほしいか？』…かな？ふざけるなのほうは場面はちがうけどアニメで言ってたけど。

リ「…僕もどこかで言ったような聞いたような気がするんだよね…」
あはっ…
昌「俺の記憶が正しければ絶対〇守の力を持つ皇子様のアニメだよな」
うん…コー〇ギ〇スだね。ちなみに主人公はリクオと中の人が同じ。
リ「あ、だからか」
昌「その繋がりか？」
うん。いや～、アニメ化に当たって中の人が福〇潤さんと聞いて。けっこう自分の中ではイメージがル〇ーシュと被るんだよね。二人とも二面性あるし。特に夜リクオは。
昌「まあ…」
リ「わからなくもない…かな？」
というわけでどこかで見たような台詞が出てきたらそれはおそらくコ〇ド〇アスが元ネタです。
ギ〇スからなのは単に作者の趣味です。
他のアニメも見ますよ？レン〇ルマギカとか武〇錬金とか咲－ｓ〇ｋｉ－とか当然ぬら孫とか。
リ「全部福〇潤さんが出てる！？」
早い話が自分は福〇潤さんのファンなわけです。だから無意識にキャラが似てくるかもです。
まあ、昼リクオは伊庭い〇きの方が近い気はするんだけど。
昌「いいわけは終わったのか？」
ああ、うん。一応釈明しておきたいことは終わったよ。
リ「結局僕が出てくる意味あんまり無かったよね？」
ここからは真面目にやるよ。
昌「例えば？」
え～と、リクオのＣＰを誰にするのか。とか…
リ「花開院さんは昌彰さんルート確定だから、カナちゃんと氷麗の二択だよね」
昌「まあ、そうなるだろうな」

この点に関してはアンケートとるかな？
氷麗とカナどちらをメインに据えるか？
感想もしくはメッセージの方でお待ちしております。
期限は…四国戦が終わるまでくらいに。
昌「ずいぶんいい加減だな？」
まあ、あくまでこれ自体が忙しい合間を縫って書いてるからね。
昌「まあいい、本題に戻ろう。俺に関してはゆらルート一直線なわけだが…」
いや、昌彰がゆらと平穏無事にくっつくとは限らないよ？
リ「！？」
昌「！どういうことだ作者！？」
いや、どう見ても障害無しじゃ面白くないじゃない。それに乗り越えなきゃいけない壁が最低一つはあるでしょ。
リ「あ～」
昌「…あいつか」
具体的に名前は出さないよ。でもあの人はけっこうシ〇〇ンだと自分は思うのだよ。
昌「まあ…否定できる要素は…」
リ「ない…かな？」
というわけでお二人には一回は戦ってもらうことになるかと。直接じゃないかもだけどね。
昌「となるとあの場面か…」
だね。あの時くらいしか余裕ないし。
リ「でもそれ絶対に直接対決じゃないよね？」
あはっ…一応既にそこの原案はできてたりするんだよね…
昌「しかし結局俺の事じゃないか」
いいじゃん。一応ここの主人公なんだし。
昌「いいのか？…しかしもうそんなに長く書いた訳でもないのになんか終わりが見えてきたな。他に言うことないのか？」
すみません。なにしろネタばれを考えるとうかつに出せなくて…

リ「そうだよね。実際まだ旧鼠編終わったばっかだし」
まあ、厳しいよね。自分の筆力が足りないせいも多大にあるけど…
次回はもう少し努力をしようと思いますはい。
リ「僕の出番ってこれだけ？」
昌「さすがにそれはないないだろ？」
はい、さすがに今回のこれだけでリクオの出番は終了にはさせません。
おそらく次は夜リクオで出ていただくことになると思います。
リ「まあそれならいっか」
というわけで新年のご挨拶を終わらせていただきます。
昌「これ…完全に駄文じゃないか？」
じ、次回はもう少し有意義なものになるように努めます…
いつになるかは不明ですが…
昌「さらっと言うな」
それでは皆様。本年もよろしくお願いします
昌「皆様にとってこの一年が最良の年であることを祈念いたしまして」
リ「新年の挨拶とさせていただきます」

第六夜　合宿　～行き先は妖怪の住まう山～（前書き）

一ヶ月ぶりの更新です。
試験勉強の息抜き程度で書きました。
あと一週間しか無いよ、どうするの自分・・・
作者は切羽詰まっておりますがごゆっくりお楽しみください。

第六夜　合宿　～行き先は妖怪の住まう山～

「う・・・」

「う？」

日時は一番街の騒乱が起こった翌日の放課後。

場所は清継達の一年の教室。黒板には「清十字怪奇探偵団　第三百六十二回　妖怪会議」の文字。

「うらやましい～～～～～」

清継の羨ましいというより恨めしいとでも言いたげな声で清十字…長いな～中略～妖怪会議は幕を開けた。

「うらやましくなんかないよ…すっごく怖かったんだから！！」

カナは清継に呆れた視線を向けながらゆらに同意を求めた。

「家永さん…ごめんなさい…私にもっと力があればよかったんやけど」

ゆらは縮こまりながら謝った。ちなみに制服は破られてしまったので体操服の上着のジャージを着ている。

「その件については俺も謝らないといけないしな。ゆらが知らせてくれたのに場所の特定ができなくてな…」

半分は嘘だが、そう言って昌彰も遅くなってすまなかったとカナに頭を下げた。

「そんな、ゆらちゃんも昌彰さんも謝らないで下さいよ。最終的にはちゃんと助けてくれたじゃないですか」

慌てたようにカナが両手を振った。

「（それに悪いことばかりじゃなかったしね…）」

「しかし君らがピンチだからこそ彼は現れた！！しかも陰陽師である安藤さんと花開院さんがいたのに！！」

カナが呟いた言葉は清継の興奮した叫びによって掻き消された。

「それでこそボクのあこがれる夜の帝王！妖怪の主なんだ～～！！」

清継の快哉が教室に響き渡る。

（…たく、のんきなもんだな。下手したら喰い殺されてたかもしれないんだが…）

今回は極めて特殊なケースだ。普通なら妖怪が人間を人質に取るとは考えにくい。

何故か妖怪に捕まる算段を立て始めた清継に昌彰は島と共に呆れた視線を向けた。

「（…っと、それよりも…）及川さん、今日リクオはどうしたんだ？」

端の方で皆のやり取りをニコニコと眺めていた氷麗に昌彰は声をかけた。

「何ですか陰陽師。リクオ様なら…あれ?」

「だから聞いたんだがな…」

いつもならこの辺でリクオが止めに入ったりするはずなのだが今日はそれが無い。

「家永さん、リクオはどうしたんだ?」

昌彰はリクオと一緒のクラスのカナにも訊ねる。

「…リクオ君?そう言えば朝から見てないかも」

カナが今にも眠りそうな目を擦りながら思い出すようにして言った。

「!!!」

その言葉を聞くやいなや、氷麗は笑みを凍らせ、教室から飛び出していった。

†††††

「で、ただの風邪なんだな?リクオ」

今、昌彰は奴良組本家にいる。リクオが学校に来ていないと知って飛び出していった氷麗を尾行してついてきたのだ。

「うん。心配かけてゴメン昌彰君。わざわざお見舞いまで来てくれて」

そう言うリクオの頭には巨大な氷の塊が浮かんだ氷嚢が乗っている。物理的にどうして落ちないのかが甚だ疑問だが…

「いいさ、この前来れなかったから来てみたかったのもあるし（…しかし、ぬらりひょんの血は人間に近いのか？）他に具合が悪いところはないのか？」

昌彰が気にしたのは妖怪の血が覚醒したことによる人間としての体への負荷だ。

強い妖であればその力は人としての命と魂までも蝕んでいく。

「あ、うん。本当にただの風邪だから…」

そう言っているリクオは普段より顔は赤いが、他に異変は見受けられない。

「ならいい。あまりきついようなら快癒のまじないを施すけど…」

ガラガラガラッ

昌彰の言葉の途中で障子があいた。

「あ、氷麗。さすがにこれは…え？」「お」

障子を開けて縁側から顔を覗かせた意外な人物にリクオと昌彰は驚

いた。

「やっほ！」

「か、カナちゃん！？」

「家長くんだけじゃないぞ！」

見ると清継、島、巻、鳥居もいた。ゾロゾロと部屋の中へ入って来る。

「昌彰さんも来てたんですね」

カナが昌彰を見つけて話しかける。

「ああ、この前来れなかったから見舞いに来ようと思ってな。みんなで行くならそう言ってくれればよかったのに…」

もっとも、聞かれてはまずい話をするために来たのだから一緒に行くはずもないのだが。

「そう言えばゆらは？」

昌彰はメンバーの中にゆらがいないことに気付いた。

「ああ、ゆらちゃんなら…「ゆらくんなら新しい制服を買いに行ったよ」…だそうです」

「ああ、なるほど（あれ？ゆらのやつ金持ってるのか？）」

昌彰は昨日、家計を預かる際に生活費の分を受け取っている。たぶん今のゆらの財布にはお小遣い程度しか入っていないだろう。

女子の制服がいくらするかは知らないが、確か大抵男子の制服よりは高いはず…

「（白虎、このカードをゆらに届けてくれ。暗証番号は１２〇７だ）」

『承知』

昌彰は財布から銀行のキャッシュカードを取り出し、白虎に渡した。

白虎は風を駆り、一路ゆらの下を目指して飛んでいく。

「しっかし、情けないわね～ゆらとカナは妖怪に襲われても学校に来たっていうのに」

「ねー」

巻と鳥居が頷き合っている。随分軽く言ってくれるが、最初の付喪神騒動の時にいなかったから仕方ないのか。

「それじゃお薬もらってくるね」

カナがそう言って立ち上がり、襖に手をかけた。

「お待たせ～リクオさ…」

ガシャンッ

派手に陶器の割れる音が響いた。

昌彰が音源の方を見ると鉢合わせしたカナと氷麗。そしてその足元に砕け散った湯呑茶碗。

「ハゥワ…」「家長…（なんでここに!?）」

完全にカナも氷麗もてんぱっていた。

「及川さん!?」「なんでここに!?」

島や清継もそれに気付いた。特に島は愕然としているが…まあ無視しよう。

「ホ…ホホホ（おちつけ私!!全滅させてごまかそうなんて考えちゃダメ!!）」

「（やばいな…）ごめんね及川さん。道案内させて」

氷麗の目が妖怪時の色に変わっているのを見て昌彰は口を挟んだ。

「えっ!?あ、はい。気にしないでください!」

咄嗟に氷麗も話を合わせる。

カナも一応の納得を見せる。

「みんなもすまないな。勝手に来てて」

昌彰は改めて全員に向き直って謝った。

「構わないさ！及川くんもお疲れ様だね。それより…」

清継はそう言って通学カバンからノートパソコンを取り出す。

「ゴールデンウィークの予定を発表する！！」

†††††

GW初日、昌彰達清十字怪奇探偵団は合宿のため一路西へ向かっていた。

ー新幹線の中ー

「さぁ…みんないいかな？それで…」

全員が無言で頷いた。

「よし…いくぞ！！せーの！！」

一斉に全員、額においたカードを場に出した。

ー結果ー

ゆら　１２　鴉天狗

カナ　７　旧鼠

氷麗　９　雪女

リクオ　１３　ぬらりひょん

昌彰　１３　天狐

鳥居　１０、巻　８、島　３

…清継　1　納豆小僧

「ぐあああ　また負けたぁぁ」

「くそーまたリクオと花開院さんと安藤さんの勝ちかよ!!」

「ちくしょー持ってけよ…賭けたお菓子全部持っていけばいいだろー!!」

清継と島の絶叫が車内に響いた。

「しかし、リクオも安藤さんも強いよな。しかもカードも最強ばっか」

リクオはぬらりひょんを、昌彰は天狐を常に引いていた。

「たまたまだよ。たまたま」

「…まあかなり珍しい偶然だな（縁がある妖だしな…）」

リクオはぬらりひょんの血を継ぎ、昌彰は…

―――――

「捩眼山伝説…ですか…聞いたことないですね。すみません…お兄ちゃんは？」

ゆらは妖怪ポーカーで勝ち取ったお菓子をモグモグ頬張りながら昌彰にも聞いた。

「…ゴクン。悪い…俺も聞いたことがない」

昌彰も頬張った菓子をジュースで流し込んでから答える。

リクオと昌彰はこれまで十九連勝。ゆらもそれなりに勝っている。

話題に上っているのは今回の合宿の目的地、捩眼山。そしてそこに残されている妖怪伝説だ。

（十二神将に聞けば何かわかるかもとは考えたが…）

「ふふふ…そりゃー、ゆらくんや安藤さんが知らないのも無理はない！！」

詳しいマニアしか知らないような伝説だからね、と清継が自慢げに語る。

「そのためには『妖怪の知識』をためなければ！！さあ！はいもう一度！！」

清継はあきらめが悪いのか粘り強いのかもう一度妖怪ポーカーを挑んできた。

―結果―

リクオ、ゆら、昌彰　１３

カナ８、　氷麗　９、　鳥居　７、巻　６

島　３…清継　１

†††††

「で、待ち合わせの『梅若丸の祠』とやらはどこにあるんだ？清継」

妖怪博士とやらから清継が課題として探すようにいわれた祠を探して山の中を歩き回ること一時間。

「あ、え～と…」

『運』と『感覚』を磨いていればおのずと見つかる…その博士にそう言われたらしいが、この二点に関して絶望的な清継が指揮をとっていては見つかるものも見つからない。

「リクオ、ゆら。おまえ達が先頭を行け」

昌彰は清継から地図を回収し、後を振り向いた。

「「え？」」

「ゆらなら勘がいいし、リクオにはさっきのポーカーみたいな強運がある」

実際にゆらの陰陽師の直感とリクオの妖怪の血があれば見つかるだろう。

「お兄ちゃんは？」

「俺は殿（しんがり）を務める」

そう言って昌彰はリクオに地図を渡して、最後尾にいるゆらを前に行くように促した。

†††††

「これが『梅若丸の祠』？」

先頭を清継からゆらとリクオに変えて五分後。あっけなく問題の祠は見つかった。

「間違いないよ！さすが奴良くんに花開院くんだ！」

「…清継。お前は何もしていないだろ」

興奮して歓声を上げる清継に昌彰はぼそりと呟いた。

「（お兄ちゃん…なんか不穏な気配が…）」

ガサッ

ゆらがそう昌彰に囁いて来た時に背後から草を踏む音が聞こえた。

咄嗟にゆらは呪符を構え、昌彰は右手で刀印を結ぶ。

「何者だ！？」

「意外と早く見つけたな。さすがは清十字怪奇探偵団」

昌彰の誰何の声に返って来たのは中年の男のだみ声だった。

「ああ！！あなたは！！」

唐突に清継が声をあげる。

「知ってるの清継君？」

昌彰の後ろで背中にカナを張りつかせたリクオが清継に聞いた。

「作家にして妖怪研究家の化原先生だよ！！お会いできて光栄です！！」

そう言って清継は駆け寄って握手を求めた。

「それより…この梅若丸って…何ですか」

妖怪博士の容姿に若干引き気味のゆらが祠の方を見ながら聞いた。

「いやぁ…うれしいな。こうも若い年で妖怪が好きな女の子たくさんいるなんて」「俺も興味があるから是非聞きたいですね」

じりじりと近寄って来る妖怪博士に昌彰はゆらを背後に庇って割り込んだ。

「ああ、そいつはね…この山の妖怪伝説の主人公だよ。ついておいで」

そう言って妖怪博士は昌彰達を先導して歩き始めた。

時刻は既に夕方。夕日が辺り一面を深紅に染める逢魔時（おうまがとき）。

木々の影が昌彰達の歩く石段を縞模様に彩っている。

「ん？何だこれ…？」

巻が注連縄の巻かれた太い円柱の前で足を止めた。
樹にしては表面が滑らかすぎる。よく見ると下に行くほど徐々に細くなっているようだ。
「それは爪だよ」
「「「「爪!?」」」」
昌彰達清十字団の面々は絶句した。昌彰とゆらが周りを見渡してみるとその辺の樹にも数本ずつ爪らしいモノが刺さっている。
「ここは妖怪が住まう山だ。もげた爪くらいで驚いちゃーこまる」
そういう妖怪博士化原の顔には狂気じみた笑みが浮かんでいた。
「（お兄ちゃん。これ本物なん?）」
ゆらは昌彰に囁いた。その顔には微かに焦りと緊張の色が見受けられたが恐怖は欠片も見られなかった。
「（…わからない。青龍、六合どう思う?）」
昌彰に呼ばれて青龍と六合が顕現した。
『結論から言えば本物だ』『ただし数百年前のモノだがな』
ちらりと爪に視線を向けて青龍は断言した。その後に六合が補足を入れてくる。

何故か二人ともゆらには聞こえないようにして。

「（一体どんな…）」

昌彰の疑問に答えたのは青龍でも六合でもなく化原だった。

「この山の妖怪伝説の主人公。山に迷い込んだ旅人を襲う妖怪…その名を?牛鬼〟という」

化原が指差す先には巨大な牛の妖怪の像があった。

「（さすがにこれはまずいんじゃないか?）」

数百年前とはいえ本物の妖怪のモノなら無視するわけにはいかない。現在まで伝承が残っているなら尚更だ。

『大丈夫だろう。この山を支配する牛鬼はあいつの…奴良組の傘下だ』

青龍はリクオを一瞥して告げた。これがゆらに聞かれないようにしていた理由だった。

「（そうなのか!?…なら…）」「（お兄ちゃん、何やって?）」

ゆらが堪え切れなくなったのか昌彰をせっつく。それと同時に青龍と六合は隠形し、霊符に戻った。

「（…いや、よっぽどの事が無ければ大丈夫だろうって話だ。一応警戒はしといたほうがいいかもしれないけど）」

「（そうなん？ならええけど…みんなの事はどうするん？）」

見ると巻と鳥居、リクオが山を下りようとしている。

「（一応護符を持たせておけばいいだろ）」

そういいながら昌彰は呪符入れに入れてある護符の枚数を思い出した。一応多めに作ってあるから足りるはず。

「待ちたまえ！！暗くなった山を下りる方が危険だ！！それにおりるてもバスはもうない！」

清継のその台詞に駆けだそうとしていた巻達は止まった。

「その件に関しては清継の言うとおりだな。今日は新月だ」

整備されているとはいえ、何の明かりも無しに山を下りるのは危険すぎる。

「それにボクの別荘はすぐそこだ！！この山の妖怪研究の最前線！！セキュリティも当然バツグンだ！！」

清継が指差す先にはかなり大きな建物が見えた。

「…セキュリティねぇ？（どこまで信頼していいのやら…まあ、よっぽどの事が無ければ大丈夫だと思うが…）」

「（たぶんほとんど無意味やと思うよ）」

清継の家の収集物の実態を知る昌彰とゆらは苦笑を浮かべるしかなかった。

「セキュリティ？妖怪に？きくかな…？」

リクオも同じように思ったようで疑問の目を清継に向ける。

「まぁ…いうても牛鬼なんぞ伝説じゃから、あの爪も誰かの作り物かもしれんしの～」

「ほらほら、先生もこうおっしゃってるわけだしね！温泉と食事が君たちを待ってるよ？」

化原の言葉を受けて清継がさらに推し進める。

「それは…うう～…」「でも…」

温泉と食事という言葉に帰る気でいた巻と鳥居が迷ったような声を出す。

「それにほら！襲われたとしてもこっちには少女陰陽師の花開院ゆらくんと少年陰陽師の安藤昌彰くんがいるわけだ！！」

バァ～ンとか効果音がつきそうな感じで清継はゆらと昌彰を示す。

「ねえ！？二人とも大丈夫だよね！？」

清継はＶサインを二人に突き付けた。

「今度こそしっかり汚名返上しなきゃ」

ゆらはそう言いながら濃紺の地に金糸で七つの星の輝きをあしらった名刺入れに似た呪符入れを取り出した。

「まあ…な。とりあえずみんなにはこれを渡しておくよ」

昌彰もゆらの物とよく似た呪符入れを取り出した。こちらには十二の光彩が縫い込まれている。

「安藤さん何ですかコレー？」

巻がそう言いながら配られた紙を見た。短冊状の和紙に朱墨で五芒星と様々な紋様が描かれている。

「陰陽師謹製の護符だ。万が一の時には障壁を張る力がある。肌身離さず携帯してくれ」

あまり長くは保たないけどねといいながら昌彰は清継にもそれを渡した。

「さて、ワシはもう山を下りよう」

昌彰が護符を見せた途端、化原は慌てて背を向けた。

「え、先生も一緒に…」

「いやいや、ワシの役目は終わりだよ」

では、と言いながら半ば逃げるように化原は石段を下りていく。

「そうそう、危険だから日が暮れてからは絶対に外に出ない方がいい」

その言葉に清継は何故か目を輝かせた。

「リクオと及川さんも持っていてくれ（妖怪を祓う力はないよ。ただ障壁になるだけだから。雪女も持っておくといい）」

「（わたしはいりません！）」

昌彰は氷麗を説得するためにそちらを向いて気付かなかった。

青龍と六合は爪を確認する際に出てきただけでゆらに聞かれないように気を配っていたし、それ以前に化原の方を見ていない。

だから気付かなかった。山を下りていく化原の身体に繋がれた無数の糸を。その糸が伸びる先を。

†††††

「うまく留まらせたな馬頭丸」

「ここまでが大変だったぞ牛頭丸。で、これからどうするんだ？」

森の木々の茂る中、会話する二つの影があった。

「まずは奴らをバラバラにする。そして俺がリクオと側近を」

一人は武家風の和服に刀を帯び、長めの前髪で左目を隠した少年の容姿をした妖怪ー牛頭丸

「なら雑魚はまかせろ。俺がちゃちゃっと片付ける」

もう一人は貴族風の狩衣を纏い、牛の頭蓋骨を被った妖怪ー馬頭丸

「だが…牛鬼様に言われた男にだけは気をつけろよ」

牛頭丸はそう言って遠くに見える昌彰を睨みつけた。

(陰陽師…牛鬼様が直々に気をつけろと言った男。どれほどのモノだ?)

「わかっている牛鬼様直々に言われたんだ甘く見たりはしない」

ニヤリと馬頭丸は口の端を歪める。

「今夜は新月。嵐の夜…大将の首を狩るにはふさわしい夜だ」

牛頭丸のその言葉に呼応するように森の梢を風が掻き鳴らした。

「行くぞ」

牛頭丸のその言葉を最後に二人の妖怪は闇に紛れた。

第六夜　合宿　～行き先は妖怪の住まう山～（後書き）

・・・・・・

琥珀「・・・」

昌彰『おい、作者。あとがきだ、黙ってないで何か言え』

琥「・・・今、忙しいんだよ」

昌『なら今上げるな。終わってゆっくり上げろ』

琥「・・・」

返事はないただの身代わりのようだ・・・

ボムン！ヒラヒラ・・・

昌『逃げたか・・・だから無理はするなって言ったのに・・・ん？なんだ・・・』

ペラリ

「これについて解説よろしく（＾―＾）～☆　Ｂｙ　琥珀」

昌『丸投げしやがったな・・・なになに・・・

「読んでいただいた皆様ありがとうございます。少し早めに更新出来ました。」　・・・また現実逃避がひどかったんだね。

えーと「次回の更新は前回言った通り中旬以降になります」　だからこれもその日でよかったんじゃ・・・

「今後は一話７０００文字前後（±５００文字）で投稿したいと思います」　まあ、今までがバラバラ過ぎたんだけどな。多いときは一万字越えてたし、少ないと三千字なかったし・・・

「もちろんきりがわるければ増減はします」　当然のことだろ。って言うかこれ全部地の文でよくないか！？

「そろそろ昌彰君が気付くでしょうからここで終わります」　ってこれだけのために俺はあとがきまで出てきたのかよ！？』

それではまた次回お目にかかれますよう、琥珀でした。

琥「試験が～！！」

昌『だから落ち着け！』

※以下宣伝になります。
コラボ企画！
夢幻様の『本格推理委員会』とのコラボ企画が進行し始めました！
自分の方はもう少し後になりますが夢幻様の方で第一幕がスタートしました。
こちらも読んでいただけると嬉しいです。

第七夜　新月の夜　～戦いの幕開け～（前書き）

・・・やっと、やっと終わった
燃え尽きた・・・
作者は瀕死ですが、牛鬼編二話目となります。
楽しんでいただけると嬉しいです。
あ、あと今回は温泉があります。さほど問題になるような描写はない・・・はずです。

第七夜　新月の夜　～戦いの幕開け～

清継の別荘に入った皆の第一声は次のようなものだった。

『おおおお…』巻・鳥居

「成金趣味っすね」島

「若…何ですかコレ？」「すごいね…」氷麗＋リクオ

「悪趣味…」「だな」ゆら＋昌彰

暖炉にシャンデリアなど洋館にある装飾に、白磁の壺やら鷲の木彫…和洋折衷といえば聞こえはいいが、とにかく高そうなものが洋の東西を問わずに並んでいる。

「父の山好きがこうじて建てた別荘でね。この山の妖怪研究用に建てかえさせてもらったものだ」

「ハハ…」

清継が胸を張って言うが昌彰は乾いた笑いしか漏らせなかった。

妖怪研究用に、って、親もよく許可したものだ。

「（うちらがそんなこと言ったら元も子もないんやない？）」

ゆらが昌彰の考えていることを見抜いて囁いてくる。

「（確かにそうだな…）」

昌彰達がそんな会話をしているとは知らずに清継は奥の引き戸を示した。

「さあ、この奥が特製の温泉だよ。女の子たち…先に思う存分入るがいい」

その言葉を受けて巻と鳥居がいの一番に温泉へと駆けこむ。

「うあああ――――すっごー――――い!!」「豪華すぎる～～」

昌彰達からは見えないが、温泉の豪華さに二人ともテンションを異常に上げて戻って来た。

「さっそく入ろー!!露天風呂だよ!!」「行こーぜ、カナ～つら～。ゆらも～」

それに引きずられるように女子は全員温泉に連れていかれた。

「…清継。俺たちの部屋は？」

嵐のように女子が去って行ってから昌彰は清継に聞いた。

「ああ、こっちだよ」

そう言って清継は先頭に立って歩き出す。

「二階は一人部屋の客間が八つある。好きな部屋を選んでくれ」

そう言って鍵を差し出してくる。

「ボクの部屋は一階の奥にある。荷物を置いたら一階のリビングに集合だ」

部屋割は、１カナ、２リクオ、３氷麗、４島
　　８ゆら、７昌彰、　６巻、　５鳥居
となった。

なんとなく誰かの邪な意図が感じられる気もするが…

それぞれ自分の部屋に荷物を置きに行く。

「…これは素直にすごいな…」

十畳ほどの広さにシングルサイズの綺麗なベッド。簡易式のバーカウンターとキッチンに冷蔵庫。

ちょっとしたビジネスホテルよりはるかに快適で、豪華な部屋だ。

「しかし、別荘らしくはないな」

感心したように部屋を見回していると部屋の扉がノックされた。

「昌彰くん、そろそろ行こう」

「おう、ちょっと待ってくれ」

昌彰はそう言ってバッグから呪符入れを取り出した。

「待たせたな。リクオ」

ドアを開けるとリクオが一人で待っていた。

「ううん。島くんは先に行ったみたい。なんかすごく張り切ってたけど」

そう言いながら階段を下りるとリビングからその島の声が聞こえてきた。

それを聞いてリクオは顔を引き攣らせ、昌彰は無言で微笑んだ。

――――

「行かないんですか清継君!?今覗けば…「どこを覗くって島?」…そんなの決まってるじゃないですか!!女ｙ…って安藤さん?!」

清継に対して力説していた島はそのまま振り返って続けようとした。

しかし、島はみなまで言わずに…いや、言えずに終わった。

島の目に入ったのだ。怖いくらいに優しげな笑みを浮かべた昌彰が。

「もう一度聞こうか。島、どこを覗くって?」

昌彰は笑顔のまま島に問いかける。だが、目は完全に据わっているうえに、右手は既に刀印を結んでいた。

「いっ…いえ!なんでもないっす!」

島だけでなく清継も焦ったように首を振り、軽く震えている。
それほどの気迫を昌彰は放っていたのだ。
「…ならいい。俺はすることがあるから」
昌彰はそう言って呪符入れから数枚の符を取り出した。
「昌彰君、どこに行くの？」
リクオがリビングから出ていこうとする昌彰を呼びとめた。
「一応侵入者除けの結界を張って来る（…安心しろ。害意のある奴だけを排除するようにしとくから）」
侵入者除けと聞いて顔を曇らせるリクオに小声で囁いた。
「んじゃ、清継達が暴走しないように見といてくれ。頼んだ」
†††††
「あ――？来てよかったぁ――――」
湯気で霞みがかった露天風呂に巻のハートマーク全開の声が響く。
「妖怪とか全然興味ないけどォこの別荘気に入っちゃったぁ――――！」
天然石の湯船に源泉かけ流し、さらにはちょっとした庭園に石灯籠

まであるのだから温泉旅館顔負けである。

「もう一生ついてく――――！！」「巻あんた現金すぎるよ――――」

キャイキャイとはしゃぐ巻と鳥居をよそに、ゆらは静かに瞑想して自分の精神を高めていた。

（…お兄ちゃんは大きい方が好きなんやろか？…はぁ…わたしもあんくらいあったら…）

…前言撤回。一人で悶々と妄想していた。

ゆらはそんな事を考えながらチラチラと巻へ視線を向け、自分の胸元にも視線を下ろす。

堂々と存在を主張している巻のものとくらべると随分と控えめな自分のもの。ゆらは小さく溜息を吐いた。

別にゆらが小さいわけではない、比較の対象の発育がいいのだ。ゆらだって年相応の成長はしている。

カナや鳥居となら比べても遜色ない？、というかドングリの背比べだが。

（今度聞いてみようかな…）

一応周囲を警戒していなければならないはずなのにゆらは完全に自分の世界に埋没していた。

「ゆ～らちゃん」

巻と鳥居が声をかけてきても気付かないくらいに…

「（でもそれで大きい方が好きとか言われたら…）「ゆらちゃんってば！」へ？な、何？！」

両側から二人に揺さぶられてゆらはようやく現実に回帰した。

「ムフフ…」「！！？」

ゆらは巻の浮かべる意味深な笑みを見て咄嗟に逃げようとするが両手を左右から掴まれて身動きさえできない状態にされてしまった。

「な、なんやの？」

「えー？ゆらちゃんが普段どんな生活してるか聞こうかなーって思ってー」

鳥居が左から女子同士がある特定の話をするときに使う笑顔を浮かべながら聞いてくる。

合宿で、お風呂で、女の子しかいない。こうなると話題は必然的に絞られてくる。

「べ、別にみんなと変わらへんと思うけど？」

逃げるようにゆらは右手に視線を向ける。そこには同じ笑みを浮かべた巻がいるわけで…

「えー？でもこの中じゃ唯一の彼氏持ちじゃん？なんかあるでしょ

ー？」

「か、彼氏って…うちらは兄妹で…」

「義理のでしょ？それに婚約者なんだしー」「ねー」

「そ、そんなん言われたって…ブクブクブクブク」

追い詰められたゆらはお湯の中に逃げ込んだ。

「ねー。カナも氷麗も聞きたいよねー」

巻は止めにカナと氷麗を呼んだ。

（助けて～家長さーん）

ゆらは懇願の意思を込めてカナを見やるがカナは気付いていないようだった。

というか先程のゆらと同じような表情をしている。

心ここにあらずといった様子でザブザブと湯の中をこちらに近づいてきた。

「って氷麗は？」「そう言えばいないね」

巻と鳥居は氷麗を探して視線を巡らせる。

「ゴポッ…最初から入ってきてへんかったと思うけど？」

ゆらは湯から顔をあげ、そう言った。確か脱衣所までは一緒だったはず…とそこまで言うとカナがいきなり行動を変えた。

「ゴメン！わたしもう出るね！」

「へ？」

そう言ってカナは脱衣所の方へ駆けて行ってしまう。

「ちょ、家長さん～！？（置いてかんといて～！！）」

ゆらの心の叫びも空しく、カナはさっさと脱衣所に消えていった。

「…仕方ない、ここは…」「じっくり聞かせてもらいましょうかね？」

「へぅ？」

露天風呂には獲物を狙う二羽の鷹と狙われた小鳥だけが残された。

†††††

「ふぅ…これでいいだろう」

そう言って昌彰は柏手（かしわで）を打った。宵闇に澄んだ音が響き渡る。

それに別荘の外壁に貼られた四枚の呪符と四隅に立てられた桃の枝が反応し、別荘の四方を囲む長方形の結界となる。

この中にいれば例え寝込みを襲われることになっても大丈夫だろう。

「夜になって多少妖気が漂ってきた気もするが…問題は露天風呂の方か…」

脱衣所と露天風呂はL字型に少し飛び出しており、今回張った結界からはみ出してしまっている。

さすがに女子が入浴中に風呂場の近くをうろつくのは躊躇われた。

覗きと思われるのは嫌だし、第一に結界に使える呪符がもうない。

「あとで作っておこう…」

昌彰は少し迷ったが、結局女子が上がってから別に結界を張ることにして玄関へと戻った。

「一旦部屋に戻るか…おい、きよつ…ぐ？」

一応伝えておこうとリビングに顔を出した昌彰だったが、そこには誰もいなかった。

「一体どこに？…！おいおい…」

窓際の小卓におかれているのは二枚の護符。間違いなく先程清継達に渡したものだった。

さらに中央におかれていたテーブルには一枚のメモ用紙が置かれていた。

『ゴメン昌彰くん。やっぱり清継くんを止められなかった。だから

ボクもついていく。
できるだけ早く戻るようにするから…
P．S．　できたらでいいから襲われても滅さないようにしてほしい。ここはボクの配下のシマだから…』

途中まで呼んで、昌彰はそのメモを握りつぶした。

「お人よしすぎるぞ、リクオ…白虎！」

残された護符をポケットに押し込み、昌彰は行動を起こした。

『ここに』

即座に白虎が風を纏って顕現する。

「風読みでリクオ達の居場所を探れるか？」

玄関まで駆け戻りながら昌彰は白虎に問う。風読みで居場所が特定できればすぐにでも引きずり戻す勢いだ。

『すまないが無理だ』

「なにっ！？」

苦い顔で否と言った白虎を昌彰は問い詰める。

『この嵐…風に妖気が満ちている。これでは人間の気配はおろか、妖怪の気配も読むことはできぬ』

昌彰は知らないが、今夜リクオを討つために牛鬼の配下の者が活発

に動き回っていた。
それがこの山に妖気を充満させる結果となったのだ。
「…！」
玄関を出て、昌彰も白虎の言葉を実感した。先程までと比べ物にならない妖気が辺りを満たしている。
『どうする？昌彰』
さすがに合宿まで式盤を持ってくるわけにもいかないので占いは使えない。星見はこの嵐の夜に可能なはずがない。そうなれば…
「…直接探す！天后！」
『お呼びですか』
「ゆら達の護衛を頼む！行くぞ白虎！」
『かしこまりました』『御意』
†††††
「行ったね…」
森の木々に紛れ、別荘を監視する一つの影。
「根香（ねごろ）…行け」

その言葉に応じて小山のような影が動き出す。その数、十数体。

静かにしかし着実に白虎の風を駆る昌彰を追いかけ始めた。

「さて、こっちは女ばかりか…いいよみんな…さっさと片付けちまおう」

鬱蒼とした森から現れたのは六体の巨大な体躯をもつ牛の鬼。

そいつらは露天風呂を囲むように闇に紛れて蠢きだした。

†††††

「っ！！」

「ん？どったの、ゆらちゃん？」

先程まで顔を真っ赤にしていたゆらがいきなり顔をあげたのを見て、巻は怪訝そうな顔を向けた。

「妖気が…」

周囲の闇には妖気が満ちていた。先程までの比ではない。

「二人とも下がって！！」

ゆらは湯船の淵においていたタオルと呪符入れを引っ掴んだ。

「ど、どうしたのゆらちゃん！？」

ゆらのいきなりの行動に、巻と鳥居はしばし茫然となる。

ズガァッ！！

「「えっ？」」

メキャ！バキッ！

「「えええ～っ！？」」

露天風呂の垣根を踏みつぶして現われたモノ。

それは全長が三メートルはゆうにあるであろう、巨躯の大鬼。

「クカカ…」

さらにその上に立ち上がる小柄な影が一つ。

「喰え」

グアアァッ

その一言で風呂場を取り巻く鬼達が動き出した。

「禄存！」

ゆらが放った呪符が光を纏って鋭い角を広げたエゾジカの式神となる。

ドシャァッ！ギチッ！

禄存はその角で鬼の突進を受け止め、自慢の脚力で押し返す。

「くっ！？式神…もう一人の術師か！？」

「入浴中の陰陽師を襲うなんて…ええ度胸やないの！！」

ゆらは正面にいる鬼の頭上にいる馬頭丸を睨みつける。

「ちっ！宇和島！」

馬頭丸の乗る鬼が目の前で別の鬼を喰いとめている禄存めがけてその爪を振り下ろす。

「禄存！？」

咄嗟にゆらは避けるように命じるも、その間にも爪は禄存の背へと迫っていた。

バシュゥッ

「なっ！？」「え？」

温泉から立ち上った湯の障壁が宇和島の爪を退けた。

『やはり来ましたか…』

「！別の式神か？！」

脱衣所から静かに歩み出たのは銀髪をなびかせた女性の神将。

『戦力を分断して各個撃破する。悪くない戦略ですが、我が主は読んでいましたよ』

彼女が操る水は自在にその姿を変える。

「「綺麗…」」

巻と鳥居も初めてみる十二神将の人外の美しさに思わず呟いた。

『十二神将が一人、天后。我が主、昌彰様の命によりお守りいたします』

†††††

「さぁ～行くぞ～!!我らが清十字怪奇探偵団レッツゴーだ!」

その少し前、リクオと清継達は別荘からけっこう離れた場所にいた。

先頭に清継が立ち、島とリクオがそれに続く。殿を務めるのは氷麗だ。

そしてそれらを樹の上から見下ろす一つの影。

――――

（あれが三代目…ならば側近もこちらにいるか…）

牛頭丸はそれを見極めるべく、監視を続けた。

付かず離れず、巧みに妖力を隠し、気取られぬように、細心の注意を払って。

（しかし…あれで側近か？）

牛頭丸は氷麗の行動に思わず溜息をついた。

警戒しているのであろうが、明らかに挙動不審。

ただのタヌキを妖怪と間違え、警護の対象を崖から突き落とすわ、樹の穴に入ろうとしてリュックが引っかかるわ、挙句の果てには蜘蛛の巣を罠だと勘違いするわ…

（…ったく、これだから本家の野郎は…）

こみ上げてくる溜息を必死で抑える。

牛頭丸は牛鬼の側近としてその事に誇りを持っていた。

だからこそ、氷麗の空回りした行動に余計に腹が立ったのだ。

「そろそろ頃合いか」

牛頭丸は小さくつぶやいた。

リクオ達が進む先にあるのは別れ道。分断するならばここが最も適している。

「……」

―――

闇の中から響いた人にあらざる者の声。それが唱えたのは呪文か呪歌か…

どちらにしろ、その効果で前を行く二人の人間はその意思を奪われた。

「おや…別れ道だ…島くん。どっちに行ったら妖怪に会えるかな？」

「ボクは～左だと思います」

「僕は…右だなぁ…二手に別れるか」

「名案っすね～」

島と清継はそう言って勝手に左右に別れた。

「え？ちょっと待ってよ二人とも！？」

リクオは焦って止めようとするが二人は振り向きもせず黙々と進んで行く。

「様子がおかしい。急に…氷麗は島くんを追って！！」

「待って下さい、若！」

氷麗は必死でリクオを押しとどめた。ただでさえ護衛は一人しかいないのにこれ以上リクオを無防備にするわけにはいかない。

「ここで別れたら、もし何かあった時に困ります！」

「いいから行くんだ！早くしないと手遅れになる。氷麗は島くんを！」

リクオは氷麗の腕を解き、背中を押して島の行った道へと押し込んだ。

その時に微かな紙の音が聞こえたのを氷麗は聞き取ることができなかった。

†††††

『はあぁっ！』

裂帛の気合と共に放たれた三本の水の鉾。そのうちの一本が正面にいる鬼の右腕を肩からもぎ取った。

落ちた腕が庭園の石灯籠をなぎ倒す。しかし…

ザバァッ

左右に展開した二本はそれぞれ鬼の爪で散らされてしまう。

『っく！』

天后は思わず歯がみした。天后は攻撃の術を持つ神将の中で最も通力が弱い。

だから通常、後方支援や守りに回ることが多かった。

「貪狼！」

ゆらが新たな式神を呼ぶ。日本狼の式神－貪狼が禄存の抑え切れない鬼を食い止める。

現在、天后が三体と対峙し、禄存と貪狼が二体ずつ。そして馬頭丸が乗る鬼が一体。

多勢に無勢と言った状況であるが天后の瞳に焦りの色はない。

むしろどこか嬉しそうな輝きが宿っている。

戦うだけなら闘将たる青龍か六合を回せばよかったはず。

護るだけなら同じ水将たる玄武でもよかったはずだ。

残る朱雀は火将だから水場では不利、白虎は風が必要だから回せない。

だが、それらの神将は全て男の神将であった。

『女湯を襲うならそれ相応の覚悟があるんでしょうね？』

そう言って天后は馬頭丸を睨みつける。

自らでなければならない任というのは、天后にとって久しぶりであり嬉しい事でもあった。

『激流破！』

放たれるは水流を伴った神気の波動。

青龍の剛砕破を原型に、弱い通力を水圧で補った天后の持てる最大級の攻撃。

叩きつけられる神気と水圧は正面にいた鬼を完全に叩き潰した。

「！うぉっ！？」

激流破の余波は他の鬼にも届いた。馬頭丸の乗る鬼も例外ではない。

「今や！貪狼！喰らいー！」

グギャァァー

貪狼の牙が体勢を崩した鬼の喉笛を切り裂いた。

「くっ！女の式神と陰陽師は後回しだ！そこの二人を先にやってしまえ！ただの女だぞ！」

そこから鬼達の動きが変わった。先程までは最大戦力である天后とゆらを集中的に狙っていた。

だが、今度は狙いを戦う術を持たず、守られているだけの巻と鳥居に向けたのである。

「あんたら！お兄ちゃんからもらった護符は！？」

必死で巻達を守るために鬼達の猛攻を捌きながらゆらは叫んだ。

「あー、それがその…」「濡れちゃいけないと思って…」
脱衣所において来たらしい。
「！」
ゆらは舌打ちしそうになるのをなんとか踏みとどまった。
昌彰の護符による護りがあれば、多少は攻撃に出ることができるのだが…
（あかん、これじゃ護ることはできても攻撃でけへん…）
庇いながらなので動きが制限されてしまい、決定打が打てないのだ。
『巻さん！鳥居さん！建物の中へ！』
天后は二人に叫んだ。はっきり言って何もできない二人がいては足手纏いだということは天后も感じていたのだ。
昌彰の結界の中に入ってしまえば、後ろを気にせずに戦える。
「え？あ、はい！」
巻が何か思いついたような顔をして脱衣所の中に飛び込んで行った。
鳥居もそれに続く。
『ゆら様！そちらは…［侵入者～侵入者～］…は？』「へ？」

間の抜けた機械音声がその場に響いた。

「…なんだ…？」

天后だけでなく、ゆらも、果てには敵であるはずの馬頭丸でさえ思わず動きを止めた。

振り返った天后とゆらの目に飛び込んできたのは降ろされたシャッター（『お祓い済み』と書かれている）。

清継自慢（苦笑）の妖怪セキュリティだ。

「…宇和島…」

溜息を押し殺した馬頭丸が命じると天后の相手をしていた一体が脱衣所の方へ回り込んだ。

結界ギリギリのところから脱衣所を破壊する。

「何よこれぇぇ！！全然役にたたねえぇ！！」「清継のアホー！！」

それに追われる形で巻と鳥居が戻ってきた。

『……』

天后は怒鳴りつけそうになるのを必死で堪えた。これが青龍だったら確実に二人を怒鳴りつけただろう。

何故この土壇場で清継の用意したセキュリティに頼ろうとするのか…

せめて護符だけでも持ってきてくれていればと天后とゆらは思った。

当然ながらパニック状態の二人にそんな判断ができるはずもなく、状況は逆戻りしただけ。

いや、むしろこれによって四方を完全に囲まれてしまったのだ。

「これで、逃げ場はなくなったな」

馬頭丸は配下の鬼の上で口を笑みの形に歪めた。

第七夜　新月の夜　～戦いの幕開け～（後書き）

琥珀「終わった～！」
昌彰「まだ結果は出て無いぞ？」
琥珀「グハッ！？・・・昌彰くん、痛いとこを容赦なくついてくるね・・・」
昌彰「お前がテスト終わったからって浮わついてたから言ったまでだ」
琥珀「やるだけやったよ。うん」
昌彰「んじゃ、とっとと書けよ。話しを進めろ」
琥珀「だね。とにかく四国戦までは終わらせたい。ところで昌彰くん」
昌彰「何だ？」
琥珀「夢幻さんのところでずいぶん頑張ってるね」
昌彰「コラボだろ？いやーまさかあんなにかっこよくやってもらえるとは、嬉しい誤算だね」
琥珀「ゆらも凄く乙女になってる気が」
ゆら「それはうちの要望が通ったからや」
琥珀「いつの間に来たの？因みなんてお願いを・・・」
ゆら「こっち（本編）では出来ないような甘々ラブラブなやつを。あとがきでもいいから。って」
琥珀「結構難しい要求を・・・」
昌彰「っというわけで、夢幻さんとのコラボ作品『コラボ事件！～孫と孫の血を継ぐ者と白髪の魔術師～』現在（２／１５）、５話目まで連載中です！」
ゆら「四国戦後の私達と零牙くんの奮闘、ぜひご覧ください！」
琥珀「さりげなく、いやおもいっきり宣伝だな・・・」
昌彰「それはそうと追試になってないといいね」
琥珀「オチはそれ！？」

昌・ゆ「それでは皆様また次回お会いしましょう！」

第八夜　交錯　～妖と妖、妖と陰陽師～（前書き）

…ちょっとキリが悪いですけど、春休みに入ったのであげます。
なかなか話が進まない…

第八夜　交錯　～妖と妖、妖と陰陽師～

†††††

「待ちなさい島くん！」

島は氷麗の制止を無視して先へ進む。いつもの島ならニヤけたデレデレの顔で振り向いて即座に止まるだろう。

この時点で島は既に妖怪の支配下に置かれているということに氷麗は気付くべきであった。

しかし、普段からリクオしか見ていない氷麗は気付かずに、そのまま島を追いかける。

前を行く島の灯りを頼りについていくと少し開けたところに出た。

「このっ「てめーが側近か」…！！」

頭上から降って来た声に氷麗は咄嗟に妖気を解き放った。

ドシャァァッ

落下速度も加えた刀による一撃は確かに氷麗を貫き通すには十分な物だった。だが…

（！？氷？）

貫いたはずの手ごたえが無く、牛頭丸が不審に思って刀の先を見て

みれば、刃を氷が覆っていた。

「何…？牛鬼殿の手下なの？」

既に氷麗は本性へと戻り、間合いを取っていた。

「ああなるほど…雪女、ね」

牛頭丸は刀をひと振りして氷を払った。

「刀をおさめなさい。今だったらあなたのことを咎めないから」

氷麗は静かに告げる。

「リクオ様の命令で人を追ってるの。ほっといてくれる」

「くくく…ハハハハ…」

「！？なにがおかしい」

闇の中に響き渡る牛頭丸の笑い声に氷麗は苛立ちも露わに声を荒げる。

「あなた…誰に手を出しているかわかってないようね！！私の主は…「ガタガタうるさいよ女」うっ…」

氷麗が冷静さを失った一瞬の隙を突き、牛頭丸は間合いを詰めてその刃を氷麗の左足の甲に突き立てていた。

「偉そうにするな！問題児の側近のくせに！！」

†††††

「待ってよ清継くん！」

闇の中をリクオは必死で清継を追っていた。

しかし、唯一の明かりは前を行く清継の持つ懐中電灯の明かりのみ。

暗闇の中では思うように走れず、足元もおぼつかない。

「リクオッ！」「えっ？！」

リクオは突如として中空から響いた声に驚いて足を止めた。

「勝手に外に出るんじゃねぇ！しかもあいつら護符を置いていくたぁどういう了見だ！！？」

容赦のない怒声と共に、目の前に風を纏った白虎と昌彰が舞い降りる。

白虎の風読みも使えない中、自らが渡した呪符の微かな波動を頼りにここまで来たのだ。

「ご、ゴメン。でも放っておくわけにも…」

「ゴメンじゃない。他の奴らは？」

「島くんと清継くんがバラバラに動いちゃって…島くんの方は今氷麗が追ってる」

その言葉に昌彰は眉間の皺を深くした。

「雪女も来てるのか！？まずいな…リクオ、例のモノは？」

「大丈夫ちゃんと仕込んである」

「そうか…なら少しは…『昌彰…』どうした白っ…わかった」

微かに安堵の息を漏らした昌彰だったが白虎に声をかけられ、再びその表情に険しさが宿る。

白虎は先程自分達が飛んできた方を睨みつけていた。

「リクオ、先に雪女のところへ行け。一人にするのは危険だ。清継は俺が引き受ける」

「え？…うん、わかった」

一瞬リクオは躊躇ったもののやはり氷麗が心配なのかすぐに昌彰の言葉に従った。

昌彰はリクオを見送った後、即座に清継が向かった先を振り向いた。

「…『困々々、至道神勅、急々如塞、道塞、結塞縛、不通不起、縛々々律令』！」

苛立ち紛れで力任せに術を放つ。

フラフラと動いていた懐中電灯の光が沈黙したことで当たった事を

確認した昌彰は周囲にチラリと視線を巡らせて即座にその光を頼りに駆けた。

暗視の術を自らにかけているので昼間と変わらない速度で走り、すぐに清継のところに辿りつく。

「……」

昌彰は縛魔術を喰らって倒れている清継の額に護符をキョンシーのように張り付けて、懐から筆ペンを取り出した。

『昌彰…その辺にしておけ』

簡易式の呪符を作る際に使用する筆ペンで清継の顔に落書きの一つでもしてやろうと目論んでいた昌彰は白虎に止められて再び筆ペンを懐に納めた。

「確かに…それどころじゃないか」

振り向いた先に見えるのは森が造り出す闇。しかしそこに人外の瞳の輝きが潜んでいる。

「青龍」

『随分と多いようだな』

青龍が剣呑さを声に滲ませて顕現する。その手には三日月刃の大鎌が携えられていた。

「珍しいな。それを使うなんて」

昌彰は軽く驚いたように呟いた。

『こいつらにかかずらっている暇はない。さっさと片付けるぞ？』

青龍はそう言いながら前に出る。

「そんなに天后が心配か？」

少しからかうような口調で昌彰が問う。

『…違う（あいつは非力などではない…ただ、俺がいるのに共に闘ってやれないのが心苦しいだけだ…）』

「まあ、いい。さっさと終わらせるだけだ。『形なき弓よ、ちはやぶる神の生弓、放つ生矢よ、妖気を的と為せ』！」

昌彰が放った霊力の矢は木々の合間を縫って闇に潜む鬼を貫く。

グギャァァッ！！

その叫びをＢＧＭに三体の鬼達が姿を現した。未だ見えない気配も含め、その数およそ十数体。

「この前の旧鼠とは比べ物にならないか…」

降り注いだ霊力の矢は雑魚なら一発で消し飛ぶほどの威力を持つ。

どれほどが当たったかは分からないが、ほとんど無傷で出てきた鬼達に昌彰は微かに目を眇めた。

纏った畏は旧鼠のそれをはるかに凌ぐ。武闘派牛鬼組が誇る牛鬼軍団の一角だ。

「白虎、青龍。できるだけ殺しはするな。リクオからの頼みだ」

『はっ、あの甘ちゃんは…』『承知した』

†††††

一　一方その頃　一

「ハァッ!!」

「くっ!?」

氷麗は牛頭丸の刀を掻い潜り、無手は不利だと判断して氷の薙刀を造ろうとした。

しかし牛頭丸も黙って見ていてはくれない。息をつく間もない斬撃が氷麗に襲い掛かる。

「その程度で側近か!?笑わせる!!」

牛頭丸の一閃を氷麗は左半身を引くようにしてかわした。

「呪いの吹雪…」

氷麗が畏を放とうとする間にも刃が喉笛を狙って迫りくる。

「雪化粧！」

右側に転がるようにして袈裟斬りの斬撃を回避し、横殴りに呪いの吹雪を叩きつける。

「ふんっ！」

牛頭丸はそれを返す刀に自らの畏を乗せて断ち切った。

「っ！呪いの…「そうそうやらせるかよっ！！」あぐっ！」

間髪をいれずに鳩尾にひざ蹴りが突きこまれる。

「ここまでだな…」

片膝をついた氷麗に牛頭丸は切っ先を突き付ける。

「何故…若だと知っていながら…どうして！？」

氷麗は気丈にも牛頭丸を睨みつける。

「ふん…全ては思慮深き牛鬼様のお考えよ！！」

その言葉と共に放たれるは必殺の意思を込めた一閃。

「！呪いの吹雪…」

ドガァッ

氷麗が咄嗟に放った畏は一撃を止めるには至らなかったが、刃を凍

りつかせた。

それによって切り裂かれることは防いだが、頭部を強打されることになった。

「あぅっ…（若…守らなきゃ…でも…）」

氷麗は必死に起き上がろうともがく。

だが、貫かれた左足からの激痛に頭部への打撃で意識が飛ぶ寸前まで追い込まれたこの状況ではわずかに頭を持ち上げるのが限界だった。

もう畏を放つ間も余力もない。

「死ね」

思わず目を閉じた氷麗が最後に見たのは自らに刃を振りかぶる牛頭丸の姿…

そのはずだった。

キィンッ!!

鋭い澄んだ音が闇に響き渡る。

氷麗は覚悟した斬撃が来ないことを訝しんで目を細く開いた。

「何ッ!?」

徒人には見えぬ霊力によって編まれた半球状の結界が氷麗を覆い、牛頭丸の刀を止めていたのだ。

「なに…これ？」

氷麗は痛みを堪え、どうにか身を起こす。

カサッ

微かな紙の音に気付き袂を見れば、そこには一枚の護符が押し込まれていた。

「コレは…」

折りたたまれていたそれは昌彰が渡そうとして拒まれた護符。

「まさか若が…」

そしてリクオに渡されたはずのモノ。それが何故か氷麗の下にあった。

「氷麗！？」

切羽詰まった声に氷麗がそちらを振り向けば、追いかけてきたであろうリクオの姿が目に入った。

「若？…」

リクオが来たという事実に氷麗は焦りを感じた。リクオに渡されたはずの護符は今自分が持っている。

つまり、リクオを守るものは何もないのだ。

「きちゃ…ダメです」

牛頭丸が即座に対象をリクオに移した事に気づき、氷麗は叫んだ。

「逃げてぇ――――!!若――――!!」

キィンッ！

悲痛な氷麗の叫びを切り裂き、再び空気を震わせたのは、牛頭丸の刃が受け止められた音だった。

「えっ？」「てめぇ…!!」

「一つ聞く。その女に何をした…？」

不可視の障壁越しにリクオは牛頭丸を睨みつけた。その瞳は静かな怒りに満ちている。

「妖怪の総大将になろうという奴が…陰陽師の護符を持つとは…」

牛頭丸の目に蔑むような色が宿る。

「そいつは奴良組若頭のボクの僕(しもべ)だぞ…それを承知でやってんのなら」

キンッ！

三度目の澄んだ音が響いた。

「なっ…！？」

「『オレ』は…お前を斬る！！」

しかし今度の音はリクオの刀が牛頭丸の刀を弾いた音。

「大丈夫か氷麗？」

牛頭丸が体勢を立て直す間にリクオは氷麗を抱き支えていた。

「若…どうして…？」

「昌彰から二枚もらった。お前と別れる時に上着のポケットに押し込んだんだ」

リクオは自らの上着のポケットから一枚の護符を取り出して見せる。

「そう…ですか…。それよりも…下がってて…ください。私が…やらなきゃ…」

気力を振り絞って氷麗は必死で立ち上がった。

「くぅっ…」

「無茶をするな。その怪我、歩くことも辛いはずだぜ？」

再び崩れ落ちる氷麗をリクオは抱えるようにして支えた。

「情けねぇな。そんな弱っちい娘に助けられ、あまつさえ陰陽師の護符にまで頼るとは」

その様子を見て牛頭丸は挑発するように笑った。

「逃げてください。あいつは本気で若を殺しに来ています。今の若では…」

「いーから…下がっていろ」

そう言ってリクオは自らの持つ護符を氷麗に押し付けた。

「なっ!?若っ!」

慌てて氷麗は手を伸ばすが、それは二重に強化された障壁に阻まれた。

「牛鬼の配下の者か?」

リクオは油断なく刀を構える牛頭丸に対して言葉を投げかける。

「そうだ、無礼は重々承知の上だが、それが我が主の意向ならば!」

言葉と同時に牛頭丸の刃がリクオへと襲い掛かる。

「死ね!奴良リクオ!」

ギィィィン

振るわれた一閃をリクオは自らの得物、長ドス?祢々切丸〃で受け

止めた。

「っ…」「……」

刃を交えたまま力は拮抗し、鍔迫り合いとなる。

ギィン！ギシッ！

リクオは振り下ろされた刃を弾き返し、横薙ぎにされた一閃を受け流す。

「……フン！この牛頭丸の『爪』がお前のような？ふぬけ〃にかわせるか！！」

怒号もろとも放たれた一撃をリクオは身を低くすることでかわした。

「何っ！？」

リクオを捉え損ねた一撃はその背後にあった樹を一刀のもとに両断した。

「はあっ！」

「くっ！」

横合いから放たれる一閃を牛頭丸は峰に左手をつけて両手で衝撃を受け止める。

（若…昼のお姿なのに…どうして…？）

何合と刃を打ち合うリクオに氷麗は違和感を覚える。昼の姿のままリクオが牛頭丸と対等に渡り合っていることに…

一方、リクオは自らの内から湧き出てくるものを何の疑いもなく受け入れていた。

（ずっと前から知っていた。これがボクの力…）

見える。牛頭丸の振るう刃が、その動きが。動く。迫りくる刃を受け止め、弾き返す。

「（おかしい…こいつ…覚醒しなければただの人間ではないのか…？）ぐぁっ！？」

一瞬の逡巡の隙をつかれ、牛頭丸はリクオに弾き飛ばされた。

「（こいつは…強い…）ならば敬意を表して見せてやろう…我ら牛鬼組の真の姿！」

牛頭丸は体勢を立て直し、刀を正眼に構える。リクオもまた正眼に構え睨みあった。

ザッ

一気に牛頭丸が間合いを詰め、刀を振りかぶる。

「牛頭陰魔爪！」

放たれる一撃は何もしなければリクオの身体を両断するだろう。

リクオは自らの刃でそれを受け止めた。

その瞬間、牛頭丸は左手を離し、昌彰も使う刀印に似た印を結んだ。

「――――」

グラッ

「（身体が…）何を…？」

リクオは急に体が重くなるように感じた。

「フ…お前にはわかるまい！」

「若っ！」

氷麗の声でリクオは気付いた。牛頭丸の背から伸びた禍々しき爪に。

ジャガァァッ

二本の爪が左右からリクオを切り裂く。

「牛鬼組は人をあやつり惑わし引き寄せ殺す『？（おそれ）』の代紋」

牛頭丸は誇らしげにその爪を誇示し、刀をリクオへと叩きつける。

ガキッ！ギチィ！

リクオは素早く立ち上がり左手を刀身に添え、牛頭丸の刃を受け止める。

「！」

左右から爪が襲ってくるのを視界の隅に認めたリクオは敢えて牛頭丸の力に逆らわず、後ろへ下がった。

目標を見失った爪が背後にあった樹を抉る。

「人間風情に負けるはずがねーんだよ！！」

ギチィンッ！

「ふ…人間風情か…」

背は樹に押し付けられ完全に退路を断たれながらリクオは薄く、不敵な笑みを口の端に乗せた。

「これで、最後だ！！」

牛頭丸の背負う爪が二本から八本にまで増殖した。

「若っ！！」

ザンッ！

氷麗の叫びは刃が肉を断つ音で遮られた。

「馬鹿な…」

ズルッ…ドシャァッ

地に落ちたのは根元から斬り落とされた異形の爪。

「妖怪でもねぇ…てめぇに…」

「血なら流れている…闇の…総大将の血がな……」

地に伏した牛頭丸はそのまま意識を失った。

「もう大丈夫だ…」

「若…」

氷麗は駆け寄ろうとしたが足が動かなかった。

「知ってたよ。自分の…こと…」

リクオはどこか悲しげな顔で呟いた。

「夜…こんな姿になっちまうんだな」

†††††

「『放たるる風、さながら白刃のごとく』！」

名も無き風神が鬼の全身に無数の裂傷を負わせる。

『ちぃっ！！』

青龍が大鎌を一振りして一体の鬼を昏倒させる。放つ神気の波動は

稲妻となって鬼達の皮膚を切り裂き、神経を焼いた。

『失せろ！』

白虎は上空から鎌鼬や竜巻状の風の鉾を繰り出している。それらは鬼の巨躯を切り裂き、土砂を巻き上げる。

「『謹請し奉る、降臨諸神諸真人、縛鬼伏邪、百鬼消除、急々如律令』！」

柏手が夜の空気を切り裂き、響き渡る。

圧倒的なまでの霊力の波動が霊圧となって鬼達をまとめて吹き飛ばした。

『昌彰！』

「つっ！？」

焦りを含んだ青龍の声に振り向いた昌彰は左手で人形（ひとがた）を放った。

「『バン、ウン、タラク、キリク、アク』！」

放たれた人形を中心に白銀の五芒星が顕現し、鬼の拳を受け止め、弾き返す。

『剛砕破！』

よろめいた鬼は青龍の一撃を喰らって地に伏した。

この前の旧鼠と比べればはるかに強いが、分御霊といえども幾星霜を経た十二神将の敵ではない。しかし…

「くそっ！きりが無い！」

最初にまとめて吹き飛ばしたはずの鬼達が起き上がり、再び向かってくるのを見て昌彰は思わず大きな声をだした。

殺さないように手加減した攻撃。そして森の木々が邪魔をして有効な攻撃を当てることができない。

『昌彰！これでは埒があかない！』

それに加えて鬼達の生命力が予想よりも高かったことによって、考えていたよりも戦力を削りきれていないのだ。

青龍は殺さないように細心の注意を払って神気を抑制していたが、これ以上の遠慮は無用だと暗に告げていた。

「青龍、待て！っく『臨める兵　闘う者、皆陣列れて前に在り』！」

木々の影に紛れて接近してきた比較的小柄な鬼に、九字真言を叩きつける。

刃となった霊力が、その鬼の四肢を斬り飛ばした。

昌彰は必死で考える。多数の敵を殺さずに無力化する策を。

上空で雷鳴が轟き、その光は昌彰の脳裏に一つの策を閃かせた。

「青龍！一旦戻ってくれ！」

昌彰の声から活路を見出したのを感じ取ったのだろう。青龍は静かに問い返した。

『策は？』

「ある。うまくいくかは正直賭けだけど」

その答えを聞いて青龍は一瞬顔をしかめたが即座に霊符へと戻った。

「白虎！俺を抱えて中空へ退避！」

『御意』

白虎が下から投げられた岩を風の鉾で砕きながら昌彰の下へ舞い降りる。

そのまま昌彰を風の中へ取り込み、再び曇天の空へと舞い上がる。

「玄武！」

白虎の風の中で昌彰は新たな式神を喚ぶ。

『ここに』

応えて顕現するのは小柄な水将玄武。昌彰が思いついた策、それは…

「あいつらにいる周囲に雨を降らせてくれ！」

『承知』

通常、天候をあやつることは十二神将にはできない。だが、今は嵐の直前。空気中の水分量も極限まで高まっている。

そこに水将たる玄武の力で介入すれば、雨を早まらせることくらいは容易い。

瞬く間に、完全に視界を奪うほどの豪雨となって鬼達へと叩きつけられる。

「『伏して願わくは　来たれ、闇を切り裂く光の刃…』」

その雨音に消されぬように昌彰は唱える。

「『周囲を白銀に染め上げる、雷の剣よ…』」

天空を覆うのは黒く分厚い暗雲。その中で鈍く稲妻が輝いた。

「『電灼光華　急々如律令ー』！」

暗雲を突き破り、闇を切り裂き飛来するは白く輝く雷の剣。

それは見る者全ての視界を白く塗りつぶし、過たず鬼達がいる場所の中心へと突き刺さった。

通常、雷はより高い位置に落ちる。この場合、鬼達の頭は森の木々より少し低い位置にある。

よって、稲妻は木に落ち、そのまま地面へと流れるはずだった。

しかし、先程玄武の降らした雨で森は全てが水に漬かったように濡れている。

さらに上空から姿を確認できないほど木が密集していることも災いした。

鬼の巨体ではどうしても木の梢に身体の一部が接触してしまうことになる。

木へと落ちた雷はそれぞれの枝葉に付着した水を介し、触れている鬼の身体へと流れる。

鬼達は全身に無数についた傷から灼熱の電流を流しこまれたようなものだ。

「……」

薄く煙たなびく闇の中に鬼達は声も無くその体躯を横たえ、完全に沈黙した。

第八夜　交錯　～妖と妖、妖と陰陽師～（後書き）

昌彰「遅かったな？試験はとっくに終わってたろ？」
琥珀「いや、友人の援軍要請（追試の勉強）にかりだされて…」
昌彰「お前は大丈夫だったのか？」
琥珀「おかげさまでね」
昌彰「さて、内輪ネタはここまでにして、本編についていってみよう」
琥珀（あれ？なんか立場逆転してる？）
昌彰「今回は戦闘が主になっているが…」
琥珀「前回のは短いうえに描写も少なかったからね。今回は、少しは改善されているとは思うんだけど…でもやっぱり術のみでの戦闘はなかなか描写が難しいね」
昌彰「それはもっと精進しろ。そしてその分話が進んでないんだが…」
琥珀「言わないで…いや、牛鬼とリクオの会話がね。この中途半端さが何とも難しくて…」
昌彰「お前が設定したんだろうが？」
琥珀「一応できてはいるんだよ。…会話文だけ」
昌彰「さっさと進めろ。いつまでかけるつもりだ」
琥珀「うー…春休み、と言うか三月はもしかするとバイトが入るかも知れなくて…」
昌彰「…さらに遅くなるかもしれない、と。読者の皆様、作者がとてつもなく身勝手であることをお許しください」
琥珀「一応自分学生だし」
昌彰「何の免罪符にもならねぇよ！！試験は百歩譲っていいとしてもバイトは関係ないだろ！！？」
琥珀「色々あるんだよ…具体的には親の知り合いからの頼みとか…ホントにすみません。できる限り更新はします！」

昌彰「とにかく書け。二月中にもう一回は更新しろよ？」
琥珀「…努力はしよう」
昌彰「それでは皆様また次回、お会いしましょう」
琥珀（結局、全部仕切られちゃったな…）

第九夜　終結　～答えと決意～（前書き）

くっ…

二月中にもう一話あげると言いながら間に合わなかった…

これでギリセーフ…ってのはダメ？

しかも、かなり強引に仕上げてる感がぬぐえない…

しかし、ここを終わらせないと次に進めない。

さあ、次は四国戦！の前に、紫雲鏡の話が入るのか？

第九夜　終結　～答えと決意～

†††††

『くぅっ…』

四方を囲まれた天后とゆらは完全に防戦一方になっていた。と言うのも…

「天后!?大丈夫なん?ちょっ、二人とも離して!」

「ははは!そうだ、殺さずに操るってのもありだよな!（これで牛頭丸よりも先に勝利の報告ができる!）」

馬頭丸の糸によって操られた巻と鳥居がゆらにもたれかかり、湯の中へ押し沈めようとしているのだ。

そのせいで禄存は呪符に戻り、貪狼と新たに放たれた落ち武者の式神、武曲も不安定な状態になっている。

『人間を操る妖術…いえ、糸ですか…』

天后は操られた二人に繋がる不可視の糸の存在に気づいた。その糸を断てば巻達は正気に戻る。

しかし…

グァァッ!!

『激流破！』

鬼達の攻勢がそれを許してくれない。禄存が消えたことによって数による優位は消えている。

「ちょっと、二人ともどこに…きゃっ！？」

ザバンッ

『『ゆら様！？』』

武曲と天后が慌てて振り返ると、ゆらは巻達に押し倒され、完全に湯の中へと没していた。

「今だ！行けっ！」

馬頭丸の命令に鬼達は即座に行動に移る。

ゆらが倒れ、弱っている貪狼と武曲を薙ぎ払い、ゆらへとその爪を、牙を、拳を伸ばす。

『させません！』

湯が一気に溺れたゆらの周囲に立ち上り、障壁となって爪や牙、拳を食い止めた。

「畳みかけろ！」

貪狼と武曲が消え、天后もゆらを護るので手一杯。これを好機とみて、馬頭丸は配下の鬼達に止めを命じた。

（厳しいかもしれませんね…）

鬼達が一斉に両の拳を振り上げる。

ドガァッ！グシャッ！ズドンッ！

「えっ！？」

地に叩き伏せられたのは鬼達の頭、そしてそれには錫杖が突きたてられていた。

「ゲボッ！？」

何が起きたか分からずにいる馬頭丸の顔に錫杖が一閃。

派手に水しぶきを散らしながら温泉へと叩きつけられた。

「ゴホッ！ハァ…ハァ…天后…いったい何がおきたん？」

なんとかゆらが意識を取り戻した。目の前に転がっているのは錫杖を突き刺して転がる鬼達だった。

『…天狗？』

天后は自らの障壁越しに新手の姿を確認した。それが奴良組本家の者であることも。

ザパッ

「ブハァ!!何しやがる!!?」

湯の中から必死で馬頭丸は顔を出した。

「小僧。自分が誰に口をきいているかわからんのか?ワレらは鴉天狗一族…知らぬわけではあるまい」

そう言うのは鎧を纏い、錫杖を携えた漆黒の鴉、黒羽丸。

「カ…カラス天狗!?本家のお目付け役がどうしてここに…ハッ」

『ゆら様…巻様と鳥居様もお下がりください』

後ろから漂う殺気に振り返った馬頭丸が目にしたのは怒りの神気を漂わせた天后の姿。

「汚らわしい…女湯を襲う妖か…」

再び視線を前に戻せば怒りの妖気を漂わせた眼鏡をかけた女性の鴉、ささ美。

「あ、いや…」

「小僧、てめぇに聞きたいことがある。だが…今は若の捜索が先だ。ささ美、ここは女子のお前に任せる。俺たちは若を」

弁解しようとする馬頭丸を完全に黙殺し、黒羽丸ともう一体の鴉、トサカ丸は天へと舞い上がる。

「わかった、気をつけて」

そう言いながらささ美はロープと鞭を取り出した。素早く馬頭丸の足を縛り、露天風呂の軒下に吊るしあげる。

『私もお手伝いいたしましょう』

ゆら達が脱衣所に避難したのを見届けた天后も水を鞭状に操って、微笑みながらそれに加わった。

†††††

ピシャァァッン！！

「ひゃっ！？…どうしよ…雨も降ってきちゃった…」

カナは木の枝の影になっている石段に腰かけていた。

「及川さんも気を失ったままだし…このままじゃ」

ガガァァンッ！！

「きゃぁっ！…ホントどうしたら…」

ガサガサッ！

「何っ！？」

突如として動いた背後の茂みにカナは驚いて振り返った。

「リクオ！って、家長か！？なんでここに！？」

茂みから風を纏って飛びだしてきたのは白虎と青龍を従えた昌彰だった。

再び護符の波動を頼りに追ってきたのだ。二枚の護符の反応が同じところにある。

だからリクオと氷麗が一緒にいるものと思っていたのだ。

「え、えっと…さっき、及川さんを抱えたあの人が来て…」

（！リクオのやつ、一人で決着をつけに行きやがったな…）

最初に鬼達が襲ってきた時、昌彰は自分達陰陽師への襲撃かと思っていた。

だが、氷麗とリクオに渡した呪符が発動したことを先程の戦闘中に微かながらに感じた。

まさかと思って来てみればそこにいたのは氷麗とカナで…

「青龍、家長達を別荘まで警護してくれ」

昌彰はカナの話を聞いてリクオの目的を理解し、背後に控える青龍を振り返った。

『…俺は天后の下へ行く。そのついでだ』

ぶっきらぼうに青龍はそう言った。昌彰に対してあれだけの襲撃があったのだ。

それならゆらの方にも何らかの襲撃があった可能性が高い。天后一人で持ちこたえられているかどうか…

「青龍、天后だけじゃない。ゆらもいるんだ…信じてやってくれ」

『…わかった』

青龍も本音ならば担いでいる清継を今すぐ放り出してでも天后の下に駆け付けたい心情だろうに、昌彰の言葉を受けて幾分か落ちついたようだ。

「白虎、山頂へ向かうぞ。そこにあいつもいるはずだ」

『御意』

昌彰の命令で再び風が渦巻いた。

「ま、待ってください！（あいつって、あの人のことなの？）」

カナが呼びとめるもその声は風に呑まれ昌彰には届かなかった。

『家長といったか？そいつを寄こせ、抱えていく』

「あ、はい。ありがとう…ございます」

青龍は左手で清継を肩に担ぎ、右腕一本で氷麗を抱えた。

『急ぐぞ』

そう言って人を二人抱えているとは思えないほどの軽やかな動作で石段をかけのぼる青龍。

「え？ちょっと待ってくださいよ！」

カナは慌ててその後を追った。さすがにここに一人残されるのはご免被りたいらしい。

†††††

―捩眼山山頂―

（遅い…）

牛鬼は何の知らせも無いことを訝しんでいた。

腹心の牛頭丸と馬頭丸にはそれぞれリクオと陰陽師を討つように命じておいた。

特に陰陽師の男の方、昌彰には十分注意しろと。

だが、先程の目も眩むような強烈な稲光の後、馬頭丸が操る牛鬼軍団の一角が放つ畏が消えた。

（あの陰陽師に敗れたか…）

「何を考えている。牛鬼」

牛鬼の背後にある柱の陰、そこに現れたのはさらに深い闇を纏った妖。

「ああ、やはり来られましたか。リクオ様」

牛鬼は微かに振り向いてその姿をみとめた。

「答えな、牛鬼。何故こんな短絡的に――――オレを殺そうとしたのか」

その首筋に突き付けられリクオの長ドスが雷光を受けて鋭い光を湛えた。

「?牛の歩み〃と言われる程思慮深いお前が何故…まさかあのバカみてぇな旧鼠も…お前なのか」

静かなリクオの声が殺気を帯びる。

それだけカナ達に害を加えられたのが許せなかったのだ。

「いつからその姿に変わられました?何のために?」

牛鬼の問いにリクオは軽く眉を寄せる。

「ご自分の身を護るためですか?それとも《人間の》『ご学友』を護るためですかな?」

「何が言いたい?」

ピシャァァァ!!

再び轟いた雷鳴、それに照らされてリクオの首筋に突き付けられた

刀が浮かび上がる。

「質問に答えろ。お前は何のために妖怪変化を為した!?」

牛鬼の身体から畏が放たれる。

（ガゴゼ?蛇太夫?旧鼠?…幻覚か!?）

気がつけばリクオは周囲を今まで屠ってきた妖怪に囲まれていた。

「貴様は何のために三代目になるのだ!?何を護るために!?」

ガゴゼが叫びながらリクオへと飛びかかる。

それを一刀のもとに切り捨て背後に立った蛇太夫に向き直った。

「お前に百鬼を背負う覚悟はあるのか!?それが知りたい」

返す刀で蛇太夫の胴を逆袈裟に斬りあげる。

だが、斬ったはずなのに刃に手ごたえはなくすぐさま元の姿へと戻ってしまう。

「お前は人を護ると、弱きものを護ると言った。だが知っているか?二代目が死んで徐々に弱体化してしまっていることを」

旧鼠が生前と同じく気障な動作と共に言い放つ。

「お前にわかるか?この西の果てで着実に組が弱体化していくのを見ながら外からの攻勢を必死で防ぐことしか出来ぬ私の気持ちが!

？」

過去に対峙した敵の幻覚に囲まれるリクオに牛鬼は言葉を叩きつけた。

「くっ…」

リクオは旧鼠が放った大量のネズミにまとわりつかれそれを払うのに手一杯だ。

ただ、その言葉を聞くしかない。

「どうした！？自分を護ってくれる百鬼夜行がいなければ…そんなものか！！」

苦戦するリクオに牛鬼は苛立ちを覚え、さらに続けた。

「総大将は違った！我ら（妖怪）を護るために最強となったのだ！！」

かつてリクオの祖父、ぬらりひょんは言った。人と妖の共生、そのためには自分が最強になればいいと。

「お前に流れる血は腐ってしまったと言うのかリクオ！今のお前では人間はおろか、奴良組すら護れん！！」

ゴワァッ！！

その言葉が響いた瞬間、青白い炎が立ち上り、リクオを取り囲む。

「牛鬼…試してんのか？あんまりオレを見くびんじゃねーぞ」

（奥義…明鏡止水――総大将が…使っていた技…）

青き炎はリクオの周囲にいるガゴゼや旧鼠を焼き尽くした。

「答えてやる牛鬼。オレの『意思』は変わらねぇ。血に目覚め、力を自覚した時からな…」

カッ！

稲妻がリクオの姿を照らし出す。炎を従えたその姿は牛鬼に若かりし時の総大将を彷彿とさせた。

「オレは三代目となり――てめえら全員の上に立つ！！」

†††††

「急げ！！牛頭丸に狙われた若を探しすんだ！！何をおいてもそれが先だ！！」

豪雨の中、漆黒の翼が二対羽ばたく。

「兄貴！あれは！？」

トサカ丸が右を飛来する妖気とは別の気一神気を孕んだ風に気づいた。

――――

「急げ白虎！」

豪雨の中、風で雨を弾きながら空を駆ける神気を孕んだ風。

『昌彰！あれを』

白虎が左に羽ばたく二対の漆黒の翼を見つけた。

両者は数瞬の後に空中で対峙する。

「何者だ？」

黒羽丸は油断なく錫杖を構えた。トサカ丸もその後で控える。

『鴉天狗…奴良組本家の者か？』

それに対して白虎は相手の正体を見極めると即座に敵意を収めた。

「兄貴、こいつ親父が言っていた…」

「ああ。お前達はここで何をしている？」

白虎の風の中に昌彰を見つけた黒羽丸とトサカ丸も警戒心を緩める。

「リクオを追っているんだ。おそらく山頂の屋敷に向かったはず…」

それを聞いて黒羽丸とトサカ丸の顔つきが変わった。

「情報感謝する。いくぞ！」

それだけ言うと黒羽丸とトサカ丸は漆黒の翼を翻し、山頂の牛鬼の屋敷へ向かって羽ばたく。

「白虎、俺たちも急ぐぞ」

『御意』

昌彰と白虎も再び山頂を目指し、風を駆った。

†††††

「うぉぉ～い…やめろ…やめてくれ～…ガボベホッ！！」

馬頭丸の言葉は頭が宙に浮いた水の球に頭を突っ込まれて途切れた。

「ダメだよ。気を失っちゃ」

ビシィッ！！

軽く意識が途絶えた馬頭丸にさき美の持つ鞭が飛ぶ。

「ぐぁっ！！式神～こいつも妖怪だろー！！退治しろよ！！」

馬頭丸は必死で傍らに立つ天后に助けを求めるが…

『まだコレくらいでは終わりませんよ？』

天后はニコリと微笑み、さらに水球を馬頭丸の頭に叩きつける。

「やはり旧鼠はお前らがやったことか！！」

容赦なくささ美の鞭が叩き込まれる。

「ひぃ――！！許して――！！」

――――

『着いたか…まったく、足手まといになるな』

「ハァハァ…そんなこと…言ったって…きついんですって…」

カナは青龍の速さに息も絶え絶えで玄関に座り込んだ。

『戦闘の気配はないか…天后。ここに…何をやっているお前達？』

青龍は戦闘の気配がないことに微かに安堵しつつ、天后の神気を頼りに露天風呂の方に赴けば、脱衣所の中から顔を引き攣らせ外の様子をうかがっているゆら達を見つけた。

「あ、青龍。それが…」

ゆらが青龍に気づいて外を示す。

「さぁ、さっさと言いな！」

『婚姻の決まった嫁入り前の女子の素肌を覗いておいて、ただで帰れると思っているのですか？』

そこで繰り広げれているのは…まぁなんと言うか…拷問？のようなものであった。

『見なかったことにしよう…お前達は俺が連れて帰って来た奴の世話をしてやってくれ』

青龍は天后が持つ新たな一面に多少面食らいながらも賢明な判断を下した。

「うん…わかった」

青龍とゆら達はそそくさと脱衣所を後にした。

†††††

ピシャァァッ!!!

ギィィンッ!ガチッ!ガキンッ!

雷鳴を背景に鋭く刀同士がぶつかる金属音が響く。

「まだだ!お前はこんなものなのか!?」

刃を交えながら牛鬼は叫ぶ。お互い浅く傷を追ってはいるが未だ致命傷は受けていない。

「牛鬼…オレを殺して…その後どうするつもりだい」

リクオは牛鬼の刀を受け止めて問いかける。

ギィンッ!!

「お前を殺して…」

牛鬼はリクオの刀を大きく弾いた。必殺の一撃を叩き込まんと自らの刃を振り上げる。

「オレも…死ぬのだ」

交錯は一瞬、それで勝敗は決した。

「私もかつては〝人〟だった。いきたいと願う人間…だが…人間には悪鬼に耐える力が無い…」

ドゥッ！！

牛鬼のその言葉と共にリクオの右胸から派手に血が舞った。

「それでもなお人であり続けるのなら…私が自らをかけ――葬るのみ」

リクオの上体が傾いだ。

「魔道に堕ちろリクオ。私のように人間を捨てろ。総大将になるのならば…」

牛鬼はリクオを振り返る。

「私を超えてゆけ！リクオ」

ドシャァァッ！！

そして牛鬼の身体から血飛沫が迸った。先程の交錯で受けた傷は牛鬼の方が大きかったのだ。

「それで…良いのだ…」

ドォォッ

「違うな…間違っているぞ牛鬼。この血を否定したところで何も変わらない…」

リクオは膝をついた体勢から立ち上がり牛鬼の方を向き直る。

「オレは…オレはこの血を抱えて、お前ら全員の上に立つ！」

それがリクオの出した答え。いくら否定したところでこの身に流れる人の血はなくなることはない。

（妖であり、人であるオレを受け入れてくれたあいつのためにも…）

あの時の誓い…それは昼と夜、妖と人の自分が為したものだ。

違えぬためにも人の血を否定することはできない。

ガバンッ！！

突風と共にお堂の扉が弾け飛んだ。

「リクオッ！？」「リクオ様ぁ！？」

そこから入ってきたのは二体の鴉天狗と式神を従えた陰陽師。

「そこにいるのは……牛鬼だな！？貴様……」

「お前らは手を出すな。昌彰、お前もだ」

リクオはそう言って昌彰達を制した。

「リクオ様…？」

「この地にいるからよくわかるぞ。リクオ…内からも外からも…いずれこの組は壊れる」

倒れ伏した牛鬼が言葉を紡ぐ。

「早急に立て直さなければ…ならない…。だから私は動いたのだ。私の愛した奴良組を…潰す奴(やから)が…許せんのだ」

たとえリクオ、お前でもな…と牛鬼は静かな目をして言った。

「兄貴…」

「逆臣・牛鬼！リクオ様に…この本家に直接刃を向けやがった…！！」

黒羽丸が声を荒げるが牛鬼はそれを遮るように続ける。

「当然とは思わぬか。常に人を護ることにのみうつつを抜かしている輩に、最強の奴良組が継げるかということだ」

今までリクオが百鬼を率いたのは最初の小学校のバス事故の際、そ

して一番街でカナ達を救出する時。

どちらも人間が絡んだ時だ。人間を助けるためにしか動かないように捉えられても仕方はない。

「しかし、お前は意思を示した。私の想い描いていたものを超えてくれた…」

牛鬼は懐かしむような視線を宙に漂わせた。

「もはやこれ以上考える必要はなくなった…」

「リクオ様危なのうござる!!」

ムクリと起き上がった牛鬼に黒羽丸が焦って声をあげた。

「これが…私の結論だ!!」

牛鬼は逆手に持った刀の向きを返し、自らの腹へと振り下ろした。

「『禁ッ』!」

カキィィンッ

「――なぜ止める?リクオ…陰陽師…」

昌彰が張った障壁が刃を止め、リクオの祢々切丸が牛鬼の刀を斬った。

斬られた刃は柱に突き刺さっている。

「私には…謀反を企てた責任を負う義務があるのだ…なぜ死なせてくれぬ…牛頭や馬頭に会わす顔がないではないか…」

「おめーの気持ちは痛ぇほどわかったぜ」

そう言いながらリクオは祢々切丸を鞘に納める。

「オレがふぬけだと俺を殺して自分も死に…認めたら認めたでそれでも死を選ぶたぁ…らしい心意気だぜ。牛鬼」

「だがな…死ぬこたぁねえよ…こんなことで」

「こんなことって…これは大問題ですぞ!!若!」

信じられないリクオの言葉に牛鬼は茫然となり、トサカ丸は慌てて言い募った。

「ここでのこと…お前らが言わなきゃすむ話だろ」

「そんな…若…」

その言葉に黒羽丸とトサカ丸は絶句した。

「いいか牛鬼…死ぬんじゃねぇ。オレはこんなことでオレの一家が死ぬことを許さねぇ」

そう言ってリクオは踵を返した。

「お前は…」

牛鬼はそう言って昌彰にも視線をむける。

「ふん…俺はリクオの願いを聞き届けただけだ」

できる限り殺さないでほしいという願い。それを聞いただけだ。

「俺もこれ以上関わりはしない。果てたきゃ自分で果てろ」

牛鬼が最後に聞いたのはその言葉だった。意識を失った牛鬼は支えを失ったように倒れ込んだ。

静かになったお堂に雷鳴のみが木霊した。

†††††

“オレがお前の親になってやるよ――梅若丸”

親とはこのような存在なのだろうか。私の家は…このときから――この――奴良組になった。

――――

「あ、起きた?」

牛鬼が起きて聞いた第一声は安否を問うリクオの声だった。

「ケガはなんとかなったみたいだ。よかった!」

「お前の部下は優秀だが頭が固いな…俺が快癒の呪(まじない)をかけようとし

たら全力で反対しやがった」

リクオには昌彰の止痛と止血の符が全身に貼られ、快癒の咒で傷はほとんど塞がっている。

「リクオ…朝になると、やはり変わってしまうのか…」

「今は…人間だよ」

気まずい沈黙がリクオと牛鬼の間に落ちる。

「リクオ、俺は牛鬼の部下に意識が戻ったことを報せてくる」

「あ、うん。お願いしていいかな」

そう言って昌彰は席を立った。

「馬頭丸…」

別室で横になっている馬頭丸に声をかける。

「はっ、はい！！」

馬頭丸は即座に布団を跳ね上げ起き上がった。

「いや、そのままでいいから。牛鬼の意識が戻った。後で会いに行ってやれ」

「は、はいっ！！」

必要以上に怯える馬頭丸に昌彰は疑問を持った。

『やはり…』

「言わないでください！！」

白虎が何か言おうとしたが馬頭丸が必死に止めさせた。

「何があったか知らんが伝えたからな…」

そう言って昌彰はリクオのところへ戻ろうとした。

『いいのか？昌彰』

背後から白虎が問いかける。

「ん？」

『ゆら達も襲われたんだが…』

ケガなどはなかったがそれでも襲われたことには変わらない。

「ああ…そうだな…」

『そうだなって…』

「俺もそれについては良しとは思っていない…だが、今回の戦いでゆらも実戦経験を積むことができた」

ゆらが持つ大きな才能。必要な努力も怠っていない。唯一ゆらに不

足しているもの…それは実戦経験。

「そう考えると、今回のこれだって無駄にはならない。結果的にとはいえ誰もケガもしていないんだ。それで良しとしよう」

『…お前がそう言うのなら構わんが…』

（それでも…俺はまだ強くならなくちゃだな…）

昌彰は一人胸の中で呟いた。今回はどうにか凌いだ。

しかし、奴良組の鴉天狗の応援がなければ、天后とゆらを失っていたかもしれなかった。

まだ昌彰は十二神将全てを召喚することはできないし、一度に出せるのも三人までだ。

このままではいつか仲間を失ってしまう。

――――

「牛鬼がボクの百鬼夜行にいてくれたら…嬉しいよ」

障子に手をかけると中からリクオの声が聞こえてきた。

「もちろん昌彰さんも…力になってくれますよね？」

影で気付いたリクオは昌彰にそう言ってきた。

「よく気づいたな…誓いを果たす限り俺はお前達に手を出すことは

しない」

「それでいいよ。ありがとう昌彰くん」

捩眼山動乱―内憂外患を憂いた幹部牛鬼の反乱はここに終結した。

第九夜　終結　～答えと決意～（後書き）

琥珀「なんとか牛鬼編を脱出できたね…」

昌彰「随分と強引に終わらせた感はあるがな」

琥珀「最近きついね言うことが…」

昌彰「長くかけた割に終わらせ方が雑なんだよ！」

琥珀「ゴメンナサイ…四部も使ったからね。長すぎたかな？とも思った」

昌彰「そうか…俺は何とも言えないが…次は四国編だな」

琥珀「いや…その前振りの紫雲鏡編を入れるよ」

昌彰「あれはリクオとカナオンリーでいけるやつだろ？介入させるつもりか？」

琥珀「ん？キミはあんまり関与しないよ。むしろ神将カップルが主役になるかな？」

昌彰「というと…青龍と天后？」

琥珀「さーて頑張ろう」

昌彰「けっこうこの二人優遇されてないか？」

琥珀「今現在出せるのはこの二人だけだからね…出次第他のカップルも入れていくよ」

昌彰「次に出るのは？」

琥珀「玄武と太陰か、朱雀と天一じゃないかな？」

昌彰「騰蛇と勾陣は？」

琥珀「出したいよ！自分もあの二人は大好きだよ！けど仕方ないんだよ！出てくるのが終盤くらいにしかならないんだよ」

昌彰「どうにかしてやれよ」

琥珀「番外編で短編を書くからその時に…」

昌彰「それでは読者の皆様、また次回お会いしましょう！」

琥珀（また締めをとられた…！）

第十夜　つかの間の休息（前書き）

四国編の前振り、雲外鏡編です。

少し長くなったかな？

で、後半はリクオ達は出てきません。メインは青龍×天后です。

第十夜　つかの間の休息

ピピピピピ…

ある女の子の部屋に目覚ましの音が響く。

ピピピピｐガッ！

「うう…」

目覚ましのアラームを止めて部屋の主、家長カナは目を覚ました。

「…またあの夢…見ちゃった…最近…見てなかったのに」

カナの呟きは蛇口から流れる水の音にかき消される。

―カナちゃん―　―カナちゃん―　―また―会おうね――

「六歳のときからずっと…くり返し…見る夢…」

†††††

「ハイそこ！！違う！！」

晴天の屋上にゆらの熱心な指導の声が飛ぶ。

「式神のかまえは『こう』や！！恥ずかしがったらあかん！！」

そう言ってゆらは実際に巻と鳥居に手本を示して見せる。

「大事なんは妖怪に気持ちで負けん『すごみ』や！！」

そう言って禹歩のステップを見せるゆら。

「そうそう、そのステップを忘れずに！それで妖怪から逃げるんや」

ヒィヒィ言いながらも実践する巻達にゆらは基礎的な防衛策の重要性を説く。

「逃げ腰とは違う！！これは生きる術や！！陰陽師の禹歩は妖怪から身を護る未来への一歩やで！！」

「なんで私らが」「こんなの習わなきゃいけないのよぉ～」

昌彰さんの護符持ってたらそれでい～じゃんとこぼす二人にゆらは眦をつり上げた。

「せっかくお兄ちゃんの護符があっても持ってなかったら何の意味もないやろ！？また全裸の時に襲われたらどないするん！？」

「それはそうだけどー」「ゆらちゃん厳し過ぎるよ～」

――――

巻と鳥居が悲鳴をあげる中、カナは双眼鏡で裏庭の様子を偵察していた。

その丸い視界の中に映るのは今日も雑用をこなすリクオとそれをかいがいしく世話する氷麗の姿。

（つ…つきあってるのかな～？き…きにしてなんかないけどぉ…そうよ…これは……）

そう思いながらカナは双眼鏡から顔を離す。拾い上げたのは捩眼山で拾ったメガネ。

「（奴良くんに…「メガネ」を返す…そのタイミングを図っているだけ…）……やっぱ…帰ろ…」

「何してるん家長さん」

「はうっ！？」

カナはゆらに背後から声をかけられて可愛らしい悲鳴をあげた。

「さぁ～～家長さんもレッスンや！ホンマはいの一番に受けてほしいのはあんたなんやで」

「え…ちょっ…」

ゆらはズルズルとカナを屋上の中央に引きずり戻した。

「やぁ諸君！！やってるね！！」

ようやく清十字団の主（実際には昌彰の方が上に立っているが）、清継が屋上にやってきた。

「ふふ…青空の下…陰陽護身術の修行！！う～む素晴らしい光景！！捩眼山での反省点が活きてるね！！」

昌彰がいればどこが素晴らしい光景だと突っ込んだところだろう。

「ボクだって反省の度合いでは負けてないよ！！」

ノートパソコンを片手にそう叫ぶ清継。昌彰がいればお前が最初に護身術を受けやがれとまた突っ込むだろう。

「ふひ～疲れた～」「もう帰りたい～」

一通りの訓練を受けた巻と鳥居は息をあげて座り込む。

「と…その前に」

清継はそう言ってリボンで飾られた小さな小箱をカナに差し出した。

「！？」

「家長さん！！今日は君の生まれた日じゃないか～～マイファミリーへのプレゼントに遠慮なんかいらないよ！！ガンガン受け取りたまえ！！」

そう言う清継からは後光というか七光が差しているように見えた。

「あ…ありがとう」

カナは躊躇いながら受け取った。

「わっ…清継くんすごーい！！」「高級そうな入れ物～」

鳥居と巻の黄色い悲鳴を背景にカナはその箱を開けた。

「（呪いの人形…？）何…これ…」

「家長さんを妖怪化した人形だ！！どーだい超絶素敵（キュート）だろう！！」

清継は自慢げに話すが巻などは文句たらたらだ。

「ちょっと…もう今日は帰るね…」

「え？おいおい、今日は新着妖怪体験談大発表会という大切な――」

「ごめん…妖怪の話は…今日は…」

カナは清継の台詞を遮るようにそう言うと屋上を後にした。

†††††

「ふぅ――（うわ…ねむ…変な怖い夢のせいでよく眠れなかったから…）」

教室に戻って荷物を片付けながらカナは睡魔に襲われた。

（そーいや私が怖がりになったのって、あの…夢のせい…だったような…）

そう思ったのを最後にカナの意識は眠りの海に潜った。

――

―カナちゃん…可奈ちゃん…きみはまだ六つか―

カナの夢の中に現れたのは六歳の時に自分。

―じゃあ大きくなったら遊んでね…十三歳になったら迎えにくるよ―

夢の中のカナの頭は異形の手で撫でられた。

―――

「！！」

カナは勢いよく夢の世界から浮上した。

（なん…だっけ…？約束…？これは…夢よね…？）

身体中に嫌な汗が吹き出し、沈黙が支配する教室に心臓の音が大きく響く。

（怖い…早く帰ろう…暗く…ならないうちに）

カナはそう考えて階段を急いで駆け降り、校門を飛びだした。

†††††

学校の屋上では清継が自分で立ちあげたサイト『妖怪脳』に寄せられた情報について話していた。

「『紫の鏡』の話…知ってるかい？諸説あるが…その言葉を『二十

歳の誕生日』に覚えていたら…呪われて死んでしまうってやつだ！」

「うげげ…おぼえちゃうじゃない～」

巻が嫌そうな声を出して身を引く。

「まぁ、聞きたまえ。実はこの町で数年前、正確には七年前、『十三歳の誕生日』に死んでしまった子が何人もいたんだ」

清継のその言葉で清十字団のメンバーは固まった。

「ボクは…それが妖怪の仕業なんじゃないかって思うんだよね」

†††††

タタタタ…

カナは一人で駅への道を駆けていた。

（あれ…駅って…こんな遠かったっけ）

ガシッ

「キャッ?!」

カナは背後からいきなり肩を掴まれ、咄嗟に振り払った。

「うわっ!?」

「え?ま、昌彰さん!?」

振り返ったカナが見つけたのは青龍に支えられている昌彰だった。
右手に二つの買い物袋を提げ、左手の肘のところにもビニール袋をさげている。

「ゴメン…驚かせたかな?」

「何してるんですか?今日は早めに帰ったんじゃ?」

「何って見てわからないか?買い物だよ。ちょうど登校中に特売のトコを見つけてね」

昌彰は三つの袋をカナに示す。

「すまない青龍」

そう言って昌彰は袋を持ち直し、寄りかかった身体をもとに戻した。

『もう少し気をつけろ』

昌彰を支えるために自分から顕現した青龍はそれだけ言い残して再び隠形した。

「そういう家長さんこそどうしたんだ?すごく焦ったような顔をして。それに顔色がよくないぞ?」

そう言って昌彰はカナを促し、二人で駅の方へと歩き始めた。

「えっと…ちょっと寝不足で…」

そういうカナの顔は青ざめ、目の下にはうっすらと隈が浮かんでいる。

「何かあったのか？」

「いえ…変な夢見ちゃって…よく眠れなかっただけで…」

「夢？」

気になった昌彰はそこだけ聞き返した。

「はい…小さいころ…小学校に入る前くらいからだったかな？…ずっと繰り返し見てたんです」

「……」

カナの言葉に昌彰は思考の海に潜った。

陰陽師の見る夢は、夢であって夢ではない。何らかの意味を持つことが多い。

そしてそれは一般人にも少なからず当てはまるのだ。夢占いなどがその典型例である。

「昌彰さん？」

「ん？ああ…ゴメン。もう少し詳しく聞いてもいいかな？その夢について」

「え、ええっと…なんか紫色の…雲みたいな手足が生えてて…」

そう言ってカナは視線を前方に漂わせた。

「ちょうどあんなのみたいな…って、え？」

「え？」

今二人がいるのはそれなりに急勾配な上り坂の途中。そしてその頂上部には夕日を背景にした異形の影。

キィコキィコ…

自転車のチェーンが軋む音がやけに大きく響く。自転車の上にあるのは異様に大きな頭。

『雲外鏡か！』

再び青龍が自ら顕現した。今回はその手に大鎌はない。それに昌彰は少し安堵し、刀印を結んだ。

青龍が大鎌を使わない＝強敵ではないというわけだ。

「『縛縛縛、風縛』！」

昌彰の放った縛魔術が雲外鏡を乗っている自転車もろとも絡め捕ろうと風の鎖を形作る。

ジャコッジャコッ！

その音と共に雲外鏡の乗る自転車が加速した。

「くっ！」

風の鎖は加速した自転車を捕らえきれずに空を切る。

『バカッ避けろ！』

雲外鏡はスピードを緩めずに昌彰とカナ目掛けて突っ込んできた。

「おわっ！」

昌彰は青龍に突き飛ばされるようにして転がった。

青龍はカナを抱えて後方へ跳躍する。

「みぃつけた」

着地した青龍の目の前で雲外鏡は自転車を止めた。

「十三歳のお誕生日…おめでとう…カナちゃん」

『何のつもりだ貴様？』

青龍はカナを背後に庇う。

「なんだ…お前？」

雲外鏡はようやく青龍がいることに気づいたようだ。

『我が主、昌彰の命により汝を滅する』

「俺の仲間に手を出して…無事で済むと思うな！」

昌彰も立ち上がり、印を結んだ。買物袋は地面に打ち捨てられている。

卵とかが入っていないか若干心配だが…

「なんで…オデはカナちゃんと遊びたいだけなのに…」

そう呟いた雲外鏡は視界の端にあるものが入ってその口を笑みの形に歪めた。

「そうだ…カナちゃん…行こぉ…誰にも…邪魔されないところへ」

交差点にあるのはカーブミラー。その中の一つには青龍とその背後に隠れているカナが映っていた。

「『微塵となりて退散せよ、急々如律令』！」『剛砕破！』

昌彰の裂帛の気合と共に放たれた術と青龍の剛砕破が雲外鏡の顔の鏡を砕かんと襲い掛かる。

フォンッ…

「えっ！？」『なっ！？』

雲外鏡がその場から消えた。雲外鏡だけではない。清流の背後にいたはずのカナも一緒に…

昌彰と青龍の攻撃は空を切り、ぶつかり合って神気と霊力を派手にまきちらしながら相殺された。

†††††

（どうして…？さっきまで、昌彰さんと一緒にいたはずなのに…なんで学校にいるの？）

カナは学校の理科室に蹲っていた。雲外鏡によって転移させられた場所が階段で、右足を挫いてしまったのだ。

「カナちゃん…この部屋…鏡…ないよ」

「ひぃ…」

バッグの中から手鏡が…いや、手鏡に憑依した雲外鏡が顔を覗かせた。

「せまい…」

手鏡から雲外鏡の畏が限定的とはいえ放たれる。

一瞬の暗転の後に場所はどこかの男子トイレへと変わっていた。

（鏡…鏡から…出てくる…早くここから逃げなきゃ…）

カナは痛む足を堪えて立ちあがった。

ガッ、ボトォ

踏み出した足がバッグにあたり、先程清継からもらった人形が転がり落ちる。

ブィィン、ブィィンッ

「イヤァッ!?ナニコレ…!?こ、これも…妖怪…!?」

いきなりその人形が震えだし、カナは思わず腰が抜けてしまった。

「そこに…いるのぉ…」

手洗い場にある鏡から雲外鏡の声が聞こえた。

(もう…ダメ…)

しかし、絶望の淵にいるカナに希望の光が舞いこむ。清継に渡された人形から。

『家長さん…聞こえるかい…』

「!清継くん!?」

『驚いたかなー?実はこれ清十字団の通信機になってて「助けて!」え?』

いきなりの言葉に通信機の向こうの空気が凍りついたようだ。

「今、妖怪に…鏡の妖怪に襲われてるの――!!」

『妖怪!?なんやて!?今どこにおるんや!?』

向こうで通信機を奪い取ったのだろう。ゆらの声が聞こえてきた。

「今…学校!!どこかの男子トイレに…「カァナちゃん…」イヤァッ！」

カナは背後から迫って来る雲外鏡に思わず持っていた人形を投げつける。

その衝撃で清継たちとの通信が切れてしまった。

「カナちゃん…あそぼぉ…」

†††††

『今、妖怪に…鏡の妖怪に襲われてるの――!!』

通信機から零れてくるカナの切羽詰まった声にゆらは清継からそれを奪い取った。

「妖怪!?なんやて!?今どこにおるんや!?」

思わず通信機に向けて叫ぶゆら。

今昌彰はいない、自分が護らなければならない。その思いで必死でカナに呼びかける。

『今…学校!!どこかの男子トイレに…「カァナちゃん…」イヤァッ！』

ブツン！

「あかん！切れてしもた！！」

ゆらは通信機の人形を清継に押し返した。

「男子トイレって言うとった…行くで！」

そう言って呪符入れを取り出し、屋上から階段を駆け降りた。

そのまま近くにある男子トイレのドアを蹴破る勢いで開け放つ。

「おらん…ここやない。気配すら感じひん…」

そう言って次のトイレへと飛びだす。

†††††

「ゆらちゃん！！ここ！ここだよ！」

ゆらが最初に飛びこんだトイレの鏡。その中にカナはいた。

『おらん…ここやない。気配すら感じひん…』

そう言って出ていこうとするゆらと清継達。

「待って！ここよ…なんで見えないのぉ――――！？」

悲壮なカナの叫びも空しく誰も気づかずに外へ出ていく。

「誰も気づかないよ…妖怪じゃないと入れないから…」

そう言って雲外鏡は雲の触手をカナへと伸ばす。

「イヤァッ！！」

バチィッ！

「ウグゥッ！？」

不可視の障壁が雲外鏡の触手を弾いた。

「な…んだ…コレ？」

「これって…」

昌彰が捩眼山に赴いた時に渡してくれた護符。それは未だ効力を失わず、雲外鏡の触手を退けたのだ。

「カナちゃんっ！？」

その時、鏡の外から声が聞こえた。

「リクオくぅん！？」

ガシャァァンッ

「なんで…鏡面世界（こっち）が見える……ここは…オデとカナちゃんだけ…」

雲の触手が鏡に突き刺さり、粉々に砕き散らした。

「ねぅえぇぇ、かなちゃんんんん！」

キィンッ！ギシッ

のしかかって来る雲外鏡に対して再び昌彰の護符が障壁を築く。

「コレ…ジャマ…」

雲外鏡は障壁を突き破ろうと触手を槍状に変化させ、同時に放つ。

「キャァッ！」

ギチッ…ミシッ！

障壁が鈍い音を立てる。いくら陰陽師謹製の護符といえどその効果には限界がある。

この状況が長引けば護符に込められた霊力が尽きることは目に見えていた。

「イヤッ…」

メキャメキャッ！

何かがひび割れるような音が周囲に響く。

「ニギャッ！？」

雲外鏡の頭部となる巨大な鏡。その頂点に無数の罅が走る。

素手で雲外鏡の鏡を抑えるのは、夜が近付き覚醒した夜のリクオ。

「てめー…オレのシマで女に…手ェ出してんじゃねぇぞ」

その言葉と共に放たれたのは祢々切丸の一閃。

ピキッピキィ…ガシャァァァア！！

鏡の中心から走った傷から、罅が放射状に広がる。

「お前…何者…だ…」

その言葉を最期に雲外鏡は木っ端みじんに砕け散った。

それを横目にリクオは祢々切丸を鞘に納める。

「あ…ありがとう…」

「大丈夫だったか？」

リクオはカナへ手を伸ばす。

パシッ

その手はまだ発動したままの障壁に弾かれる。

「…その様子だと直接襲われてはねぇみてぇだな？」

そう言ってリクオは踵を返す。どこか寂しげな顔を浮かべながら…

「ま…待って！」

カナは咄嗟にリクオ（カナはそうとは知らないが…）を呼びとめた。

「どうした？」

振り返るリクオにカナは内ポケットから取り出した護符を…捨てた。

「いいのかい？身を守るもんを捨てちまって？」

リクオは驚いたように聞き返す。

「いいんです……えっと…あっ！」

立ち上がろうとしたカナだったが挫いた足の痛みに前のめりに倒れ込む。

「足…怪我してんのかい…」

受け止めたリクオはカナの足の様子を看取るなり、両手でカナを抱えあげた。

「えっ！？」

お姫様な抱き方にカナは思わず顔を紅くした。

ブルブルブル

「ひぇっ！？」

『大丈夫なん!?家長さん!?』

通信機の向こうからゆらの焦った声が聞こえる。

おそらくまだ探しているのだろう。

「あ…ごめん、ゆらちゃん…大丈夫…寝ぼけて勘違いしたみたい…全然妖怪じゃなかったよ」

『ホントかい家長くん?』

今度は清継の声が聞こえてきた。

「うん。もう帰ってるから安心して。うん。それじゃまた明日ね」

ごまかしきる自信がなくカナは早々に会話を打ち切った。

「終わったのか?」

カナが通話を切った後リクオは窓から宵闇の空へと飛びだした。

電柱の頂点を足場に再び中に身を躍らせる。

「そ…空飛んでる――――!?」

実際は跳躍しているのだがカナにしてみればどっちも同じなのだろう。驚いた声をあげる。

「家に送るだけだぜ。こっち…だよな?」

再び電柱の頂上に着地する。

「いや…」

「？」

「お願い…もうちょっとだけ一緒に…」

カナは若干頬を赤らめながら続ける。

「あなたのこと…もっと…教えて下さい！！」

数瞬の躊躇いの後にリクオは方向を変え、カナに囁いた。

「怖い思いをしてもいいんだな？」

「えっ？」

†††††

「白虎、風読みで追えるか？」

『先程から探っているが反応がない。鏡で移動したせいだろう』

青龍だけでなく白虎も顕現するが追跡しようにも追うことができない。

『お前の護符の波動を追えばいいんじゃないのか？』

たしかに捩眼山ではその手段を使ったが、鏡面世界という異世界の中に取り込まれているため、探ろうとしても完全に遮断されてしまっているようだ。

「無理だ。発動でもしてくれればまだ探しようがあるんだが…！」

そう言っている最中に昌彰は護符が発動したのを感じ取った。

「白虎！あっちだ！」

『学校？』

昌彰が指差した方向を見て青龍は胡乱げに呟いた。

『なぜ？』

白虎も訝しげな表情を浮かべる。

「そんなことはどうでもいい！急ぐぞ！」

『それも持っていくんだな…』

買い物袋を抱えあげた昌彰に青龍は呆れたような感心したような視線をむける。

「当たり前だ！白虎！学校へ急げ！」

『御意』

神気を含んだ風が渦巻き、白虎と青龍、昌彰を包み込み上空へと舞

い上がった。

――――

「！白虎…速度を落としていい。護符の反応が戻ってきた」

『何？』

間もなく学校に到着するところになって昌彰は速度を落とさせた。

「ゆらがやったか…若しくは…」

昌彰がそう呟いた時、校舎の窓から人影が飛びだした。

「リクオが…やったようだな」

地上に降りた昌彰はそれを見上げた。

リクオは途中で方向を変え、一番街へ向けて向かっているようだ。

「青龍、天后」

『なんだ？』『ここに』

天后が青龍の背後に顕現する。

「大丈夫だとは思うが、念のためついていってくれるか？」

『何のために？』『青龍、いいじゃないですか』

青龍は不機嫌そうに、天后は若干楽しそうに応じる。

「だから念のためだ。それと…一番街…あの街が今どうなっているかも知りたい。頼む」

『…承知した』『かしこまりました』

二人の神将はそう言って隠形した。

†††††

「いらっしゃいませ!!ご来店ありがとうございます!妖怪和風隠食事処『化猫屋』へようこそ!!」

青龍と天后はリクオを追って化猫屋にいた。

『奴良組若頭への使いの者だ』

「若に?それではこちらへ…『いい。自分達で探す』」

青龍は迎えに出た化猫(店員)を無視して中へ進む。

「お二人様ですか?こちらへどーぞ!」

新たに応対した店員にそう言われ、四人掛けのボックス席へと誘われた。ちょうどいい具合にカナとリクオの席が見える。

「ご注文は何になさいますか?」

『俺はい…『またたびカクテルを二つお願いします』天后…』

青龍は適当に流そうとしていたのだが、メニューを見ていた天后が遮って勝手に注文する。

『いいじゃないですかたまには。こうして二人で出掛けるなんてめったにない機会なんですから』

『妖の酒だぞ？』

神饌として供えられたお神酒とは違うのだ。

『騰蛇（とうだ）も昔、愛宕の天狗の里で酒を酌み交わしたと言っていますし、構わないでしょう？』

『そんな話どこから…』

しかもいつの話だと青龍は呆れたようなように呟いた。

『勾陣（こうちん）に聞きました。ね、いいでしょう？』

『…一杯だけだぞ？』

天后の笑顔に青龍は苦虫をかみつぶしたような顔をしながらも了承した。

すぐさま小さなカクテルグラスが二つ運ばれてくる。

『さ、青龍』

天后は一方のグラスを手に取り、乾杯とでも言うように掲げた。

―――

『せ～りゅ～』

『……』

青龍は完全に酔っぱらっている天后に辟易しながらも無言を貫いた。

人身をとっていない十二神将が酒で酔うことはない。ただしそれは人間の酒の場合だ。

ここ化猫屋で出される酒は化猫組直営の酒造で造られる。

つまりは洋酒ならぬ妖酒だ。天狗の酒ほど強くはないが、飲みやすい分ついつい飲み過ぎてしまうことが多い。

『ねぇ～、せ～りゅ～』

今の天后の状態がそれだ。

「なぁ、あの子美人じゃねぇ？」

「そうだな！あんな綺麗な銀髪見たことねぇし！」

しかも軽く酔いが回って頬が紅潮し、瞳が潤んだ天后はさらにその人外の美貌を増していた。

周りにいる客の妖怪だけでなく店員の化猫達もちょくちょく覗きに来ている。

それが青龍の神経を逆なでし、より無口にさせているのだ。

『……』

『せ～りゅ～！ねぇ～、せ～りゅ～…』

（（カワイイ…！！））

普段の凛としたきつめの雰囲気は息を潜め、甘えてくる天后は無自覚のうちに周囲の妖怪たちの視線を引き付けている。

『せ～りゅー…なんで何も言ってくれないの～』

『お…おい、泣くな！？』

ひたすら無言を貫き続けていた青龍だがいきなり涙ぐんだ天后に慌ててフォローを入れる。

「おいおい、あんな美人泣かせてるぜ…」

「だいたいあいつあんな美人と一緒にいるのに何にもしゃべらないなんてありえねぇだろ…」

『お前ら…そこに直れ！』

周りの妖怪たちがこちらを見ながら囁きかわす言葉に青龍は本気で神気を解放しようとしていた。

『ダメですよ～、せ～りゅ～。初対面の人にそんな事言っちゃ～』

と、先程まで泣き顔だった天后が軽い膨れっ面で上目づかいでもって見上げてくるものだから、周囲からの視線が半端ない。

『帰るぞ天后！』

『？せ～りゅ～…えへへ…』

せ～りゅ～…じゃない青龍に抱きかかえられた天后は一瞬驚いたような顔を見せたがすぐに至福の表情を浮かべ、そのまま身を青龍へ預けた。

「お客様…お勘定は…？」

恐る恐る店員の一人が青龍に声をかける。

『奴良組若頭にでもツケておけ！』

青龍はそう言って、天后を抱えたまま隠形した。

ツケられたリクオはまだそのことを知らない…

†††

チュンチュンチュン…

夜明けの化猫屋…

片付けをする店員の前に三人の人ならざる者の影が現れた。

「あ、すみませーん、もうすぐ夜明けなんで…」

店員の言葉は風が渦巻く音の前に掻き消される。

ビシビシッビシィィッ

「!?うがっ…」

風の音が弾けると同時に店員の衣服が切り裂かれる。

「なんだー!?」「突風!?店が揺れたぞ…」

店の中から他の店員も飛びだしてくる。

「ここが…奴良組の本拠地浮世絵町…」「首都（とーきょー）にあるのにな〜んか古臭い街だなぁー」

先程の風を放った黒服の男と側にいる舌を出した男が言う。

「どうやら噂どおりの甘ちゃん一家だな…この街を制圧する日数は多く見積もって…一週間だな」

その二人の奥に全てを見下ろすかのようにいる男が呟いた。

「さて…念のため、あちらにも釘を刺しておこうか…」

第十夜　つかの間の休息（後書き）

琥珀「さて…ようやく四国編に入れるよ…」

昌彰「今回は随分と思い切ったな…」

琥珀「天后さんの性格をかなり崩壊させたね。まぁ酔っぱらってたからっていう言い訳は用意してあるし、よくない？」

昌彰「まあ、読者の皆様に受け入れてもらえればいいけどね…しかし今回は比較的早かったな？」

琥珀「一応、原案は早くからできてたからね。それとはやくコラボのを出したいし」

昌彰「そうだな。夢幻さんの『本格推理委員会』の方では既にコラボ編は完成してしまったんだ」

琥珀「だから急いでるんだよ。一刻も早く追いつかなくちゃ！だけど…」

昌彰「だけど？」

琥珀「まだ全くできてないんだよ！場面のぶつ切りばっかりで繋がらないんだよ！」

昌彰「プロットができてるようなもんだろ？さっさと書け」

琥珀「そこからがてこずるんだよ！」

昌彰「はいはい。で、次回更新はいつごろ?」

琥珀「…少し遅くなるかもしれない」

昌彰「二話前で予告しておいた事態になったと…」

琥珀「昨日からね…読者の皆様、この作者の身勝手をお許しください…極力努力はします」

昌彰「それでは読者の皆様、また次回（いつになるかな?）お会いしましょう!」

琥珀「三月中にはもう二つほどはあげたいです…はい」

第十一夜　日常に忍び寄る影（前書き）

お久しぶりです…
バイトの合間を縫っての執筆活動…
疲れて即寝てしまう生活が続いておりました。

しかし、季節はもうすぐ春だというのに厳しい冷え込みが続いております。
東北関東大震災の被災地のほうでは未だに雪が降り、寒さ対策が十分に取れていない避難所等での生活はご高齢の方をはじめとして多くの方々が不安と寒さと闘っているのでしょう。

自分ができることを少しでもやっていきたいと思います。

なんか暗いまえがきになってしまいましたが久しぶりの更新です。
どうぞ…ちょっとグダってますけど…お楽しみください。

第十一夜　日常に忍び寄る影

―奴良組本家　大広間　総会会場―

上座に総大将ぬらりひょん、奴良リクオが座し、下の座敷には相談役の木魚達磨、鴆一派組長の鴆、牛鬼組組長の牛鬼を始めとした幹部が顔を揃えている。

いや…一つだけ空席があった。関東大猿会会長の狒々の席が空いている。

幹部達の膳に供されているのは赤飯。

その品に反リクオ派の幹部達は眉を潜め、小さな声で囁きかわす。

「リクオ様が出席されるとは…随分と久しぶりじゃああるまいか」

「牛鬼もおるぞ…」

謀反を起こしたはずの牛鬼が総会の場にいることもさらに困惑の様相を深める反リクオ派の面々。

「噂では奴は破門級の罪を犯したとか」「リクオ様に弓を引いたという…何故またこの総会に出る…？」

先頃の牛鬼の謀反の情報も不完全ではあるものの伝わっているようである。

「この場で裁くつもりか…」

――――

「リクオ様、どーして夜の姿でご出席されないのですか！」

リクオの前にふよふよと鴉天狗が漂う。

「そんなポンポン変化できるようなもんじゃないんだよ…」

「その姿では…不利ですよ。総大将との約束をお忘れか！」

いつもと変わらぬリクオに叱咤が届く。

「忘れてないさ！もちろん」

リクオがそう言い切った時、反リクオ派の筆頭である独眼鬼組組長の一ツ目入道が口火を切った。

「なんですかな？今日の総会は。私の知る理由なら赤飯など出るはずがない」

そう言って一ツ目は牛鬼の方を見やる。

「おい、一ツ目ェ…」

「オレはねぇ…組のためを思って言ってるのよ？ただでさえ西方の勢力に押されとるんじゃ。ここらでビシッとなー。弱体化はごめんじゃ！！」

一ツ目はぬらりひょんの言葉を遮り、そう言った。

「そうじゃ…そこで組の強化のためにこの総会で奴良リクオに正式に奴良組の跡目である『若頭』を襲名させる」

「ハ？」

ぬらりひょんの思いがけない言葉に反リクオ派の幹部は首を傾げる。

「今まででてきとーにしてきたがな…よって牛鬼の件はリクオに裁かせる！！」

「ちょっと総大将…いまさらリクオ様に何の期待をかけているのですかハハハ…」

一ツ目はぬらりひょんの言葉に乾いた笑い声をもらした。

「リクオ」「うん」

ぬらりひょんに呼ばれ、リクオが前に進みでる。

「大安吉日のこのよき日に奴良組総会にお集まりいただき恐悦至極に存じます。只今紹介にあずかった奴良リクオでございます」

「リクオ…？」

普段のリクオを知る鴆をはじめとする一部幹部はその違いに息をのむ。牛鬼はいつもとかわらないようだが…

「若頭のお役目確かに承りました。今後いかなることがございましてもこの盃決してお返し致しません」

リクオは昼の姿でありながらきっぱりと言い切った。

「しかしながら私いまだ妖怪任侠道を修行中の脆弱なる駆け出しの若輩者でございます。その言葉の間違いや、皆様に失礼な言葉を申したる節はこのような次第ですので何卒ご容赦頂きたく存じます」

「なんじゃ…？」「急に…」

一息でそれだけ言い放ったリクオに周囲はざわついた。

「リクオ様…では牛鬼の件を私から説明させていただきます」

そのざわめきがおさまるころを見計らって木魚達磨が進み出る。

「うん」

そして木魚達磨から先日の牛鬼の反乱の詳細が語られた。もちろん旧鼠の件も含めて。

「やはり本当か」「バカな奴」「ならば牛鬼の奴」「へっ」

反リクオ派の幹部たちからは嘲笑をも含んだ声が聞こえる。

「リクオ様…ご処分を」

「うん」

木魚達磨のその言葉で再びリクオへと注目が集まる。

「おとがめなし！！」

リクオは『無罪』と書かれた半紙を全員の目前に掲げた。

『ハァ!?』

ありえない言葉に反リクオ派の幹部は揃って疑問の声をあげる。

「なんでじゃ――――!?」「それほどのことをしといて――――!?」

「総大将!?こりゃーちょっとおかしーのと違いますかい!?」

納得できない幹部達がぬらりひょんに詰め寄る。当のぬらりひょんは動じる気配は微塵もない。

「リクオ様は何もわかってねぇ!!若頭とか本気で言ってんですかい!?」

一ツ目を先頭に抗議の声があがる。

「せめて解散させるのがスジってもんだろーが」

リクオに対して喧喧囂囂(けんけんごうごう)と反対意見が吹き荒れる。

「いーの!ボクが決めたんだから!ボクを見極めるためにやったんだよ。ねー牛鬼!!」

それらを押しとどめるようにしてリクオは牛鬼の方を見る。

牛鬼は静かにその場に座したまま沈黙を守っている。事態の成り行きを見守るように。

「総大将！ほんとにいいんですか！？しかも陰陽師の介入があったとか聞いていますぞ！？奴良組の若頭になろうというものがそれでいーんですか！？」

埒が明かないと判断したのか反対派の幹部達の追及はぬらりひょんへと向かう。

「ふぅむ…その事なんじゃがのう…」

「なっ！？」

ぬらりひょんの言葉…それに反リクオ派の幹部はもちろん、リクオ派の幹部からも驚愕の声が上がる。

牛鬼だけがその言葉を受け入れ、微かに顔をしかめた。

「そりゃー本気ですかい！？総大将！！」

「リクオの進言じゃ。ワシも組の強化にとっても有益じゃと判断した」

ぬらりひょんの言葉に追及の矛先は再びリクオに向かった。

「どういうつもりだ！？そんなんが通るとでも思ってるのか！？こんなんじゃ組は弱くなる一方よ！」

一ツ目が堪え切れぬというようにリクオに詰め寄る。

「お、おい一ツ目…「止めんじゃねぇ！！」」

一ツ目は止めに入った算盤坊を振り払って続ける。

「大体妖怪でないものを組に加えるとでも言うんか!?逆に忠誠心が薄くなるわ!!」

「おい一ツ目…」

叫び続ける一ツ目を鳩が止めにかかった。

牛鬼が動かなかったことがリクオ派だけでなく反リクオ派の幹部にとっても大きな影響を与えたのだ。

「なんだぁ!?若いの?おめーはこんなガキを支持するっちゅうんかい!?」

怒鳴り返す一ツ目に鳩は無言で見返した。

直接刃を交えた牛鬼が提言を受け入れた。それだけその力を無視できないということだ。

「周りを見ろ!空気を読め!!誰一人……」

そこで一ツ目気づく。いつの間にか後ろにいたはずの反対派の幹部たちが離れていることに。

「オレは…言ってない」「オレも言ってないぞ」

「お…おい…(どーした…?みんな…)」

一ツ目以外の反対派はじりじりと自分の席に戻っていた。
そこでようやく一ツ目は自分が孤立しているに気づく。
「一ツ目よぉ…お前…あくまで組のためって言うんだな…？」
リクオの纏う空気が変わった。昼の姿でありながら一ツ目を圧倒するほどの気迫を放つ。まるで夜の姿のような…
「なんなら…お前も試してみるかい？俺と――の力を？テメェの命でな…」
「ううー――うう！」
一ツ目は完全にリクオの気迫に呑まれていた。無意識に足が一歩下がる。
「なんてね。戻って会議を続けようか！」
先程までの気迫が嘘のように収めてリクオはそう言って一ツ目の肩を叩いた。
（勝負ありましたな総大将）
目線で問いかける木魚達磨にぬらりひょんは黙然と頷いた。
†††††
『昌彰…どうかしたのか？』

「玄武か…」

ゆらが眠った後、昌彰はベランダに出て夜空を見上げていた。

『星占か…何か気になることでもあったのか？』

「……妖星が流れた…」

『なっ…』

妖星…即ち彗星や流星のことであり、星占では凶事の前触れであるとされている。

「北辰から離れていたからお爺様が動くようなことにはならないと思うけど…」

昌彰は嫌な予感を払拭できなかった。

その夜…奴良組傘下の一派、関東大猿会が何者かの襲撃を受け…壊滅していた。

†††††

―翌日―

「じゃあなゆら」

「うん。今日は帰りに買い物行くんやろ？」

現在昌彰達は学校の階段の踊り場で今日の予定を話している。

いつの間にやら昌彰とゆらが兄妹であることは清継達の口から一年はもとより二年、三年にも広がってしまったのだ。

これではコソコソする意味はないので二人ともいい加減に開き直って、学校でも堂々と仲のいい兄妹で過ごしている。

ちなみに婚約の事実はゆらが清十字団全員を脅してでも口止めした。

昌彰としてはゆらに余計なムシがつかないよう、広げてしまってもよかったのだが、ゆらが断固拒否した。

清十字団にばらしたのはゆら自身なのだが、さすがに全校生徒に知られるのは恥ずかしいらしい。

「ああ、たしか日用品が安かったはずだ…「お！安藤、いいところに！！」っと、じゃあ放課後にな。ゆら」

階段の上から担任の安達先生に呼ばれて、昌彰は若干名残惜しそうに会話を切りあげ、四階へ足を向ける。

「うん。じゃあねお兄ちゃん」

ゆらも踵を返して自分の教室に向かった。

「で？何ですか先生」

「いや、今日の放課後職員室に来い」

「それだけですか？」

昌彰は軽く憮然として聞き返した。それだけなら教室で言えばいいだろと思わないでもない。

「いや～、今日はこれから出張が入っててな…」

そう言いながら腕時計を見る安達先生。時間が押しているのかその顔には焦りの色が濃い。

「詳しくは放課後話す。んじゃ、日直よろしくな」

そう言って安達先生は昌彰に日誌を渡すと瞬く間に階段を駆け下りていった。

「…今日は日直だったけ…用事があっても無くてもどのみちゆらを待たせることになったわけだ…」

手渡された日誌を見下ろして昌彰は軽く息を吐いた。

――――

ー放課後ー

「安藤くん！お客さんだよ」

日直の仕事を終えたのに鞄をおいたまま一向に帰る素振りのない昌彰にクラスメイトの武藤が来客を告げた。

「客？」

まだ教室に残っているクラスメイトの女子の視線も自然とドアに集中する。

思い当らず昌彰は首を傾げた。だがその疑問はすぐに氷解する。

「お兄ちゃん！帰ろ！」

そう言いながら昌彰の教室にゆらが飛び込んできたからだ。

クラスの女子の張りつめた空気も霧散する。

「悪いゆら。今日は先に帰っててくれ」

すまなそうに言って昌彰は席を立つ。先生の誤魔化しようから面倒な話になるであろうことは予想に難くない。

「え？なんか用事でもできたん？」

「いや…ちょっと先生から呼び出しくらってな…」

「なんかあったん？」

その言葉にゆらは心配そうに顔を曇らせる。

「ああ、たいしたことじゃないみたいだから心配しなくていい。買い物だけしといてくれるか？」

ゆらを安心させるように昌彰は軽く頭に手を置いて撫でてやった。

「…ん。わかった」

くすぐったそうにしながらもゆらは嬉しそうに頷く。
“どこのホームドラマだ”的なシーンを素で展開している二人である。

「ホント二人とも仲いいよね～」

その様子を武藤は笑いながら見ていた。女子からは羨ましそうな視線がゆらに集中する。

当の本人たちは気づいていないが・・・

「うっせーよ武藤。ゆら、途中まで一緒に行くぞ」

昌彰は逃げるようにゆらの手を引いて教室を出た。

女子の羨ましそうな視線に見送られてゆらは教室を後にした。

職員室のある二階のところで別れる。

「早く片付いたら追いかけるから。頼んだぞ」

そう言って昌彰はゆらを送り出す。安達先生の用件が何だかわからない以上いつまでかかるかしれたもんじゃない。

「うん！先に行っとくからはよ来てな～！」

そう言ってゆらは階段を下りていった。

「…ふぅ…」

昌彰はおそらく嘘になってしまう台詞を言うのに押し殺していた多少の罪悪感を溜息に乗せて吐き出す。

気を取り直してとりあえず職員室に行こうと昌彰は二階へと足を向けた。

しかしその沈痛とした空気を打ち破る声が昌彰の鼓膜を震わせる。

「あ～！！見つけましたよ陰陽師！！」

「…げ…」

階段の上から聞き覚えのある声に昌彰が足を止め、見上げてみれば仁王立ちで見下ろしてくる及川氷麗の姿が目に入った。

「聞きたいことがあります！！」

無意識にだろうか？氷麗の身体から畏が放出され、冷気が階段から流れてきている気がする。

「悪い雪女！ちょっと今日は忙しいから！！話はまた今度聞く！」

そう言い捨て昌彰は廊下へ駆けだそうとした。

「なっ！？待ちなさい！！」

氷麗は階段を一段飛ばしで駆け降りて来る。この慌てよう…奴良組の方で何かあったのかもしれない。だが…

「『禁ッ！』」

昌彰は階段の前に力ある五芒星（セーマン）を描き、障壁を築く。

ベチンッ！「モガッ！？」

階段を駆け下りてきた氷麗は当然止まれるはずもなく真正面から障壁に激突した。

「悪いな雪女。今日は忙しいんだ、急ぎの用事じゃないなら明日にしてくれ！」

本当に緊急事態ならリクオが動くだろうし、第一に氷麗は笑顔を浮かべているが眼が全然笑っていなかった。

何かあったら確実にこっちが危ない。

「痛ぅ～…（涙）。ま…待ちなさい！陰陽師ィ～！！」

階段に氷麗の絶叫が木霊するが昌彰は無視してさっさと職員室に逃げ込んだ。

――――

「で、何ですか用件は？」

昌彰は職員室に入ると既に出張から戻っていた安達先生のところに顔を出した。

「ああ、ちょっと来い」

そう言って安達は昌彰を隣の進路指導室へ連れていった。

「今週、生徒会役員の選挙があるのは知ってるな？」

安達はそう言いながらパイプ椅子に座った。昌彰にも向かい側の椅子を勧めてくる。

「ええ…（そういや清継のやつ、仕込みがどうとか言ってたな…）それがどうかしたんですか？」

昌彰はそう言いながら自分も椅子に座る。

しばし逡巡してから、言いにくそうに安達は切り出した。

「実はな…今回の選挙、会長に立候補したやつは多いんだが…副会長に立候補した奴がいなくてな…」

浮世絵中の生徒会役員は会長と副会長が選挙で選ばれ、その他の役員は会長副会長が推薦し、先生がそれを承認するという形を取っている。

そして会長はカリスマ性が求められるだけで、実質的な仕事は全て副会長以下の役員が担うことになる。

だから会長職人気が高いが副会長ははっきり言って不人気というか…ぶっちゃけ誰もなりたがらない。

「それでだ…」

安達は一段声のトーンを低く落とした。

「「副会長に立候補してくれないか？」」

見事に安達と昌彰の声がかぶった。

「…なんでわかった？」

そう聞いてくる安達先生に昌彰は苦笑交じりに返す。

「このタイミングで選挙の話を振って来るんならそれ以外ないでしょう？大体なんで転校してきたばかりの俺なんですか？」

転校してきてそれほど時間は経っていない。知名度もなにもないだろうに。

そういうと呆れたような視線を向けられた。

「お前の校内での知名度は高いぞ？まぁ一年の奴良には及ばんがな」

「はい？」

予想もしなかった言葉に昌彰は固まる。

一年の奴良とはどう考えてもリクオだろう。というかリクオにそれだけの知名度があるのが驚きだが…

「気づいてなかったのか？」

思わず黙り込んだ昌彰に安達は根拠となる事柄を述べていった。

先生曰く、転入後すぐに実施された実力試験では今までのトップを余裕で抜かしてぶっちぎりの一位。しかも全国ランク二桁台を叩きだしていた。

（普通どおりにしただけなんだがな…多少運もよかったし）

スポーツををやらせれば剣道・柔道ではむかうところ敵なし。

（授業だからだいぶ手を抜いたんだけどな…）

うっかり勝負を挑んできた三年の剣道部部長と柔道部主将を打ち負かした。

（あの後は部活に熱心に勧誘されたんだっけ）

昌彰は自分の実力を普通だと思っているようだが、小学生の時から式神であるはずの十二神将から鍛えられていればその実力は段違いだ。

何事においてもそれなりにはできるようになれと陰陽術だけではなく徹底的に叩きこまれた。

一般教養に関しては玄武からは学校の勉強、天后からは日常の所作、冠婚葬祭などのマナー。

武道に関しては朱雀から剣道、白虎と青龍からは徒手空拳に合気道、六合からは槍術といった具合だ。

ちなみに十二神将の言うそれなりは一般に言うかなり…いや相当にレベルが高い領域にある。

できることは妥協なくやるので、そこらへんの一般人よりは強いし、頭もいいわけだ。

もっともそれをこなしている昌彰もすごいのだが…

「…えっと他には？」

「ああ、他にもな…」

ゆらと仲のいい兄妹であることとか暴走する清継を抑えられる唯一の存在とか…

どこから漏れたのか暴走族総長の倉田に勝ったこともあるなんて情報まであった。

「…俺の知名度が無駄に高くなっていることはわかりました。ですが、何故わざわざ俺なんですか？」

昌彰は溜息を押し殺し、安達に問い返す。

昌彰の知名度の高さ、能力の高さからすれば選挙に出れば確実に当選するだろう。

もっとも副会長職は立候補者がいないから信任投票になるだけだが。

「理由は二つあるが…一つはな…会長に一年の清十字が会長に立候補しているのは知っているか？」

「ええ…まさかそれでですか？」

清継が下手に権力を手にすると危なっかしいのは確かだが、まさか一年が会長に通るようなことがそうそう起こってたまるかとも思う。

「普通は一年が通ることなんてないでしょう？」

昌彰は思ったことをオブラートに包んで吐き出した。

「普通ならな…ただ応援演説をするのが奴良なんだこれが」

「……」

リクオの知名度が高いのは先程説明を受けているから納得はするが、先生が危惧するほどの人気とは…

昌彰は絶句するしかない。

「下手をすれば確実に通る…そこで唯一抑止できるお前が生徒会役員にいてくれればこちらも安心できるというわけなんだが…」

「…清継についてはわかりました…それでもう一つは何ですか？」

溜息を隠しつつ昌彰はもう一つの理由について問う。

「もう一つなんだが…生徒会の担当が管野先生に決まってな」

「……」

露骨に昌彰の顔が嫌悪に歪んだ。ここまで正直に感情が顔に出るのも珍しい。

「そういやそうな顔をするな」

「俺あの先生はあんまり好きじゃないんですけど。ぶっちゃけて言えば嫌いなんですが？」

英語の担当でもある管野は昌彰のクラスの授業も受け持っている。転校してきた時の態度を根に持っているのか、必ずと言っていいほど一番難しい長文訳を昌彰に振って来るのだ。

しかも計算しているのか、わざとらしくならないように当ててくるから質が悪い。

もちろん昌彰は全てきちんと答えているが、それが余計に火に油を注いでいるようだ。

「それは承知してるよ。職員の間でも管野先生を生徒会の担当にしようとする意見はなかったんだ…でもね」

管野先生は教務主任と指導主事を担当している。実務における大部分を担っており、それなりの発言力もあるわけだ。

その管野先生が申し出れば誰も正面から否と言うことはできない。

それに加えて教頭も校長も赴任したばかりで長年いる管野先生の意向を無視して行うには厳しいのが現状だ。

結果として、多々問題があれど管野先生が生徒会の担当と相成ったのだ。

「生徒からも同僚からもよく思われていない。でも有能だから無下にもできない。しかし生徒いじりがひどいときている。だからせめて対抗できる生徒を役員に入れておきたいということなんだ」

安達先生がそう言った後、昌彰は眉間に皺を寄せて思案した。

仮に清継が当選した場合、確実に清十字団の面子を役員に据えるだろう。

そしてその清継の応援演説をするのはリクオ。知名度と人気は他の追随を許さない。

とくれば…

「……一つだけ条件をつけてもいいですか？」

こちらから条件を提示して少しでも有利な状況で臨んだ方がいいと長い沈黙の後に昌彰は判断を下した。

第十一夜　日常に忍び寄る影（後書き）

琥珀「ようやく更新できた…」

昌彰「遅い！！」

ゲシッ

琥珀「ベフッ！？」

昌彰「何日待たせた？」

琥珀「えっと…約二十日ぶり…三週間になるかな？」

昌彰「ホワイトデーもすっぽかしただろうが！！」

琥珀「うう…夢幻さんがせっかくバレンタインデーでいいのを書いてくれたからお返しに何か書こうと、頑張ろうと思ってたんだよ…でも…」

昌彰「バイトでできなかった、と？」

琥珀「当日までホワイトデーのことを忘れてた…」

昌彰「……」

琥珀「その日もバイトあってさ…帰ってきたら夕飯食べてお風呂入ってバタンキュ～だった…」

昌彰「…まぁ過ぎたことは仕方ない…」

琥珀「許してくれるの？」

昌彰「読者の皆さんが許してくれるかは別だがな？」

琥珀「あぅ…」

昌彰「そういうなら次の機会でどうにかしろ！」

琥珀「次の機会？」

昌彰「おい…まさか俺の誕生日を忘れたとか言うなよ？」

琥珀「あ、はい…座談会パート？でいいかな？ちょうどネタもあるし」

昌彰「またそれか…四国編の最中にやるのか？」

琥珀「頑張って終わらせる…たぶんきっと…」

昌彰「…期待しないで待つとしよう。読者の皆さま、今後ともこの作者をよろしくお願いします」

琥珀「また明日から終末だ…お客様が多いだろうな…」

昌彰「字が違うだろ。“週末”だ。終わらせるな」

第十二夜　四国よりの先鋒（前書き）

学生の皆様は今日から新学期という人も多いかと思います。
作者も今日から新学期です。

第十二夜　四国よりの先鋒

†††††

「総大将！！今日もたくさんお菓子いただきましたね！」

悠々と道を山積みのお菓子を抱えて歩いていくぬらりひょん。その脇をぴょこぴょこ跳ねるように納豆小僧が続く。

「まかせとけ納豆小僧」

敵勢力の侵攻がある状況下にも関わらず、奴良組総大将ぬらりひょんはお供は納豆小僧一人という軽装で街を闊歩していた。

「しっかし宇佐美バアさんのアメはマッズイのう～」

「そっすね～。食えたもんじゃないないっすね～」

ぬらりひょんと納豆小僧はそう言いながらもそのアメを食べている。

古いものと妖怪は相性がいいのかマズイマズイと言いつつもいつも宇佐美バアさんのアメをいただいているのだ。

「ん？あれは…」

前から歩いてくる人影を目に留めて、ぬらりひょんは足を止める。

そこには両手に荷物を抱えながら歩いてくるゆらがいた。

†††††

（ちょっと買い過ぎてしもたかな…）

ゆらは抱えた荷物に悪戦苦闘していた。

特売で安かったティッシュやトイレットペーパー、キッチンペーパーｅｔｃ…重くはないがかさばる品ばかりだ。

袋に入れることも手に持つこともできずに積み上げて両手で抱えられたそれらは風が吹けば崩れ落ちそうな状態だ。

ブワァッ

「あっ！？」

言ってる側からいきなり吹き荒れた一陣の風がゆらの手から荷物を奪い取る。

パスッ、ヒョイ

しかし、それらは地面につく前に誰かが拾い上げてくれた。

「買い物かい？感心感心」

風にさらわれた荷物は前から来ていたぬらりひょんが受け止めてくれていた。

「えっと…確か奴良くんの…」

「そうじゃ、リクオが世話になっておるの。家はこの近くかい？」

納豆小僧は既にビニール袋の中に退避していることを確認してぬらりひょんはゆらが落とした荷物を抱えなおした。

「ええ、そんなに遠くないです…ありがとうございます、荷物拾ってもらって」

「かまわんよ。家まで手伝おう。何せかさばるからのう…家はこっちじゃったかな？」

ゆらは飛ばされた物を受け取ろうとしたが、ぬらりひょんはそう言って歩き出した。

「え、あ、はい」

ゆらも小走りで後を追った。半分ほどに減った荷物は両手で抱えるほどではなく普通に手に持つことができる。

「そういえばお兄さんとは今日は一緒じゃないのかね？」

追いついたゆらにぬらりひょんはそう問いかける。

「お兄ちゃんは先生に言われて遅くなるらしくって」

傍から見れば祖父と孫が買い物をして帰っているようにも見えるだろう。

しかし事情を知っているリクオや昌彰から見れば、大妖怪『ぬらりひょん』本人と、そのぬらりひょんを倒すと宣言した陰陽師が一緒

に歩いているのだ。

しかもゆらは隣を歩くリクオの祖父がぬらりひょんであることをしらない。

笑えばいいのか危機感を抱けばいいのか…当のぬらりひょんは笑いながら歩いているので少なくとも危機感を抱くことはないか…

「リクオが良く話しておるよ、仲のいい兄妹で許嫁じゃと」

「!?ッ!ななな、何を…」

いきなりのぬらりひょんの言葉にゆらは顔を真っ赤に染めた。

「違うのかね?…それとこうも言っておったぞ…なにより兄の昌彰くんの方が楽しそうにしておると」

「え?」

ゆらは意外な台詞に驚いた。

(あんまり料理も上手くないし、一緒に暮らしてるのに何もできひん…それやのに…)

ゆらはそう思っているが実際はそうでもない。

昌彰が一人で夜警に出たときは簡単な夜食を作ってくれていたり、たまの休日に昌彰の目覚ましを止めて朝食を作ってくれていたりと甲斐甲斐しく若妻のようなことをしているのだ。

師事する天后や天一曰く、センスはあるらしい。少々大雑把だが…

悶々と考え込んでしまうゆらをよそに、二人はゆらの家への近道となる公園に差し掛かった。

そこは周りを新しいビルに囲まれ、ぽっかりと谷のように穴があいている場所だ。

そこで再びぬらりひょんが口を開く。

「しかし、安藤に花開院といえば有名な陰陽師の大家…なんでその家の若い二人が婚約してるのかね?」

「それは…」

ぬらりひょんの問いにゆらは口籠る。それだけでなく足を止め、立ち止まってしまう。

それは言えないからなのか…それとも言いたくないからか…

「不躾な質問じゃったかな…しかし中学生で二人暮らしというのも大変じゃろう?」

沈黙したゆらから何か事情があるのだと感じたぬらりひょんは話題を変えた。

「いいえ…お兄ちゃんの式神達がいてくれますから…」

普段ゆらは神将達と一緒に掃除をしたり洗濯をしたりしている。

神将達が的確に教えてくれるのでゆらの家事の腕はめきめき上達していた。

近頃は神将達の手助けを借りることも少ない。

花開院本家にいたころとは比べ物にならないほどの成長だ。

「それに…！っ！？」

「！！」

さらに何かを言おうとしたゆらは途中で言葉を呑みこんだ。ぬらりひょんも何らかの気配を察知し、無言で身構えた。

「あぶない！！おじーさん」

ビシッ！ビッ　ビシュッ！！

ゆらがぬらりひょんを抱えて横っ跳びにその場を離れる。

その一瞬後に“何か”がゆらとぬらりひょんのいた空間を切り裂いた。

ヒュン　ヒュルン　ヒュン

髪一筋の間を残して“何か”はゆらとぬらりひょんの頭上を掠め…

ズガァッァ！！

後ろにあったブランコを粉砕した。

「大丈夫…!?おじいさん…」

「うむ」

パラパラと舞い散るブランコの残骸の破片を見やりながらゆらはぬらりひょんの無事を確認する。

「ホウ…よけたか…」

公園の反対側の入り口から数人の黒服の男たちが現れた。

時は既に夕方、闇が広がり始める逢魔が時…

「勘のいい『護衛』だな…!」

夕日の光を背景にその影がゆらの足元まで伸びる。

「なんじゃ?あの男…風をあやつる妖怪…?“かまいたち”か?」

ぬらりひょんは冷静に先程の一撃を分析する。

(いや…この攻撃…たしかお兄ちゃんの部屋の文献で見たことある…)

ヒュンヒュルルンと風を切り裂く鞭のような音を放つ「風妖怪」…

ゆらは記憶していないが文献の名は『榎本家四国妖怪秘録』…

四国にある陰陽師の一派から安藤家にもたらされた妖怪秘録である。

ゆらがそう考えるうちに再び風が渦巻く…

（その名は怪異妖怪“ムチ”！！）

ゆらは咄嗟にぬらりひょんを背後に庇い、呪符入れを取り出した。

「おじいさん逃げて――！！」

ギュバァァッ！！

ゆらが叫ぶ間にもムチの風が迫りくる。

ビシ！ビシッ！ドシャァッ！！

飛来した風がゆらの放った多数の護符に弾かれる。

バシュゥ！　ビュゥゥ！！

それでも弾ききれなかった風がぬらりひょんの頭を掠めていく。

バンッ！！ガシャァァン！！

外れた風や弾かれた風がゆらとぬらりひょんの背後にあるビルを襲い、そこにある壁を抉り、ガラスを粉砕する。

「！？いたっ！！うおい…」

吹き飛ばされたガラスの破片がぬらりひょんの頭上に降り注ぐ。

「大丈夫!?おじいちゃん!!」

ゆらはムチを睨みつけたままぬらりひょんへ声をかける。

「なぁ――に、これくらい…」

そう言いながらぬらりひょんは頭上のガラス片を払いのける。

さすが妖怪、切り傷一つ負っていない。

「しかしあんた…すんごいの～」

ぬらりひょんは瞬時にあれだけの護符を展開したゆらの技量に感心する。

「おじいちゃん、悪いことは言わん…逃げて!!」

ゆらは決してぬらりひょんの方を見ようとしない。

敵たるムチから一瞬たりとも目をそらすわけにはいかないからだ。

「……たしかに逃げた方がよさそ――じゃの～」

ぬらりひょんの言葉にゆらは軽く安堵の息を吐いた。しかし…

「しかし“かまいたち”…こんな荒っぽい奴だったか…」

続くぬらりひょんの言葉には思わずゆらも振り向いてしまう。

「!!…妖怪に詳しいんやな、おじいちゃん…」

「うん？まあのう…」

ゆらの険しい視線にぬらりひょんは言葉を濁した。

「でも…あいつはかまいたちとちゃうよ」

「！」

自らの予想を否定したゆらの言葉にぬらりひょんは微かに目を瞠った。

「あいつは…風の“ムチ”！四国の山奥に現れる…怪異妖怪！！」

ゆらがそういう間にもじりじりとムチ達は間合いを詰めてくる。

「あの風は…“毒”…人を病にさせる……猛毒の風！！」

威嚇するようにムチがヒュンヒュンと音を発する。

「……（四国の妖怪――）そりゃ…わしの…あずかり知らんとこじゃのう…」

ぬらりひょんがそう呟いた刹那、再び風がゆらに襲い掛かる。

ビシュッ！

残った護符の合間を掻い潜って風はゆらの側を掠める。

（！！周りの部下がおらん…！？）

ゆらは咄嗟に目を瞑ったがぬらりひょんはムチの周りにいたはずの配下がいなくなっていることに気づいた。

「し…しもた…！？（まわりを…かこまれた…！？）」

目を開けたゆらが目にしたのは自分たちを中心に散開するムチとその部下。

「こ…これは…陣型（フォーメーション）…！？」

それら各々が風を解き放ち、風による陣型を構築する。

ビュン　ゴワッ！！　ビシッ！！

吹き荒れる風が小石を巻き上げ、そのうちの一つがゆらの頬を直撃する。

「『風の陣型　砂打ちの鞭』…無数の刃を隠した風の壁だ。いつまでもつかな？」

ドシュゥゥ！！

「む…」

ゆら達の背後から風に乗った石やら何やらがものすごい勢いで飛来する。

「おじいちゃん――！！…くっ…」

ゆらが残された護符でそれをしのぐが…

ビシィッ！

「うぁ！！」

それらに紛れて放たれたムチの一撃がゆらの左腕を切り裂く。

「！おい…ワシのことはほっとけ」

崩れかけるゆらを支えながらぬらりひょんは自分を切り捨てろという。

自分だけなら確実にこの窮地を脱することができると踏んでいるのだろう。

「そうはいかん！！（このままやと守り切れん！！）おじいちゃん！！つかまって…！！」

そう言いながらゆらは新たに呪符入れから人型の符を取り出す。

「『式神　禄存！！』」

（式神…）

光を纏った符は瞬く間に鹿の式神となり、ぬらりひょんをその背に乗せると、風の陣型を飛び越える。

「追え！」

ムチ達は慌てて禄存を追撃するために風を放つが、禄存は壁を三角飛びの要領で駆け上がり、風を振り切って屋上へと逃れた。

「チッ!!（風が…届かん）」

ムチは怒気を孕んだ視線でゆらを睨みつけた。

「おーい！ありがとうよ。花開院の…」

ビルの屋上に逃がされたぬらりひょんが目にしたのは傍目にもわかるほど消耗しているゆらだった。

（無理もないか…あれだけ護符を使って式神まで呼んだんじゃ…）

「まずはお前からだ……死ね…」

ムチのその言葉で配下の者たちも一気に風の刃を解き放つ。

（っ――――！わしなんぞのために式神を使うからじゃぞ…）

ぬらりひょんは思わず身を乗り出そうとした。

「ダメです総大将!?正体をばらすわけには!!」

納豆小僧が袖を掴んで必死でぬらりひょんを止める。つーかお前いつの間についてきたんだ?

ドシャァァッ!!　ビュォォ!!

ビシ　ビシッ!!

風がゆらの服を切り裂き、肌を傷つける。

「…くっ…」

ゆらは呻きつつも右手で一つの印を結んだ。

それは昌彰ももっともよく使用する印。拳から人差し指と中指を揃えて伸ばした刀を象る印ー刀印。

「『禁っ』！」

刀印を横薙ぎに斬り払い、一言ゆらは叫んだ。

一文字に薙がれた場所に不可視の障壁が展開する。

「『爆！』」

それと同時に放った呪符が爆裂を引き起こした。

ゆら自身を巻き込むほどの爆発にムチ達も思わず攻撃の手を止める。

「やぁっと足手纏いがおらんようになったなぁ…フフ…」

そう言いながらゆらが張った障壁が消える。

爆風によって巻き起こされた土煙…その中から現れたのは巨大な日本狼の式神ー貪狼、槍を携えた鎧武者の式神ー武曲。

「！！」

（式神を…三体！？）

ムチ達もぬらりひょんもその力に驚愕を隠せない。

「まさか…あの歳で式神を三体も出すとは…信じ難い才能じゃ…」

「貪狼ォォ――！！こいつら喰い殺してしまい――――！！！」

ゆらの指示で貪狼がその牙をムチの配下へと突き立てる。

「武曲！！」

『承知！』

閃いた槍の一撃はもう一体の配下を切り裂く。

「『式神　廉貞』！！」

ゆらの手元に四体目の大きな金魚の式神が現れる。

「式神改造！！人式一体！！」

ゆらの左腕に廉貞が纏わりつき、融合する。

「花開院流陰陽術　黄泉送り送葬水包銃（ゆらMAX）――！！」

水の弾丸が残りのムチの配下を呑み込んだ。

「小娘一人やったら倒せるとでも思ったか？」

廉貞の口から白煙をたなびかせ、ゆらは倒した妖怪たちを見やる。

（確か、相手は五人いたはず…）

塵となり風に消えゆく妖怪の死体を確認する。

「（四体しかおらん!?まさか…）!!」

背後から殺気を感じ、振り返ろうとした矢先に風がゆらの左肩を貫いた。

「うぁっ!!」

弾き飛ばされたゆらにできたのは空中で体勢を立て直し、衝撃を殺して着地することだけ。

中空からはムチがニヤリと口元を歪めてそれを見下ろしていた。

『ゆら様…』

武曲は素早くムチの方を向き直り、槍を構えてゆらを背後に庇った。

貪狼も即座に跳躍して噛み砕こうと身を低くする。

「（親玉をやりそこねたか!!）大丈夫や!!たいした傷やない!!」

ゆらは再び廉貞をムチに向けて構える。だが…

（まずい…さっきの一撃で…こいつの毒風に当てられてしもた！！）

ゆらは必死で狙いを定めるが左腕は安定せず、視界にも霞みがかかっているような気がしてきた。

「うぅ…（体に力が入らん！！）」

ゆらはがくりと膝から崩れ落ちる。

「禄存！貪狼！！」

『いけませんゆら様！』

ゆらは禄存と貪狼を呼ぶが武曲がそれを押しとどめた。

「なんで止めるん武曲！！」

『無理ですその状態では…ゆら様の限界を超えてしまいます！！』

「そやかて、あいつがまだ…」

ドサァッ

「禄存っ！？」

武曲とゆらが言い争っているところに無数の裂傷を負わされた禄存が墜ちてきた。

ガザガサッ！

「貪狼！？」

貪狼も側の茂みに叩きつけられる。

ゆらが毒に蝕まれ、弱っているところをムチの風を喰らったのだろう。

四肢を痙攣させ、動くことができないようだ。

『ゆら様！！』

ビュァッ！！

『ぐっ…』

ゆら目掛けて放たれた風を武曲は己が身を盾にして受け止めた。

「武曲！？」

『ゆら様…このままでは危のうございます…昌彰殿に…ぐっ…』

武曲は風からゆらを守り切ると地に膝をつけた。

「くっ…戻って武曲」

廉貞も既にゆらの腕から消えている。

「あいにくおめーと遊んでいるヒマはねーんだ。あばよ」

ムチはゆらの式神達を無力化したのを見届け、風となってぬらりひ

ょんの逃げたビルへと飛んだ。

「あかんっ！お兄ちゃんに…」

ゆらは携帯をポケットから引っ張り出し、履歴を呼び出す。

そこでゆらは手を止めた。

（…今から連絡したところで間に合うんか？）

おそらくまだ昌彰は学校にいるだろう。ここまでたとえ白虎の風を駆ったとしてもここに着くころには全てが終わった後かもしれない。

（それに…助けられてばかりやったらあかん…）

ゆらは携帯を閉じ、震える膝を叱咤して立ち上がった。

「待っておじいちゃん…すぐに行くから…」

†††††

（いる…たしかに…オレの前を歩いている…おかしいだのに……なんで見えねぇ…！？）

ムチは追い詰めたはずの相手の姿が見えないことに狼狽を隠せない。

ブズッ……

「何者も自分にとって大きすぎる存在と出会ってしまったとき、その存在を畏れるあまり気づくことをやめる」

次にムチが感じ取ったのは腹部に走る猛烈な痛みと、未だ視認できぬぬらりひょんの言葉。

「見えていても認識できぬようになる」

その言葉とともにぬらりひょんは刃を引く。

「それが――――ワシの力、真・明鏡止水（ぬらりひょんの）　ワシの盃に波紋は鳴らんよ」

ドサッ…

「どうじゃ…ワシの戦い方。風情があるじゃろ」

それに続いてムチが崩れ落ちた。先程まで渦巻いていた風が消え失せる。

「あきらめんか。ワシのドスにやられたら立ちあがれんわ」

まだ諦めていないようにもがくムチにぬらりひょんが告げる。

「しっかし老体にゃー今さら刀をふるのは少々キツイ。お前の国の言葉でいうと…『たいぎなわー』」

ぬらりひょんは笑いを含んだ声でそういうとスッと表情を引き締めた。

「死ぬ前に言えや…四国からの妖怪がなぜワシをおそうんじゃ」

その言葉にムチが答えることはなく、薄く笑みを浮かべ風の中に塵と消えた…

ぬらりひょんも無言でそれを見送る。

バンッ

「おじいちゃん！　ハァッ…！ハァッ…大丈夫!?」

階段から駆け上がって来る足音が聞こえてゆらが屋上に飛び込んできた。

「おお!!おじょーさん上ってきたのかい?」

体内に残った毒と階段を駆け上がってきたために、足はふらつき、呼吸も上がっているがゆらは気丈にムチを滅さんと呪符を構える。

「私が来たからには…あれ?あの男は…」

そこでゆらはようやくムチがいないことに気づく。

「おお?あ――いや別に…何もないよ。うむ、奴は去っていったよ」

不審がるゆらにぬらりひょんはまさか自分が倒したと言うわけにもいかずどうにか誤魔化す。

「ホウ」

ゆらが納得を見せたその瞬間…

ボロッ　ピキッ！！

ムチの風によって抉られたビルの残骸にひびが走る。

ガラッ！　メキャッ！！　ゴガッ！！

そのまま堪え切れずにビルの一部が倒壊した。

「えええぇ！！ありえへん！！何もなかったとはとても思えへんで！！」

「いやいや待て待て！！」

いくらなんでもわかるでーと叫ぶゆらをぬらりひょんは必死で押しとどめる。

「ワシは隠れとったんじゃ…ワシを見つけられなかったら、あの男ひとしきり暴れて風のように去っていったぞ（ムチだけにな…）」

「ほぅ…風のように…（ムチだけに…か…？）」

「くそ…また倒せんかった…お兄ちゃんならこんなことならへんかったのに…」

「いやいや助かったよ。お譲ちゃんがいなきゃー、ワシャ死んどった。お譲ちゃんの存在がワシを救ってくれたんじゃ」

自己嫌悪に落ち込みそうなゆらをぬらりひょんはそう言って励ます。

「（あ、お兄ちゃんとおんなじこと言うてくれた…）ホンマ？ホン

マにそう思うん？」

思わずゆらはぬらりひょんの手を握り締めた。

「もちろんじゃ。この通り怪我も無い。ありがとよ花開院のお譲さん」

「よかった…おじいちゃんみたいなええ人を…妖怪から守れて」

そう言ってゆらは微笑む。

「…アンタこそいい陰陽師になるぞい」

「ありがとうおじいちゃん…」

気が緩んだのかゆらは壁に背をつき、床へとズルズルと崩れ落ちた。

「そうや…おじいちゃん…あれ…？」

再びゆらが顔をあげた時には既にぬらりひょんの姿は消えていた。

第十二夜　四国よりの先鋒（後書き）

琥珀「さて、今日から新学期です！」

昌彰「無事に進級できてよかったね」

琥珀「よかったよ。ついでに言うと前期の時間割が意外と楽なんだよね。毎日三限までしかない」

昌彰「なら・・・」

琥珀「だからといって執筆速度が上がるかというとそうでもない」

昌彰「・・・なんでだ？」

琥珀「専門教科ばっかりだからね・・・」

昌彰「これ以上遅くはするなよ？」

琥珀「努力はするよ。しばらくは安定して更新・・・できるといいな」

昌彰「希望かよ！」

第十三夜　侵攻開始、宣戦布告（前書き）

四国編は原作準拠でいきます。
多少アニメ版が入るかも？

第十三夜　侵攻開始、宣戦布告

―――

「ん？ゆらのやつまだ帰ってないのか…」

部屋のドアノブをまわして昌彰はそう呟いた。

漆黒のキーケースから鍵を取り出し、部屋へ入る。

安達先生からの生徒会役員選挙への出馬に対しての申請書類やその他諸々の話し合いをしているうちに既に日は落ちている。

「一度は帰ってきてるみたいだな…」

灯りをつけたリビングにおいてあるゆらの通学鞄に昌彰はそう呟く。

荷物をおいてから買い物に行ったのだろう。一人であれだけの量を持つのはけっこう大変だ。

しかし、そうだとしても随分と遅い。

「ゆらに限って道草をくっているとは考えにくいし…」

ゆらの携帯にかけてみても電源が入っていないか圏外であることを告げる女性のアナウンスが聞こえるだけ…

「いやな予感がするな…」

何かあったんなら式神をとばしてくるだろう。しかし、それすらもできない状況ということも考えられる。

「前回の旧鼠の件もあるしな…白虎」

『ここに』

昌彰の召喚に応じ、白虎が顕現する。

「白虎、ゆらの居場所はわかるか？」

そう言われて白虎は視線を中空に向け、しばし風を読む。さほど遠くなかったのかすぐにその動作をやめた。

その壮年の双眸にわずかに険を滲ませながら…

『ああ、そう遠くない…だが…』

「何かあったのか？」

歯切れの悪い白虎に昌彰は問いかける。

『妖気を…毒の風の気配を感じた』

「！！なにっ…（まったく気付けなかった！？）まさかゆらが…！？」

『いや…妖気はもはや残滓にすぎぬ。おそらくはゆらが倒したのだろ…』

昌彰は白虎の言葉を最後まで聞かずに走り出した。

（なんであいつを一人で行かせた!?昨日の星読みでわかってただろう!?）

アパートを飛びだした昌彰はスーパーへの近道となっている公園への道を駆ける。

（妖星が流れる－その凶事の前触れを見ておきながら何故何も手を打たなかった!?）

昌彰は己を責め続ける。

実際のところ凶事として暗示されたのは奴良組への四国勢の侵攻であり、ゆらはそれに巻き込まれただけなのだが、この時の昌彰はそのことを知るはずもない。

「っ!!ゆらっ!?しっかりしろ!!何があったんだ!?」

あと少しで公園が見えてくるというところで路上に倒れているゆらを見つけた。

「ゆらっ!?」

顔色は蒼ざめ、呼びかけても反応がない。昌彰は咄嗟に呼吸と脈を確認する。

緩やかではあるが呼吸していることを確認して昌彰は微かに安堵の息を吐き出した。

ゆらを横に寝かせたまま今度は首元に手を当て、脈拍を測る。

「早すぎる…」

まだ三十秒ほどしか経っていないのに既に五十を超えている。しかも徐々に脈が弱くなっている。

明らかに大量出血によるショック症状だ…

（外傷はたいしたことはない…となると、内臓での出血か！？）

先程白虎から告げられた情報から推測するに、毒を喰らった可能性が即座に導きだされる。

ムチにより負わされた傷から入り込んだ毒は確実にゆらを蝕んでいたのだ。

「解毒の方法がない…！！止血の符で出血は抑えられるが…」

臓器がどれほどのダメージを受けているのかわからないこの状況では、快癒の咒（まじない）だけで間に合うかどうかわからない。

『昌彰様…』

昌彰が焦りに顔をゆがませているとゆらを挟んで向かい側に、揺らめく金糸のような髪と澄んだ冬空のような青き瞳を持った少女の式神が顕現した。

「！天一か…」

新たに召喚が可能となった土将の天一である。彼女の能力を思い出した昌彰の瞳に一縷の希望が宿る。

『私が“移し身”でゆら様の傷と毒を引き受けます…』

『待て天貴！傷の状態がわからないまま引き受けては…！！』

天一が自らの能力でゆらの傷を引き受け浄化しようと申し出るが、その後ろに顕現していた朱雀がそれを止める。

だが、天一の目にある強い光に朱雀は言葉を止めた。

『朱雀…これは私の役目です…そのための移し身…』

『…わかっている…だが…』

朱雀は天一が移し身の術を使うことを極度に嫌がる。それは千年前から変わらない…しかし…

『私は大丈夫…だって朱雀が側にいてくれるでしょう？』

『！…ああ…』

夏に咲き誇る大輪の向日葵のような天一の笑顔に朱雀は唇を噛みしめ頷いた。

「天一…無理はするな」

今の天一は分御霊であるが故に引き受けられる傷や呪詛の容量が本霊のそれよりも小さい…

もし、限界を超えて引き受ければ分御霊としての天一は消滅し、引き受けた傷はすべてゆらへと戻ってしまう。

『心得ております…『我が身は我にあらず、全ての禍こと禍ものを引き受ける、癒しの門』…』

天一の指先に宿った光がゆっくりとゆらの体を包み込む。

光が消え、ゆらの顔色がだいぶもとの状態に戻ると同時に天一が崩れおちた。

『…『天貴っ！』…大丈夫よ朱雀…』

傷は無事、天一が引き受けることができたらしい。

『昌彰、俺はこれから天貴の介抱に回る』

神将の生命力は人間のそれよりはるかに高いが、彼らとて痛みや苦痛を感じない訳ではない。

いまも天一にはゆらが負った傷の痛みと残された毒が襲いかかっているのだろう。

「わかっている。すまない天一…」

昌彰の言葉に朱雀に抱えあげられた天一は儚げに微笑んで朱雀と共に隠形した。

「…白虎、風を頼む」

昌彰はまだ意識の戻らないゆらを抱きあげるといつもと変わらない声音で白虎に風を出すように命じた。

『承知』

だから白虎も普段通りに応じる。ゆらを抱いた昌彰の肩が震えていることには気づかないふりをして…

――――

『落ちつきましたか昌彰様』

「ああ。すまない天后」

ゆらを部屋まで連れ帰り、天后に任せてようやく落ち着いたらしい昌彰はゆらの枕元に座したまま応える。

『昌彰、お前は今回の件どう思う?』

天后の隣に顕現した青龍が昌彰に問う。

「そう…だな…」

リクオの配下達は約定によってゆらに手を出すことはない。

奴良組に対する反乱分子も本家の膝下の浮世絵町ではありえない…

組に属さないはぐれ妖怪だとすればゆらがここまでやられるはずがない…

とすれば…

「外部の新たな勢力か…？」

昨日見た凶事の前触れ、それが外部勢力の侵攻を暗示するものだとすれば辻褄は合う。

「…お兄…ちゃん？」

「！ゆら…気がついたか…」

まだ視点が定まらないようだがゆらは無理やり上体を起こそうとした。

「うち…どないしてん？…っ？！」

天一が傷を引き受けても出血で失った血は回復していないようで眩暈を起こしたゆらは再び布団へ倒れ込む。

「無理をするな…軽い貧血だ。…ところでゆらいったい何があった？」

「っそうや！妖怪…」

「『だから無理をするな！（しないでください！）』」

今度は昌彰だけでなく天后からも叱責が飛んだ。

「天后…」

『ゆら様…あなたのそのまっすぐで一生懸命なところはあなたの美点です…しかし、焦っては周りが見えなくなってしまいますよ？』

普段から教えを請い、よく指摘を受ける天后の言葉だからこそ、すとんとゆらの心に落ちた。

「うん…ゴメン…」

『わかればよろしいのです』

素直に謝ったゆらに天后はふわりと微笑んだ。

「それで何があったんだ？」

「あ、うん…」

昌彰に促され、ゆらは話し始める。

買い物の途中でリクオの祖父に会ったこと。帰り道の公園でムチに襲撃されたこと。

（ムチ…たしか四国の妖怪だったはず…）

ゆらからの情報に昌彰は敵の正体にあたりをつける。

手下の妖怪たちは倒したが親玉には逃げられてしまったという。

（逃がした？だが妖気は残滓しか…リクオの祖父…ぬらりひょんか？）

帰ろうとして体内からの激痛に苛まれ、そのまま気を失ってしまったらしい。

（おそらく速効性の神経毒と遅効性の細胞毒が含まれていたんだな…）

一撃で仕留められなくても徐々に相手の力を削ぎ落とす。毒を使う者の常套手段でもある。

「お兄ちゃん…最後の…逃がした奴はどうなったかわかる？」

「っ！？あ、ああ白虎に頼んで追跡してもらっている。今晩中には片をつけるつもりだ」

既にムチは倒されてしまっているが、昌彰は敢えて生きているように嘘をついた。

「なら私も…」

そう言って三度ゆらは起き上がろうとする。先程より回復したのか今度は崩れ落ちることも無く上体を起こした。

「いや、ゆらは今日は休んでろ」

「でも…逃がしたのはうちやし…」

やはり気が引けるのかそれでも立ち上がろうとするゆら。

「大丈夫だから…な？」

「…うん」

そう微笑む昌彰にゆらはまた横になった。

やはり疲れていたのだろう。しばらくすると規則正しい寝息が聞こえてきた。

「ゆら…眠ったのか？」

反応は無い。

「行くぞ…白虎」

おそらく今夜、敵は再び動く。そう踏んだ昌彰は白虎を呼び、装備を整えた。

『承知した』

ベランダに出た昌彰を白虎の風が包み込む。

「天后…ゆらを頼む」

『承りました』

†††††

―浮世絵町・一番街―

夜となってもまだ活気でにぎわう街に普段とは違う影が忍び寄った。

風が鳴る。それと同時に異変は起こった。

パァッン　パリン　パァァン！！

街灯が、ネオンが派手な音と共に弾け飛ぶ。

「いやぁっ！！ガラスが…」「あれ？真っ暗！？何も見えないぃぃ――！！」

夜雀が薙刀で照明を破壊すると同時に己が羽を撒き散らしたのだ。

そこから端を発した混乱は人々に恐怖を与え、パニックに陥れるには十分だった。

上空を滑空する犬鳳凰の吐く炎が、ビルへと燃え移り火災となる。

霊感の全くない人間（例：清継など）から見れば突如として炎が噴き上がったように見えただろう。

ゴガッ！ドゴォッ！！

「ビルが！！ビルが崩れたぞー！！」

砕かれた瓦礫が道路へ、そこにいる人へと降り注ぐ。

「『微塵となりて退散せよ、急々如律令』！」

昌彰が放った術が降りしきる瓦礫を直撃し、木っ端みじんに打ち砕いた。

「やはり動いたか…避難誘導なんて暢気な真似をしているヒマはなさそうだ…」

「なんだてめぇは！？」

徒人には見えぬ鬼がビルの上に跨っている。

「この巨体…四国の妖怪ということは…手洗い鬼か！」

伝承では瀬戸内海を挟む山にまたがり、海で手を洗うほどの巨躯の大鬼であるとされている。

「我が名を知っているとは面白い…この拳で我が力も思い知れ！！」

手洗い鬼は地上へ降り立つと同時にその拳を放った。

「『我が身は我にあらず。神の御盾を翳すものなり！』」

振り下ろされる巨大な拳。昌彰の張った障壁はそれをやすやすと受け止め、弾き返す。

「なっ！？」

人間に己の拳を止められ、驚愕の表情を浮かべる手洗い鬼。その隙を昌彰が逃すはずもない。

「『謹請し奉る、降臨諸神諸真人、縛鬼伏邪、百鬼消除、急々如律令』！」

破邪の呪文が手洗い鬼目掛けて襲い掛かる。

「ちぃっ！？」

手洗い鬼はその巨体からは想像もつかない瞬発力でそれをかわした。

「青龍、六合。遠慮なくや…「待っていたよ陰陽師…」！お前が大将か！？」

青龍と六合を召喚し、一気に畳みかけようとする昌彰の前に新たな声が割り込んだ。

「玉章様！？」

慌てて昌彰に対峙していた手洗い鬼が身を引く。

その背後から現れたのは見慣れぬブレザーの学生服に身を包んだ、細身の優男。

完全に人型をとっており、人ごみに埋没してしまえば妖気を辿って見つけだすことも困難だろう。

背後に細布で顔を覆った女とかぎ針の髪を持つ女、二体の妖怪を従えて悠然とその場に存在する。

確かにその力はここにいるどの妖怪よりも強い。

「これは奴良組に対する宣戦布告だよ。人には被害を極力加えていないつもりだ。もちろんキミの家が護る帝にもね」

うっそりと口の端をつり上げて玉章が笑う。

『何が言いたい!?』

余裕を露わにする玉章の態度が気に入らないのか青龍は大鎌を発動するとその切っ先を玉章へと向けた。

「見逃してほしいと言っているんだ。今回の国盗りは簡単なことだ。犠牲も最小限にしか出さない」

突き付けられた大鎌にも玉章の余裕は変わらない。

「だから見逃せと?随分ムシのいい話じゃないか」

確かに安藤家の陰陽師はむやみやたらに妖怪だからと言って滅するような真似はしない。

だが、それは人に対して害を為さないという前提があっての話。

既にゆらに対して手を出している相手に対して慈悲をかける余地は微塵も無い。

「お前の配下に俺の義妹が襲われた…それでも敵対する意思は無いと?」

そう言って昌彰は刀印を結んだ。纏う衣が霊力の奔流を受けて翻る。

「(ムチの奴…陰陽師も相手にしていたのか…)あれは部下の勝手な暴走だよ。ボク達にキミと敵対する気はない」

玉章は一瞬表情を歪めたが即座にそれを打ち消し、笑みを浮かべて見せた。

しかし、その裏では厄介な相手を敵に回したかもしれないという事実に微かな焦りを抱えていた。

「責任は全て部下に擦りつけるか…たいした大将だよ」

「貴様!!玉章様を侮辱するか!!」

吐き捨てるような昌彰の言葉に玉章の背後に控えていた針女が、昌彰目掛けて己の髪を伸ばす。

キィンッ!

しかしその全ては六合の振るった銀槍に弾かれた。

「…これでそちらから手を出したのは明白…陰陽師に対して喧嘩を売ったんだ。滅せられても文句は無いな?」

「っ!!」

己の失態に針女は顔面を蒼白にして玉章を振り仰ぐ。

しかし玉章はそれを見ようともしなかった。

「ここでお前を倒せばこの戦は終わ…!!!」

昌彰は不意に言葉を止める。

『どうした？』

青龍が不審そうに声をかける。

「…二人とも戻ってくれ」

『何？』『…』

青龍と六合の視線が昌彰に集中する。

「いったん引くぞ。こいつらの相手をしている場合じゃない」

先程昌彰に襲い掛かった感覚、それは自らの護符が突破されたことを告げるものだった。

『…承知』『いいだろう』

主の表情の中に確かな焦りを感じ取ったのか六合と青龍は命令を受け入れ隠形した。

「白虎、風を」

声も無く顕現した白虎の風が昌彰を取り巻き、夜闇に染まった空へと駆け上がった。

――――

「…申し訳ありません玉章様…処分は如何様にでも…」

昌彰達の姿が見えなくなると針女は震えながら玉章の前に跪く。

彼女は玉章がこのような失態を許すはずがないのを熟知していた。

「っ！」

玉章の手が肩にふれたとき、針女は確実に死を覚悟した。しかし…

「構わないよ針女」

その言葉に針女は弾かれたように顔をあげる。

「しかし、玉章様はあの術者を気にしておられたのでは…」

針女はさらに縮こまるが玉章は既にそれを見ていない。

「いいさ…既にムチが余計なことをして敵に回してしまっていたようだし…」

そう言って玉章は己が手に携えた刀に目をやる。

「あの式神も…この刀の前では敵ではない…」

その眼にあるのは自信か…狂気か…

「では…」

「ああ、まだ役に立ってもらうよ針女…」

面をあげる針女に、玉章は表面上は柔らかな笑みを浮かべ、そう言った。

†††††

昌彰が玉章に接触したころ―

「申し上げます。浮世絵町より璞町（あらまた）―各方面にて妖怪が暴れているとの情報にございます…また陰陽師が交戦しているとの情報も入っております」

（あいつらだ…あの妖怪たち）

リクオは報告を受けて夕方あった妖怪たちを思い浮かべた。

（まさかボクらを直接攻撃するとかじゃなく人間をおそうなんて…）

奴良組本家は混乱の極致にあった。

総大将は行方不明、主だったものは幹部の護衛に振り分けられており、残された者達は完全に浮足立っている。

特に戦う力を持たない土地神たちの動揺は激しかった。

たしかに一番被害を被るのはその地を追われた土地神であることは間違いないのでそれも仕方のないことだが…

「これ!!みなの者きけ!!これより奴良組はワシが代理でしきる!!たとえ総大将がいなくてもしっかりせんか――――!!」

「やっぱりいないんだぁぁぁあ」「総大将ぉお――――!!」

まとめようとする木魚達磨の言葉も総大将が、組のトップがいないことを実感させるだけでさらに動揺を深める結果となってしまう。

「妖怪が！！おたおたすんじゃね――――――！！！」

そんななかリクオの叫びが轟き、混乱を一気に抑え込んだ。一瞬で先程まであったざわめきが鎮まる。

「人々から畏れられる存在なんだろ？」

騒いでいた妖怪たちは放心したかのようにリクオを見つめる。

「じーちゃんはどっかで遊んでるだけだ。はっきりしてんのは…敵が土足でボクらのシマを踏み荒らしてるってこと」

「わ…若…？」

そのリクオの姿に鴉天狗は呆けたように呟く。

「入って来たんなら退治（おとしまえつける）するだけだ」

昼の姿でありながらリクオは堂々と言い放つ。

「達磨…てめーがしきんのは筋違いだ…奴良組は今から若頭（ボク）がしきる！！」

第十三夜　侵攻開始、宣戦布告（後書き）

琥珀「ふーっ・・・」

昌彰「ようやく四国編も中盤に入ったな」

琥珀「後は袖モギと犬神戦と最終決戦だけかな・・・」

昌彰「連休くらいまでには出せそうか？」

琥珀「うーん多分だけどどうにか」

昌彰「そう言えば、前回の話でゆらが俺の使ってる術を使ったがあれは？」

琥珀「あ～、初歩的な術ならゆらちゃんも使えるようにはなってるよ？」

昌彰「いいのか？」

琥珀「九字真言と障壁くらいだから。あくまで補助に過ぎないし」

昌彰「で、次はいつに？」

琥珀「これのすぐ後」

昌彰「は？」

琥珀「さて行くよ。昌彰くん」

昌彰「おい！ちょっと待て！」

番外編　一か月遅れのホワイトデー企画（前書き）

さすがに遅くなったけども…一カ月遅れのホワイトデーです。

ゲストに夢幻さんの『本格推理委員会』から速水零牙くん、菅原雅ちゃんをお迎えしてお送りいたします。

それではどうぞ

番外編　一か月遅れのホワイトデー企画

琥珀「さて、男性諸君。お集まりいただいたのは他でもない。今日が何の日かわかってるよね？」

一同『ホワイトデーでしょ？一カ月遅れの！！』

琥珀「はい、その通りです！ごめんなさい！！（土下座！！）」

昌彰「いくらなんでもこれは無いんじゃないのか？」

琥珀「どうしてもやっておきたかったのさ！！夢幻さんに素敵なバレンタイン企画を書いてもらっておきながら放置なんてしたくなかったんだよ！！」

零牙「まぁ、ミアにまだきちんとお返ししてなかったからちょうどいいですけどね」

琥珀「ほ、ほら。零牙くんもこう言ってるし、素直にお返しを渡そうよ。ね？」

昌彰「はぁ…ま、いいけどな。ゆらにもお返しわたして無かったし…」

琥珀「さて、気を取り直して皆さんのお返しの品を見せていただきましょう！零牙くんのは？」

零牙「ベイクドとレアの二層チーズケーキです。他にもありますけどね」

琥珀「凝ってるね。自分も好きなんだよね、チーズケーキ…」

零牙「あげませんよ（苦笑）」

琥珀「人の物をとる趣味はないよ。さて、昌彰くん。キミは？」

昌彰「メロンパンとクリームパンだけど」

琥珀「？珍しいね」

昌彰「今持てるパン作りの技術とクッキー作りの技術の結晶体だ」

琥珀「なるほど、普段作っている二つを融合させたんだ」

昌彰「もちろん全て手作りだぞ。カスタードクリームからね」

琥珀「それまたすごい凝りようで…ゆらちゃんは愛されてるな。さて十二神将の皆さんは？」

朱雀『定番なのかは知らんがクッキーだ。一応手作り』

玄武『昌彰に教えてもらってな』

青龍『ふん…』

琥珀「あれ？一人足りなくないか？」

青龍『騰蛇なら出かけているぞ？』

琥珀「企画放り出してどこに？」

青龍『知らん。だがこんなものが散乱していた』

琥珀「『別府地獄巡りツアー』？九州まで行ってるのか？」

昌彰「それよりも早いとこ渡したいんだが？」

琥珀「そうだね。それでは女性陣の入場です！」

女性陣一同『遅いっ！！』

琥珀「すみませんでしたぁ！！！（ひたすらに土下座。額は既に地面と一体化してます）」

ゆら「お返しずーっと待っとったんよ？」

ミア「そうだよ。一回デートしたくらいじゃ割に合わないくらい待たされたんだから！！」

天一『まぁお二人ともそう怒らずに…お返しがもらえるだけでもいいじゃないですか？』

太陰『そうよね。下手したらもらえなかった可能性さえあったんだから』

琥珀「ホントにすみませんでした。（怖いよぅ…）と、とりあえず男性諸君！お返しのプレゼントを渡して下さい」

昌彰「ほい、遅くなってすまなかったなゆら」

ゆら「ありがとう／／／今食べてもええ？」

昌彰「もちろんだ」

ゆら「じゃあ、頂きます。はむっ…」

サクッ　モグモグ…

昌彰「どうだ？」

ゆら「ん…うまい…今までで一番うまいかもしれへん…」

昌彰「そ、そうか？よかった…」

琥珀「ミアちゃんは？」

ミア「さすがにホールのままは…」

零牙「ああ、ごめんミア…ほい！」

ヒュン　ヒュン　ヒュヒュン！

琥珀「…お見事…」

ミア「すごいねレイ！空中で綺麗に八つに斬り分けちゃった…」

零牙「たいしたことない。それよりミア、はいフォーク」

ミア「いつの間に？…頂きます」

モグモグ…

零牙「どうだ？」

ミア「おいしい…お兄ちゃん（修）のよりもおいしいよ！」

零牙「御褒めに預かり光栄です…／／／」

琥珀（コソ～…痛ッ！）

零牙「それとコレも」

ミア「今開けてもいい？」

零牙「ああ…むしろ今すぐ開けてくれ」

ミア「じゃあ…」

ガサゴソ

ミア「十字架（クロス）のペンダント？…あ！」

琥珀（自分は既につけているとは…演出細かいな零牙くん…）

零牙「十字架なら俺がしてても不自然じゃないし、制服の下に隠れるからいつもつけられるかなと思って…」

ミア「レイ…（えへへ…レイとお揃い…）」

零牙「そういえば朧月さん…リュウの奴はどうしたんですか？」

琥珀「ああ、リュウくんは…呼んでも来そうになかったから…闇討ちしてミユちゃんのところに直接お届けしてきた」

零牙「それはまたすごいことを…」

琥珀「音声だけつないでみよっか？」

ガガッ…ガピッ！

ミユ「さ～て…リュウ、早くちょうだい！」

リュウ「ちょ…待てミユ！！それ以上は…ホント待てって！！」

ミユ「なんで？今日一日はリュウは私へのプレゼントなんでしょ？もうちょっとでイケそうなんだから…」

リュウ「だからってそれ以上はホントにヤバいって！…うぅっ…」

ブツンッ！

琥珀「さ、さぁ十二神将の皆さんは！？」

零牙「ちょっ！？」

昌彰「作者！こんなところで放置するな！！」

琥珀「…映像付きで確認しとく？」

零・昌「「遠慮します！（する！）」」

琥珀（まぁ実際は…）

――――

リュウ「ミユ…ホントに勘弁してくれ！それは今月の俺の全財産…」

ミユ「いいでしょう？ずーっとお返し待ってたのに何もなかったんだから」

リュウ「だからってひとをゲーセンで財布代わりに使うなぁ！！」

ミユ「往生際が悪いよリュウ。許嫁を放っておいた罰！ミアちゃんはレイとデートに行ったけど私は何にもなかったんだからね！！」

リュウ「うぅ…ミユ…それホントに最後の五百円…」

ミユ「これでダメだったら諦めてあげるから」

リュウ（そう言ってそのクレーンゲームにいくら注ぎ込んだ！！？）

ミユ「あともうちょっと…あ…ヤッタァ～～ッ！！」

リュウ「（取れたのか…）で、ミユいったい何をとったんだ？」

ミユ「えへへ…リュウ、手を出して」

リュウ「ん？はい」

ミユ「そっちじゃなくて左手！」

リュウ「イテ！いちいち抓らなくても…はいはいこっちでいいのか？」

ミユ「んっと…よかったぴったりみたい！」

リュウ「ってミユ！？」

リュウが自分の左手を見てみれば…薬指に輝くシルバーのリングが見える。

当然それと対になるモノがミユの左手にも輝いているわけで…

ミユ「ペアリング…これでリュウは私のモノだね！」

リュウ「～～っ！！（ペアリング（こんなもの）つけてたら確実にＦＦＦ団に殺られる！）」

ミユ「リュウ…学校でもちゃんとつけててね？」

――――

サクサク　モグモグ

朱雀『どうだ？』

天一『朱雀…すごくおいしいです』

朱雀『そうか！！まだたくさん作った！どんどん食べてくれ！！』

天一『ありがとう朱雀…でも…』

朱雀『ん？』

天一『あまり食べ過ぎると太ってしまいます／／／…』

朱雀『なんだそんなことか。オレが太ったくらいで天貴を見捨てたりするわけ無いだろう？』

天一『朱雀…』

琥珀（…このバカップルは…というか十二神将って体型変わるのか…？）

玄武『…どうだ太陰？』

太陰『うん…。げ、玄武がつくったにしては悪くないんじゃない？』

玄武『…それは褒めているのか…？』

太陰『だから！おいしいって言ってるでしょ…』

玄武『そうか。ならば良い』

琥珀（なるほど…太陰はツンデレだったのか…）

青龍『……』

天后『青龍…フフフッ…』

青龍『似合わないことをしたな…』

天后『そうでもないですよ？ありがとうございます青龍』

青龍『っ！…ところで琥珀よ。騰蛇達はどうするんだ？』

琥珀『ん？後で報告来るでしょ。一応休暇扱いだし』

†††††

ところ変わって－九州、別府－

騰蛇と勾陣、十二神将最強とそれに次ぐ凶将は二人揃ってその地にいた。

二人の眼前には紺碧に染まった池が広がっている。

勾陣「どういう風の吹きまわしだ？お前から旅行に誘ってくるなど？」

騰蛇「…いや、二か月前の礼だ…」

勾陣「二か月前？」

騰蛇「あ～…だからチョコの…」

勾陣「ああ、バレンタインの…もしやと思うが騰蛇よ？日付を一カ月間違えてないか？」

騰蛇「勾…ワザとやってるだろ？」

勾陣「おや、察しがいい…」

騰蛇「～～っ…作者（あのバカ）の都合だ。全く…予約取り直したり大変だったんだぞ…」

ニヤリと笑う勾陣に騰蛇はガリガリと頭を掻く。

勾陣「しかしいいのか？私たち二人だけこんな…」

騰蛇「構わん。琥珀曰く『もうしばらく出してやれそうにないから二人で旅行にでも行ってきて』とか言ってたからな」

勾陣「そうか…まだ…」

騰蛇「寂しいのか？勾よ」

勾陣「まさか…ただ戦う時に背中が落ちつかん」

そう言って勾陣はすたすたと次の目的地へと向かうバスへ乗り込もうとする。

騰蛇「ったく…待てよ勾！」

騰蛇が追いかけるも結局次の目的地まで答えははぐらかされ続けるのであった。

――

騰蛇「これは凄いな…」

勾陣「正に真紅と言ったところか…」

騰蛇「……」

騰蛇はそこにある案内板を呼んで黙り込んだ。

“血の池”地獄…その言葉は千年前の己の罪を思い出させるには十分なもので…

勾陣「…綺麗だな…お前の夕焼けの瞳や炎の色だ…」

騰蛇「勾…」

勾陣の発した言葉はその時に救いを…光を与えてくれた忠誠を誓った主達の言葉…

“その炎はまるで水面に咲き誇る紅の蓮のようではないか…。よし、お前の名を紅蓮としよう…”

“もっくんの瞳は夕焼けの色だね…”

勾陣「まったく…そういうところは千年前から変わらんな…」

勾陣は苦笑すると自分よりも幾分高いところにある騰蛇の頭をくしゃりとなでた。

騰蛇「勾…」

勾陣「（…あまり私をヤキモキさせるなよ…）ほら？行くぞ…紅蓮（ぐれん）」

紅蓮「ああ…そうだな…慧斗（けいと）」

慧斗「久しいな、その名を呼ぶのは…」

――――

夕刻…

騰蛇「それで勾…宿なんだが…」

勾陣「何だ？まさか取れていないとかいうオチか？」

騰蛇「いや…その…家族風呂なんだが…構わないか？」

勾陣「女子にそれを聞くというのも野暮だろう？」

番外編　一か月遅れのホワイトデー企画（後書き）

う～ん…無理やりにでも紅蓮×慧斗が出したかったから書いてみたけど…
やっぱりうまく書けない…
あの何とも言えない信頼感というかなんと言うか…
とにかく説明が難しいけどあの感じがだせないよ～…

4月16日　誕生日企画！（前書き）

企画連投です。
更新を期待された方はすみません。

4月16日　誕生日企画！

ここは昌彰とゆらの愛の巣…ゲフンゲフン…アパートの部屋である。

一同『誕生日おめでとう！昌彰さん（くん）！』

昌彰「ありがとうみんな！！」

琥珀「誕生日おめでとう昌彰。友達のみんなもわざわざお祝いに来てくれてありがとう」

リクオ「当然だよ！誕生日おめでとう昌彰くん！！」

零牙「おめでとうございます昌彰さん！」

琥珀「零牙くんに至っては企画の前倒しみたいになっちゃたね」

零牙「あんまり待たせないで下さいよ？」

琥珀「鋭意努力させていただきます…はい…」

昌彰「それよりも単行本十五巻において厄介な問題が発生したよな？」

琥珀「うん…まさか…いや…予想はできたんだけどね…」

零牙「何の話ですか？」

昌彰「…ああ…なんと言うか…」

夜リクオ「対抗馬が出てきたんだよな？ゆらに対する」

零牙「対抗馬？」

昌彰「リクオ！？余計なことを言うな！」

琥珀「どうしようかな…あの時にガチで戦わせるか…」

昌彰「作者もだ！」

零牙「戦うって…まさか妖怪…？」

夜リクオ「さすがにそれはないだろ？いくらなんでも陰陽師を寝取ろうとする妖怪は普通いない」

零牙「ですよね…じゃあ…」

琥珀「昌彰くん…いい加減白状したらいいじゃないか」

昌彰「…うぅ…零牙、絶対に誰にも言うなよ？」

夜リクオ「そこまで気にするようなことか？」

昌彰「ああ…この手の話に異常な喰いつきを示す奴が、零牙の知り合いの中にいるからな…」

琥珀「今日は呼んでないから心配しなくていいよ？」

零牙「異常な喰いつきを示す奴…？まさか」

昌彰「わかったか？相手となるのは…俺の義理の兄、花開院魔魅流（まみる）…だ」

零牙「えっと…昌彰さんの義理の兄ってことは…ゆらさんのお兄さん！！？」

琥珀「正確にはゆらちゃんにも義理の兄だね。魔魅流も花開院分家からの養子だし」

零牙「ああ…（なるほどね…）」

昌彰「なんで義理の兄弟が義理の妹を取り合うなんて言う構図に…」

零牙「ははは…（たしかに土御門が聞いたら鼻血流して喜びそうな気がする）」

土御門「呼んだかにゃー？」

とある魔術の禁書目録より陰陽術師、土御門元春。参入

一同『うぉわぁっ！！？？』

零牙「土御門！？どうしてここに！？」

土御門「いや～。面白そうな話をしてる気配を感じたから、時空の壁をぶち破ってきてみたんだぜよ」

一同【ありえねぇだろ…こいつ】

昌彰「…大体俺と同じ血がこいつにも流れているというね…」

琥珀「だね。土御門姓で陰陽術師ってことは一応安倍家の末裔だろうし」

零牙「それが義理とはいえ妹に手を出している…ゲフッ!?…言い直す、妹を溺愛してるシスコンだっけ」

昌彰「いくら時空が違うといえどなんかショックだよ…」

土御門「随分な言われようだにゃ～…そうは言っても昌やんもオレと同類だぜぃ」

夜リクオ「同類って…」

昌彰「変なことを言うな土御門!!俺はまだゆらに手を出していない!!リクオもそんな目でこっちを見るな!!」

土御門「そういうことにしておいてやるぜぃ昌やん。しかし“まだ”ねぇ」

昌彰「っ!こ、言葉のアヤだ!!」

琥珀「そう言いながら顔が赤くなってるぞ?」

昌彰「～～っ!!」

零牙「まあまあ、朧月さんもその辺にして。そうは言っても二人はよく似てますよ?妹さんのために一生懸命なところはなんかそっくりです」

土御門「そういうことだぜぃ昌やん？」

昌彰「…そこだけは同意する…」

琥珀「まぁ頑張ることだね。譲るつもりは毛頭ないんでしょ？」

昌彰「当たり前だ！！」

琥珀「自分としてもキミの恋路を応援してるけどね。こればっかりは原作だからといって譲るつもりは無いよ」

昌彰「譲るつもりは無いで思い出したが…例の件はどうなったんだ？」

琥珀「ああ…京都での最終決戦の話？ってキミが知ってたらまずいでしょ？」

昌彰「ここだけ（オフレコ）の話だ。で？」

琥珀「そりゃーもちろん鵺≠晴明様で。そうしないとキミの存在が成り立たなくなりそうで…」

昌彰「やっぱりか…。んじゃ鵺はどうするんだ？」

琥珀「そこは思い切った改変を施そうかなと。過去設定が色々とごちゃごちゃになるかもしれないけどそこは目を瞑ってもらいたい…」

土御門（一体何の話だにゃー？）

零牙（今後の方針みたいだな）

土御門（ふ～ん。面白そうな話も終わったみたいだし帰るか。舞夏が心配するだろうし）

零牙（え？あ、おい！）

土御門元春退出。

零牙「消えやがった…」

琥珀「まぁ、まだ予定だし、現在の羽衣狐の背景とかも関わって来るだろうから一概には言えないよ」

昌彰「あとは様子見か？」

琥珀「それくらいかな…」

零牙「終わりました？」

琥珀「ごめんね零牙くん。ほったらかしにして…あれ土御門は？」

零牙「妹が心配するから帰るって…そういえばゆらさんはどうしたんですか？」

昌彰「ああ、ゆらなら…」

ゆら「準備できたよ～！！」

いきなり隣の部屋の扉が開いた。

琥珀「お疲れ様ゆらちゃん」

ゆら「お兄ちゃんの誕生日なんやもん盛大にお祝いせんと！！」

昌彰「…ゆら…ありがとう」

ゆら「というわけでは…じゃぁ～ん！！」

一同『おおっ！！』

テーブルの上に所狭しと並べられているのは見事な料理の数々。

シチュー、ポークピカタ、ビーフストロガノフ、カルボナーラ、天ぷら、蕎麦、唐揚げ、出汁巻き卵、メバルの煮つけ、春巻き、エビチリ等々。

和洋中を問わず、手作り感あふれる料理が満載だ。

ゆうに十人前はあるだろう。

昌彰「コレ全部ゆらが作ったのか？」

ゆら「うん！って言いたいけど少し天一や天后に手伝ってもろた」

天一『さすがにこれを一人でするのは無理だと思いまして…』

天后『ですがほとんどゆら様が主導されましたよ』

琥珀「けどコレ…食べきれるのかな？」

リクオ「さすがに量が多すぎる気も…」

ゆら「大丈夫！そろそろ…」

ピンポ～ン！

ゆら「は～い！開いてるから勝手に入ってええよ～！」

ガチャッ…バタバタ…

雅・真優「おじゃましま～す！」

琥珀「およ？」

零牙「ミアにマユ！？どうしてここに！？」

真優「お兄ちゃんだけずるいよ～。私だって浮世絵町に行ってみたかったんだから！！」

雅「そうだよレイ！私もお祝いしたかったんだよ！！」

ゆら「うちが呼んだんよ。構わへんやろ？」

琥珀「いやはや…ゆらちゃんの行動力には恐れ入るよ」

雅「というわけで、昌彰さん誕生日おめでとうございます！」

真優「おめでとうございます！」

昌彰「ありがとう！って…零牙、このちっちゃい子は？」

零牙「ああ、妹の真優です…詳しくはコラボの時に紹介しますよ」

琥珀「さて、そろそろ乾杯といきますか」

？？？「ちょっと待ったぁ～っ！！」

琥珀「およ？」

清継「ボクらを忘れてもらっては困る！！」

カナ「私たちもいるよ！！」

巻「というか作者…」

鳥居「完全に私たちのこと忘れてたよね？」

琥珀「わ、忘れてなんかないよ？ただ多すぎると収集つかなくなるし…」

氷麗「リクオ様～！探しましたよ～」

琥珀「雪女まで来たか…」

島「オレは…？」

琥珀「ん？島もいたのか？まぁいいや、ゆらちゃん皆さんにジュース渡して～」

ゆら「はいな～」

琥珀「ではとりあえず。昌彰くん！！」

一同「誕生日おめでとう～！！」

†††††

昌彰「そういえば作者からプレゼントとかは無いのか？」

琥珀「ああ、用意してあるよ…ゆらちゃん！！」

ゆら「ええっと…見せなあかん？」

琥珀「昌彰くんも喜ぶと思うよ？」

昌彰「おいゆらに何をさせる気だ？」

琥珀「そう警戒しない。ゆらちゃん、思い切って見せちゃえ！」

ゆら「でも…／／／」

琥珀「じれったいな…それっ！」

ゆら「あっ！」

昌彰（…“妻”氏名、花開院ゆら…現住所、東京都浮世絵町〇〇－×…立会人、奴良リクオ、速水零牙…）

琥珀「おろ？何固まってるんだ昌彰？」

昌彰「夫の氏名欄が空白…って!?」

ゆら「そやから…書いてくれへん?あ、あなた…／／／」

昌彰「え?あ…え、っと…あ…」

ボンッ!!!

琥珀「あちゃ～脳がオーバーヒートしちゃったみたいだな…とりあえず今のうちに拇印を押してっと。ほい、ゆらちゃん。あとは昌彰の名前書いてから昌彰が十八歳になったら役所に持って行きな」

ゆら「えええんかな?」

琥珀「構わないさ。婚姻届なんてただの紙。要は二人の間に愛があるかないかだから」

ゆら「そうやね…ふふっ。誕生日おめでとう　あなた／／／」

X

4月16日　誕生日企画！（後書き）

つ――――っ…

なんだこのベタベタは…

たまにはいいかと思って書いたけど…

ベタすぎて…

ｏｒｚ

第十四夜　襲われたクラスメイト（前編）（前書き）

初めて前後編にしたかも・・・

第十四夜　襲われたクラスメイト（前編）

†††††

『一体なぜ引いたんだ昌彰』

風の中に青龍が再び顕現する。

「護符が突破された！」

雲外鏡事件の後に清十字団に新たに渡した護符。そのうちの一枚が突破された。

しかもその場所は騒ぎが起こった一番街から離れている。

『なるほど、こちらは囮…陽動だったということか』

風を操る白虎が呟いた。それならば派手に騒ぎを起こしたのも納得がいく。

『場所はわかるか？』

「おそらく浮世絵総合病院だ。そこにもう一つ護符の反応がある！」

その言葉を聞いて白虎の風がさらに加速する。

「間に合え…」

昌彰の言葉は渦巻く風に紛れた。

――

時間は少し前に遡る…

―浮世絵総合病院―

「鳥居――。あったー？」

「うん。この先みたいだよ。たしかおばあちゃんが言ってたのって…あ、あった」

懐中電灯の明かりの中に照らし出されたのは一つの古びた小さな社だった。

「うわぁ…ずいぶんさびれて…」

人々から忘れられたかのようにひっそりと佇むその社だが、確かに神たるものは存在していた。

背には折り鶴の翼を背負い、折り鶴の絵柄が入った羽織を纏い、“千羽”と書かれた薄布を眼前に下げたその姿は、今受ける信仰の大きさを示すように小さなものであったが…

「千羽様千羽様…おばあちゃんが元気になって…長生きできますように」

祈る鳥居の姿を見てもその神は沈黙したままだ。

「…これでひばりちゃんも良くなるよー」

（ひばり？）

巻が言ったその名前に千羽は反応する。

「帰ろっか」

「うん」

そう言って巻と鳥居は社に背を向ける。

（待てその名は――）

「待て」

千羽が行動に出る前に新たな声の主が鳥居の袖を掴んだ。

「！な…何？」

思わず鳥居は振り向いた。振り向いてしまった。

鳥居の袖を掴んだのは石でできた小さな地蔵。しかしそれが放つのは純然たる妖気であった。

「こんなサビれた神などきかんぞ…代わりに…ワシの名を呼べ…ワレ、袖モギ様ナリ」

「いや！！なによこれぇぇぇ！！？」

鳥居の恐怖に染まった叫びが夜の闇を切り裂く。

「鳥居？」

その声を聞き、少し先を歩いていた巻も足を止めて振り返る。

「放してぇ！！」

鳥居は必死で振り払おうとするが袖モギは掴んだ袖を放そうとはしない。

「だめだ…ワシの名を呼べぇ！！」

袖モギの顔が憤怒に歪む。

「いぃいやぁぁぁぁ――――！！放して…放…」

一気に袖モギの体から妖気が立ち上った。

「化物――――！！！」

キィンッ！

放たれた袖モギの呪いに反応し、昌彰の護符が障壁を築く。だが…

「ワシの名を呼べぇっ！！」

掛けられた呪いは消えることなく障壁を突破しようと襲い掛かる。

障壁は数瞬耐えるものの見る間にひびが入り、符に込められた霊力が尽きかけている。

「いやぁっ！！」

パキィッン！

次の瞬間には甲高い音と共に護符の霊力が尽き、障壁が砕け散った。

呪いが鳥居へと直接襲い掛かる。

ビッ…

鳥居が身を捩り、袖が裂け…

ドジャァァッ！！

…る直前で錫杖の一閃が鳥居と袖モギの間に割って入った。

「！！…あ？何者だ？」

袖モギは奪い取った袖を喰らいながら乱入した者へと向き直る。

乱入してきたのは笠を被った黒衣の破戒僧…黒田坊。

（奴良組の妖怪か…？）

「鳥居―どうした…！？誰！？」

袖モギが逡巡している間に鳥居の悲鳴を聞いて巻が戻って来た。

先程までいなかった黒田坊に一瞬瞠目するも、倒れた鳥居に一目散

に駆けより、抱き起す。

「と、鳥居――――!?ど……どうしちゃったんだよ――――!!」

「!」

鳥居の名を聞いて思わず黒田坊は振り返る。

無理も無い、縁無き者ならいざ知らず、先日無実の罪に問われた際に救ってくれた少女の名だ。

「あぶない!!」

千羽が警告の声をあげるが、背を向けた黒田坊に好機とみた袖モギがその袖に手を伸ばす。

袖をとられ、黒田坊は後ろを振り向いた。

ジャラァッ!

しかし、呪いが降りかかる前に袖に仕込まれた大量の暗器が袖モギを襲う。

「うぉおお!?な…なんじゃこりゃ…」

刀、槍、錫杖、三叉槍、鎖鎌、六角棒ありとあらゆる武器が次々と現れては消える。

ジャキィッ!

黒田坊はそのうちの一振りの刀をとり、袖モギに突き付ける。

「おぬしこそ何者だ…。その子に……何をしたっ！！」

言葉の端々から抑えきれない怒りが滲み出ている。

怒りをそのままに黒田坊は袖モギを貫かんと刃を振るう。

「ぬぉぉぉっ！？」

袖モギも必死で身をかわす。元々の体が小さいため、なんとか繰り出される突きの嵐を掻い潜っていた。

「ちょこまかと…「『臨(のぞ)める兵(つわもの)　闘う者、皆陣列(みなじんやぶ)れて前に在り』！」むっ！？」

中空から聞こえたその声に黒田坊は咄嗟に刃を引き、身構える。

「うぉぉっ！？」

だが九字真言によって放たれた刃は正確に袖モギだけを狙い撃った。

「『放たるる風、さながら白刃のごとく』！」

焦って黒田坊から距離をとった袖モギに、今度は容赦なく名もなき風神の刃が打ち込まれる。

「昌彰さん！？」「陰陽師か！？」

白虎の風が土煙を巻き上げ、その中から昌彰が現れた。

「巻か？ってことは…」

昌彰は巻が抱えている鳥居を見やると遅かったかと顔を歪めた。

「フヒヒ…陰陽師まで来たか…ワシは土地神殺し専門…これ以上は分が悪い…」

武闘派の黒田坊に加えて陰陽師の昌彰まで参戦したのを見て、袖モギはそう言い残すと逃走に転じた。

「おいっ待て！！」『逃がすか！！』

黒田坊と白虎は追撃をかけようとするが…

「待て白虎！今は鳥居の方が重要だ…」

『くっ…』

昌彰の言葉で白虎は風を収める。

「昌彰さん…鳥居は…」

涙目になった巻が縋りついてくる。

「落ちつけ巻！」

「！！」

昌彰の一喝に巻はビクッと震えるが、なんとか涙を抑え込んだ。

「とにかく今は落ちつくんだ。幸いここは病院だ。とにかく人を呼んで来い！」

「は、はいっ！」

巻に人を呼びに行かせた昌彰は上着を脱いで鳥居の首の下に入れ、気道を確保すると黒田坊と千羽に向き直った。

「時間がない。手短に教えてくれ。さっきの地蔵の仕業か？」

「わからぬ。拙僧も先程ギリギリで駆けつけたのだ」

黒田坊はそう答え、二人の視線は自然と千羽に集中する。

「ええ…あの子らは千羽鶴を供え、祈ると病気が治るという小生の噂を聞きつけて来たようで…」

「ということは、お前は土地神か？」

昌彰が千羽に問う。

「ええ…奴良組所属、千羽といいます」

躊躇いがちに千羽は頷いた。

「そーいうことならあの娘を治してやってくれんか？」

黒田坊がそう口添えをする。

「それは…出来ない――あの娘は…呪われている」

「なに…？」

「陰陽師殿の護符とすんでのところで黒田坊様が割り込んだので呪いは弱体化し、即死は免れたようだが…」

昌彰はそれを聞いて解呪の手段を模索する。

「呪いか…なら人形（ひとがた）を形代（かたしろ）に…いや、意識がない状態では無理か…」

人形に自らの名前を書き、三度息を吹きかけることによってその人形はその者の形代となる。

だが、今の鳥居は意識がない。形代を作るのは無理だ。

先程ゆらの傷と毒を引き受けてもらったせいで天一は移し身を使用できない…

「なら…」

そう呟いて昌彰は鳥居の側に座した。

「何をする気だ？陰陽師」

「下がっていろ黒…」

黒と呼ばれ、黒田坊は一瞬ムッとしたが、黙って後ろへ下がった。

「『この声は我が声にあらじ。この声は神の声　まがものよ、禍者

よ、呪いの息を打ち祓う、この息は神の御息…』」

剣印を結んで昌彰は唱える。

「むっ…」

黒田坊は居心地が悪そうに身をよじった。昌彰の神咒(かじり)を受けて、周囲にも多少の影響が出ているのだ。

「『この身を縛る禍つ鎖を打ち砕く、呪いの息を打ち破る風の剣妖気に誘うものは、利剣を抜き放ち　打ち祓うものなり』！」

神咒の完成と共に昌彰は鞘から刀印を抜き放ち空へ向かって振りぬいた。

それと同時にさぁっと鳥居にかかっていた妖気が消え去る。

「呪いは…解けたのか？」

「いや…ひとまず妖気を祓っただけ…放っておけばまた…」

昌彰がそう言ううちに鳥居の身体から妖気が零れ始める。

「…！これじゃ結界を張っても…」

外部から呪詛をかけられているなら結界で隔離してしまえば対象に効果は現れなくなる。

しかし、内部に呪いを埋め込まれているとそういうわけにはいかない。

「…陰陽師。どうにかならんのか?」

黒田坊は抑揚のない声で昌彰に問う。

内心は何もできない自分の無力さを押し殺して…

「このままじゃどうしようも無い…呪いを解かない限り…」

「要は呪いを解けばどうにかなるのか?」

念のために意識や脈、呼吸を確認している昌彰に黒田坊は訊ねた。

「ああ…おそらくは」

「ならやることは一つだ…」

黒田坊はそう言って袖モギが逃げた方向を睨みつけた。

「どうするつもりだ黒田坊?」

ようやく駆け付けた巻が連れてきた医者の方を見ながら昌彰は問う。

「人間などどーでもいいが…あの娘は……ちと困る」

「…少し待ってくれるか?…こっちです!!」

すぐに医師と看護師がストレッチャーを伴って駆けつけ、鳥居をそれに乗せた。

「意識レベル３００、自発呼吸あり、脈はおよそ毎分八十です」

「わかりました。後はこちらが引き受けます！」

怒涛のごとく医師達は院内へと戻る。

「昌彰さん…鳥居は…大丈夫ですよね？」

不安で仕方がないのだろう。普段の勝ち気そうな表情はなりを潜め、その瞳は儚げに揺れている。

「必ず助ける。巻さんは鳥居さんの側についていてほしい。頼めるかな？」

「…っ…はいっ！」

巻は頬を流れる涙をぐいと擦ると、鳥居の後を追って病院内に駆け戻った。

「すまない、待たせたな。それでどうするつもりだ黒田坊？」

「言うまでもない。あの地蔵を探すのだ」

何をいまさらとでも言いたげな目線で昌彰を射る黒田坊。

「当てはあるのか？」

「…土地神殺し専門だとかぬかしていた。ならば神社や祠をあたるまで…」

一瞬黒田坊は沈黙するが具体案を出してきた。

だが…

「この街に一体いくつあるんだ?そこはお前の方が詳しいだろ?」

「っ…」

自分でも気づいていたのか黒田坊は黙って唇を噛む。

「…今、奴良組とは別の妖怪がこの街に来ている。おそらくあの地蔵もそのうちの一人…」

「何っ!?」

敵対勢力の侵攻に気づいていなかった黒田坊はその声に驚愕を滲ませた。

「闇雲に探してもキリがない。いったんリクオ達と合流した方がいい」

「たしかにその通りだな…拙僧は本家に戻る。貴殿は…」

「俺も行こう…白虎!!」

『御意!』

神気を孕んだ風が昌彰だけでなく、黒田坊をも包み込んだ。

一気に高度を上げ、闇の中を一直線に奴良組本家に向かっていく。

（これが…陰陽師の式神か…）

†††††

―奴良組・本家―

「リクオ様…大丈夫でしょうか…」

雪女はリクオから本家にて待機を言い渡され、ただ気をもむしか出来ぬことに少しばかり苛立ちを感じていた。

「そう気にしなさんな…あんたはこの本家の守りを任されてる…そう思えばいいだろう？」

毛倡妓はそう言って雪女を励ます。

「ですが…若が外に出られているというのに御側に居れない側近など…」

よほど置いていかれたことが不満なのか雪女はまだぶつぶつと文句を呟く。

「やれやれ…ずいぶん重症みたいだね…ん？」

呆れたように雨が降り始めた空へと視線を向けた毛倡妓の目にこちらに向かって突っ込んでくる何かが映った。

「言ってる側から…来たみたいだよ？」

その風を纏った何者かはそのまま奴良組本家の庭園に侵入してきた。

「何者です!?」

鬱屈していた雪女は侵入者に対して畏を全力で解き放つ。

その畏の凄まじさに降っている雨は霰へと変化していた。

「待て雪女!拙僧だ!」

「え?黒?それに…陰陽師!?」

侵入者の正体に雪女だけでなく、毛倡妓以下その他の妖怪も驚きを隠せない。

「雪女!若は?リクオ様はどこに!?」

黒田坊が思わず雪女に詰め寄る。

「リクオ様ならパトロールに出ておいでです…それよりも黒!どこをほっつき歩いていたのですか!?あなたがいない間に…」

あまりの剣幕に呑まれて答えるがそれどころでないことを思い出したのであろう。

逆に黒田坊へ食ってかかった。

「敵対勢力が攻め込んできたのだろう?」

「どうしてそれを!?」

だが、黒田坊がそれを知っていたことで追及の矛先は鈍る。

「雪女、詳しい説明をしている暇は無い。鳥居さんが襲われたんだ…」

「え…？」

続く昌彰の言葉に雪女は固まった。それもそうだろう。

リクオについて清十字団にも参加している氷麗にしてみればよく知る人間の一人だ。

「だから…「昌彰さん！！」なっ…リクオ？！」

「リクオ様！？どうしてお戻りに？」

いないと思っていたリクオのいきなりの登場に昌彰を始め、氷麗も驚愕の声を上げる。

「昌彰さんの風がうちに向かっているのを見かけて何かあったんじゃないかと思って…それよりも鳥居さんが襲われたって！？」

「申し訳ありません若…拙僧が近くにいながら…」

黒田坊は悔しさと自らへの怒りを堪え、リクオに頭を下げる。

「ゆるさねぇ…」

「っ！」

咄嗟に黒田坊は顔を上げた。リクオから普段とは段違いの畏が感じられる。

「あいつら…オレらの地(シマ)ばかりじゃなく、クラスメートにまで手を出しやがってよ……」

その言葉に込められたのは憤怒の念。クラスメート…仲間に手を出されてリクオが怒りを感じないはずがない。

「リクオ…どうするんだ?」

リクオの畏に周りがたじろぐなか、昌彰がリクオに問う。

「決まってんだろ?」

そう言ってリクオは踵を返し、纏った羽織を翻した。

「お呼びですか若頭」

そこに現れるのは白い長髪に緋色の瞳を持つ夜のリクオ。

そして漆黒の翼を背負い、その背後に控える三羽の鴉天狗。

「三羽ガラス…浮世絵町中のカラスを使え。奴らを…あぶり出せ!!!」

第十四夜　襲われたクラスメイト（前編）（後書き）

琥珀「ようやく本編更新です！」

昌彰「企画連投だったからね・・・」

琥珀「まあ、一つは季節外れもいいとこだけどね」

昌彰「さて、今回の話だが・・・少し短めだな？」

琥珀「いや～袖モギ戦は一話で終わらせるつもりだったんだけどね・・・」

昌彰「ついつい調子に乗って書いてたらかなり長くなった？」

琥珀「ちょっとペースがよくて・・・気付いたら一万字越えそうでさ・・・」

昌彰「普段からそれくらい書けたらいいのに・・・だからまずは半分上げようと？」

琥珀「一応きりのいいところで切ったから厳密に半分ってわけじゃないけど」

昌彰「まあいい。それで、後編は？」

琥珀「週明けくらいにはいけると思う」

昌彰「読者の皆様を待たせるなよ？」

琥珀「それはもう重々承知。それでは皆様、また後編で！」

第十五夜　襲われたクラスメイト（後編）（前書き）

お待たせしました後編です！
オリジナルが多少多いかも

第十五夜　襲われたクラスメイト（後編）

†††††

―浮世絵町・上空―

「くそっ！！一体どこに居やがる！？」

リクオは苛立ち紛れにそう吐き捨てる。

三羽ガラスが浮世絵町中の鴉を使い、まさに網というべき監視網を敷いているが、そのいずれにも袖モギは引っかかっていないのだ。

「白虎、風読みは？」

既に空は白み始めているのだ。時間は刻々と削られている。

『無駄だ。よほど巧妙に妖気を隠しているらしい…』

一度遭遇した相手だから妖気を辿れるかと昌彰は思ったのだが、予想以上に警戒されているようだ。

「その妖怪…土地神殺し専門…とか言っていたそうですね？」

並行して飛翔するささ美が昌彰に問いかける。

雨の中一晩中飛びまわっているはずなのに息一つ切れていない。

兄の黒羽丸とトサカ丸に至ってはリクオと黒田坊をそれぞれ乗せて

いるのに、だ。

「ああ…おそらくは四国妖怪…」

昌彰も自分の記憶の中から合致する物を見つけようとしているのだが見つからない。

相手の正体が分かれば少しは対策も立てようがあるのだが…

「四国…土地神殺しですか…」

そう言ってささ美は黙り込む。

「心当たりがあるのか？」

黒田坊がそう問うが、ささ美は首を横に振った。

「確証がありません。しかし、もしそうなら奴良組の根底が危険にさらされています」

そう言ってささ美は自らの配下にある鴉に指示を飛ばす。

「もし敵の正体が私の予想通りだとしたら次に狙われる可能性があるのは…」

ささ美はいくつかの神社の名前を上げた。

“珠苔（たまごけ）神社”…

その名を聞いた時に昌彰の脳裏に何かが走った。

特に以前聞いたことがあるとかではない。漠然とした何か。

それこそ直感と呼ばれるものだろう。

「リクオ…珠苔神社に向かってくれるか？おそらく次に襲われるのはそこだ」

昌彰は一瞬の逡巡の後にそう言った。

「何か根拠はあるのですか？」

ささ美は疑問を含んだ視線を昌彰に向ける。

「無い。強いて言えば直感だ…」

昌彰とて無条件に信じてくれるとは考えていない。無理ならば自分ひとりでも行くつもりだった。だが…

「三羽ガラス」

それ以上の言葉を言わずしてリクオは命じる。

「若？」

当然疑問の声が上がるが…

「どうせこのままでは状況は好転しない。ならば賭けてみるのも一手だ」

陰陽師の直感…リクオはその片鱗を一度垣間見ている。
それゆえに昌彰の勘にかけてみることにしたのだ。

「ありがとう…リクオ」

そして一行一式神を駆る陰陽師と三羽の鴉と一人の破戒僧を従えた百鬼の主は一路、苔姫を祀る珠苔神社へと向かうのだった。

†††††

「ム…空も白んできたか…あの術者を警戒しすぎたかの…」

雨雲越しにもわかるくらい東の空が明るくなってきている。
袖モギは昌彰の直感通り、珠苔神社の境内にいた。
昌彰に見つかってからは慎重に行動し、数を稼げないでいたようだ。

「まぁいい…ここは今日の中でも最も上玉…これで最後にしようかの～」

そう言いながら袖モギは本殿へと足を進める。
最期の時が己の身に迫っていることに気づかずに…

――――

「いやがったな四国妖怪！」

上空から見下ろす昌彰達は獲物を見つけた鷹の如く急降下をかける。

「お前の勘通りだな昌彰」

ニヤリとリクオが微笑んでくる。

「ああ…しかしあいつは…」

改めて相手の姿を確認してみるが、やはり合致するものが存在しない。

「!?あいつはやはり…袖モギ様!?」

昌彰が考え込んでいるとささ美が相手の正体を看破した。

「知っているのか?」

「四国に伝わる袖モギ信仰の妖怪!!弱い土地神を襲い、信仰の念を自分の畏に変えるもの!!」

(土地神に害を為すものか…)

昌彰が記憶している榎本家妖秘録や花開院家、安藤家妖秘録は人に害為すものを中心に記載されている。

土地神に害為すとなると記されているのは神道系の書物になるだろう。

「戦う力のない土地神が襲われればひとたまりもない!!」

「やはり…敵は四国。やつら我々奴良組のシノギを根っこから奪うつもりだったのか！！」

そう言っているうちにも袖モギは本殿の中へと消えていた。

――――

「な…何するのです！！ここをどこだと思っている！？ワラワはこの神社の土地神…苔姫なるぞ！！」

薄闇の本殿の中に祭神である苔姫の悲鳴が響く。

「お主が誰かは関係ない。どれほどの信仰を集めているか…が問題だ」

袖モギは苔姫の纏う豪奢な着物の振袖を掴んでニヤリと口の端をつり上げる。

「お主自身を呪い殺し、ワシがこの神社の畏となる！」

その言葉と共に苔姫の着物の袖が引き千切られる。

「いやあぁぁぁ」

「ひひひ…立派な着物は美味しいの～」

喰らった袖から苔姫がどれほどの信仰を集めているのかを感じ、袖モギの精神は高揚していた。

「もっとくれ…モットモットソデ！」

「いや…いやぁ～！！」

袖モギはさらに苔姫に襲い掛かる。その様子はまるで追剥であった。

「ワシに呪い殺されたくなかったらソデを置いてけ――！！」

袖モギは気付かなかった。

本殿の中の闇より黒い影が己の目の前にいることに。

そしてその袖を自分が掴んでいることに。

「アグァ…！？」

口の中に突き付けられた剣、掴んだ袖が先刻病院で対峙した相手だと告げていた。

「生憎だな。それは拙僧のソデだ」

「で…、でめーぇぇはぁ…っ！！」

袖モギは咄嗟に間合いを取ろうとしたが、黒田坊はそれを許さない。

「そんなに欲しけりゃくれてやる」

袂から無数の武器、暗器が解き放たれ、袖モギの身体を切り裂き、貫き、抉りだす。

「ガヴルゲケェーーー！！！？」

その凄まじさに袖モギは声にならない絶叫を漏らした。

「お主に味覚があるならば、そいつはまずかろう…拙僧の剣は血の味しかせんからな」

そう言って黒田坊は袂に武器を収める。

「お主が掴んだ最後の袖はお主自身の死に装束だ」

袖モギは瀕死の状態で賽銭箱の上に叩きつけられた。

「おい…答えろ」

ピクピクと痙攣する袖モギに昌彰が刀印を突き付ける。

「呪いだ!!お前がくたばれば呪いは解ける…そうだな?」

黒田坊が袖モギを掴みあげ、問い詰める。

「ああ…呪いは…とけた。だがあの娘は…もう死ぬぞ?」

「なん…だと?」

袖モギの答えに昌彰とリクオ、黒田坊は言葉を失う。

「ワシの呪いは命を峯る。呪いはとけてもあの娘自身どれだけもつかな…」

「……」

無言で昌彰は拳を関節が白くなるほど握りしめる。

「一晩が過ぎ…もう夜明けだ。果たして…間に合ったかな……？」

ズビュッ！

ヒャッヒャッヒャと嘲笑をこぼす袖モギをリクオは祢々切丸の一閃で屠った。

「若！？」

「行くぞ黒、昌彰」

リクオの様子にささ美は慌てて声をかけるが、リクオはそれを無視して黒田坊と昌彰を呼んだ。

「ああ…白虎」

『承知…』

†††††

「鳥居…お願い…目を開けてよ…」

巻は未だ昏睡したまま意識の戻らない鳥居の傍らで手を握ったままその言葉を繰り返した。

「夏実…お願いだから…」

――――

「お助け下さい千羽様…どうか…孫を…」

冷たい雨の降りしきる中、夏実の祖母のひばりは千羽様の祠にひたすら祈りを捧げていた。

（ひばり殿――ずっと…憶えていてくれたのか…。こんなにも年老いるまで…私のことを…）

千羽の脳裏に初めて会ったひばりの姿が蘇る。

（これ以上の喜びは――――ない）

――――

「ねぇ…夏実……神様…居るんなら夏実を目覚めさせてよ…ケチってないで奇跡くらい起こしてよ…」

布団に顔を埋めるようにしていた巻は仄かに感じた温かい力に、ふっと顔を上げた。

「何…コレ…鶴？…光ってる…」

部屋中にひばりに持ってきたはずの鶴達がふわふわと浮いているのだ。

（人の子よ…そなたらの想い…確かに受け取った…）

巻の向かい側に折り鶴の翼を背負った影が現れる。

「…もしかして…千羽様…？」

巻はいきなり現れた人影に驚きつつも目の前の不思議な現象に目を瞬かせた。

（人の想いの大きさが…私の力を強くする…）

徒人には聞こえぬはずの千羽の声が巻の耳に届いた。

（私自身が強いわけじゃない。神だから…ほんの少し後押しするだけだ…）

「……ぅ…うぅ…」

「鳥居！」

微かにうめき声を漏らした鳥居に巻は慌てて声をかけた。

（私は千羽鶴…人の想いの――結晶だ…）

――――

―翌日・早朝―

「鳥居さん！！元気かね！？元気だろーね？」

ここが病院であることを忘れたかのような清継の元気が有り余った声が鳥居の病室に響いた。

「清継くん!?みんな!!来てくれたんだ」

「当たり前だねマイファミリートリー」

「清継くん、ここ一応病院だから…でも急に入院なんてビックリしちゃったよ。大丈夫?」

カナが清継を窘めてそう続ける。

「心配掛けてごめんね…今朝の検査で何もなければそのまま退院だって。学校にも行けるみたい」

「それはよかった…ん?そう言えば巻さんは?」

清継は首を巡らせて巻の姿を探した。

「うぅ~ん…もう少しだけ寝させて~」

一晩中鳥居に付き添っていた巻は鳥居の足元の布団に突っ伏して仮眠を取っていたようだ。

先程からの騒々しさで目を覚ましたらしい。

(よかった…鳥居さん…なんとかなって…これも昌彰さんのおかげかな…)

リクオは人知れず安堵の息を漏らした。

(でも…奴らはボクだけじゃなくてこの街を狙っている。なんとか手を打たないと…)

「そうそう！千羽鶴…じゃなくて、間に合わなくて百六十五羽鶴を持って来たんだが、昌彰さんがどこかに持っていってしまってね…」

すまなそうに頭を下げる清継に鳥居は笑顔を向ける。

「ううん。気持ちだけでも充分嬉しいよ。それにね…千羽鶴ってそこに込められた気持ちが大事なんだと思う。ね、巻」

「うん…千羽鶴は人の想いの結晶だって千羽様も言ってたし…」

そう言って巻も鳥居に同意する。

「千羽様？」

そこだけを聞き咎めた清継が首を傾げる。

「へぇー！！それは面白い。ぜひ今からお礼参りに行こう！」

「うん…そうだね！」

巻は一瞬昨日のことを思い出したが千羽様にお礼に行くというのに反対する気はない。

親友を救ってもらったのだ。千羽様にはいくら感謝しても感謝しきれないだろう。

「じゃあみんなで行くぞ！」

一一方その頃一

「失礼します。ひばりさん…ですよね？」

「…はぃ…どちら様、ですか…？」

「鳥居さん…夏実さんの友人の安藤に花開院といいます…」

一晩中雨に打たれながらも祈りを捧げた無理が祟ったのだろう、ひばりは肺炎をこじらせてしまったらしい。

「そうですか…あの子は…？」

「大丈夫です。意識も戻って今朝の検査に異常がなければもう退院できるようです」

当直の医師は昌彰の顔を憶えていたようで、頼みもしないのに詳しい病状を説明してくれた。

昌彰のことを医大志望の高校生で、鳥居の兄か何かであると勘違いしていたようだが…

「そう…ですか…。…ありがとうございます…千羽様…」

そう言ってひばりは眠りに落ちた。

こうして会話するのもかなりの体力を消耗するのだろう。

着けられた酸素マスクが呼気で白く曇った。

「お兄ちゃん、コレ…」

「ああ」

昌彰はゆらが差し出してくる千羽鶴一正しくは百六十五羽鶴だが一を受け取り、ひばりの枕元に置いた。

清継達が鳥居のために折ったものだが、拝借させてもらった。

「ゆら…準備はいいな?」

「……うん」

ゆらは大きく深呼吸すると横笛を取り出して口に当てた。

本来なら琴が良かったのだがさすがに病院まで持ってくるのは厳しかったので諦めたようだ。

「『今斯く(ここ)?に…』」

病室にゆらの奏でる笛の音と昌彰が唱える祝詞(のりと)が響き渡る。

その祝詞に応えるかのように枕元におかれた千羽鶴が光を放ち始めた。

「『菅掻(すがかき)を為しつつあるは、吾等(われ)が遊楽のためにあらず・・・』」

さらに祝詞が続くと同時にひばりの枕元に千羽の影が現れた。

昌彰が最初に見た小さな姿ではない。人と変わらぬ大きさに力を得た千羽本来の姿。

「『神の御心を和めて、此鮮潔なる神座に招迎するものなり』」

祝詞が完成し、千羽鶴を依り代として千羽が降りた。

千羽は微かに昌彰に向かって頷くとひばりに手を翳す。

折り鶴に込められた想いが千羽に力を与え、その力を以て千羽はひばりへと治癒を施す。

長きに亘って自分を憶え、信じてくれた者へ…

（ひばり殿…）

人の想いを得た千羽はその本来の力を行使する。

人の想いだけではない。今は千羽の想いもそれに加わっている。

百六十五羽しかいないはずの鶴が、昌彰の神降ろしの術を受け、その力はより強く、大きなものになっていく。

光が鎮まった後には、呼吸が随分と軽くなったのかひばりは穏やかに眠っていた。

「お兄ちゃん…成功したん？」

ゆらが横笛を収めて昌彰にきいてきた。

「ああ…助かったよゆら」

「あれが…あの鶴の翼を持ったのが千羽様？」

そう言ってゆらは視線を千羽にむける。

「ああ…昔からここで人々の祈りを叶えてきた土地神様だ…」

（ありがとう陰陽師殿、その妹君…）

千羽は二人に一礼するとフッと消えた。

「行ったか…」

昌彰はそう言って病院の裏手にある社の方を見やる。

そこから放たれるのは昨日までの弱々しい力ではない。

新たに芽吹こうとする若々しい力が感じられた。

†††††

「袖モギが…やられただと…？」

玉章は自室でその報告を受けた。

「総大将もいないのに…随分と手際がいいな。…あの孫か？…若しくは陰陽師も一枚噛んでいる可能性があるな…」

そう言って玉章は苦々しい顔を浮かべた。

（やはり敵に回したのは少々痛いか…）

「玉章！天下を取る器はアンタ一人ぜよ」

そう言うのは扉のところで控えていた報告を持ってきた玉章と同じくらいの年齢に見える少年。

「証明してやろうか…？命令しろよ…“奴らの首差し出せ”ってさ」

「陰陽師諸共リクオを殺るつもりか？…それは…前倒しするほどのことか。犬神」

玉章はそう言って犬神を振り返る。

「総大将代理をやっている可能性はあるが今は必要ない。（むしろ陰陽師の方が厄介な存在だ…）全ての実権を握ってから殺すか飾りにすえるか決めようと思ってる…」

「玉章。必要あるぜよ」

「…だからな、いぬが…」

抑えようとする玉章の台詞を遮って犬神は叫ぶ。

「だってよっ！！生意気なんだよあいつらは！！奴良リクオと玉章の絶対的“差”を見せてやらんと」

（奴良リクオとの…か。お前が本当に憎んでいるのはどっちだろうな？）

犬神が生まれた訳を知る玉章はその行動がどちらの恨みに根差したものなのか測るように見つめた。

「頼むよ玉章。オレはぁーお前の牙になりてぇのよ…」

「確かに…お前を使えば護衛もろとも瞬殺だろうが…お前の本気は見たくない」

きたないのだ…と本心を隠すように玉章は呟いた。

第十五夜　襲われたクラスメイト（後編）（後書き）

琥珀「というわけで初の前後編でしたがいかがでしたでしょうか？」

昌彰「原作部分より、オリジナル部分で伸びてる分が多い気が・・・」

琥珀「う・・・。いや、あんまりキミがいろいろ知りすぎてると、原作キャラが死んじゃうんだよ」

昌彰「それでか・・・だがむしろ活躍増えてね？」

琥珀「ささ美さんでしょ？別に中の人が好きだからとかいう理由じゃないからね！」

昌彰「はぁ・・・別にいいけどな・・・。他のオリジナル部分は・・・鳥居さんのお祖母ちゃんのところか・・・」

琥珀「いや～原作ではノータッチだったけど、さすがに一晩中雨に打たれてたら風邪くらいひくでしょ？お年寄りなら尚更」

昌彰「まあそうだろうな。というかゆらって笛吹けたんだ？」

琥珀「そこら辺は捏造。まあ神楽の一環だと思えば習得してても不思議じゃないでしょ？」

昌彰「まあそうだな」

琥珀「こんなところかな。次回は犬神戦に入ります」

昌彰「また前後編？」

琥珀「それは自分の筆次第。それでは皆様また次回お会いしましょう！」

※追記・一ヶ所、千羽様が袖モギ様になっていたのを修正しました。危ない危ない・・・

それと苔姫の神社名は捏造です。

※アニメ版では「たまごけ」の音のみ出てました。（＾＾ゞ

字はイメージで当てました。

第十六夜　犬神襲来　～選挙演説の闇～（前編）（前書き）

また前後編になりました。
またオリジナル？部分が多いかと思います。

それと、今回は視点移動が激しいです。
ちょっと読みにくいかもしれません。

第十六夜　犬神襲来　～選挙演説の闇～（前編）

一翌日一

浮世絵中正面玄関前

「…やっぱりか…」

登校した直後に昌彰は隣を歩くゆらに聞こえないように溜息をついた。

『昌彰…』

白虎が昌彰だけに見えるくらいに顕現して宥めるように声をかけてくる。

「（わかっている。だけどあからさま過ぎるだろ…）」

正面玄関前に仁王立ちする青田坊が目に入る。少なくとも昨日までは見られなかった光景だ。

いくら騒ぎを起こされ、クラスメイトが襲撃されたとはいえ、普通の人間にまで異変を察知されるのはどうなんだろうか？

「（後でリクオに言っておこう…）おはよう倉田くん」

「おう、安藤か」

学校では倉田と名乗っている青田坊は昌彰に挨拶を返した。

捩眼山の一件で、昌彰が氷麗とリクオを守ったことで比較的に態度が軟化しているようだ。

昨日の一件もそれに拍車をかけているのかもしれない。

最初の出会いで自慢の拳を受け流され、一目おいている分もあるのだろう。

ザワザワ…

暴走族総長（ヘッド）と普通に昌彰が会話していることで周囲にざわめきが満ちる。

「（お兄ちゃん…なんか周りの視線がすごいんやけど）」

「あ～…このままここにいるのもなんだな…倉田くん、また後でな」

「ああ。そういや今日は生徒会役員の選挙があるとか？」

「ああ…」

それだけ言い残して昌彰はゆらを連れて周囲からの視線を避けるようにさっさと昇降口に消えた。

†††††

（あいつが玉章の言ってた術者か…）

犬神はその身に浮世絵中の制服を纏い、中庭からその様子を見てい

た。

（陰陽師のくせに妖怪とくっちゃべってるなんざ変わった奴ぜよ…それと…）

そうして犬神は校舎へと視線を上げる。

（奴良リクオ…ぬらりひょんの孫。お前も学校に通っているんだな）

リクオの様子に犬神は自らの学校を、玉章と出会った時のことを思い出す。

（あいつは…人間の中でさえも目立つ存在だった。力でねじ伏せ…人間さえも支配した）

犬神はリクオが普通に人間の中に溶け込んでいるのに微かな苛立ちを覚えた。

自らは望んでも得られなかった日常を羨むかのように…

「……ムカつくぜよ…奴良リクオ…」

†††††

「実力テストの結果を返すぞー」

安達先生から転校直後に行われた実力テストの結果が返される。

もっとも昌彰は既に結果は知っているのだが…

「安藤くん！何点だったの？」

昌彰が校内でぶっちぎりの一位を獲ったということは既に周知の事実となっているため、クラスメイトの関心は何点だったかということに傾いていた。

「……」

昌彰は記された点数に自分でも少し動揺していた。

「ねぇ昌彰くん！！」

固まっている昌彰にしびれを切らしたのか武藤が結果の用紙を奪い取った。

「あ！待てって！」

昌彰は焦って取り戻そうとするが一瞬早くクラスメイトの視線に結果が晒される。

「…四百九十二点？４９２…？」

晒された点数にクラスメイトも思わず固まった。

「ちなみに五教科で五百点満点だぞ～」

安達先生だけがニヤニヤと笑いながら楽しそうにその様子を眺めている。

「うそぉ！？」

「マジかよ？」

「て言うかそれだとほぼ満点じゃない！？」

「すげぇ…」

ちなみに全国順位は四十八位だったりするのがわかってさらにクラスに興奮の輪が広がるのだった。

†††††

昼休み・中庭

昌彰とゆらは並んで昼食を取っていた。

午後からは生徒会役員選挙があるので昼休みが普通より少し長いのだ。

「ふぅ…まさかあれほどとはね…」

『当然だ。我が教えたのだからそれくらいは取ってもらわねば困るぞ？』

昌彰の学業の担当である玄武はさも当然であるというように頷いた。

ちなみに他の人間には見えない程度に顕現している。

「さすがやねお兄ちゃん。うちはそんなによくはなかったけど…」

そういうゆらも昌彰にたまに勉強を見てもらっているためか、四百五十八点をとっているのだから大したものである。

「ん？そういやゆら、制服どうしたんだ？」

『私が繕っておきました』

昨日ボロボロだったろ？という昌彰に天后が顕現して答える。

「繕ったって…よく直せたな」

『十二神将を甘く見てもらっては困りますよ？』

一見すると繕った跡すら見受けられない針仕事に昌彰は感嘆の声を上げた。

『今度から裁縫の手習いも始めましょうか？』

羨ましそうに見てくるゆらに天后はそう提案する。

当然ゆらは首を縦に振った。

「それよりも時間大丈夫なん？」

「ああ、まだ大丈夫だ。俺は実際になんかするわけじゃないし」

時間を気にするゆらにそう言って昌彰は昼食のパンをかじった。

普段なら弁当を用意するところだが、昨夜から袖モギを追っていたり、鳥居の見舞いに行ったりで時間と余力が残っていなかったから

だ。

「ファ…ッ…」

「昨日…寝てへんの？」

あくびをかみ殺す昌彰にゆらが心配そうな視線を向ける。

「ん…ちょっと手こずってな…」

「少し…寝る？」

眠そうに瞼を擦る昌彰にゆらは自らの膝を示して見せた。

「っ！…ゆら…非常に魅力的な提案なんだがな…」

場所は中庭。当然他の生徒もいるし、校舎からも丸見えだ。

「あ…」

ゆらもそれに気づいたのか羞恥で顔を真っ赤に染めた。

「…でもそうだな…眠いのも確かだし…」

沈黙と眠気に耐えられなくなったのか昌彰は頭をゆらの肩に預けた。

昌彰の方がかなり背が高いのでかなり不自然な格好になるが…

「ふぇっ？！」

「おやすみ…五分前になったら起こして…」

そう言って昌彰は睡魔に意識を委ねた。

「…お兄ちゃん？」

すぅ…すぅ…と規則正しい寝息が聞こえてくる。

「もう寝てしもた…随分と無理しとったんやな…」

そう言ってゆらは昌彰の頭を撫でる。

「は…むぅ…うちも少し寝よかな…」

実のところゆらも昨日は昌彰が出ていってからしばらくは眠っていたものの、気になって途中からずっと起きていたのだ。

だから昌彰ほどではないにしろ寝不足なのである。

「天后…おる？」

『はい、ゆら様』

ゆらの呼びかけで天后がゆらや昌彰だけに見える程度に顕現する。

「時間になったら起こして…確か一時からやったと思うから、少し前くらいに」

『かしこまりました』

それだけ言って天后は再び隠形した。

「おやすみ…お疲れ様、お兄ちゃん」

†††††

（けっ…仲のいいこった…）

犬神は屋上から昌彰とゆらが寄り添って眠っているのを見下ろしていた。

式神―玄武と天后―が警護しているので、迂闊に手を出すわけにもいかず、まだ見ているだけであるが…

（こっちは別の女かよ…見せつけてくれるねぇ…どっちも…）

犬神が視線を向けた先にはリクオが雪女と共に弁当を食べていた。

若干氷を齧るような音が聞こえているが…

じわじわと犬神の中に怒り、妬み、恨み、憎しみ…様々な負の情念が満ちていく。

犬神は暴れそうになる妖気を必死で抑えた。

（まだぜよ…まだ早い…）

ここで気づかれてしまってはまずい。まだ恨みを溜めろ…犬神はそう自分に言い聞かせる。

（仕留めるなら…二人いっぺんにぜよ…）

そう思い、再び中庭へ視線を下ろす。

未だに静かに眠っている昌彰とゆらの姿が目に映った。

「おや…若。生徒達が体育館に移動していますよ」

校庭の方を眺めていた河童がそうリクオに告げる。

「えぇ!?…あっ!しまった!!」

そう言ってリクオは慌てて立ちあがる。

「今日は一時から生徒会選挙演説の応援があったんだ!!」

「あ、そう言えば青もそんなことを言ってましたね」

氷麗としては何故青田坊がそれを知っているのか疑問は残るが…

「行くよ氷麗!」

「はいっ!」

リクオに連れられて氷麗は屋上を後にしようとした。

(さぼれよ。そんなくだらない行事…なんで進んで人間の輪に加わろうとする…妖怪だろ…?)

ゾクッ…

氷麗は背筋に寒気を感じて足を止めた。

（ハブられる…モンだろ…？）

何らかの気配を感じて振り返る。

しかしそこには何もいなかった。

†††††

――――

『お兄…ちゃん…』

強大な力を持つ何かの前にゆらが立っている。

『ゆらっ！』

昌彰は必死で駆けた。だが…届かない。

伸ばしたその手も、放った術も…

『消えろ…力無き者よ…』

その何かは手に持った禍々しいまでの妖気を放つ刀を振り上げ…

『ゆらぁっ！？』

無情にもその刀はゆら目掛けて振り下ろされた。

――――

「お兄ちゃん？どないしたん？」

「っ…いや、何でもない」

昌彰はそう言って先程の悪夢の余韻を振り切るように頭を振った。

「大丈夫？さっき起きてからなんか様子がおかしいけど？」

そう言ってゆらは昌彰の顔を覗きこむ。

「いや…ちょっと夢見が悪かっただけだ…気にしなくていい…」

そう言いながら昌彰は全く逆のことを考えていた。

陰陽師のみる夢はただの夢ではない。時として予言・予知となりうるのだ。

「先に行く。天后、玄武、ゆらを頼む」

『かしこまりました』『承知した』

天后と玄武がゆらの背後に控えている。

万が一なにかあっても大丈夫だろう。

「頑張ってね！お兄ちゃん！」

そうゆらは演説に向かう昌彰にエールを送った。

「ああ」

昌彰は後ろ手に手を振って体育館に向かう。

『何を見た昌彰？』

「朱雀か…」

体育館への道すがら朱雀が問いかけてくる。

敢えてゆらと離れるまで待っていてくれたのだろう。

「……」

『昌彰？』

沈黙する昌彰に朱雀は首を傾げる。

「…届かなかった…」

『え？』

「…この手も…術も。ゆらを助けるのに届かなかったんだ…」

『……』

悲痛なその声に朱雀は沈黙するしかない。かつて自分もその状況を味わった身として、その恐怖は骨身にしみているからだ。

「ただの夢ならそれで…っ！？」

『妖気！？』

昌彰は努めて明るく振る舞おうとしたが、その矢先に微かではあるが妖気を感じ取って身を固くした。

「この感じ…まさか体育館にいるのか？」

今体育館には全校生徒五百人が集まっている。その中に紛れこまれては…

「朱雀、ゆらについていてくれ。それと下手に動くな。生徒が巻き添えになる」

『承知』

朱雀はそれだけ言って隠形した。それと同時に体育館から感じていた妖気も消失する。

「…消えたか…」

昌彰はそう呟いて紛れこんだ妖怪を探すのを諦め、舞台袖にいるであろうリクオと合流すべく足を進めた。

†††††

「若！逃げてください！ここは我らにまかせて！！」

舞台袖にはリクオと護衛が全員集結していた。

「それはできないよ。狙っているのはボクじゃなくて…人間の方かもしれない！」

「今回は違います！！」

この前だってそうだったというリクオに首無しは思わず声を荒げた。

「奴らの目的はリクオ様の命なんです！！」

「でもやつらは生徒全員だって殺せる！！」

リクオも負けじと言い返す。

「こんなところに白昼堂々出てくる妖怪がそれをしないとは限らないじゃないか！！」

「…リクオ様…学校のみんなのことは…あの陰陽師に任せたらいいかがでしょう？」

氷麗はリクオが何故わざわざ学校にくるのか疑問に思っていたが、やはり学校の友人を守るためだと気づいてそう提案する。

「なっ！？」

その提案に河童や毛倡妓、首無しは驚いて一瞬固まった。

「今はダメだ。こっちの都合で勝手に押しつけるようなことはしたくない。それに…」

「リクオ様ご理解ください！！あなたは今、ただの人間なんです」

首無しのその言葉に場が一気に鎮まった。

「闇の中では――秘めた力を発揮できても今は無力。だからこそ我らが護衛についているのです」

「首無し…おい」

らしくない言いように青田坊が声をかけるが首無しは無視して続ける。

「我々は奴良組の妖怪。決して逃げ腰になっているわけではないことをご理解いただきたい！！」

首無しの後には誰も言葉を発せず、痛いほどの沈黙が支配した。

「…自覚はあるよ。だからお前たちに守ってもらうしかない」

沈黙を破ったのはリクオ。だが、その言葉は先程と違い、静かなものだった。

「だから首無し…ぼくの言うとおりにボクを守れ！！」

「……若？」

リクオの言った意味を測りかねて首無しはリクオを見つめた。

「ほらみんなもボーっとしないで！！」

そう言ってリクオは雪女たちを急きたてた。

†††††

（どうした…奴良リクオ…その扉のむこうにかくれて…）

犬神は他の生徒に紛れて体育館の中心からやや前の方に座っていた。

他の立候補者やその応援演説がなされているが犬神にはそれらは全て雑音にしか聞こえない。

（逃げたな…ここにいる全員より自分の命の方が大切か…）

犬神は一向に姿を見せないリクオに苛立ちを覚える。

（ヌクヌクと坊ちゃん育ち。お前はそれだけの器だったってことだ。護衛に守られていい身分だぜ）

†††††

「っと、設定ナンバーは…」

昌彰は自らに暗視の術をかけ、暗闇の中で作業していた。

本体に設定ナンバーを打ちこみ、手元の機械のスイッチを入れる。

「感あり。電池切れとかはシャレにならないからな…」

正常に作動していることを確認した昌彰はその機械を部屋の外で待っている人物に手渡した。

「後は切り替えのタイミングだけだ…うまくやってくれよ」

†††††

“続きまして会長候補　一年三組…”

今回の選挙の目玉である人物の演説に周囲にざわめきが広がっていく。

それと同時に暗幕が引かれ、闇が体育館を覆った。

“スクリーンにご注目ください”

照明の落とされた壇上に無駄に豪華な一室が映し出された。

『マドモアゼルジュテーム』

「キター！！き、き、清継くんだーーー！！」

『そーです、清継です！！』

返事をした清継に会場全体がどよめく。

『全員配置ついた？』

全校生徒の驚愕の声が轟く中、氷麗を始め奴良組の妖怪たちは闇に乗じて、囲むような配置を取った。

「リクオ様の言うとおり…真っ暗になったわ」

この暗闇では人間は見えないだろうが妖怪には逆にやりやすい。
相手が妖気を放てば一発でわかる。
出たら闇を利用して全員で取り押さえるのがこちらの策。
†††††
（…なんだこの茶番は？人間てのは下らなさすぎる）
『おっともうタイムリミッツだ。ちょっと心もとないが…応援演説は君に頼んだ！！』
清継がそう言うと舞台に照明が戻った。
スポットライトに照らしだされるのはいつもと変わらないリクオの姿。
（逃げたんじゃなかったのか…？妖怪のお前がそこで何をする？）
微かにノイズが混じった後、リクオは話し始めた。
「あ、えー…ボクの名前は…奴良リクオです」
その言葉と共に清継の時を上回るどよめきが体育館を震わせた。
「オレあいつ知ってるー！！」
「この前グランド草むしりしてくれた奴だろー！？」

「いつもゴミ捨てしてくれる奴だ！」

全校生徒から歓声が湧き上がる。

（なぜ…妖怪のお前が人から歓声を受ける…？）

犬神には理解できなかった。人間ではないはずのリクオが人間から喝采を浴びるのか。

（オレは罵声しか知らない…妖怪が浴びるべき言葉をあびた…）

犬神の身体から抑えきれない妖気があふれ出る。

（人間が…恨めしい）

†††††

「（な…なんや…？急に妖気が…）天后…」

『はい…確かに…複数ですね…。昌彰様からはパニックになるかもしれないから下手に動くな、と…』

ゆらと天后も犬神や雪女達が発した妖気を感じ取っていた。

続いて歓声に紛れて、怒声や悲鳴が混じるのも。

「お兄ちゃんは！？」

『先程朱雀がこちらへ来ました。おそらく既に気づいておられるか

と…なっ！？』

「えっ！？」

人より優れた視力を持つ天后が見たのは首だけとなって壇上へと飛んでいく犬神の姿だった。

†††††

「見つけたよ！青！」

毛倡妓は中央少し前にいる妖気を放っている犬神を発見した。

「おお！！」

即座に青田坊が抑えにかかる。

「キャア」「えっ！？」「何っ…」

いきなりの出来事で周りが騒ぎだすが、それらも歓声の渦に呑まれ、さほど大きな混乱は起きなかった。

「く…（何故…何故だ？…オレは…オレは…）」

「ムダだ！てめぇはもう何もできねぇ！あん時の舌野郎じゃねーか！」

青田坊ががっちりともがく犬神を抑え込む。

（お前みたいになりたかった――）

恨み、憎しみ、リクオに対するそれらの負の情念が犬神を駆りたてる。

ググッ…ビシ…ビシッ！

肉がちぎれるような音を立てて、犬神の首が飛んだ。

「ハッ!?」

慌てて青田坊は手の中の犬神の身体を見る。

だが、そこには首のない身体が残るのみ。

「く…首が…」

鮮血を撒き散らして犬神の首はリクオへと迫る。

「（ニクラシイ…殺シタイ…ニクラシイ）喰い殺してやるぜよ奴良リクオォォオ!!」

犬神はその牙をリクオの喉笛に突き立てた。

「え!?」「若!!」「リクオ様!!」

「ガハッ…ガッ」

スピーカーからリクオのもがくような声が聞こえる。

「キャァアッ!?」「何だ…!?犬?」

同じ壇上にいた他の立候補者達がリクオに飛びかかった者の正体に気づいて悲鳴を上げた。

†††††

（犬神とは呪いの呪法。この犬神は術を失敗した者のなれの果て…か）

昌彰は犬神がリクオに食らいつくのを舞台袖の暗闇から見ていた。

「（今なら…）」

そう言って今にも飛びだそうとする人影を昌彰は抑えた。

「（まだ待て。他の生徒が壇上にいる。それに確実に隙ができる…その瞬間を狙って仕留める）」

さすがに状況がおかしいと思ったのだろう。

体育館内に今までとは違うざわめきが起きる。

「奴良リクオ～てめぇの首は…俺が取ってやるよ～」

犬神はさらに牙を突き立てた。

「うわあああああ！！」

スピーカーを通して、リクオの叫びは体育館に響き渡る。

その尋常でない叫びに壇上にいた他の立候補者は咄嗟にその場から離れた。

「オレと同じで人間から逃げてるくせによー！！なんで好かれてんだよ！！」

わけわかんねぇ！と叫んで犬神はリクオの首を噛みちぎった。

頸動脈から噴き上がる血飛沫が壇上を鮮やかに染め上げる…はずだった。

（なん…だと…？）

噛み裂いたはずの手ごたえがまるでないことを犬神は訝しんだ。

それどころか、食いちぎった首も、残された胴体もない。

ただそこには一枚の人形があるだけ…

（まさか！？）

「やはり若を狙っていたな…」

その声に犬神は顔を上げ、噛みつこうとしたが、頭上からヒモで口ごと縛りあげられていることに気づく。

ステージ上の釣り棒には首無しの首が浮いていた。

「首が飛ぶか…予想通りだな」

昌彰はそう言いながら舞台袖から姿を現す。

「てめぇは！？」

「やれ！リクオ！」

犬神が驚愕に目を見開いた瞬間、昌彰の後ろから祢々切丸を携えたリクオが飛び出してきた。

（！？やっぱり入れ替わってやがったか！！）

第十六夜　犬神襲来　～選挙演説の闇～（前編）（後書き）

琥珀「皆様ＧＷいかがお過ごしでしょうか？」

昌彰「もう半分を過ぎようとしているがな…？」

琥珀「自分はとくに何もなく普通に過ごしているわけなんですが…」

昌彰「ならさっさと執筆活動をやれ！」

琥珀「やってるよ。だからまた…」

昌彰「また前後編になった…か？」

琥珀「伏線も埋めたりもしたからね…」

昌彰「かなりあからさまな伏線だと思うんだが…」

琥珀「次の最終決戦の際の伏線だからね。すぐに回収するよ」

昌彰「で？後編はいつになる」

琥珀「とりあえず来週までには…」

昌彰「ん？前は『連休明けには四国編を終わらせたい』とか言っていた気がするが…？」

琥珀「実家に帰省してると資料が…ね？」

昌彰「持って帰れなかったわけね？」

琥珀「なんとか原作は持って帰ってこれたんだけど…」

昌彰「その他は下宿に置き去りか…」

琥珀「五日には戻るからそれからペースが上がればいいんだけど…」

昌彰「前回も言ったが読者の皆様を待たせるなよ？」

琥珀「それはもう…はい。それでは皆様、有意義な連休をお過ごしくださいませ」

第十七夜　犬神襲来　～選挙演説の闇～（後編）（前書き）

遅くなって申し訳ありません！
前後編にしておきながらこの始末・・・
本当にすみません！

第十七夜　犬神襲来　～選挙演説の闇～（後編）

†††††

――――

「わかりました若。でもその作戦では不十分です。私に考えがあります」

首無しはそう言って自らが身代わりとなって囮役を引き受けると申し出た。

「だけどそれじゃ首無しが危ないじゃないか！」

「若、あなたがやるよりもはるかに安全です！」

「確かにそうだが…もう一段安全な策があるとしたらそっちを取るだろ？」

その言葉と共に扉があき、舞台袖の方から昌彰が戻って来た。

「昌彰さん！？」

「…陰陽師…何か策があるのか？」

首無しはやや警戒したような視線を向ける。

「ああ、形代…いやこの場合は式か…それを身代わりにする」

そう言って昌彰は懐から人形（ひとがた）を取り出した。

「この符に名前と歳を書いて三度息を吹きかけろ。それで形代ができる」

昌彰は人形を筆ペンと一緒にリクオに差し出した。

――――

（さすがに声までは出せないからな…）

そう昌彰が背後の舞台袖を振り返る。そこには電源が入れられたままのピンマイクが置かれていた。

リクオの姿をした式を壇上に向かわせると同時に、ピンマイクに配線を切り替えたがうまく誤魔化せたようだ。

「やれ！リクオ！」

天井付近に潜ませた首無しのヒモに縛られ、身動きを封じたところでリクオが止めを刺す。

これで確実に仕留められるはずだった。

†††††

「（クソが…小賢しいマネを…）うおお！」

犬神は絡みついた糸を解こうともがくが糸はますますきつく締めあげる。

「無駄だよ。ボクのヒモは…逃げれば逃げるほど絡みつく」

毛倡妓の一度好きになったら離れない性格と絡新婦（じょろうぐも）の束縛癖が合わさった糸だからねと、首無しは犬神に笑いかける。

（なんだよこいつはリクオの部下か？）

犬神は憎悪をこめて首無しを睨みつける。

「やれ！リクオ！」

舞台袖からその声が聞こえ、犬神はそちらを振り向いた。

ちょうどリクオが昌彰の背後から飛び出してくるところだった。

（奴良リクオ…陰陽師…！）

犬神の奥底で何かが震えた。

それは遙か昔に生まれた犬神の先祖。

呪いの法の失敗のなれの果て。犬神という妖怪を生んだのは未熟なる術者の失敗…

（お前が…お前らみたいな術者がいなければ…俺みたいな歪んだ存在は生まれなかったんだ！！）

犬神の内で首をもたげた術者に対する恨み、憎しみ。

その憎悪の念を受けて、犬神の身体から妖気が膨れ上がる。

「っ！何だ？」

リクオも昌彰も、首無しを始めとした護衛の妖怪も思わずそちらをかえりみる。

それほどの妖気。

「うおお！？こりゃ…なんじゃーー！？」

犬神の身体を抑え込んでいた青田坊が叫ぶ。

犬神は妖怪としての本性を解放した。

「えっ」「何？」「うあああ」「な…なんだぁー！？」

†††††

「っ！奴良くん！？」

ゆらは慌ててステージの方へ走りだそうとした。

何が起きたかは分からないが、あれほど妖気が発せられているのだ。

ただ事ではない。

『ゆら様』

「なして止めるんや天后！？」

『落ちつけ。ゆら、あれは昌彰の式だ。罠を仕掛けていたようだな』

肩に手をかけた天后を振りほどこうとするゆらに玄武は落ちつくように声をかける。

「でも…」

『既に相手は昌彰が捕らえた。下手に動くな』

朱雀もそう言ってゆらを止める。

その背に大剣を顕現させているが、さほど危機感を持っているようには見えない。

『ですから…！』『む…』『なんだと…？』

「え…？（…なんやこの妖気…でかすぎる――ありえへん…やろ？）」

ゆらと神将達が目にしたもの。それは変貌した犬神の、巨大な姿だった。

†††††

「く…首が戻った…」

「なんなんだ…こいつ…」

犬神のあまりの変貌にリクオの護衛の妖怪も絶句するしかない。

「グァァアア！！」

犬神はその爪を振り上げる。目の前にいるのは、リクオに…昌彰。

「まずい…リクオ様を狙っている！リクオ様！逃げてくださ…」

ゴアッ！！

「『禁』っ！……がっ…く…」

刀印で真一文字に引いた線から、不可視の障壁が立ちあがり、爪を食い止める。

犬神がその爪を振り下ろしたのは昌彰だった。

「そのまま抑えていな…昌彰」

その言葉と共に犬神の右前脚が真っ二つに切り開かれる。

「陽は閉ざされた…この闇は幕引きの合図だ…」

祢々切丸を携えてその場に立つのは、闇に映える緋色の瞳と白い髪を持つ夜のリクオ。

†††††

「なんだーあいつは…」「突然出てきたぞ！？」

いきなりのリクオの登場に周囲の生徒がさらに混乱する。

しかし、清継の演出が過剰であったため、あくまで演出であると思われているのが救いか…

（妖怪同士の争い…それにあいつは…）

巨大な体躯をもつ犬神と壇上で対峙する昌彰と夜リクオ。

（お兄ちゃん…？一体…どうして…？）

ゆらは昌彰が妖怪の総大将と共闘するように並んでいることに動揺した。

――――

「えっ！？（昌彰さん？それに…あの方も…）まさか本物の…」

カナも異変に気付き、前に行こうとしていた。

しかし、昌彰に続いて夜リクオが現れたことで本物の妖怪であることを確信したのか足を止めた。

（でも、さっきまでいたのはリクオくんで…）

カナもまた混乱に囚われ、事態を見守ることしかできない。

†††††

「ナンダ…誰ダオマエ…」

犬神はいきなり現れた夜のリクオに訝しげな視線をむける。

「学校でこんな姿になるつもりはなかったがな…」

ゆっくりとリクオは前に進み出る。

「とっとと舞台から降りてもらうぜ。オレもお前も…ここには似つかわしくねぇ役者だ」

その言葉と共に一歩を踏み出したリクオの姿がかき消える。

「グガァァア！！」

次の瞬間に、犬神は鼻先から眉間にかけてを切り裂かれた。

それでも左前脚を背後に現れたリクオへと振りかざす。

リクオもそのままではやられない。

三角飛びの要領で壁を蹴り、祢々切丸を突き立てる。

左前脚を切り裂いたリクオは犬神の鼻づらに着地する。

そのまま犬神の顔面を斬りつけようとするが左から迫って来る爪に気づいて飛び退いた。

その腕を足場に跳躍しようとするが毛皮に足をとられ、身体が流されてしまう。

「チッ…」

ドガァッ！！

空中で回避さえ不能なリクオに犬神の尻尾が叩きこまれる。

「『吹き来る風、白刃のごとく』！」

「ゴォォァアアッ！！」

昌彰の放った風神の刃が、リクオを追撃しようとした犬神の横っぱらを切り裂いた。

「遅ぇんだよ昌彰…」

そう言ってリクオは左目に垂れてきた血を拭いとる。

「巻き込んでもいいのならそうしたぞ？」

人間離れした速さで立ち回るリクオと犬神の戦いに術のみで介入するには些か無理がある。

「ハッ…」

そう零してリクオはゆっくりと立ち上がり、その双眸が犬神を射抜く。

ゾワッ…ゾクッゾクゥゥ！

（ナンダコイツ…）

犬神は背中に冷たいものが落ちるのを自覚した。

「う…うおおぉおおっ！」

その予感を吹き払うように犬神は右前脚を振りかぶる。

“出たな！！妖怪！！”

「！？」

いきなりの出来事に犬神は動きを止めた。

「清継だ！！」「映像が復活した！？」

（清継の仕込み…ここでか…）

混乱していた体育館内がこの映像で収束していく。

“このボク…清継ふんする『陰陽の美剣士』が来たからには…”

（なんだこの茶番は…？）

犬神は身体を駆け巡る悪寒を振り払うようにスクリーンに対して爪を振りかざす。

「『縛縛縛、不動縛』！」

霊力の鎖が犬神を縫いとめる。

（ここでスクリーンを壊されたら演出じゃないとばれる！）

清継の芝居に乗るのは癪だが、パニックを抑えるのに一役買っているのは事実。

ぶち壊しにするわけにはいかない。

「ガッグゥ…ッ」

“よみおくりスノーダスト退ＭＡＸ――――！！（島くんうまく）くらえ――――！！”

鎖から逃れようともがく犬神に清継の上手いのか下手なのかよくわからないネーミングの必殺技が炸裂する。

スクリーン上で派手なＣＧが展開されると同時にステージ上にいる犬神が凍りついた。

「今です若！」「犬の動きは止めました」

首無しの糸で縛りあげられ、氷麗の息吹で凍りつかせたのだ。

「やれ！リクオ！」

完全に身動きがとれない犬神へとリクオは跳躍する。

「つらら…この雪…ちょっとやりすぎだぜ」

「リクオォオオォ！！！」

ダイヤモンドダストが舞う中、リクオの刃が、祢々切丸が犬神を切り裂いた。

パキ…パキャッパキンッ！

犬神を覆っていた氷が砕け散る。

ズズズ……ズゥゥゥゥゥウン！！

右の肩口から胸部にかけて切り裂かれた犬神は氷の破片を撒き散らして崩れ落ちた。

冷気を孕んだ風が壇上から吹きすさぶ。

「すげぇ…」「何なんだよこのステージ…」

生徒達から驚いたような、呆れたような呟きが漏れる。

「若！！」「待て！」

氷麗がリクオが無事なのを認め駆け寄って来ようとしたがリクオが鋭くそれを制した。

「まだ…生きているみたいだな…」

昌彰の言葉と共に氷の残骸の中に身体のあちこちを斬られ、血だらけの人間形態の犬神がいた。

「へ…やりやがったな…？ぬらりひょんの孫…陰陽師ィ…」

そう呻きながら犬神はリクオと昌彰を睨みつける。

「テメーらはもうしまいじゃー！！オレがどういう妖怪か知らずに攻撃しやがった！！」

ヒャハハハハハと狂ったように笑い続ける犬神。

「オレは“恨めば恨む程…強くなる妖怪”なんぜよ…（いけよ…おかしいな…）」

しかし叫びながらも内心では疑問を浮かべていた。

普段なら確実に首が飛び、変化をしているはず。

「オラッ！飛べよ首がっ！！なんで変化しねぇ！？」

だが、いつまでたっても何も起こらない。

「『オン、ビンビシカラカラシバリソワカ…』」

静かな真言が壇上に響いた。それを受けて犬神は身を捩る。

「グッ…ガッ…何しやがった…陰陽師…」

身体を直接的に抑え込まれているわけではない。

“犬神”という妖怪の根本を為すものを抑えられているのだ。

（陰陽術のもたらした負の遺産…今ここで清算する！）

妖怪を滅するだけが陰陽師ではない。星を読み、未来（さき）を占う。

そして、呪いを操る。これもまた陰陽師だ。

生かすための術を自在に操るためには、殺すための術もしっておかなければならない。

安藤家はその歴史の中で帝に仇なす敵を呪詛で葬ったこともある。

降りかかって来た火の粉を呪詛返しで焼き払った者の数など公式記録に残っているだけでも数えきれるほどではない。

「テメェ…テメーらみたいな術者がいるから！！」

犬神は必死でもがく。しかし、昌彰の呪文が響くごとに力が抑えられ、消えていく。

（たしかにそうだ…だが）

人を呪わば穴二つという。死に至るほど激しい呪いは必ず我が身に跳ね返る。

呪った相手のものだけでなく自分のための墓穴も必要になるということだ。

だが、陰陽師にはその定義は当てはまらない。

陰陽師は呪詛を返す術を心得ているからだ。

だから彼らは呪詛に関わる時に意思を揺らがせてはならない。

彼らが揺らげばその累は縁者にも及ぶのだ。

「『ナウマクサンマンダバサラダ…』」

結んだ印は一両手の指を内側に握り込んだ一内縛印。

犬神を“犬神”たらしめている根本、太古に生まれた“犬神”を封じるための縛魔術。

「何をしやが…る…ヤメ…ロ…」

「『センダマシャダソワタヤウン、タラタカ…』」

昌彰はただ静かに詠唱を続ける。

バササッ！！

縛魔術が完成する直前。黒い羽を持つ新たな妖怪が壇上に舞い降りた。

「！？」

『昌彰！』

朱雀の神気が昌彰の頭上に現れた夜雀を弾き飛ばす。

その煽りを受けて、昌彰も思わず印を崩し、その身を庇った。

「よ、夜雀ぇえ！？」

ガシャァアンッ！！　パリィィン！

朱雀の神気を避けた夜雀の薙刀の一閃がステージの照明を破壊する。

「なんだ…何しやがった夜雀ぇ！なんでてめーがここに…これから殺るとこなのによー！！」

不完全ながらも縛魔の秘術を受けたためか、ふらつきながら犬神は立ち上がった。

「失敗したんだね…バカな犬神…」

「玉章…！？」

その背後に夜雀の造った闇から玉章が現れた。

「残念だよ。君の能力は…人を呪い恨み強くなる。なのに…君は恨む相手を畏れてしまったようだ」

そう言って玉章は犬神の肩に手をかける。

「…力そのものも封じられてしまったようだね…」

玉章は視線を昌彰に向けた。

その視線を遮るように朱雀が昌彰を庇う。

「何言ってんだ？玉章…オレを認めてくれたのはお前じゃねぇか！なぁ！オレはまだやれる！！」

「いや…もう…終わりだ」

玉章の冷たい声音が犬神に突き刺さる。

「玉章…」

「散れ…カス犬」

プロジェクターが放つ光に犬神が木の葉となって散っていく。

「っ！貴様！！」

「お前…今その犬を…」

時間どおりに作動したプロジェクターは三人の影を舞台に色濃く映し出していた。

「おや、奴良リクオくん…久しぶりだね…それと…そこの陰陽師」

朱雀はプロジェクターが作動すると同時に隠形していた。姿を衆目にさらすわけにはいかない。

「まさか君がそんな立派な……姿になるとはね。君をどうやらみくびっていたようだ」

玉章はリクオを見ながらそう言った。

「そして…キミがそんなに甘いとはね…」

そう言って今度は昌彰に視線を向けた。

「ふふ…君達は本当におもしろい。闇に純粋に通ずる魔道――そして、神にも魔にも等しく通ずる陰陽師…」

ブワリと玉章の畏が渦巻く。

「今の君達にならボクが名乗るにふさわしい…だけどこんな姿じゃ説得力がないね」

渦巻く妖気に木の葉が舞う。

「ボクは四国八十八鬼夜行を束ねる者。そして八百八狸の長を父に持つ者…妖怪・隠神刑部狸。名を――玉章」

そこに姿を現したのは面をつけた歌舞伎役者のような衣装を身に纏った妖怪。

「君の“畏”を奪い、ボクの――八十八鬼夜行の後ろに並ばせてやろう――そして陰陽師…キミも式神も…ボクに従わせてみせる」

「…それはこっちのセリフだぜ…豆狸」

「誰に従うかは俺自身が決める。…貴様はその器たりえない」

リクオと昌彰は真っ向から玉章へと戦う意思叩きつける。

「フ…それでは…さらばなり。また会おう」

それだけ言い残して玉章の姿は闇に溶けるようにして消えていった。

「…芝居がかった狸だ…」

「怪我人は出なかったようだな…（あいつ以外は…）」

犬神が破壊し、落下させた天井の破片。それらは玄武と天后が結界をうまく用いて弾いてくれていたらしい。

「若…」「リクオ様…」

氷麗と首無しがリクオに駆けよろうとした。

「早く消えるぞ。終幕だ」

そう言ってリクオは踵を返した。

「確かに…」

昌彰のその言葉と同時にスクリーンのむこうから何かが飛びだして来た。

「妖・怪・退・散―！！」

バババンッと効果音がつきそうなほど大見得を切って清継が登場した。

「ボクにまかせれば万事ＯＫ！！生徒会長には企画力！演出力！そして実行力のこの清継へ清き一票を――！！」

完全に体育館を沈黙が支配した。あまりの展開にみなついていけてないのだ。

その隙にリクオや昌彰達は舞台袖に引きさがった。

「おおおお――――!?」「やっぱ清継の演出かよ――――!!」「ありえねぇ――」「でもすげー!!」

一拍遅れて体育館には興奮した絶叫が満ちた。

†††††

「フッ…うまくいったようだな…」

防音扉越しでさえ聞こえる熱狂にリクオは微かに笑みをこぼした。

「リクオ…これからどうするつもりだ?」

昌彰はリクオに問いかける。

ゆらだけでない。学校の友人達も被害にあいかけた。

これ以上不干渉を貫くことはできない。

「間違いなく戦になるだろう。それもかなりの規模だ…」

百鬼夜行と八十八鬼夜行。正面からぶつかり合えば確実に大規模な戦闘になる。

「そうか…なら…」

そう言って昌彰はリクオへと刀印を突き付けた。

「今君を殺せばこの戦いは起きずにすむかもしれない」

「貴様！」

それを受けて河童と毛倡妓が間に割って入ろうと動いた。

「らしくない真似はやめたらどうだ？昌彰…」

「何？」

それに対してもリクオは静かに告げた。

「お前に俺は殺せねぇ。お前は以前言ったよな？害意のないものは討たないと。これは俺達妖怪同士の戦だ…お前は手を出すんじゃねえ」

そう言ってリクオはカーテンを開ける。

「！」

暗闇に慣れた昌彰の目にとって、外の光は閃光の爆発にも匹敵した。

「ゴメン、昌彰くん。でも今はまだ君を巻き込みたくはないんだ…行くよ皆」

そう言い残して昼の姿に戻ったリクオは控室を出ていった。

河童や毛倡妓、黒田坊に青田坊もそれに続く。

「…甘いな、リクオ…首無し。一つ伝言を頼まれてくれないか？」

昌彰は最後に出ようとした首無しを呼びとめた。

「何だ？」

「お前に免じて静観させてもらう。だが、人間に被害が及ぶようなら躊躇わずに介入するぞ、と」

「わかった、伝えておこう」

そう言って首無しもリクオの後を追おうとした。その背に昌彰の言葉が投げかけられる。

「それと…うっかり間違えて俺の式神を殺すなよ」

「…それは…「それだけだ…あとは好きにしてくれ」…わかった」

思わず振り向いた首無しだが、昌彰は既に背を向けていた。

“次は副会長候補。二年一組、安藤昌彰くんお願いします”

アナウンスが流れ、昌彰は先程戦場となった壇上へと上がった。

第十七夜　犬神襲来　～選挙演説の闇～（後編）（後書き）

琥珀「読者の皆様遅くなって申し訳ありません！！（土下座）」

昌彰「有罪確定…一応申し開きを聞いておこうか？」

琥珀「実は…実家にＰＣの電源コードを忘れちゃってさ…」

昌彰「『疾ッ』！」

放たれるは地獄の業火…泰山府君炎羅符呪。

琥珀「うぉっ！？ちょっと待った！なにその術！？小説の元ネタ違うじゃん！！」

昌彰「（どうせ出すつもりだろうが…）つまりはたんなるドジというわけか？」

琥珀「ううう…ホントにそうです。これぱっかりは謝るしかないです（土下座）」

昌彰「ハァ…読者の皆様。このボケ作者は後でよ～く言い聞かせておきますので見逃してやってください。で？次が最終決戦か？」

琥珀「うん。一応…また長くなるかもしれないけど…」

昌彰「早くしろよ？連休明けには四国編を終わらせたかったんだろうが？」

琥珀「うん…そうしないと六月の頭に中間考査が控えてるからね…そろそろ勉強しなくちゃ…」

昌彰「お前はホント試験ネタをひっぱるのな…また更新速度が落ちるのか？」

琥珀「書きたいけど…試験は大事だよ？再試とか食らうと悲惨だよ？」

昌彰「はいはい…単行本十六巻も出たというのに…それに関しては何もないのか？」

琥珀「ん～…鵺さんあそこで退くのかよ！？とは思ったよ。これはアレかな？おとなの事情ってヤツかな？」

昌彰「はいはい。で、原作は京都編まで終了して…こっちの方向性は固まったのか？」

琥珀「正直余計にややこしくなった…。羽衣狐は死んだけど、最終的な敵（鵺）がいるという時点でチョイとばかり無理な状況になってしまう可能性がチラホラ…」

昌彰「ま、頑張れ。俺はゆらとうまくいくならどうなろうが構わん」

琥珀「いや～、魔魅流くんの過去がよくわからないのがネックでね…まあ頑張ってみますか」

昌彰「それでは皆様、また次回お会いしましょう」

琥珀「少なくとも中旬くらいには…もし無理だったら六月の十日程

に…」

昌彰「弱音を吐くな！」

第十八夜　決戦の前に・・・（前書き）

遅くなりました！
すみませんｍ（・｜・）ｍ
筆が進まない・・・

第十八夜　決戦の前に・・・

†††††

―生徒会選挙結果発表―

「うおおおお！」

とりあえず目に入って来るのは棒グラフの記された張り紙。そして一本だけぶち抜いている棒グラフ。

「うおおおおおお！！」

続いて目に入るのは少しばかり首を上げて上を見ればその上に伸びる棒グラフ。

「うおおおおおおおおおおおお！！！！」

さらに首が痛くなるほど見上げれば最上階まで伸びた棒グラフの頂点が見える。

ここまでする意味があったのだろうか？

ともかく、浮世絵中生徒会選挙は清継の史上最多票獲得という結果で幕を閉じたのであった。

ちなみに隅っこには副会長、安藤昌彰信任投票の結果があったが、こちらは信任が圧倒的であったことだけ記しておく。

†††††

―生徒会室―

「カンパーイ!!」「清継くん当選おめでとー!!」

既に生徒会室は清十字探偵団の部室と化していた。

昌彰とリクオ以外の面子は勢ぞろいしてささやか?な当選祝いが開かれていた。

「まさか本当に通るとはねー」「ダントツだったねー会長かー」

巻と鳥居は呆れたような驚いたような口調でそう言う。

「ハッハッハ凄かろう凄かろう。いやー清十字団員も有名になったもんだよ」

清継は頭を掻きながらそう言う。

実際、当選の理由はリクオや昌彰達による壇上の戦闘が演出と思われたことが大きいのだが…

完全に自分の演出がうまくいったと思っているあたりは清継の器の大きさというべきか…

「リクオくんの人気も凄かったよねー」

カナはそう言ってリクオを探すがその姿は無い。

「ねえゆらちゃん、昌彰さんとリクオくんは？」

隅の方で昌彰を待っているであろうゆらに声をかけた。

「うちもさっきから探しとるんやけど…」

壊れた体育館の掃除をリクオが買って出て、昌彰もそれを手伝っていたはずだがいつの間にかいなくなっていたのだ。

「ほんまにどこに行ってもうたんやろ？他の役員の人事もあるはずなんに…」

ゆらはそう言ってハァと溜息をつくとカナの方を向き直った。

「そう言えば家長さんは奴良くんとは幼馴染やったな…」

「うん、そうだけど…どうかしたの？」

カナはゆらの言葉に怪訝そうに首を傾げる

「いや…」

「さぁやりたいことやりまくるぞ～」

ゆらが言い淀んだところで清継の叫びが生徒会室に木霊した。

巻がブランドの鞄は！？と続ける。

笑いが生徒会室に満ち、和やかな空気が流れた。

「その前にきちんと反省文の提出をしてもらおうかな？」

その和やかなムードをぶち壊すがごとく乱入者が現れる。

「安藤は…いないのか。まあいい、一人当たり原稿用紙十枚。明後日までに書いて来い」

生徒会担当の管野先生が反省文の原稿用紙の束を抱えて入って来たのだ。

「反省文？なんでですか？」

ドアに一番近かったカナが代表して疑問を呈する。

「いくら演出とはいえ、体育館の天井を壊しているんだ。当然罰則があるべきだろう」

ニヤリと口の端を歪めながら管野先生はそう言う。

道理は通っているのだが、そんな表情で言われれば単なるいやがらせにしか見えないような…

「そんな！あれは演出とちゃう！妖か…「こちらにいらしたのですか管野先生。探しましたよ」…お兄ちゃん？」

妖怪の仕業やと反論しようとしたゆらの視界にリクオと昌彰が映る。

その視線にゆらはセリフを途中で呑み込んだ。

「安藤…それに奴良もいたのか。ちょうどいい、お前達と清継には

特別に二十枚だ」

そう言って管野先生は原稿用紙の束から厚めのものを二束引き抜いた。

「こちらは反省文ではすみませんよ管野先生？」

その台詞と共に昌彰達の背後から新たな人物が現れた。

「教頭…先生。何故こちらに…？」

教頭は無言でリクオが抱えてきた木箱の中身を示した。

厚手の透明なビニール袋に入れられた岩のようなものがいくつか入っている。

「なんですかそれ？」

清継が駆け寄ってきて尋ねる。

「破損した体育館の天井裏部分だ。落下していた分は既に回収したんだが…」

そう言って昌彰は握りこぶしより二回り大きい塊を持ちあげる。

「それがどうかしたんですか？」

そう言って清継は首を傾げた。

傍から見ればただのコンクリート片にしか見えないのだが…

「これは石綿…つまりアスベストですよ」

教頭がそう言いながら視線を管野先生に向ける。

「安藤くんが報告してくれたのですが…」

破片を片付けていて違和感を覚えた昌彰が、臥せっていた土将の天一を召喚して確認したのだ。

無理をして召喚したため、天一は再び斃れてしまった。

今頃朱雀が烈火のごとく激しい怒りを燃やしているだろう…

「まさかと思って地学を担当されている安達先生にも確認してもらいましたが…間違いないそうです」

教頭のセリフに管野の顔が著しく青ざめる。

「この件に関して当時の工事の担当責任者であった管野先生に事情をお聞きしたいのですが?」

ニコリと微笑みながらそう言うと、昌彰はその工事の見積もり表などのファイルを取り出した。

これが昌彰の出した交換条件。

副会長職を引き受ける代わりに学校の資料を自由に閲覧できる権利を得たのだ。

もちろん守秘義務は負うが、管野と相対するのには十分な武器となりえる。

既に勝負はつきつつあるが…

「既に市の担当者の方がいらしています。間もなく…ああちょうど到着したようですね」

赤色灯を回転させた車が二台グランドの端に横付けされた。

†††††

―夕刻―

昌彰は一人自室に六壬式盤（りくじんちょくばん）を前にしていた。

ゆらはカナの家に行くと天后から水鏡で報告を受けている。

「動くとすれば…今夜か…」

目の前には今後の動きを占じた結果を前に呟く。

そこから読み取れるのは、四国勢が動くとしたら今夜、場所は浮世絵町道楽街道付近…

ゆらには事情聴取に行くから遅くなると言っておいた。

おかげで今夜は自由に動くことができる。

（リクオに報せるべきか？しかし…）

手を出すなと言われた手前、直接介入するのは一般人に被害が出そうになる時くらいしかない。それに…

「あの夢…」

昼間の夢に出てきた相手…異様な妖気を纏い、尋常ならざる力を宿した刀を持っていた。

「今度ばかりは…ゆらだけは戦場に出すわけにはいかない…」

目の前でゆらを斬られる光景が甦る。

「玄武…」

『ここに…』

「天后に水鏡で連絡を取れ。決してゆらを戦場に出すな、決して側から離れるな。と」

同じ水将同士でなら水鏡を用いて対話できる。

『承知した』

玄武の前に仄かに揺らめく水鏡が出現した。

昌彰も携帯を取り出してゆらにあててメールを打った。

ゆらを護るために…嘘のメールを。

「『事情聴取、長引きそうだ。遅くなると思うから先に休んでてくれ』…」

かなり苦しい言い訳じみたメール。それでも送っていなければ、ゆらは確実に遅くまで起きて待っている。

そうすれば異変に気づいて戦場へ出てきてしまうだろう…

「すまない…ゆら」

そう言って昌彰は送信ボタンを押した。

†††††

「遅くなるから…か（色々聞きたいことがあるんに…）」

ゆらはそう呟いて携帯を閉じた。

（あの時現れた妖怪…旧鼠の時にもおった…またお兄ちゃんも一緒に…）

前回も今回も昌彰は妖怪と共闘していた。まるでそれが当然であるかのように…妖怪の総大将と肩を並べて。

（あいつは何者なんや？…お兄ちゃんは何か知ってるんか？それに…）

「お待たせゆらちゃん！」

お盆にお茶とお菓子を乗せたカナが戻って来ることによってゆらの

思考は中断した。

「ごめんなさい家長さん。急に…」

「ううん気にしないで。それより話って?」

お茶を進めながらカナが切りだした。

「うん……奴良くんのことなんやけど…」

「リクオくん?」

「家長さんと奴良くんて…どんな関係なん?」

「え!?どど…どんな関係って!?」

いきなりのゆらの言葉にカナは持っていた湯のみを取り落としそうになった。

「ほら…いつから知ってるとか…彼がどんな人かとか…」

「あ、あー…えっと…リクオくんとは幼稚園が同じで…そこで出会って…」

カナはそう答えながら今までのことを振り返る。

家が近所だったからバスが一緒で、それでよく遊んだりもして…

「小学校の時もなんかよく一緒のクラスで…ってよく考えたら八年も同じクラス?」

（やっぱり…この子が一番身近なところにおる…奴良リクオの）

凄い腐れ縁だなーと呟くカナを見ながらゆらは自分の勘が正しかったことを確信していた。

（昼間の舞台…妖怪の総大将だけやない…一番街で私が捕まった時にいた奴らや…その中心にいた人物が彼。それに…）

ゆらが自分でも最近まで気づかなかった違和感。

昌彰は清十字団のメンバーの中でリクオだけを名字でなく名前で呼ぶのだ。（清継は名字が言いにくいので対象外）

「（きっと何か関係がある…）他に何かしっとる？友人関係とか。普段どんな話してるとか」

「ええ！？（ど…どうしたのゆらちゃん？いつもと違うよ！？）」

普段と違うゆらの行動に戸惑うカナの脳裏にテレビで見た京都女性のたしなみとやらが甦った。

（まさかゆらちゃん…リクオくんのこと…）

カナの頭にゆらがリクオを好きなのではないかという考えが飛来する。だが…

（でも…昌彰さんとは婚約してるんだよね？二人ともすっごく仲よさそうだし…）

カナは咄嗟に頭に浮かんだ考えを打ち消した。ゆらと昌彰を見ていれば、そんな可能性はあるはずがないと思うからだ。

「なんでもいいんよ。家族構成とかは？」

「（でも…それだとしたら何のために？）えっと…たしか…おじいちゃんとお母さんだけで…。おうちにお邪魔した時にも言ったけどお手伝いさんとかがたくさんいるって」

その答えにゆらはしばし考え込むように黙り込んだ。

そして躊躇いながら口にする。

「お父さんがおらん理由…とかは聞いてたりするん？」

「えっ？」

†††††

――――

『じいちゃん！じいちゃん待って！ボクも行くよ！』

闇の中、ぬらりひょんを先頭に歩む妖怪たち…それこそまさに百鬼夜行。

『リクオ、駄目じゃいつも言っておろう』

そう言ってぬらりひょんは幼いリクオに振り向く。

『妖怪は妖の術を使い、空を舞い、自由に消えては現れ、剣技体術・姿形をも常人の想像を超える…ガキのお前にはまだ無理じゃよ…』

『でもボクはおじいちゃんの孫だよ?』

その言葉にぬらりひょんに従う妖怪たちが視線をリクオに向けた。

リクオの器を見定めるように。

『ならばリクオ。人にも妖怪にも畏れられる存在となれ』

そう言ってぬらりひょんは再び歩き始める。

『その時――全ての妖怪がお前の下僕(しもべ)となる…魑魅魍魎の主となれリクオ――』

――

(そうだ――ボクがまとめるんだ…じいちゃんから受け継いだ百鬼夜行をボクが束ねるんだ)

幼き日に祖父が率いていた百鬼夜行…それが今自分の肩にかかっている。

襲ってくる重圧を振り払うようにリクオは首を振った。

(弱気になるな!きっと…うまくいく)

だが…その覚悟は崩れ去ることになる。

――

「親父！」

血相を変えて戻って来た黒羽丸が縁側から座敷の障子を叩く。

「何事じゃ息子よ…なっ…」

出てきた鴉天狗は息子達が抱えている者を見て絶句した。

「鴆殿は来ているか！！牛鬼殿も…呼べ――――！！！」

その剣幕に周りの妖怪たちも慌てて集まって来た。

リクオもさすがに焦りを隠しきれない。

「牛頭丸！！馬頭丸！！」

そこにいたのは傷を負い、血まみれになっている牛頭丸と馬頭丸。

特に馬頭丸の方は意識もなく危険な状態に見えた。

「敵の本拠地に潜入したそうだ」「なんだ…やつらのアジトはわかっているのか」

周りに妖怪たちがヒソヒソと囁きかわす。

「牛頭丸…ゴメン…ボクのせいだ」

辛うじて意識のある牛頭丸はリクオの言葉に首をもたげる。

「君はボクの命令で動いたのに…こんなことになるなんて」

リクオは自分の無力さに拳を握りしめる。

「リクオ様の命令…だったんですか？」

リクオの言葉に周囲にざわめきが満ちる。

「うるせぇ…テメエの傷を…人のせいにすると思ってんのかオレがっ」

牛頭丸は血を吐きながらもそう言い、リクオを睨みつける。

「オレの…力不足だっ…」

そう言って牛頭丸は崩れ落ちるようにして気を失った。

「牛頭丸！」

「リクオ様のさくせんだったのか…」「牛頭も馬頭も…」「リクオ様では駄目なんではないか…？」

周囲で囁きかわされる言葉がリクオの耳に突き刺さる。

「この組は妖怪集団…人間に率いられるわけがない」

（まとめ――られない……百鬼が…バラバラに――なる…）

リクオの視界がぐらりと歪んだ。

「若…これは私が推薦したもの…これは我々牛鬼組の責任…」

（そんなことない…牛鬼、やめてくれ…牛鬼は悪くない）

牛鬼がリクオを庇おうとするが、それすらもリクオにとっては耐えがたいもので…

「ざけんじゃねぇ四国の奴ら!!奴良組のシマで好き勝手しやがって!!それならこっちから乗り込んでやろーじゃねぇか!!みんなぁ!!」

狒々の息子、猩影が叫んだ。ここにいる妖怪の中で最も怒りを覚えているのも彼だろう。

しかし周囲の妖怪たちは沈黙するのみ。誰一人声を発しようともしない。

「なんだよ…おめーら!!なんで誰も反応しねーんだ!!リクオ様!今こそ百鬼夜行出入りのときだ!!奴良組の力!!見せつけてやりましょう!!リ…」

グラリ…

「うっ…ガハッ…」

猩影が叫んでいる途中でリクオはえずき、倒れ込んだ。

「リ…リクオ様ー!」「なんだ!なにが起こった」「急に…リクオ様が…」

氷麗を始め、リクオの側近たちが慌てて駆け寄る。

「運べ――――！！」「鴆！鴆！」「リクオ様が…」

（なんだ――急に…目の前が…真っ暗だ……）

――――

「ん…うぅん…」

「！リクオ様！！大丈夫ですか？」

気がつくとリクオは自分の部屋の布団に横たえられていた。

「急に倒れられて…ビックリしましたよ～。どうされたんですか？熱は無いし…」

「あ…そっか（ボク…倒れたのか…）」

ここ数日の無理がたったのだろう。

「鴆様の薬が効いたのかしら」

そう言いながら氷麗はリクオの額に乗せたタオルをとりかえる。

「あ…うん…心配掛けた…ね」

リクオは氷麗たちを安心させようと起き上がろうとした。

「まて。まだ安静にしていろ」

鳩がそれを遮った。

「おい…お前らも気を使ってそろそろ出てけ」

「え…あ、ちょっと押さないでください～」

鳩は半ば無理やり氷麗たちをリクオの部屋から追い出した。

「鳩くん…大丈夫だよ。それより行かないと」

リクオはそれでも強引に起き上がろうとした。だが…

「あいつらの前じゃ…お前も本音で話せないだろ」

鳩のその言葉でリクオは固まった。

「お前…いつから寝てない？昼は学校、夜は市中をパトロール。そんなんじゃ倒れるに決まってらぁ。なに…無理してんだ？」

「…鳩くん…無理なんかじゃないよ…これくらいこなせないようじゃ…駄目だと思うよ」

そう言ってリクオは布団に倒れ込む。

「ボクは総大将（ぬらりひょん）の孫なんだから…若頭のボクが百鬼夜行を…まとめるんだ」

目を覆ってリクオは続ける。

「牛鬼とも約束したんだ！目をつぶらずにやるって…ボクがやらなきゃいけないんだ…」

「リクオ…それはお前の本音じゃねぇ」

鴆の影が布団の上に落ちる。

「本音だ！！本気で思ってる！！でも今はまだ…ボクは下僕に信用されてないから！！だから…」

「アホかっ！！」

鴆はそう叫んでリクオから布団をはぎとった。

「百鬼夜行はなー。元々じーさんのモンだった奴らだろうが！オメーに仁義感じねえ奴はついてこねぇ…そんな奴ぁーほっときゃーいいんだよ！！」

「鴆くん…？」

鴆の言葉にリクオは驚いたように言葉を漏らす。

「オレはついていく。オレは…お前と盃を交わしたんだからな…」

鴆の目に強い光が宿る。

「リクオ。お前は…お前の百鬼夜行を作れ！！」

「ボクが百鬼夜行を作る？」

茫然としたようにリクオは呟いた。

「そうだ。妖怪なんざ…気まぐれなもんさ。大将に強さを感じなきゃあどこへなりとも消えてっちまう。ましてや盃も交わしてないおまえのしたにゃあな」

そこで鴆は一度言葉を切った。

「いいかリクオ…“畏”をぶつけて…百鬼を集めろ！お前にならできる…」

「わかってる。それ…夜のボクのことを言ってんだろ！？でもボクには妖怪としての力は夜の間しかない。そんなボクにみんながついてきてくれるとは思えない」

リクオは自分自身に憤りを覚える。

「このままじゃダメなのはわかってるよ…だから頑張らなくちゃ…」

「バッカやろ――！！やっぱりおめーはわかってねー！」

そんなリクオに鴆は吠える。

「百鬼夜行はそうじゃねぇ！昼も夜も関係なく“お前そのものに”おのずとついてくる…“仲間”ってのを集めろってんだよ！！」

言葉と共に鴆は障子を引き開けた。

ドチャッ！！

障子の外で聞き耳を立てていたであろう側近たちが部屋へとなだれ込んでくる。

「ちょ…青…黒?」

リクオは長身の二人に押しつぶされるような格好になってしまう。

「いてて…バレてたのか…」

首無しは飛んでいった首を回収しながら鴆にばつの悪そうな視線を向けた。

「リクオ様!!」「我々と…“盃”を交わして下さい!!」

「え…!?」

黒田坊と青田坊を先頭に側近たちはリクオに詰め寄った。

「我々がリクオ様に仕えているのは…元々は盃を交わした総大将の任命だったからです!! いわば今…リクオ様と拙僧達は何の契りもない!!」

その剣幕にリクオは再び茫然となるしかなかった。

「でも…これまでお側にいたからこそわかるのです…リクオ様は…人も妖怪も護ってくれるお方…」

氷麗はそうリクオに訴えかける。

「そして、本来的であるはずの陰陽師でさえも信頼する懐の深さも持ち合わせている」

「そんな器のでけぇあなただから…オレたちの総大将にふさわしいと思えるんです!!だから苦境のこの時こそ!!“盃”を交わして今のリクオ様についていきたい!!」

首無しと青田坊が畳みかける。

「……でも…ボクは…四国が来てからみんなに迷惑かけっぱなしだし…」

「だから我々と一緒に戦いましょう!!オレたちをつかってくれりゃーいーんです!!」

及び腰になるリクオを青田坊はそう言って叱咤する。

「みんな…」

「リクオ様…我々と七分三分の盃を……」

第十八夜　決戦の前に・・・（後書き）

琥珀「読者の皆様。また長いことお待たせしてしまって申し訳ありません！」

昌彰「…で？」

琥珀「何その『言い訳でもなんでも言ってみろ』的な…」

昌彰「そのままだよ。言い訳はあるなら聞いてやる」

琥珀「…それはこのすぐ後で…」

昌彰「ん？あ～そう言えば今日は…」

琥珀「というわけで次は企画です！」

5月19日　花開院ゆら誕生日企画！（前書き）

企画と呼べるほど大仰なものでもないです。
即興性も高いですし・・・

5月19日　花開院ゆら誕生日企画！

一同『ゆら（ちゃん）！誕生日おめでとう！』

ゆら「ありがとうお兄ちゃん！作者も！」

昌彰「おめでとうゆら。しかし…」

ゆら「少し寂しい気がする…。作者、他作品からのゲストとか呼んでないん？」

琥珀「ごめんね…気づいたのが三日前の夜で…時間がなかったんだ」

昌・ゆ「「……」」

琥珀「ホントにすみません（ジャンピング土下座！）だから呪符を向けないで！！」

昌彰「…まあ、ゆらの誕生日に荒事もなんだ…」

ゆら「一応、いいわけだけでも聞いとこか？」

琥珀「ええ…言い訳させてもらえるとしたら…はっきり言って詰まってます。高原現象です」

昌彰「わかりやすく言うと？」

琥珀「スランプです…文がうまく浮かんでこないんです…何度も書

いては消し、修正してはうまくいかず…。納得のいく文ができないんだよ！」

ゆら「具体的には？」

琥珀「この前に書いた奴がちょうどそれ。最終決戦の前振りの部分（特に生徒会室での会話部分）は…これ蛇足じゃないか？と思いつつも外すと後に説明する機会がなくなるし、口実として使う部分もあるから削れないし…」

昌彰「わかった…とりあえず…さっさと続きを書け」

琥珀「ひどっ！愚痴くらい聞いてくれたっていいじゃないか！」

ゆら「うちの誕生日になんで作者からの愚痴を聞かされなあかんの？」

琥珀「…仰る通りです…すみません」

昌彰「さて…単行本の方では京都編が完結したわけだが…こっちの設定は組み上がったのか？」

琥珀「一応は…。前々話のあとがきでも言ったけど鵺さんの引き際が良かったせいで何かと決着が先延ばしになっちゃったからねぇ…」

ゆら「ちなみにあそこでそのまま鵺戦にもつれ込んだ場合の設定はどうなってたん？」

琥珀「そりゃあ…リクオと昌彰とゆらの活躍によって勝利。昌彰とリクオの大技まで決まってたよ。それとキミと昌彰との関係にもき

っちり決着つけて大円団」

昌彰「それらは全て水の泡、か…」

琥珀「だね…一部の設定は流用できるけど…ゆらとキミとの関係はね…。羽衣狐が消えた時点で色々清算されるような設定だったから…」

ゆら「どうなるん、うちら？」

琥珀「あんまり詳しくは言えないけど…最悪京都と東京の遠距離なんて可能性も…」

昌・ゆ「！！？」

琥珀「原作の方で新章に入ってからゆらが出てきてないんだよ…だからその辺が曖昧でさ…」

昌彰「（…いざとなったら玄武と天后に頼んで水鏡を使えば…いや、太陰の風なら新幹線くらいの…）」

琥珀「昌彰～、一応最悪の場合だから。そこまで真剣に考えなくてもいいよ」

ゆら「けど、うちは京都にのこっとるんやろ？」

琥珀「たぶんね。昌彰は東京と京都を往復するような生活をするかも…」

昌彰「完全に典型的な遠距離恋愛じゃないか！！」

琥珀「いや～浮世絵町でリクオ達と行動しないと原作に沿わなくなるし…けど京都を舞台にすることもあるし…ってどっちつかずの状態なんだよね…」

ゆら「結局未定ってこと？」

琥珀「うん…まあそこに至る前に次巻がでるだろうから少しはまとまるかな？とは思うけど…」

昌彰「っと、作者そろそろ終わらせていいか？」

琥珀「ん？」

リクオ「昌彰さん、飾り付け終わりましたよ！」

鳥居「テーブルの準備も終わりました！」

カナ「飲み物も買ってきましたよ！」

清継「みんなさすがだね。手際がいい！」

巻「あんたは何もしてないでしょ！」

昌彰「お疲れ様みんな。では…オープン！」

部屋の中は普段と比べて格段と華やかに飾りつけられていた。

そしてテーブルには前回の昌彰の誕生日の時に勝るとも劣らない料理の数々が並べられている。

チキン南蛮、ハマチの刺身、パエリア、ローストビーフ、クリームパスタ、グラタン、ポトフ、チンジャオロース…前回以上にジャンルがバラバラな気がするが…

ゆら「もしかして…これ」

昌彰「一応全部俺が作った。おかげで冷蔵庫はすっからかんだけどな」

カナ「私達が部屋の飾り付けをしたんだよ」

ゆら「みんな…ありがとう！」

琥珀「さて、みなさん各自飲み物を持ってくださ～い」

昌彰「それじゃ、ゆら…誕生日」

一同『おめでとう～～！！！』

†††††

琥珀「さて、恒例のプレゼントなわけですが…準備はいい？」

ゆら「うちからの誕生日プレゼントは…／／／婚姻届やったけど…」

昌彰「…まぁ…似たようなものだ…ゆら」

懐から箱を取り出した。

ゆら「開けてもええ？」

昌彰「ああ…」

それを開けば、納められているのは白銀に輝く環。

よく見れば表面には北斗と五芒星が浮き彫り（レリーフ）にされている。

ゆら「これって結婚…」

昌彰「婚約指輪だ。まだ届は出してないから…」

ゆら「昌彰…」

琥珀（馬に蹴られる前に逃げよ…それでは読者の皆様。また次回お会いしましょう！）

昌彰「（早いとこ書けよ？）」

琥珀「（善処はしてみる…とりあえずはスランプ脱出を…）」

第十九夜　開戦（前書き）

久しぶりの更新です。お待たせして申し訳ありません！！（土下座！）

早く四国編を終わらせたいよぅ…

第十九夜　開戦

―四国・坂出―

「うわー見てください総大将！おいらこんな電車初めて乗りましたよ！！これが寝台車か～」

初めて乗る寝台車に浮かれ気味の納豆小僧。しかし…

「黙っとれ納豆。うっかり消すかもしれんぞ？」

「はぅっ…き…気をつけます…」

続いて乗り込んだバイクのライダースーツを着込んだ男に脅され、おとなしくなった。

初老に入って久しいであろうにどこか若々しさを感じさせるのはその顔に浮かんだ微笑みのせいだろうか？

「そう緊張するな納豆。臭いがきつくなる。？斉殿（りゅうさい）もそう脅かさずに」

そう言いながらぬらりひょんも乗り込んでくる。

「簡単になったもんじゃな…四国を出るのも…」

そう言いながら隠神刑部狸が付き添いの女性―岩屋にいたあの女狸妖怪であろう―を従えて席に座る。

「妖怪と一緒に寝台車に乗るというのも些か変な気はするがなぁ…」

そう言ってライダースーツの男、?斉もぬらりひょんの隣に腰を下ろす。

「いやなら式神でもなんでも使って一人で行けばよかろう」

「なに、面白い経験だと言っているんだよ」

微かに顔をしかめたぬらりひょんに?斉は屈託なく笑った。

「若明(わかあき)は息災か?」

「詳しくは知らんよ。最近は会うこともないからのう…じゃが、うちの三代目が後継と仲が良いようでな…」

「ほう…」

ぬらりひょんの言葉に笑って?斉は目を細めた。

「しかし…まさかわしらの目をくぐってその倅…玉章といったか?それが本当に魔王の小槌を手に入れたというのか…」

そう言った瞬間?斉の纏う空気が変わった。今までの好々爺然としたものではない。

時折昌彰やゆらの見せる鋭利な瞳。隠神刑部狸を見据えるそれが?斉の正体を物語る。

「……わからん」

長い沈黙の後に隠神刑部狸は答えた。

「…だがあいつは…確かにアレを手にしてから人を人と、物を物と思わぬ妖へと変わった。ワシらが捨て去った野望を――あの馬鹿息子は再び蘇らせたのだ」

†††††

妖怪任侠世界において盃とは、種族の異なる妖怪同士が血盟的連帯を結ぶものである。

祖父の代、あるいは父の代でこの組の百鬼となった猛者たちと――――あるいはその子孫と…

義兄弟の盃を交わすとき―その割合から五分五分の盃といい、対等な立場となる。

…だがこの時妖怪たちは七分三分の盃を望んだ。それは一忠誠を誓うという親分子分の盃――――

真の信頼がなければ出来ぬ契り――――

「リクオ様…我々はどんなリクオ様でも受け入れます」

「信じてついてきたこの家の…“宝”なんですから」

「どうか正直に自分の歩むべき道を歩んでください」

「その道が険しいのならば、必ずや共に拓きます」

首無、青田坊、氷麗、黒田坊そして河童が忠誠の誓いを刻んだ。

一人ずつリクオから盃を受けていく。

（ボクの歩むべき道か――）

リクオはそっと外にあるしだれ桜に目を向けた。

風が吹き抜け、花弁が舞った。

『オイ、昼のオレ人間ごときお前に…何が出来る？』

その枝の上から夜のリクオが見下ろしていた。

『夜はオレの領分なんだよ。そこを…どけ』

「……君に全てゆずるつもりはないよ…君のようになるのは難しいな――君は強くて恐ろしくて怖いから――でも…」

『……そうだな――お前は人間とじゃれ合ってるのがお似合いだよ』

その言葉に昼のリクオは若干寂しそうな笑みを浮かべる。

『人間のことはお前にまかす』

そう言って夜のリクオはしだれ桜から飛び下りた。

『だから“妖怪”は――オレにまかせろ』

風が舞い、桜の花弁が一片氷麗の持つ盃に波紋をたてた。

「若――――」

リクオの突然の豹変に氷麗は思わず動きを止めた。

「どうした。盃受けねぇのかい」

「え…あ…はい…」

リクオの言葉に氷麗は慌てたように盃を呷った。

「よろしくたのむぜ、氷麗」

リクオはニィッと口の端を持ちあげて微笑した。

（それと…“あいつ”に関してはオレたちの総意だ…いいな昼のオレ？）

そう心の中で呟いて夜のリクオは月を見上げた。

†††††

（親父…）

猩影は庭で父親の形見である能面を見つめていた。

『ワシが奴良組についとるわけは総大将に惚れたからじゃ』

幼き日に狒々から聞いた言葉が猩影の脳裏に甦る。

『次期総大将になるリクオ様についていくかどうかは、次代の…お前が決めればよい』

（オレにはとても…思えねぇぜ）

そう思い、猩影は視線を宙に漂わせた。

先程のリクオの様子を見ているとどうにも頼りなさを感じるのは猩影だけではないはず…

「ん？あれは…て…敵襲―！！四国の奴らと思しき軍勢が道楽街道をこちらへと向かってくる！！」

見張りを務めていた妖怪が声を掠れさせながらも張りあげる。

「ななんだって！？」「そんな…いきなり！？逃げるぞ！！」「こりゃ本格的にやべぇ」

小妖怪たちは完全に浮足立ち、動揺が本家の中に満ちる。

バンッ！

「「「「！！」」」」

「兢兢としてんじゃねぇ！相手はただの化け狸だろーが！！」

覇気に満ちたリクオの一喝が一気にその動揺を吹き飛ばした。

その後ろに盃を交わした側近たちも控えている。

（なんだあいつ…リクオ……？）

「猩影」

「え？」

初めて見る夜の姿に困惑していた猩影にリクオは呼びかける。

「テメェの親父の仇だ。化け狸の皮はお前が剥げ」

「！！ハ…ハイ…」

気圧されたように猩影は頷いた。

（そうだ…それでいいんだぜ…リクオ。昼のおめーだけを見ている奴にゃわかんねぇ…今のおめーを見せてこそおめーの“畏”は完成する！！）

「行くぞおめぇら。百鬼夜行の始まりだ…あの月が暮れるまでてめーらの命、オレが預かる」

リクオを先頭に盃を交わした側近たち、それに奴良組の百鬼が続いた。

†††††

賑やかな喧騒に満ちる浮世絵町の中心市街、道楽街道。

しかし、今夜はその中心はぽっかりと無人になっていた。

「そろそろか…」

昌彰はそう言いながら目を開けた。風に乗ってさきほどまでとは違うざわめきが聞こえてくる。

制服の上から纏っている薄墨の狩衣の袂から呪符を取り出した。

『ああ…来たようだぞ昌彰』

傍らには既に六合と青龍が顕現している。

左手からは玉章率いる四国八十八鬼夜行。

右手からはリクオ率いる奴良組百鬼夜行。

†††††

道楽街道の中心付近で四国と奴良組、両勢力は対峙した。

「やはり出てきたかリクオくん…キミも百鬼を率いる器。あの程度では脅しにもならないか…やはりぼくらは似ているね」

そう言って玉章は懐から能面を取り出した。それを被ると同時に玉章の姿が変貌する。

体育館で見せたあの歌舞伎役者のような衣を纏った妖怪の姿に。

「お互いの“おそれ”をぶつけようじゃないか…百鬼夜行大戦の始まりだ」

†††††
†††††

道楽街道で両勢力が対峙したころ。丑三つ時になろうとしているにも関わらず、昌彰とゆらの部屋には明かりが灯っていた。

「お兄ちゃん…遅いなぁ…」

昌彰が危惧したとおり、ゆらはまだ起きて昌彰の帰りを待っていたのだ。

『ゆら様、今夜はもうお休みください…』

天后が隠形したままそう言ってゆらを促す。

家事は一通り終わり、いつも通り昌彰の夜食も作った。

布団も敷いてあり、後はお風呂に入って寝るだけである。

「天后…」

『はい…？』

ゆらに呼ばれて天后は傍らに顕現した。

「天后は何か知っとるんと違う？」

『私が言いつかっているのはゆら様の護衛だけですよ』

「ホントに？」

『ええ…』

天后はそう言って微笑みを返す。式神にとって主の命令は絶対だ。

ゆらは昌彰の許嫁であり、義妹であるが天后達十二神将の主ではない。

「…天后の言葉やけど…信じられへん。昼間にあんな事があったんや…」

壇上に現れたのは犬神だけではない。他にも二体の新たな妖怪がいたことをゆらは感じ取っていた。

あの後どうなったのかは分からないが、確実に何かが起こっていることだけはわかった。

「なぁ…ホンマに…！？」

『（始まってしまったようですね）…ゆら様』

離れている昌彰の家まで届くほどの妖気。

百鬼夜行同士の戦いが始まったのだ。その異変にゆらが気づかない訳がない。

「なんや…急に…！」

『ゆら様！』

椅子を蹴倒さんばかりの勢いで立ち上がったゆらの手を天后は掴んで抑えた。

「天后……やっぱり天后は知ってたんやな…」

責めるような口調ではない。ただ静かに事実を確認するようにゆらは問う。

『申し訳ありません…昌彰様よりゆら様を決して戦いの場に出すなと命じられております。ですから…』

「…わかってる…この妖気、今までの比やない。それだけ大変な戦いなんやろ…」

昌彰が何もゆらに告げない…それはゆらを守るため…それはゆらも理解している。

「でも…うちは…ただ護られるだけなんて嫌や…」

だが、ゆらはただ護られるだけでいることなどできない…ゆらには昌彰と共に闘うだけの力がある。だから…

「お兄ちゃんが戦うんやったらうちも一緒に戦う…昌彰の背中を守る。それがうちの…」

『ゆら様…』

天后は無意識のうちに掴んでいた手を緩めた。待つことの辛さは天后も嫌というほど理解している。

自らに戦う力があればなおのことその思いは強くなるだろう。

「お願いや天后！…」

ゆらが天后に向けたそれは命令ではなく純粋にして強い願い。

ゆらは天后達の主ではない。だが…

そこに主を護りたいという意思が見える時、その願いは主の命令と同じ重さを持つ。

『かしこまりました…』

†††††

「どちらが先に動くか…」

鴉天狗は先陣で膠着状態を眺めてそう呟いた。

これほどの戦、単に正面からぶつかり合うだけでも凄まじいものになるだろう。

両勢力とも間合いを計りながらなかなか戦闘が始まらない。

ザッ…

そんな中草履が地を踏む音が響いた。

「若！？」

「ちょっと…」「なぜ若が先陣を!?」

側近たちがあまりの事態に呆然となる中、リクオは静かに進んで行く。

「何をしてる!!リクオ様を止めろ!!」

鴉天狗が焦って指示を出すが、四国勢もリクオが、大将が先陣を切ったことに気づいていた。

「大将が一番先に出てきたぞ!!」「何考えてんだあいつは!?」
「行け!殺っちまえばオレたちの天下だーっ!!」

それを切っ掛けに両勢力は雪崩のように乱戦へと突入した。

幾多の妖怪が駆ける地響きが闇に響き、刀や槍、拳のぶつかり合う音が夜の空気に木霊する。

「側近たちはリクオ様を守れー!四国の奴らに手出しをさせるなー!!」

鴉天狗が叫ぶが乱戦の中、側近たちも前に進むことは難しい。

「リクオ様!お待ちください!」

氷の刃で乱戦の中を切り開き、氷麗がリクオの後を追う。

ドガァッ!!

「うわっ！？」

轟音と共に氷麗の側にいた奴良組の妖怪が吹き飛ばされる。

「我が名は手洗い鬼！四国一の怪力！！てめぇらの一番は誰だ！？」

手洗い鬼を始めとした四国妖怪の幹部達が行く手を阻む。

「っ！…（リクオ様…無事でいてください）」

†††††

「フン…自ら進んで先陣を切るとは、一体何の策があるのかと思ったが何のことはない…ただのハッタリでしたな」

玉章の傍らに控えた犬鳳凰がそう言いながら前線の方を見やる。

「奴良リクオはどこにいる」

「さぁて…見当たりませんな…しかしこの百鬼の乱戦。死なずとも進めますまい…」

「……！！」

玉章が見たもの、それは百鬼入り乱れる戦場をものともせず、堂々と正面から歩んでくるリクオの姿。

「！？どうしました…？玉章様…」

しかし、側にいる犬鳳凰はおろかリクオの近くで戦っている者でさ

え気がつかない。

そこに敵の大将がいるというのに。

「（なんだ――――！？）お前たち！！何をしている周りをよく見ろ！！！」

叫ぶ玉章の声に周りの四国妖怪たちは怪訝そうな視線を向ける。

「なぜ誰も気付かぬ。リクオはそこにいるぞ」

「よう」

ガッ！！

玉章が叫んだ直後、リクオの祢々切丸が振り下ろされた。

「……成程……これが“ぬらりひょんの力”…か」

玉章は鞘に入ったままの刀で祢々切丸の一閃を受け止めた。

ギンッ！

そのまま後ろに下がるようにして刃を逸らす。

リクオは弾かれた祢々切丸を逆手に持ちかえ、酒の入った真紅の盃を手に取った。

「『明鏡止水―桜』」

盃に波紋が響くと同時に青白い炎が蠢く。それは巨大な火柱となり玉章目掛けて襲い掛かる。

――

「な…なんだと…あの火柱は…！？リクオ様！？」

「玉章…！？」

四国勢の中ほどで突然噴き上がった火柱に首無と針女は戦いの手を止めて呆然とした。

「大将同士何故対峙している！？」

百鬼の中を進む氷麗にもその炎は見えた。

「リクオ様…（急がなきゃ…間に合わないかもしれない…）」

氷麗は不吉な予感を振り払うように頭を振るとその方向へ走りだした。

†††††

「おいどーなってんだ！！車動かねーぞ！？」「うわっ！？前の方で火が！？」

戦場から離れたところでもリクオの放った火柱は見えた。

「あかん、急がんと！」

その炎にゆらは見憶えがあった。一番街に囚われた際に妖怪の総大将がみせた技。

『ゆら様！』

焦るゆらを天后は宥める。このままでは着いたらそのまま戦闘に流れ込みそうな勢いだ。

「わかってる…でも…」

呼吸が乱れ、下手な状態で駆けつけても足手まといになるだけ。

ゆらは逸る気持ちを押さえつけて、出来るだけ急いで火柱の方へと向かう。

†††††

「玉章様…！？」

犬鳳凰はいきなり玉章に掴まれ、狼狽した。

目の前にはリクオの放った青白い炎が迫る。

「くっ！」

咄嗟に犬鳳凰も自らの嘴から炎を解き放つ。だが…

「ギャアアアアア」

一瞬拮抗した炎もリクオの明鏡止水桜に呑まれ、その身は炎に包ま

れた。

「……オイオイ…部下を身代わりにして逃げるのか？…いつまでたっても小物にしか見えねぇ奴だ…」

リクオは呆れたように呟きながら間合いを詰める。

「このまま消しちまってもかまわねぇ気がしてきたぜ…！？」

突如としてリクオの隣に上下逆さまに黒い翼を背負った影が現れる。

「そうだ…この玉章の部下となるものは、玉章のために犠牲となり玉章に尽くすのだ…」

そう言いながら玉章は立ち上がる。

「見せてやれ夜雀」

闇色の羽根がリクオの目の前で翻る。

（なんだ…！？暗い――完全なる闇…）

それと同時にリクオの視界は完全に闇に塗りつぶされた。

「世の理には“陰”と“陽”がある。“陰”とはすなわち妖怪のこと。姿を消し、闇に消える…まさに“陰（かげ）”の存在…」

その闇の中に玉章の声が響く。リクオはその出所を探るように首を回した。

「その“陰”を相殺するもの――“陽”。“陽”の力を持つことで“陰”を消すことができる」

昌彰達の操る陰陽術は陰陽のバランスを保ち、相互に力を加えることができるもの。

「普通の妖怪はもたぬ――かつて百鬼を統一したお主の祖父が手にした力――そしてこの玉章が今手にしているのもまた――」

振り向いたリクオの脇腹に玉章の抜いた太刀、魔王の小槌が突き立てられた。

「人間はかつて“陰（かげ）”を強く畏れた――が今は世界が明るすぎるとは思わんか…妖怪の存在が薄れるわけだ。奴良リクオ……」

玉章が刃を引くと、リクオは声もなく崩れ落ちた。

「変える必要がある。そして我々は再び人々に畏れられなければならない。そう…この玉章がこの世に闇を取り戻すのだ」

それと同時にリクオの明鏡止水が破れた。

「ん…た…玉章様!?」「あれは…奴良リクオ!? いつの間にこんなところに来てやがった!?」

配下達の驚愕の叫びを聞きながら玉章はリクオの肩に足をかけた。

「フフフ…どうやら君の姿は認識されているようだね。見えぬのは君一人…形勢逆転とはこのことだな…」

そう言うと玉章は俄かに声の調子を改めた。

「訊こう。奴良リクオ、我が八十八鬼夜行の末尾に加わらんかね？」

それは降伏を促す最後通牒。断ればリクオの命の保証はない。

「悪くないと思うぞ？働き次第では幹部にしてやらんこともない。どうだ？」

「……断る」

長い沈黙の後にリクオは短く答えた。

「てめぇと盃交わすと考えるだけで虫唾が走るぜ」

そういうリクオの瞳は闇に囚われてなお、戦意と誇りを失っていなかった。

「そうかね…残念だな…ならば」

玉章は左手に携えていた抜き身の魔王の小槌を構えた。

「君を殺して君の百鬼の畏を得るとしよう！！」

（やべぇ――何も見えねぇ…闇に呑まれる…）

魔王の小槌が奏でる風切音を聞きながらリクオの脳裏にそんな言葉がチラついた。

ガッ！！

「!?」

止められた魔王の小槌が氷に覆われる。

「リクオ様やっと…見ぃつけた!!」

氷麗はかつてリクオが幼いころによくやったかくれんぼでリクオを見つけたようにそう言った。

だがリクオは反応を示さない。極限状態から一種の走馬灯の見えるような状態になってしまっているのだろう。

(なんだ…つめてぇ…前にもこんなことがあったぞ。庭に隠れていて夜になって何も見えなくてでもそこだけ――雪のような白い肌が目立っていて――)

「リクオ様しっかり!!」

氷麗の一喝でリクオは完全に我に返った。

氷麗はリクオを抱え、転がるようにして玉章の一撃をかわし、距離をとる。

「ふぅ〜」

「つららか…? バカ野郎…引っ込んでろよ」

そのリクオの言葉に氷麗は微かに目を瞠った。

「ほっとけよお前の出る幕じゃねぇ…」

それだけ言ってリクオはどうにか立ち上がる。

「ちょっと…リクオ様!?お下がり下さい…私がお守りしますから…ね?目にも何かされてるじゃないですか」

必死に氷麗はリクオを制止しようと言葉を紡ぐが…

「のけ下がってろ」

ピクッ…

あまりのリクオの言葉に氷麗はキレた。

「何カッコつけてるの―!あなたは今私が来なきゃやられてたの!!勝手に一人で突っ込んでも――――!!」

「え…?」

「せっかく駆け付けたのにあなたって人は!!ちゃんとこっち見なさい!!」

完全にお説教されているような状態になってしまっている。

「さぁ!!私が相手よ!!」

「お…おい」

氷麗は氷の薙刀を構え、リクオは若干腰が引け気味に引きとめよう

とする。

「わかってます!!隠神刑部狸!!刀だけの武器なら私に分が…「違う!!夜雀だ!!」…え!?」

リクオが叫んだのと同時に闇色の翼をはためかせ、氷麗の頭上を夜雀が舞った。

その光を奪う羽根を撒き散らしながら…

「（これが…夜雀!?）ハッ!?」

咄嗟に氷麗は両目を手で覆った。

「うわっ…」

それでも風圧を受け、軽くはね飛ばされる。

「うう…」

「つらら…どうした?」

リクオの安否を問う声に氷麗は辛うじて起き上がる。

前髪の隙間からのぞくその右目は、完全に闇に塗りつぶされていた。

「フン…フフフ…夜雀、お前は本当に…役にたつ女だな」

そう言って玉章は夜雀に歩み寄る。

「だが勘違いするなよ。お前はあくまでボクの下僕なんだ…」

そう言って玉章は能面越しに夜雀をねめつけた。

「うう…リクオ…様…」

氷麗はなんとか動こうともがく。

それを尻目に玉章はリクオの前に立った。

「残念だな奴良リクオ…そんな女が側近だなんてな…。夜雀…違いを見せろ。その役立たずをさっさと始末しろ!!」

夜雀が薙刀を構え、氷麗へと近寄る。無表情なまま薙刀が振りかぶられた。

『させると思うか?』

「むっ!?」

三日月の刃を持った大鎌と両刃の銀槍が玉章と夜雀に襲い掛かった。

ギィンッ!ガチィッ!

辛うじて夜雀は薙刀で銀槍を弾き、玉章は刀で振り下ろされる大鎌の一閃を逸らした。

ザンッ!

弾かれた銀槍がすぐさま軌跡を変え、今度は鋭い突きが夜雀の喉元

へと迫る。

バサァッ！

夜雀は受け止めるようなことはせずに、距離をとる。ご丁寧に自分の羽根を撒き散らしながら。六合は肩に纏う夜色の霊布を翻し、その羽根を全て叩き落とす。

『何をしている？』

姿は見えないがその冷ややかな声音にリクオは聞きおぼえがあった。

青龍は地に突きたった大鎌を抜きながら、リクオと玉章の間に割って入った。

「式神…？昌彰には手を出すなと言っていたはずだが…」

『ああそうだ。だからこの戦、最後まで見届けるつもりだった！』

そう言いながら青龍は玉章の一閃を受け止めた。

『だが昌彰もこう言ったはずだ。「人間に危害が及ぶようなら躊躇わず介入する」と…』

青龍は大鎌で玉章の魔王の小槌を弾き返す。

『キサマも四分の三は人間だ…我が主の命により奴良リクオ、お前と共に闘う』

第十九夜　開戦（後書き）

琥珀「えっと…」

昌彰「はぁ…さっさと言え」

琥珀「えっと…皆様お待たせしてホントに申し訳ありませんでした。（土下座）」

昌彰「あんな中途半端なとこで切るなよな？」

琥珀「ごめんなさい。ホントに試験は無視できなかったんだよ…」

昌彰「で？全部終わったのか？」

琥珀「残り二つ…来週が空くから今の内にと思って…」

昌彰「その割にはブルーだな？」

琥珀「先に終わった方の結果が戻って来たんだよ…生化学はよかったんだけど…物理化学が危険ラインで…」

昌彰「わかった。終わってから愚痴聞いてやるから、読者のみなさんに愚痴らない」

琥珀「ううう…すみません。精神的にかなり追い詰められまして…上の文は見なかったことにしてください。ウアァァァアアァ～（狂泣）」

～作者復旧中～しばらくお待ちください

昌彰「さて、今回の話だが…俺の出番が少なくないか？」

琥珀「裏の方で動き回ってたからね。主戦場には出てきてないよ。ゆらちゃんの心の動き（？）も書きたかったし」

昌彰「ゆら…結局出てきちまうのか…」

琥珀「大丈夫だよ。キミが助けるから…（一応）」

昌彰「待て、最後なんかボソッと付け加えなかったか？」

琥珀「さて次回の話に移りましょう」

昌彰「おい作者！？」

琥珀「次回は昌彰も参入しての百鬼夜行大戦の終盤へと突入します」

昌彰「ゆらは無事なんだろうな？」

琥珀「昌彰の血に眠る力。それが目覚める時、いったい何が起こるのか！？」

昌彰「なんか真面目に予告になってるぞ。珍しいな」

琥珀「来週の前半くらいまではどうにか余裕があると思いますのでその間に…」

昌彰「チョイ待ち、言い訳になってるぞ？」

琥珀「すみません。…えっと二十二日と二十九日にまた試験がありますので今度更新できるは未定です。来週中にはもう一話くらいはあげたいなと思っています」

昌彰「読者の皆様…こんなわがままな作者ですが見捨てないでやってくださいね」

琥珀「さて！ゆっくり休んで書くぞ！」

昌彰「愚痴も聞いてやるからガンバレ。あ、活動報告でオレが答えたバトンなるものがあるそうです。興味がある方は覗いてやってください」

琥珀「またあとがきが私事になってしまったｏｒｚ」

昌彰「テスト前とかはいつもこんな感じだろうに…それでは読者の皆様」

琥珀「また次回お会いしましょう。できるだけ早く書きます！それでは」

第二十夜　変貌（前書き）

どうにか更新できました。
※今回「魔王の小槌」に関してかなり強化を施してあります。
パワーバランスの調整のために。

第二十夜　変貌

†††††

――――

「『放たるる風　さながら白刃のごとく』！」

昌彰は四国側の陣の中にいた。

中心部は人払いの結界を張っていたとはいえ、範囲が狭く、この周辺にはまだ人が残っていたのだ。

「こっちへ！！」

四国勢の横から切り込む形となった昌彰は逃げ遅れた人たちを背後に誘導する。

「逃がすか！！」

ザンッ！

昌彰の頭上を跳躍し、人間へと襲い掛かろうとしていた蛙の妖怪を六合は銀槍の一閃で屠った。

『統率のとれぬ集団を率いて闘うとは大将の器もしれるな…』

青龍はそう言って大鎌を一閃させる。神気を纏ったその刃は一振りでまとめて数体の妖怪を消し飛ばす。

戦略もなく、目の前にいる人間（獲物）に飛びかかっていくようでは烏合の衆と大差がない。

「『謹請し奉る、降臨諸神諸真人、縛鬼伏邪、百鬼消…』何っ！？」

少し先の方に立ち昇った青白い火柱。

それは間違いなくリクオの放った明鏡止水―桜。

（こんなに早くからリクオが前線に？）

昌彰は焦って目を凝らすがリクオの姿を察知できない。

『よそ見をするな昌彰！』

「っ！？」

青龍の声に前を向き直れば目の前に爪が迫っていた。

間一髪のところで身をよじり、爪をかわす。

斬られた黒髪が数本宙を舞った。

「『必神火帝、万魔拱服』！！」

すぐさま刀印を結び、真言を唱えた。

退魔の炎が追撃しようとした大鷲の妖怪を消し炭に変える。

油断なく構えながら、昌彰はリクオを探すために再び視線を巡らせ

た。

「奴良リクオ！？」「いつの間にこんなところに！？」

風に乗ってざわめきが昌彰の耳に届く。

声の聞こえた方を見れば膝をついたリクオの姿が目に入った。

「っ！？リクオ！！」

手を出すなとは言われたが、そのまま見殺しになどできるはずもない。

「玉章様のために…」「ここは通さん！」

駆けだそうとする昌彰の前に四国妖怪が立ちはだかった。

「邪魔だ！どけっ！『臨める兵（つわもの）　闘う者　皆陣列（やぶ）れて前に在り』！」

昌彰は九字真言で霊力の刃を叩きつける。

しかし大将の近くを固めるだけあって、先程から倒してきた獣の妖怪たちとは違う。

即座に崩れた陣形を立て直し、昌彰を進ませるようなことはしない。

「『ノウマクサンマンダ、バサラダセンダ…ッ』（羽根！？）」

呪文を唱える昌彰の眼前に黒い羽根が舞う。咄嗟に危険を感じて目を閉じた。

バッ！

翻った夜色の霊布が舞い散る夜雀の羽根を払いのける。

「すまない六合…。まずいっ…」

突然飛び交った羽根に嫌な予感を感じてリクオの方を見れば、傍らに氷麗も倒れている。

援護に入ってやられたのか…

「青龍！六合！二人を助けろ！」

『しかし…』

六合も青龍も躊躇いを見せる。二人とも離れてしまえば昌彰が無防備になってしまう。

「友達を…仲間を見捨てられるか！行ってくれ！」

『…承知』『…』

青龍と六合は即座に跳躍した。昌彰の前に陣取る四国妖怪たちの頭上を一気に飛び越え、リクオの許へ向かった。

――――

†††††

「妖を滅するはずの陰陽師の式神が…妖怪と共に闘うとはねっ！」

『なんとでも…我らは主の命に従うのみ！』

青龍は玉章の挑発を受け流し、魔王の小槌の一閃を弾き返す。

それと同時に神気を放ち、周りを囲む四国妖怪を威嚇した。

今にも攻撃を仕掛けようとしていた妖怪たちはその威圧感に身を固くする。

†††††

青龍が玉章と対峙しているころ、六合は同様に夜雀と対峙していた。

キィンッ！　ザンッ！

違うところといえばこちらは挑発することなどなくただ無言で槍と薙刀が交錯する。

ブワッ！

夜雀は再び黒い羽、幻夜行を放ちながら間合いを取った。

その羽根を六合は夜色の霊布で叩き落とす。

「式神…何故助けに…？リクオ様は…？」

お互いに刃を向けて膠着状態に陥った六合に氷麗は問いかける。

『昌彰の命（めい）だ』

六合は短く答え、油断なく銀槍を構える。

『「…仲間を見捨てるられるか」…そう言った』

「…そう…ですか…」

六合の言った昌彰の言葉に氷麗は軽く目を瞠り、やがてゆっくりと立ち上がった。

「なら…私も戦います…」

『退けと言っても…』

聞くはずがないのを承知で六合は問う。帰ってくる返事は当然…

「退きません。若を守るのが…私の…務めです。盃を交わしたお方ですから」

『……』

六合は思わず押し黙った。彼はこれによく似た声音を知っている。

そしてその声の主が決して自分の意思を曲げようとはしないことも。

その意思の強さも…

『わかった…俺が奴を抑える。その隙に仕留めろ』

「ええ…これで貸し借りなしだと陰陽師に伝えてください」

氷麗の言葉を聞くと同時に六合は銀槍を翻す。

夜雀へと一気に間合いを詰め、その刃を袈裟掛けに斬りおろした。

「!?」

ギチィッ!

先程までと打って変わった攻撃的な一撃に、夜雀は受け切れずに重心を右に流される。

六合は槍を引くことなくそのまま反転させると、石突を振り上げた。

「ぐっ…」

下からの一撃に夜雀は反応できずに左腕を打たれる。

神経をやられたのか薙刀を右手一本に持ち替え、再び幻夜行を放ち距離をとろうと翼を広げようとした。

『やれ!』

六合の肩に纏った霊布が翻り、夜雀の視界を塞ぐ。

「我が身にまといし眷族氷結せよ!客人(まれびと)を冷たくもてなせ!」

霊布のむこうから氷麗の声が響く。

「闇に白く輝け　凍てつく風に畏れおののけ!!」

夜雀は薙刀を右手一本で振るい、霊布を払い落した。
そこにいるのは左目を氷で覆った氷麗。
「呪いの吹雪　風声鶴麗！！」
「！？」
焦って飛翔しようとした夜雀だが、六合の放った神気がそれを阻む。
氷麗の放った畏は夜雀を直撃し、夜雀は白い氷に閉ざされた黒い氷象と化した。
†††††
『チッ…』
青龍はこみ上げる苛立ちに思わず舌打ちを漏らした。
「フン…味方を庇いながらじゃ本領を発揮できないみたいだね…」
玉章は目を細め、防戦一方の青龍をあざ笑う。
『ぬかせ！！』
再び大鎌で受けた一撃、今度は弾き返すだけでなく、神気を爆発させて思いっきり吹き飛ばす。
「くっ…」

玉章も妖気で相殺しようとしたが堪え切れずに後ろへ下がった。

『剛砕破！』

さらにリクオの背後から寄ってきていた妖怪たちを粉微塵に吹き飛ばす。

リクオを庇い、周りを牽制しながらのため思うように攻撃に出られないのも事実だ。

「式神…」

リクオはゆっくりとではあるが青龍の方へ近づいてくる。

玉章はその様子に笑みを浮かべ、今度はリクオ目掛けて斬りかかる。

『下がっていろ！』

間に割り込み、玉章の斬撃を防ぎながら青龍は叫ぶ。

この状況でリクオに出てこられても足手まといにしかならない。

戦略的にでも戦術的にでもいいから一時撤退する方が得策だ。

『包囲網の一部は破った。側近と共に一旦後陣に…「ふざけんな…」…！？』

リクオはそう言って祢々切丸を振るう。

その一閃は青龍の死角にいた四国妖怪を切り裂いた。

『！おまえ…？』

青龍は視界が戻ったのかと思ったがリクオの瞳は未だ闇に閉ざされたまま。

リクオは気配のみで察知し、切り裂いたのだ。

「大将が自ら動かねぇで…下僕（しもべ）がついてくるかよ！！」

リクオはそう叫んで玉章のいる方を睨みつけた。

「フフフ…高邁な理想だね…リクオくん！」

玉章は鍔迫り合いの状態からいきなり力を抜いた。

青龍の身体が微かに前に流される。

『くっ！？』

青龍は即座に身体を捌き、リクオへと振り下ろされる刃をどうにか防いだ。

しかし、無理な体勢で振るったために、玉章に対して無防備に胴を晒すことになる。

「甘いね…式神」

玉章は防がれた魔王の小槌を今度は青龍に向けて振り抜かんと刃を

返す。

その時、青龍達の背後で氷の畏が解き放たれた。

キィッン！！

過たずに青龍の脇腹を薙ぐはずだった玉章の刃は、その直前に祢々切丸によって防がれた。

「なっ！？」

玉章の動揺は一瞬。しかしその隙にリクオは祢々切丸を振り抜いた。

「う…」

玉章は浅く胴体を斬られ、鮮血が舞う。

「やるじゃねーか。つらら」

リクオは振り抜いた刃を返しながら青龍の横に並び立つ。

「さんざん人の側近見下しやがって…玉章よ…てめえの下僕の方が下じゃねぇか」

そのままうっそりと微笑んで祢々切丸を突き付けた。

「リクオ様！」

そこに背後に六合を控えた氷麗が駆け寄ってくる。

主戦場で戦っていた幹部達も奴良組が勝利を収めているようだ。そこかしこで四国の幹部達が崩れ落ちている。

『……』

『…天后には言うなよ?』

無言で「危なかったな」と告げてくる同胞に青龍は口止めをした。

天后は青龍が戦場に出て怪我を負うことをひどく嫌うのだ。自分がいれば防げたのではないかと自分を責める。

青龍もそんな姿は見たくない。

六合はただ静かに頷いて昌彰の援護に戻ろうと踵を返した。

「どいつもこいつも…役に立たない奴らだね…」

玉章のその言葉に青龍達は足を止めた。

同時にあふれ出る異質な妖気…

「ま…関係ないけどさ…。所詮使われる存在だからな」

スルスルと玉章の髪が伸び、その先に掴まれている魔王の小槌が近くに残っていた味方の妖怪たちを斬り殺していく。

「た…玉章様!?」

四国妖怪たちは主の突然の乱心に逃れようとするが…

「お前達…ボクの為に…身を捧げろ」

魔王の小槌の刀身は無慈悲にそこにいた妖怪たちを切り裂いた。

†††††

「なんやこの妖気は!?」

ゆらが道楽街道に到着したのは氷麗が夜雀を破った直後だった。

目の前には四国妖怪の残党と逃げそびれた一般人がいる。

だがそれ以上に放たれる異質な妖気がゆらの警鐘を叩く。

「天后はあの人たちを!」

残された人の救出を天后に任せるとゆらは妖気の漂う方、玉章とリクオがいる方へと向かおうとする。

『ですが!』

「ええから!」

ゆらはそう言って天后の制止を振り切り、一人で玉章のいる方へ駆けだす。

『くっ…せめて昌彰様に…』

天后は目の前にいる四国妖怪を殲滅しながら、昌彰にゆらが戦場に

来ていることを伝えようと水鏡を発動した。

†††††

「何をしているんだあいつは!?」「味方を…斬っているのか!?」

無惨に斬り殺されていく玉章の配下。首無達奴良組幹部もあまりの事態に動揺を隠せない。

「玉章様…おやめ下さい!!仲間になにをな…っ!?」

止めに入ろうとした針女さえも玉章は躊躇なく斬り捨てた。

「ふはは…見ていろリクオ、陰陽師!!下僕の血肉でボクは魔王となるのだ――!!」

（あれは…マズイ…）

その様子を見ていた青龍はその異質な妖気を感じて玉章の持つ刀を凝視した。

配下の妖怪を切り裂くたびに、魔王の小槌は生き物のようにその姿を変えていく。

『六合!』

『…!』

青龍の呼びかけに六合は無言で応じた。わずかな時間差を置いて玉章に対して連撃を仕掛ける。

振りあげられた大鎌は背を向けて仲間を斬り殺していく玉章を捕らえようとしていた。だが…

“玉章さまのために…”

『なっ！？』

玉章の背から何かが生えた。

…

それは見る間に腕の形を為し、先程斬られた妖怪と同じ姿となって青龍の大鎌を受け止めた。

それは一匹だけではない。次々と斬られたはずの妖怪たちがまるで湧きだすように現れ、瞬く間に無数の妖怪が青龍を拘束した。

『青龍！』

六合の銀槍が青龍を捕らえる腕を斬り落とそうと翻る。

『…！』

しかし即座に別の腕が二組、今度は六合を狙った。霊布で一方の腕を弾き、銀槍を煌めかせてもう一方を切断した。

「そこまでだよ式神…」

玉章は既に青龍の方を向き直っている。既に魔王の小槌は大上段に振りかぶられている。

『…十二神将を…舐めるな…！』

魔王の小槌が振り下ろされると同時に青龍はあらん限りの神気を爆発させた。

拘束していた妖怪の骸が弾け飛ぶ。

「くっ…」

『ぐぁっ…』

玉章は神気の爆裂のあまりの強烈さに、咄嗟に刃を緩めた。

その隙に青龍も距離をとろうとするが、間に合わずに切っ先が右肩を掠めた。

どうにか着地した青龍だが、堪え切れずにその場に崩れ落ちる。

『青龍っ！？』「しっかりしろ式神！」

六合と氷麗たちの制止を振り切ったリクオが、玉章と青龍の間に身体を滑り込ませた。

「なっ…！？何してやがる！？」

リクオは思わず声を荒げた。青龍が刀傷を負った周囲の肉をえぐり取ったからだ。

見れば傷口は既に紫に変色し始めている。

「他人の心配とは余裕だねリクオくん」

「ちっ…」

玉章の魔王の小槌とリクオの祢々切丸が切り結ぶ。

六合の振るった銀槍は玉章の背負う骸に阻まれて届かない。

鍔迫り合いに持ちこんだ玉章は力任せにリクオを押し切る。

ゴギッ！

「がっ…！」

六合が援護に入る暇もなく、膂力で押し負けたリクオは側頭部を刀身の腹で殴られ、後方へと押しやられる。

『リクオっ！？』

はね飛ばされたリクオは派手に転がって身動き一つしない。

青龍は戦闘不能、リクオも今は意識があるかさえ怪しい。確実に形勢は不利だ。

六合は倒れている青龍に肩を貸し、一時離脱するために跳躍しようとした。

だが、それを玉章が許すはずもない。

「逃げる気かい？」

その言葉と共に魔王小槌が振り下ろされ、背負った骸が放たれる。

キィンッ！

神気で骸を薙ぎ払い、銀槍で魔王の小槌を受けた六合だったが、片手で振るった槍は甲高い音を立てて六合の手から弾き飛ばされた。

『がっ！？』

続く一閃を腕甲と甲冑で受けるも、勢いを殺してなおその威力は凄まじかった。

甲冑を砕かれ、刃が六合の左肩にめり込む。

『ぐっ…が…』

うめき声を漏らしながら六合も青龍と同じように崩れ落ちる。

「フハハハ…やはりこの刀は素晴らしい！陰陽師の式神さえも無力化できるとは！」

そう言って玉章は地に伏す青龍達を嘲り笑う。

『ふざ…けるな…』

青龍はなんとか立ち上がろうともがくが出来ずに崩れ落ちる。

（…すまない昌彰…）

六合と青龍の意識は徐々に闇に飲まれようとしていた。だが…

「青龍！六合！」

『『！？』』

この場にいるはずのない者の声。その声で再び二人の意識が浮上する。

†††††

（どうなっとるんや…さっきから…妖気がどんどん減っていってる――）

そう考えている間にもゆらはその気配が蠢く場所に到着した。

そこでゆらが目にしたもの、それは異質な妖気を放つ刀に斬られる青龍の姿だった。

（！？――青龍があんなに苦しんでる？まさかあの刀は…）

通常十二神将が傷を負ったとしてもあそこまで苦しむのはありえない。

（巫蠱（ふこ）術…なんでそんな刀妖怪がもっとるんや！？）

だが蠱毒を取り込んだ妖刀ならば…

目の前で今度は六合が斬られ、地に伏す。

「青龍！六合！」

気付いた時にはゆらは叫んで駆けだしていた。

青龍と六合は今の昌彰が使える式神の中で最も通力が強い。その二人がやられている…

（私の力が通じるかはわからん…けど！）

ゆらは呪符入れから式神の札を引き抜き、玉章の前に立った。

「貪狼！禄存！武曲！廉貞！」

今出せる最大戦力、四体の式神を同時召喚する。

（せめてお兄ちゃんが来るまでくらいの時間は稼ぐ！）

ザヒュッ…

「え…貪狼…禄存？（まさか…今の一撃で！？）」

一瞬で呼んだ全ての式神を還され、ゆらは動揺する。

「何のつもりだ…？ん…？」

「！っ…の…『臨める兵　闘う者　皆陣列れて前に在り』！」

咄嗟にゆらは昌彰から習った九字真言を叩きつける。

「…フン…」

だが玉章は魔王の小槌を一振りするだけで、放たれる霊力の刃を無力化した。

「消えろ…お前にはあの術師ほどの価値はない…」

魔王の小槌が玉章の頭上へと振りかぶられた。

第二十夜　変貌（後書き）

琥珀「なんとか更新できました！」

昌彰「まだ続くのか？早く終わらせろよ…」

琥珀「頑張るよ。少なくとも今週中に四国編は終わらせたいよ…だってし…」

昌彰「それ以上言わなくていい」

琥珀「はい…。…色々と詰め込み過ぎた感はあるんだよね…思い切って削っちゃってもいいんだけど書きたいし…」

昌彰「優柔不断…ちゃんと終わらせられるんだろうな？」

琥珀「頑張ってみます！四国編を終わらせるぞ！！そうしないと一カ月以上更新ができない可能性が高い！」

昌彰「頑張れよ、そっち（試験）も…」

琥珀「それでは皆様また次回！今週中には…やってみます！」

第二十一夜　終幕（前書き）

・・・今回は文字数少ない割にテンポが早いです。
一応戦闘はここで終了です。
ちょっと皆様からの反応が怖いです・・・

第二十一夜　終幕

†††††

「間に合えっ…」

昌彰は異質な妖気のする方向、玉章もいる方へ向けて全速で走っていた。

玉章が魔王の小槌で敵味方を問わず斬り殺し始めた時、昌彰は周囲の妖怪たちをも囲う姿隠しの結界を張った。

それによって玉章は昌彰の周囲にいた妖怪たちを発見できず、戦場は奴良組側の方へ大きく移動していた。

中から見えるあまりの惨状に側にいた妖怪たちは戦意を喪失したようで昌彰が玉章の方へ駆けていくのを見送るだけだった。

「貪狼！禄存！武曲！廉貞！」

風に乗ってゆらの式神を喚ぶ声が聞こえる。

（…ゆらの声！？まさかもう…）

その時、昌彰の目に一度見たことのある光景が飛び込んできた。

玉章の前に立つゆらと振りあげられた魔王の小槌が。

しかもゆらの後ろには青龍と六合が倒れている。

距離にしておよそ四十メートル…走っても間に合う距離ではない。

「ゆらっ！？」

夢で見た光景の再現。昌彰は既に知っている…

自分の手も術も…ゆらを救うには届かないと…

（それでも俺は…！）

ドクン…

昌彰の胸の最奥で脈動が起こった。

それと同時に今までにない異質なまでに凄烈な“畏”がその場に満ちる。

「っ！？」「なに…これ…？」

その波動の凄まじさに全ての妖怪たちは無意識に動きを止めた。時が止まったのではないかとさえ錯覚するほどに。

ドクンッ！！

再び昌彰の内から脈動が起こる。

その瞳の奥に宿るは仄白き炎。

その身に纏う青白い炎が走ることによって後ろに流されていく。

「お兄…ちゃん?」

「ムッ!?」

ゆらの零した呟きで我に返った玉章は目の前の術者を両断せんと刃を振り下ろす。しかし…

ギチンッ!!

昌彰が左腕に巻き付けた数珠で玉章の刃を受け止めた。

「『この術は凶悪を断却し、不詳を祓除す…』」

退魔の印を彫られた数珠の珠は、昌彰の炎を纏ってさらに輝きを放つ。

「『八剣は花の刃、此の剣は雷の刃…』」

昌彰の内からさらなる力の波動があふれ出る。

『この炎は…!?』『まさか…』

青龍と六合は絶句した。

「『向かう悪魔を打ち祓う草薙の剣』!」

突如として轟いた雷鳴が稲光を伴い、夜空を切り裂き、玉章目掛けて飛来する。

「グッ…」

玉章は刃を引き、飛び退りながら魔王の小槌と背負った骸で雷撃を受ける。

雷に触れた骸達は音も無く灰へと帰していく。

「ぐ…ぁ…」

玉章はなんとか刃で受け止めるもその余波だけで押し下げられていく。

「『風神召喚…』」

昌彰は六合と青龍の方を向き直り、そう唱えた。

名もなき風神の風が渦巻き、動けずに倒れ伏している六合と青龍を取り巻く。

『なっ!?』『昌彰!?待て!!』

主の意向を正確に読み取った神将二人はさせまいと声をあげるが、蠱毒に蝕まれた身体は言うことを聞かない。

風によって持ち上げられた二人はゆらが来た方向、天后の許へと運ばれていく。

そうするうちに玉章は雷撃の衝撃から回復したのか再びこちらへと突貫してきた。

視界の端にそれを認めた昌彰は素早く両手で印を組む。

「『しめよ、しめよ、金剛童子！』」

昌彰の内から沸き起こる波動を受けて、左腕に巻きついていた数珠の珠が弾け飛んだ。

組まれた印は―中指と薬指を絡め、人差し指と小指を伸ばして両手を合わせた―不動明王印。

キィンッ！

金属音に似た音を立てて、玉章を囲むように広がった数珠の珠を結んだ線から結界が立ち上る。

「なっ…！」

「『搦（から）めよ童子、不動明王正末のご本誓を以てし…』」

細い円錐を象るようにしながら結界が閉じていく。

ガキンッ！ギチッ…ギシッ！

魔王の小槌と結界がせめぎ合う。

未だ完成していない結界に徐々に魔王の小槌が食い込んでいく。

「『タラタカンマン、ビシビシバク、ソワカ』！」

昌彰の呪文を受けて、結界が完成し、玉章を閉じ込める。

だが、魔王の小槌を差し込んでいた部分は明らかに周囲の部分より弱まっていた。

†††††

「つ…うぅ…」

「リクオ様気付かれましたか？」

「つ…らら…？」

目を開けたリクオが最初に見たのは心配そうに覗き込んでくる氷麗の顔だった。

それと同時に刀と何かがぶつかるような音と玉章の放つ異質な妖気ともう一つ別な凄烈な畏が感じられ、リクオは一気に現実に引き戻された。

「状況はどうなった？」

「リクオ様が気を失われてからまださほど経っていません。先程から陰陽師が隠神刑部狸と対峙していますが…その…って何起きようとしてるんですか！？」

氷麗が言い淀んでいるうちにリクオは立ち上がっていた。

「オレも出る…」

「な…リクオ様！？」

氷麗たちが静止するがリクオは聞く耳をもたない。

「大将は身体はってこそだろ。それにあいつだけに戦わせておくわけにはいかない」

†††††

ギィンッ！ギンッ！パキッ…バキッ…パキャァンッ…！！

玉章がそこを集中的に攻め、結界を破壊する。

「『上来守護（じょうらい）の神霊、各々神威（おのおのしんい）を怒らせたまへ』！！」

だが、その隙に昌彰の唱えた神咒が完成し、無数の神霊が降臨した。

それぞれが手にした武器を玉章に向けて構え、放たれた弾丸のように象徴の神霊達は玉章に突っ込んで行く。

「ぐぅっ…！？」

玉章は目の前に迫る無数の武器に、魔王の小槌を振るって応戦する。

魔王の小槌に斬られた神霊は消滅するが、如何せん数が多い。

「がぁっ…」

纏った骸ごと切り裂かれ、無数の裂傷が玉章を苛む。だが…

「……」

次の瞬間昌彰の瞳から炎が消え、崩れ落ちるように倒れ込んだ。
それと同時に神霊達も消え失せる。

「お兄ちゃんっ！？」

ゆらが咄嗟に昌彰を支えるが、体格の差で支えきれるはずもなく、二人とも座り込んでしまう。

「何だ…さっきの畏は…」

玉章はそう呟きながら、座り込んでいるゆら達へと間合いを詰める。

「っ…ゆら…逃げ…ろ」

昌彰の声が聞こえたが、ゆらはキッと玉章を睨みつけた。

「『禁』ッ！」

ゆらは刀印で宙に五芒星を描き、障壁を築く。
だが、それは玉章に一刀の元に斬り伏せられた。

「まぁいい。これで厄介な相手は始末できる…」

「！お兄ちゃんっ…」

ゆらは昌彰を庇うように抱え込んだ。

ザンッ！…カランッ…

だがいつまでたっても覚悟した衝撃は来ない。

ゆらは恐る恐る目を開けた。

「何やってんだ？兄貴をつれて下がれ」

飛びこんできたリクオが玉章の面を斬りおとし、玉章の刃を抑えていた。

「何勝手に死ぬ覚悟を決めてやがる…そんなのお前の兄貴が望むわけねーだろーが！」

リクオは鍔迫り合いから一気に刃を打ちあげる。

跳ね上げられた腕の間を抜けるようにしてリクオは玉章に突っ込んだ。

身体全体でもって玉章を押しやり、昌彰やゆらから引き離す。

「まだわからないのかいリクオくん？」

ドガッ

「がっ…」

ザッ…ギィンッ！

弾き飛ばされ傷を負いながらも、リクオは玉章へと挑んで行く。

†††††

「こんなん…どないしたら…」

魔王の小槌の力でまさに百鬼を背負う妖怪となった玉章に対して、ゆらは対抗手段を思いつかなかった。

すでに自らの式神も、昌彰の式神も敗れ、己の術は通用しない。

昌彰は先程から意識が朦朧としているようで自分で立つこともままならない。

「ゆら…」

昌彰は懐から何かを取り出そうと身じろぎした。

「お兄ちゃん？大丈夫なん？」

そのまま立ち上がろうとする昌彰だったが、膝から崩れ落ちる。

「っ…すまないがその辺から適当な剣（つるぎ）を拾って来てくれないか？」

先程まで百鬼が入り乱れていた戦場にはそこらじゅうに妖たちが使っていた刀や剣が落ちている。

そのうちの一本を手にとってゆらは昌彰に差し出した。

「…すまない…」

昌彰はどこか苦しそうな表情でそれを受け取った。そしてまだ玉章と戦っているリクオの方を見る。

先程の神咒で全身に裂傷を負っていると言っても魔王の小槌で従えている妖怪の骸は大部分が健在。

取り込んだ妖気もまだ十分残っているようだ。このままではリクオに勝ち目はない。

「ゆら…俺はこれから闇に属する術を使う…」

昌彰はまっすぐにゆらの目を見ていった。

「え…？」

昌彰は自分の体力も霊力も残り少ないことを自覚している。

この状況では満足に戦うことはできはしない。

だが…

「すまない…」

白んだ空を背景に昌彰はゆらにもう一度謝ってから懐から人形（ひとがた）を取り出した。

†††††

「空が白んできたぞリクオ…」

玉章のその言葉と共に、リクオの放つ妖気が薄れていく。

「恨むなら非力な自分の“血”を恨むんだな…」

そう言って玉章は面の口元についた血を拭った。

――

（ボクは神通力を持つ父の血を…色濃く受け継いだんだ――）

だがそれは必要のない力だった…

共存という名の理想、ぬるま湯につかった様な四国では…

ただ存在し、何をするでもなく穏やかな時間が流れていく…

そんな現状に不満を持つ若い妖怪たち。それらを水面下でまとめあげ、玉章は新生四国八十八鬼夜行を作った。

そして…決定的な力を得た。それが魔王の小槌…

妖怪を斬ることで力を得るその刀を手にした…

――

「この街に来て一週間…とうとうこの玉章の“畏”が…奴良組総大将のそれを凌駕したのだ」

そう言って玉章は目の前に膝をついているリクオの顎に切っ先を当てて持ち上げる。

「リクオ様から！離れろぉお～～！！」

その叫びと共にリクオと盃を交わした側近、猩影が玉章へと襲い掛かる。

玉章は魔王の小槌を一振りしてその全員を払いのける。

「なぜ…貴様達はこんな弱い奴についていく？」

理解できないと言った様子で玉章は呟く。

「ああ？当たり前だろ……」

その言葉に青田坊はさも当然のように言い返した。

「玉章…てめぇの言うその“畏れ”。オレたちはテメェのどこに感じろってんだ？」

祢々切丸を支えにリクオはふらつきながらも立ち上がる。

「てめーは刀に踊らされているだけでてめー自身は…器じゃねーんだよ」

崩れ落ちそうになる体をどうにか持ちこたえ、リクオは続ける。

「ボクがおじーちゃんに感じた気持ちは怖さとは違う…」

強くて、かっこよくてでもどこかにくめない…だからみんなついてゆく――

「“あこがれ”なんだよ畏れ…ってのは」

――――

「（リクオ…）昼と夜の血が…混じり合ったか…」

それはかつて昌彰に誓った時にみせたリクオの姿。

昌彰はそれを見ながら心を鎮める。決して意思を揺らがせてはならない。

護るべき者達のためにも…

人形を地面に置き、剣を逆手に持ち替えた。

――――

「みんながいるこの組を守りたいんだ…ボクは気付いたそれが百鬼夜行を背負うということだ!!仲間をおろそかにする奴の畏れなんて――誰も…ついてきゃしねーんだよ!!」

「だまれ!!」

玉章はリクオの言葉を止めるために魔王の小槌を振り下ろす。

それは綺麗にリクオの身体を袈裟掛けに両断した。だが…

（何だ!?確かに斬ったはず…だが…手ごたえがない。何だ…畏れの発動?いや…姿は見えるぞ!?何なんだ今のは――!?）

動揺する玉章の視界に斬られたはずのリクオが祢々切丸を振り下ろそうとするのが映る。

（ぬらりひょんの新たな力か！？くっ…だが！）

玉章は背負う骸をリクオへと差し向けようとした。しかし…

「『怨敵降伏…急々如律令！』」

「なっ！？」

玉章は急激に力が失われていく感覚に襲われた。それだけではない。リクオに差し向けたはずの骸が灰となって崩れ落ちていく。

ズガァッ！

リクオの一閃が玉章の右腕を斬りおとした。

「うぉっ…うおおおおおおおお」

それと同時に玉章が呻きをあげた。

魔王の小槌で取り込んだ百鬼の力が抜け出ていく。

†††††

「ぐっ、が…」

昌彰は残された霊力を全てこの術に注ぎ込んでいた。

玉章の持つ刀は異常だ。今の昌彰では正攻法では歯が立たない。

ならばどうするか…

「やった…か？」

昌彰の視界にリクオが玉章を斬る光景が映った。

昌彰が行ったのは呪詛。相手の持つ妖力を減衰させ無力化する術。

それが玉章の最後の抵抗を抑え込んだのである。

まさしく全霊を注いだ昌彰は今度こそ地面に倒れ込んだ。

「ゆ…ら…」

「お兄ちゃん！？」

視線を巡らせてゆらの無事を確認した後、昌彰の意識は完全に途絶えた。

†††††

第二十一夜　終幕（後書き）

琥珀「な・・・なんとか戦闘終了までこぎ着けた！」

昌彰「文字数少ない割に内容詰めすぎだろこれ？俺は呪詛を使うし・・・」

琥珀「神にも魔にも等しく通じているからね。使ってもおかしくないでしょ？」

昌彰「もう少し使うことに対して葛藤があってもいいんじゃ・・・？」

琥珀「絞ったらこうなった。色々他にも書くとこあったんだけど、流れがね・・・」

昌彰「無茶をする・・・しかもあの人（？斉さん）は出さず仕舞い・・・」

琥珀「それこそ流れの問題だよ。出すタイミングを完全に逸したね」

昌彰「なんで出したよ？」

琥珀「だって四国出身だよ？出さないわけにはいかないでしょ？」

昌彰「そこで自分の首を締める・・・」

琥珀「ぐっ・・・ちゃんと出るよ？四国編の後に昌彰の実家（安藤家）に帰省する話を書くからその時に」

昌彰「ならいいけど・・・次話で四国編は終了かな?」

琥珀「うん・・・けどうまく占めらんないんだよね・・・」

昌彰「努力しろ」

琥珀「やってみる。次話はグダグダになる可能性大です!」

昌彰「早速言い訳用意するな!」

琥珀「それでは読んで戴いております皆様、ありがとうございます。
また次回お会いしましょう!」

第二十二夜　夜が明けて・・・（前書き）

四国編最終話です。
かなり短目になってしまいました。
微妙にギャグっぽいです。

第二十二夜　夜が明けて・・・

†††††

「お兄ちゃん?気がついた?」

次に昌彰が目を開けると飛びこんできたのは見慣れた天井と顔を覗き込んでくるゆらだった。

「ゆら…?今何時だ?あれからどうなった?」

ゆらが無事だったことに安堵しながら昌彰はそう問いかけた。

「まだ昼前や…そんなに時間は経ってへんよ」

昌彰が気を失った後、リクオの祖父や巨大な化け狸が乱入し、場を収めたらしい。

ゆらは戦闘が収束したのを見届け、天后と合流。天后と代わった白虎の風でアパートまで帰って来たそうだ。

「青龍と六合の容体は?」

昌彰にはそれが一番気がかりだった。普通の刀ならともかくあの刀で斬られた傷は神将であってもそう簡単には癒えないはず…

事実、青龍と六合の二人は意識はあるものの未だ動けず、霊符に戻ることもできない状態らしい。いまは別室で天后が看ているそうだ。

数百年前から妖怪を斬り、巫蠱術と為すことで力を得てきた刀だ。
そこに込められた蠱毒は想像を絶するものだったのだろう。

（あとで快癒の呪を施しておこう…）

昌彰の術だけでどれほどの効果があるかは分からないがやらないよりもましだろう。

そこまで話し終えたところで昌彰はゆらがしきりに目を擦っているのに気が付いた。

よく見れば目の下にははっきりと隈が見て取れる。

昨日から一睡もせずに看ていてくれたのだろう。

「ゆら。俺はもう大丈夫だからお前も寝ろ。昨日から一睡もしてないんだろう？」

「ああ…うん…じゃあちょっとだけ…」

指摘されて眠気が増したのか、ゆらはそう言うと昌彰の隣に潜り込んできた。

「っておい！？」

慌てて昌彰は掛け布団をめくりあげる。

「なんでここで寝る！？」

「だってコレうちの布団やもん…」

そう言ってゆらは再び布団を取り戻した。よく見ればいつも昌彰が使っている布団ではなく、ゆらが使っているものだ。

「オレの布団は？」

「六合と青龍に貸してる。敷布団と掛け布団を別にして敷いてるからなにも掛けるものがないって天后が言うてた」

そう言ってゆらはもう一度眠りの世界へと旅立とうとする。

「待て、俺はどこで寝ればいい？」

「…一緒に寝たらええやん…兄妹なんやから…」

「（いや、兄妹と言っても義理だし、しかも中学生になってまで一緒の布団で寝るのは…）」

などと昌彰が葛藤しているうちにゆらは完全に熟睡していた。

「…はぁ…」

いまさら起こすのも可哀想なので昌彰は布団から出て、六合と青龍の様子を見に行くことにする。

元々霊力の使い過ぎで倒れただけだ。多少寝てかいふくしているから、さほど問題ではないだろうと判断して昌彰は部屋を出た。

――

「…青龍、六合…」

リビングに六合と青龍は横たわっていた。

六合の左肩には夜色の霊布が巻かれ、青龍の右肩には天后がいつもつけている比礼（ひれ）が傷口を覆っている。

『昌彰様、具合はよろしいのですか？』

青龍の枕元に座っていた天后がそう気遣わしげに声をかけてくる。

まるで昌彰の方が重症だと言わんばかりに…

「ああ、霊力を使い過ぎただけだし、しばらく眠ったから問題ない。天后、少し手伝ってくれ」

昌彰は天后に手伝ってもらって、傷口を確認するために覆っている布を取り去る。

出血こそしていないが、傷口は紫色に腫れあがり、見ていて痛々しい。

快癒の咒（まじない）を施すも、傷口が微かに塞がるだけで体内に入り込んだ蠱毒を除くことはできなかった。

「俺の手には負えないか…一旦本家に戻って父上かお爺様に助力を…だが霊符に戻れない以上移動がな…あ…！」

そこまで言って昌彰の脳裏に一枚の紙が閃いた。

『昌彰様？』

「すぐに戻る。しばらく留守を頼む！」

それだけ言い置いて、昌彰は自室に戻ると一枚のチラシを探し出す。

それを引っ掴んで外へと駆けだした。

†††††

「ハァ…ねぇ氷麗、今からでも…「ダメです！」…ハァ…」

リクオは何度繰り返されたかわからない問答を口にした。

さすがに戦で負った傷がひどく、側近その他から絶対安静を言い渡されてしまったのだ。

「…？ねぇ氷麗…「ダメで…」じゃなくて、なんか屋敷が騒がしくない？」

「そう言えば…」

先程までそうでもなかったのに今は小妖怪たちが走り回り、隠れるような物音が響いている。

「ちょっと見てきますね」

そう言って氷麗は立ちあがった。

「若、お客様がお見えです」

氷麗が障子を開けようとした瞬間、外から毛倡妓が障子を開けた。

「毛倡妓、お客さんって…陰陽師ぃッ!?」

氷麗は毛倡妓の後ろに控えていた昌彰を見つけるなり大声をあげた。

「大きい声を出すな雪女、リクオの傷に響いたらどうする」

「あ…申し訳ありません若…って!なんで陰陽師がここにいるんですか!?」

「氷麗落ちついて!」

昌彰の言葉に咄嗟にリクオに頭を下げた氷麗だが、即座にまた昌彰を睨みつけた。

その剣幕にリクオが慌てて起き上がろうとしたほどである。

「今回の戦について聞きに来ただけだ。なにしろこっちは最後の最後で気絶してたからな。ついでに見舞いも…」

とりあえず氷麗を落ち着かせようと昌彰は果物の詰め合わせを見せながら言葉を紡ぐ。

「なら私が説明しましょう!」

そう言って氷麗は昌彰を追いだそうと背中を押した。

「待って氷麗！」

しかし、それをリクオが呼びとめる。

「若？」

「せっかくお見舞いに来てくれたのに追い出すのはよくないよ。ボクが話をするから」

「はい…」

リクオにそう言われては、氷麗は言い返すことなどできない。

静かに障子を閉めて、毛倡妓と共に部屋を離れていった。

「すまないリクオ…気を使わせて…」

「気にしなくていいですよ？」

そう言いながらリクオは身を起こした。

「それで？なんでわざわざ？」

「いや、まずはホントに戦の顛末を聞きたかったんだ。ゆらから戦闘が終わったことは確認しているが…事後処理はどうなったかが分からなくてな」

「そうですか…一応『犠牲になった者を全て弔う』って条件で手打ちにしました。玉章はあの刀を失った後、まるで抜け殻のようになってましたから」

「そうか…もう一つの話はその刀だ。そいつはどこに？」

戦の決着が無事についたことに安心した昌彰だが、目下の懸案事項はその刀だ。

神将をも戦闘不能にするほどの蠱毒を宿した刀。

「わかりません。玉章の側近だった夜雀がそれを持ってどこかへ消えたんです…」

「そうか…」

結局あの刀に関することは分からずじまい。重苦しい沈黙が部屋を支配する。

「……そうだ…リクオこのチラシに心当たりはないか？」

その雰囲気を掻き消すように昌彰はそう言って持ってきたチラシを見せる。

「これって…『薬鴆堂』！？」

「やっぱり知ってたか…」

リクオの反応に昌彰は自分の予想が当たっていたことを確信する。

「鴆は毒鳥の妖怪。それを薬局の名前に使うから珍しいと思っていたけど…」

「なんでそれを昌彰さんが！？」

リクオは驚きを隠せない。薬鳩堂はリクオの義兄弟、鳩の経営する妖怪薬局だからだ。

「ん？単に夜警に出てたら道で拾ったんだ。それよりリクオ、ここに口利きしてもらえないかな？」

「え！？」

リクオの瞳が驚きでさらに見開かれる。

「…俺の快癒の咒いだけじゃ完全には治せなくてな…」

昌彰の脳裏に六合と青龍の姿が甦る。昌彰の快癒の咒だけではさほど効果がないも同然だった。

「…わかりました。鳩さんに伝えておきます。場所はこのチラシの通りです」

昌彰の表情から悲痛な色を読みとったリクオは即座に応じた。

神将二人の苦しみようが尋常ではなかったのも覚えていたのであろう。

「それから昌彰さん…こちらからも一つお願いしてもいいでしょうか？」

「なんだ？」

立ち上がりかけていた昌彰はリクオの言葉に再び腰を下ろした。

「実は昌彰さんに…」

†††††

このリクオの頼みが、昌彰にとってもう一つの懸案事項になるのだが…それはまた後の話…

第二十二夜　夜が明けて・・・（後書き）

琥珀「なんとか無事?に四国編を終了させることができました！」

昌彰「にしても強引だな?短いし」

琥珀「う・・・。うまくまとめきれなかったのが本音です。下手に長く書いてもグダグダになるし、蛇足になりそうだから・・・ね?」

昌彰「何が、ね?だよ・・・。まあ一応四国編が終了したわけだから、次回からの展望を聞いておこう」

琥珀「えっと・・・予定ではまずキミの実家に帰省する話を書きます。でその後邪魅編は夢幻さんとのコラボの方へ行くので介入しません。コラボ終了後に過去編、そして京都編に突入します！」

昌彰「で、問題は羽衣狐さん。原作じゃあ晴明様の母親になってたけど・・・」

琥珀「そこは改変を施す予定。そのせいで過去編はちょっとややこしくなるかもしれない」

昌彰「当然鵺も違うんだよな?」

琥珀「うん。予定では少年陰陽師の方から色々と引っ張って来るつもり。詳しくは言えないけど」

昌彰「それじゃそろそろ締めるか。作者」

琥珀「読者の皆様、此度の拙作『浮世絵町　～孫と孫の血を継ぐ者～』を読んでいただきありがとうございます。無事にここまで辿り着けたのも読んでくださる皆様がいて、感想をいただいたり、お気に入り登録をしていただいたりと温かく見守ってくださったお陰です。今後も頑張って執筆していきますので引き続き読んでくださると嬉しいです。長くなりましたが、読んでくださる皆様に感謝の気持ちを捧げつつ、また次回お会いするのを心待ちにしておりますそれではまた次回お会いしましょう」

第二十三夜　昌彰帰省物語（前書き）

ようやく更新できます！

と言っても短いです。しかもオリジナル…（完成度もちょっと低いかも…スランプ気味です…）

とにかく更新したかったので上げます。

長かった…だが、地獄（期末試験）は終わった！

第二十三夜　昌彰帰省物語

東京…皇居―宮内庁・第零課　陰陽寮

『認証パス、確認シマシタ』

指紋認証、静脈認証、網膜スキャンの三つの障壁をクリアし、昌彰はそこに足を踏み入れた。

「実家に帰っても誰もいないんだからな…わざとか？」

ここは皇居の中でも限られた人間しか出入りできない場所だ。

入るだけでも一々面倒なのである。

『若明も昌樹も忙しいのだろう。これぱっかりは文句を言っても始まらない』

六合は隠形したままそう言った。

先日の四国戦で受けた蠱毒によって一時行動不能にまで追い込まれたが、リクオの頼みを受けた鳩の治療によって、なんとか動けるような状態にまで回復したのだ。

もっとも万全の状態には程遠いが…

妖怪から治療を受けることに青龍は最初こそ渋っていたが、天后に押し切られる形で治療を受け入れた。

とは言っても、体内に残された蠱毒は完全に解毒できず、未だ凝(こご)ったままである。

「だからって…「昌彰！」」

昌彰が声をかけられ振り向いてみれば、そこには黒スーツ姿の男がいた。背丈は昌彰より少し高いくらい。

役人のようにスーツを着てはいるが身のこなしは一般人のそれではない。

「成昌兄さん！」

十四歳年の離れた従兄の成昌だ。

「久しぶりだな！」

成昌も久しぶりの再会に昌彰の方へ駆け寄って来た。

「うん！この前会ったのは…一年くらい前だっけ？」

対する昌彰も普段ゆらに見せている兄としての顔はなりを潜め、今は普通の弟のようにしている。

「東京(こっち)に来てたんだろ？たまには帰ってこい。稽古にも付き合うぞ？」

そう言って成昌は昌彰の頭をクシャリとなでた。

実際、成昌は昌彰が生まれなければ昌樹（昌彰の父、成昌にとって

の叔父）の跡を継ぐ予定だった程の術者である。

昌彰が生まれたからは叔父の後継とされた歳の離れた従弟を支えるために自分の使える術を手とり足とり教え込むほど昌彰を気にかけていた。

「うん。けどゆらをあんまり一人にするわけにもいかないし…」

「そうか…うまくやってるのか？」

「うん」

仲よく話す様はさながら本当の兄弟のようである。

『久しぶり…と言っておこうかな成昌。息災のようだな』

その様子を見ながら六合は隠形したまま成昌に声をかけた。

「この声は…六合か。そうだな分御霊（そっち）のお前に会うのは久しぶりだな。元気にやってるよ」

成昌は苦笑を浮かべながらそう言った。

『それよりも昌彰…昌樹のところに行くのだろう。急がねばまた小言を喰らうぞ？』

「っと、そうだった。成昌兄さん、また後で」

「ああ。またあとでな」

六合に促された昌彰はそう言って成昌と別れ、当初の目的であった昌樹のいるであろう執務室に向かった。

――

コンコンコンッ

「開いている。入っていいぞ」

昌彰がノックすると中から入室を許可する声が聞こえた。

「失礼します」

一礼して昌彰が中に入るとそこには二人の老人と四十代後半くらいの男性がいるのが目に入る。だが…

「お爺様もいらしたんですか…」

一方の老人を認めた瞬間、昌彰は眉根が寄るのを自覚した。

「なんじゃ昌彰や。人の顔を見るなり顔をしかめよって…昔は爺様爺様言ってわしの後をついてきとったに…」

「いつの話ですか…」

好々爺然と微笑む若明に、昌彰は溜息を禁じえない。

昌彰の祖父、若明は仕事で面倒を見られない昌樹に代わって、幼少期の昌彰の面倒を見ていた。

たしかに若明が言ったような時期もあったことはあった。

「先の戦では最後の最後で気絶したと言うではないか…丹精込めて術を教えていったというのに…爺様は情けない、情けないぞ…」

そう言いながら扇の影で涙を拭う真似なぞしている。

まぁその時から陰陽術の基礎やらなんやらを叩き込んでのは確かだが、その後がまずかった。

若明は『習うよりも慣れろ』が基本方針であるらしく、除霊の現場にまだ術を実際に使ったことのない昌彰を連れていって即刻実戦に放り出したのである。

もっとも今になって思い返せば、若明が本気を出すまでも無く祓えるほどの弱い弱い悪霊で、当時の昌彰でも術さえ発動させれば祓えない相手ではなかった。

護符もきちんと持たせ、万が一の事がないように配慮もしてくれていたようだが、何も知らされてなかった昌彰からしてみれば、信頼していた祖父からいきなり化け物の目の前に突きだされたようなものだ。

最後は単純に霊力を暴発させた昌彰がその悪霊を祓ったわけだが、それでもその時の恐怖はトラウマになりかねないものだった。

「確かに座学はお爺様に教わりましたが、実践は全て成昌兄さんに指導して頂いたはずですがね」

そんなことがあってから、若明から離れた昌彰は成昌に教えを請う

ようになったのだ。

成昌もこの教育を受けたらしく、『実戦での勘を掴むのはいいが、まずは伝えておいてくれよな』とぼやきつつ若明に対して諫めていたことを憶えている。

「だいたいお爺様は…「昌彰、お客様の前だ。言葉は慎みなさい」…すみません父上…」

父の昌樹が果てしない舌戦に突入しそうだった昌彰を窘める。

「?斉殿も申し訳ありません。お見苦しいところを…」

「お気になさるな昌樹殿。若明にその話を伝えたのはわし…責任の一端はわしにある」

もう一人の老人、榎本?斉がそう言って場を取り成した。

「父上こちらの方は……。ん…?斉…?」

昌彰はようやく?斉の存在に気づいたのか、記憶を辿るように視線を彷徨わせた。

「(そう言えば昔…)…あの?斉さん!?」

昌彰の脳裏にまだ安藤家にいたころの記憶が甦った。

「思い出してもらえたかな」

「ええ。お久しぶりです」

幼いながらも祖父の若明を『喰えない狸爺』だと思っていた昌彰にとって、正面から若明と（舌戦において）まともにやりあえる？斉がとてつもなく印象に残っていた。

「でもなんでこっちに…？」

「四国は榎本家の管理下だからね…今回の八十八鬼夜行の侵攻を防げなかったのはうちの落ち度だ…」

そう言われて昌彰は？斉の榎本家が四国ゆかりの陰陽師であったことを思い出した。

「しかし、四国と言えば妖怪と人間の共存を為しえた土地…何故そこから…」

四国はかつて起こった敗北によって牙を抜かれた隠神刑部狸と穏健派として有名な榎本家。

江戸からずっと妖怪は人の間に混じり、静かに時を過ごしてきたはずだった。

「昌樹…」

若明は目線だけで昌樹がその先を口にするのを抑えた。

「…そう言えば昌彰。帰って来た理由はなんだ？単に里帰りってわけじゃないんだろう？」

「え、ああ、はい…六合と青龍の事で…」

昌彰もあからさまな話題の転換だとわかってはいたが敢えてそれに乗った。

ここで追及してもはぐらかされてしまうのがオチだからだ。

それにここに来た本来の目的は…

「六合、青龍」

『ここに…』『…』

六合は普段と変わらず無表情に、青龍は仏頂面を滲ませて昌彰の背後に顕現した。

「久しぶりじゃのう青龍、六合…じゃが…」

「ここまでとは…」

若明も昌樹も驚きを隠せない。それほどに六合と青龍に纏いつく蠱毒の瘴気が濃かったのだ。

「っ……」

?斉も思わず呻きを漏らした。

「…二人とも…本当にすまない…っ！」

昌彰は思わず二人に謝った。二人を戦場へ差し向けたのは他でもない自分であるのだから…

パシンッ！

「痛っ！？」

『アホかお前は…』

青龍が呆れたように昌彰の頭をはたいた手を振った。

『お前は俺たちを守るために善後策を尽くした。この傷は我らの落ち度に過ぎん』

六合もぐりぐりと昌彰の頭を撫でまわす。

「だ、だけど…」

『我らはまだ生きている。記憶を失っていない。大事なのはそこだろう？』

出来の悪い息子を諭すような二人の神将を父と祖父である若明と昌樹は微笑ましげに見ていた。

自分達にも似たような経験があり、その時もこうして神将達が親のように支えてくれた。

「昌彰、依り代をこちらに」

一通り神将達が話し終えたところで若明が昌彰を呼んだ。

六合と青龍が霊符へと戻り、昌彰は分御霊の依り代であるお守りを

若明に渡す。

若明はそれを開いて十二枚の霊符を取り出した。

「ふむ…昌樹、賢所（かしこどころ）へ」

十二枚の内の二枚、即ち青龍と六合の宿る霊符を調べて若明は顔を歪め、昌樹に指示を出す。

「承知しました」

即座に昌樹は内線をつなぐ。つないだ先は八咫鏡（やたのかがみ）の依り代を祀る賢所。

「六合」

『ここに…』

若明の後ろに神将が顕現する。放たれる神気は昌彰にも馴染みのある“木”の気。

木将六合の気配。だがそれは普段昌彰の配下にいる者とは段違いの神気を放っていた。

“本霊”…平安の時代より安倍家、ひいては安藤家を護り続ける十二神将。

「これを持って風音殿のところへ。昌彰、お前も一緒に行きなさい」

若明は六合に命じると昌彰にもついていくように促した。

『承知』「わかりました」

†††††

「父上…」

昌彰と六合が出ていった執務室で昌樹は口を開いた。

「あれほどの蠱毒…やはりお前の予想通りだのう?斉…」

「魔王の小槌…か」

安藤、榎本、そして花開院。その全てにおいて魔王の小槌の詳細について知る者はない…

陰陽師のあずかり知らぬところで生まれた刀。

妖の間では覇者の証とまで呼ばれる程の力を秘めた刃…

「ちょうどいい機会かもしれんのう…。昌樹、“剣(つるぎ)”を昌彰に渡す手筈は?」

「すでに成昌が手筈を整えてあるはずです…それに…」

昌樹は思わず口籠る。その先を口に出すべきか否か…

「あの“炎”は使わせるべきではない…か」

『十二神将の総意だ。お前たちにもあの炎を抑えることはできん…』

若明達の背後に濃色の髪を持つ炎の神将が薄く顕現した。

薄くとはいえ、放たれる神気は先程の六合の比ではない…

その神将の言葉に若明と昌樹は唇を噛むしかない。同じ血を引いていながら自分達に出来ることは何もない…その無力さを噛みしめながら。

『出来るとすればそれは…』

炎の神将は遙か過去へと記憶を辿る。そこにあるのは血に翻弄され、己の魂までも焼き尽くされそうになった少年の姿。

自ら次代の主と見定めた者の命の危機に己は無力であった。

それを止めることができたのはたった一人の少女。

常にその少年の傍らにあり、生涯を添い遂げた想い。それだけが少年の血の暴走を、炎を鎮めることができた…

『此度の次代にもいるだろう…』

そう言うと炎の神将は隠形し、姿を消した。

第二十三夜　昌彰帰省物語（後書き）

琥珀「読者の皆様お待たせいたしました!!朧月琥珀、帰ってまいりました!!」

昌・ゆ「遅い!!（#、Д,、）ノ」

琥珀「すみませんでした!ごめんなさい!申し訳ないです!本当にすみません!!m（＿＿;）m」

昌彰「だいたいどうして一カ月以上更新していない!?」

ゆら「いくらなんでも遅すぎるやろ!?」

琥珀「すみませんでした!!m（＿＿）m　試験前の地獄、試験中の地獄を抜けて、心身ともに満身創痍でありました。」

昌彰「で?結果は?まさか再試を食らいましたとかじゃないだろうな?」

琥珀「無事に全教科一発で通りましたから大丈夫です。さすがに通りませんでしたじゃ申し訳が立ちません…はい…m（．＿．）m」

ゆら「ならさっさと書きや。これの後はコラボがあるんやろ?」

琥珀「いや…実はまだ帰省物語は完結してなくて…まだ後半部分が執筆中だったり…」

昌・ゆ「（＃＾＿＾）」

琥珀「しかも、次の話は前半の部分部分しか書けていないという始末…」

ゆら「『滅』！！」

昌彰「『怨敵降伏　急々如律令』！！」

琥珀「ぎゃぁぁぁ～～～！？」

昌彰「ふぅ……読者の皆さますみません。うちの馬鹿作者が…」

ゆら「責任もって次話を書かせますのでしばしお待ちください」

琥珀「あの～」

昌彰「もう生き返ったのか？…で何の用だ？」

琥珀「何の用だって…自分一応作者…」

ゆら「『一応』って言ってるあたりが情けない…。で？」

琥珀「実は…春休みみたいにバ…（昌・ゆ）「消え失せろ！！（＃、Д,）＝Ｏ」グハッ！？」

昌彰「言い訳はさせない。というかしたらさすがに見放されかねんぞ…」

ゆら「絶対に書かせる。さすがにこれ以上書かないのはヤバイ…」

琥珀「…ググッ……書く…書くしかないんだ……ガクッ」

マジでバイトが週五で入りそうですが執筆活動はやります！
というか普通に書きたい！！でも書けない…これが…一か月も放置した代償だというのか…

と、とにかくできる限り更新はします！！

第二十四夜　続・昌彰帰省物語（前書き）

できた―！

前話から五日…お待たせして申し訳ありません！

第二十四夜　続・昌彰帰省物語

†††††

―賢所・門前―

「六合…ここでいいんだ、よね？」

そう言う昌彰の顔色は些か悪いように見受けられた。

『ああ…。どうした？いやに緊張しているようだが？』

「それはそうだよ…」

賢所と言えば宮中三殿の一つ。掌典（神職）と内掌典（巫女）によって護られた宮だ。

本来なら帝守護陰陽師といえど、おいそれと入れるような場所ではない。

ましてや昌彰はまだその位についてさえいないのだから。

『今回は気にする必要はない。今は誰もいないからな…』

そう言って六合はさっさと宮の中へ入っていく。

「ちょっと…待ってよ六合。それってどういう…」

慌てて追いかける昌彰だったが宮に入ってすぐに六合の言った意味

がわかった。

静かすぎる…全く人の気配がしない。普段ならありえない状況だ…

「なんで誰もいないんだ?」

昌彰の呟きは誰もいない宮の中に溶けた。六合は気にすることなく廊下を奥へと進んで行く。

そうして奥まった一室に辿りつくとその歩みを止めた。

『風音、入るぞ』

六合はそう言って躊躇いも無く部屋へと足を踏み入れた。

「彩(さい)…六合!」

中にいた巫女装束を纏った痩身の女性が六合に飛びついてきた。

『風音…昌彰がいるのに気付いていながら何故飛びついてくる?』

「だって…会えると思ってなかったから…嬉しくってつい…」

ようやく恋人に会えた乙女のような…いや、まんまそうなのだが…

風音を六合は抱きとめ、軽く頭を撫でる。

「えっと…風音…さんですよね?」

昌彰は幼いころに幾度か会ったことがあるだけで確信が持てずに訊ねた。

「ええ。昌彰、久しぶりですね」

風音はようやく六合から離れて昌彰に軽く頭を下げた。

「……」

昌彰は沈黙するしかない。昔あった時はホントに幼くて風音と六合の仲を推し量ることができなかったわけだから当然だ。

「そう言えば六合、来た用件は？昌彰もついて来たってことは分御霊に関係あることなんでしょう？」

風音の中では完全に六合の来訪が主で、昌彰は付属扱いになっている…

『ああ、分御霊…俺と青龍にかけられた蠱毒の浄化だ…』

そう言いながら六合は霊符を包んでいた夜色の霊布を解いた。

「っ…これ…」

若明達と同様に風音も息をのんだ。

『若明達でさえ浄化は困難だと判断した。風音…頼めるか？』

分御霊とはいえ六合の受けた苦痛を想像し、顔を歪める風音の肩に手を触れながら六合はそう言った。

「ええ…」

風音は道返(ちがえし)の聖域にあり、黄泉比良坂(よもつひらさか)をその身を以て封じ、黄泉からの軍勢を退ける神、道返之大神(ちがえしのおおみかみ)の娘である。

その身に宿す力は人間の比ではなく、その身に流れる血には死したもの者をも呼び覚ます力さえも持つ。

そして土の性を持つ彼女の神気は生きとし生ける者全てを育む力も持つ。

彼女の元に預けて浄化すればいくら強力な蠱毒であろうと解毒できるだろう。

「あ…でも六合と青龍が抜けたら昌彰の元にいる闘将が…」

今の昌彰が召喚できる神将―青龍、六合、朱雀、白虎、天后、天一、玄武。

その中でも攻撃の術(すべ)を持っているのは青龍、六合、朱雀、白虎、天后の五人。

その中でも青龍と六合は闘将として別格というべき通力と神気を持っているのだ。

その二人が欠けるとなると戦力の極端な低下は免れない…

『そこは私が補おう』

昌彰の背後に肩につかない位置で切りそろえられた漆黒の髪を翻し、黒曜の瞳に笑みを浮かべた女性の神将が顕現した。

本霊の六合には及ばないながらも苛烈な凶将の神気が零れ出る。

『勾陣か…』

「久しぶりね。勾陣」

六合と風音の二人もならば安心だというように笑みをこぼす。

勾陣は十二神将最強の騰蛇に次ぐ二番手に座している。その力は青龍や六合をも凌ぐほどだ。

『昌彰、これからよろしく頼む』

勾陣はそう言って昌彰に向かって頭を下げた。

「それは俺の台詞だ。よろしく頼む、勾陣」

昌彰も放たれる神気の強さが六合や青龍と段違いであることから勾陣が本当に十二神将の二番手であることを実感するのであった。

カンカンッ！カツンッ！

「ん？」

いきなり窓の方から何かがガラスを叩くような音が聞こえて昌彰はそちらを振り向いた。

「鴉？」

『嵬か』

六合が窓に近寄って開けてやると空中にホバリングしていた鴉は一直線に風音の元に向かった。

「嵬！久しぶりね！」

『姫もお変わりないようで安心しましたぞ！』

「しゃべった！？式かなにかか？」

いきなり鴉がしゃべりだしたことに昌彰は驚いた。

『むっ！？何者だ？我は道返大神に仕えし守護妖！式などとは侮辱も甚だしい！』

「す、すみません…」

鴉の守護妖、嵬の勢いに呑まれるようにして昌彰は思わず頭を下げた。

『落ちつけ嵬。これは若明の孫の昌彰だ。我らが次代の主、暴言は許さんぞ？』

『ふむ…』

嵬は風音の肩に止まって昌彰の方をじろじろと眺めまわした。

『初（はつ）に相見（あいまみ）える安藤の次代よ。我は道返大神に仕えし守護妖にして我らが姫の守り役だ。以後見知っておくとよい』

と尊大な態度で頷いた。

『というか十二神将六合！我を気安く『嵬』と呼ぶでない！』

ガオゥッと嵬が六合に吠える。

「嵬…まだ認めないの？」

風音と六合が互いを知り得て約千年。未だに反応が初々しかったりするのは、偏に嵬を筆頭にした守護妖たちの妨害があったからだ。

特に嵬は外見が普通の鴉のため（他の守護妖は大百足、大蜘蛛、大蜥蜴。どれもでかすぎる）、ちょくちょく出雲の聖域から風音の元にやって来ては六合と諍いを起こしたりするのだ。

「…これって長くかかるのか？」

言い争いというか嵬が一方的に捲し立て、六合がそれを受け流すと言った構図だが、一向に衰えぬ嵬の勢いに昌彰は傍らに立って面白そうに見ている勾陣に訊ねた。

『ああ、こればっかりは千年前から変わらんな…』

苦笑混じりに勾陣は視線を嵬を諫めようとしている風音に向けた。

†††††

『にしても六合も職務怠慢よね…』

ふわふわと栗色のツインテールに風を纏わせ、宙に浮いている少女の神将、太陰が呆れたように桔梗色の瞳を軽く眇めた。

嵬が落ちついた後に出てきたのだが、今度は六合と風音の空気に当てられ早々に退散したわけだが…

あの後、風音に押し切られる形で留まることになった六合を風音のところに残して昌彰達は陰陽寮に向かっていた。

『太陰、それを言ったらお前も玄武を引き留めたりしてるじゃないか』

そう言いながら勾陣がニヤリと人の悪い笑みを浮かべる。

太陰をからかっているのが丸わかりだが、その言葉に太陰はわかりやすいほど顔を赤くした。

『べ、別にそんなんじゃないわよ…そ、そう！玄武だから別にいいのよ！』

「いや、太陰理由になってないから…」

昌彰が子どもを見るような目を太陰に向ける。

『と、とにかく！玄武はいいの！！』

『落ちつけ太陰。出てきて早々惚気るな』

『だから惚気てなんか…』

再び収集がつかなくなりそうなので昌彰は二人を放置して先に進みだした。

『あ！待ちなさいよ昌彰！』

背後から太陰の呼んでいる声が聞こえた気がしたが昌彰は無視して先へ進むために角を曲がろうとした。

『だ・か・ら待ちなさいって言ってんでしょうがー！』

「つっ！？」

昌彰は本能的に危機を察知したのか咄嗟に後ろに飛び退った。

一瞬後に先程まで昌彰のいた空間を鎌鼬（かまいたち）が切り裂いた。そのままの勢いで壁にあたり、パラパラと破片を撒き散らした。

「うぉっ！？なんだよ太陰！？今の当たったら怪我どころじゃ済まないぞ！？」

『あたらなかったんなら一緒でしょ！それより若明から連絡があったわ。成昌の部屋に行くようにって。なんかお客さんらしいわよ』

風を読んだ太陰が若明の言葉を昌彰に伝える。

『だいぶ上達したな太陰。昔はこんな細かい作業は苦手だとか言っていたが…』

『私だって成長するわよ』

尤も今でも風読みのような作業は白虎が得意とするもので、その精度も白虎の方が上だ。

その分太陰の風は荒っぽいが速さにおいて太陰の風が勝るのだが。

「成昌兄さんのところに？」

どうせこの後行くつもりだったから何も問題は無いが…

『急いだ方がいいみたいよ？』

「お客って一体…まあ爺様の事だから嫌な予感しかしないけど…」

ほぼ予知に等しいまでの直感をひしひしと感じながらも昌彰は行き先を成昌の部屋へと変えた。

――――

「成昌兄さん、来たけど」

「おお、入れ」

どこか笑いを含んだ成昌の声が聞こえた。

「失礼しま…うわっ！？」

先程の六合のように昌彰はいきなり胸に飛び付かれた。

予想していなかった事態に急に、負荷のかかった身体が悲鳴を上げるがなんとか持ちこたえた。

「何なんだよいきなり…って…ゆらっ！？」

飛び付いてきたのはゆらだった。何があったのか知らないが、今までにないほど顔を真っ赤にしていた。

「ようやく来たか昌彰。お待ちかねだったぞお前の婚約者殿が」

「……何も変なことしてないでしょうね？」

顔を真っ赤にしたゆらを見て、昌彰が成昌を睨みつける。さらに何故か敬語だ。

「なに少し話を伺っただけだ。お前との同棲生活についてな」

常人なら軽く身がすくむであろう視線を成昌は飄々と受け流した。

「……色々言いたいことはありますけど、ひとまず置いときます。…なんでここにいる？」

後半の台詞はまだ抱きついているゆらに向けてのものだ。

「えっと…一応挨拶に行かなあかんと思てたから…」

ゆらはようやく昌彰から離れて俯いた。

「さすがだな。張っておいた早期警戒結界なんかの術的な防御は難なく突破して来たんだ。尤も、電子制御のここのセキュリティは突破できなかったみたいだがな」

「……」

『なんと言うか…大した行動力よね…』

成昌の補足に言葉を失う昌彰に太陰も呆れたように同調した。

一応ここは皇居の中だ。警備も生半可な物では無かったろうに…

「警備員に連行されそうになってるのを俺が引き取ってな。ここに連れてきた」

まあ色々と面白い話も聞けたしなと続ける従兄に昌彰は溜息を押し殺した。

「それに関しては礼を言うけど…。で、これだけ？他にないならお爺様達に挨拶に連れていって帰るけど」

すでに太陰と勾陣は霊符に戻ってしまっている。

「いや待てって！ゆらちゃんはむしろついでで、こっちが本命だ！」

そう言ってさっさと出ていこうとする昌彰を成昌は慌てて呼びとめた。

「ゆらがついでって言い方もどうかと思いますけど…」

昌彰は半眼になりながら振り向いた。

「悪い、俺の言い方がまずかった。っ、じゃなくて渡すものがある」

執務机に置かれたのは細長い桐の箱…

「何ですかそれ？」

ゆらはそれを見て首を傾げた。

いかにも古そうな箱…ちょうど刀が一本入りそうなくらいの大きさだ。

「お爺様からだ。昌彰開けてみなさい」

昌彰は素直に従って蓋を開けた。中から出てきたのは鞘に収められた一振りの剣（つるぎ）。

「退魔の剣…？にしてはさほど強力な呪力が感じられないような…」

普通の刀剣でも打たれて百年を超えれば徐々に霊性を帯びてくる。しかし、わざわざ渡すにしては普通すぎる。

「今の状態ではな。昌彰、ゆらちゃんにその剣を抜いてもらえ」

「え？うち？」

いきなり名指しされ、ゆらは戸惑ったように昌彰を見た。

「試してくれゆら」

「え…。うん…」

ゆらは差し出される剣を受け取ると柄に手をかけ、左右に引っ張っ

た。

「あれ?…え?……おかしい…なんで抜けへんの?錆びついてるとか?」

いくらゆらが抜こうとしてともまるで鞘と刀身が接着しているかのように剣はびくともしなかった。

「いや、問題ないよ。昌彰、お前がやってみろ」

昌彰はゆらから剣を受け取るとなんとなく目を閉じた。

ゆっくりと静かに刀身が鞘から解き放たれた。

刃には一点の曇りも無く、全体を仄かな白い燐光が覆っている。

「綺麗…」

その輝きにゆらは思わず溜息を漏らした。

「『降魔の剣』…十二神将の初代の主、晴明様が鍛えた降魔の剣本体の形代だ。四百年ほど前に天空の創った剣を元に創られたものだそうだ」

剣に見入っているゆらと昌彰に成昌が解説する。

「この剣は十二神将の認めた主たる人間にしか抜けない。さっきゆらちゃんはぬけなかったろう?」

昌彰は分御霊といえど十二神将を従えている。故に剣を抜くことが

できた。

「これなら普段から持ち歩いても問題ない。見つかっても模造刀で誤魔化せるからな」

そう言って笑う成昌に我に返った昌彰は問い返す。

「なんでそんな剣を俺に？」

当然の疑問だ。ある意味家宝とでも言うべきものをまだ未熟な昌彰に渡すのはどう考えてもおかしい。

「この前の戦い…」

「！」

先日の四国戦だ。あの時昌彰はリクオを庇うために下手に攻撃ができなかった。

「獣型の相手ならば、本能的に爪や牙をもって攻撃してくる。だが、人型となると…」

人型の妖怪はリクオ達のように刀や槍を用いて闘う。

素手で相手をするには分が悪すぎる。術で相対するには早い相手や乱戦では厳しい。

今の昌彰にはそれらに対抗する術がない。

「だからだ。俺たちは皇居（ここ）を離れることはできない。援護はできそ

うにないんだ」

まるで遠くで何か起こることを予見するかのような成昌の言葉。

昌彰は今の自分よりはるかに優れた星見と作歴の才を持つ成昌の言葉にはっとしたように従兄を見た。

頷く成昌に昌彰は剣を箱に入っていた竹刀袋に入れて背負うと成昌に向かって一礼した。

「謹んで拝命いたします」

そのまま部屋を出ようとする昌彰をゆらは急いで追いかけようとした。

「あ、ゆらさん！」

それを成昌が呼びとめる。

「はい？」

「昌彰を…よろしくお願いしますね…」

そう言う成昌の顔はまるで弟を案じる兄そのものであった。

「…はいっ！」

ゆらはいつも見ている、昌彰が自分にその表情を見せているのを。

だからこそゆらは願う。昌彰と共に闘うことを。

―――

ちなみに再び挨拶のために昌樹の部屋に戻った昌彰がゆらのことで若明からからかわれたりという話もあったのだが、ここでは割愛しておく。

第二十四夜　続・昌彰帰省物語（後書き）

琥珀「ふぅ～…よし！」

昌彰「多少遅くなったのは多目に見てやるか…疲れてるみたいだし」

琥珀「優しいね昌彰くん…今日はバイト休みだから頑張って書くからね」

昌彰「んじゃ、今回の話の解説くらいはしようか？」

琥珀「了～解。今回の話は昌彰くんの強化話です。以前凪時雨さんから直接戦う必要性があるのではないか？という意見を頂いておりましたので、今回の運びと相成りました」

昌彰「『降魔の剣』だよな。あれは元ネタは少年陰陽師の？」

琥珀「うん。これも凪時雨さんからの提案を頂いて色々と設定を足してみた」

昌彰「それから風音さんもでたな？」

琥珀「うん。六合だけバレンタインやホワイトデーにいなかったのは風音に会いに行ってたからだよ」

昌彰「なんで書かなかったし？」

琥珀「いや～その当時風音さんを出すかどうかはっきり決まって無かったんだよね…」

昌彰「ちなみになんで風音さんが賢所に？」

琥珀「脩子内親王とのつながりから、皇室付きの守り神（女性限定）みたいな感じになったっていう設定。もちろん安藤家と交流はあるよ」

昌彰「けど戦いには参戦しないんだろ？」

琥珀「天津神の娘だからね…パワーバランスの崩壊は必至だよ…だから戦闘には参加させられない」

昌彰「連載の方では東京が戦場になるような感じに見えたけど…」

琥珀「そこは護り限定で…」

昌彰「それじゃ、次話以降の話は？」

琥珀「いよいよ夢幻さんとのコラボの話です！！原作では邪魅編の時間軸ぐらいだと思っていただければよろしいかと…」

昌彰「いよいよか…」

琥珀「あ、その前に安藤家の人たちの設定を上げます。主に名前の由来の説明くらいしかないけど」

昌彰「それでは皆様また次回お会いしましょう！」

琥珀「次回からはしばらくオリジナルｏｒ少年陰陽師ベースの話になります。ただ…コラボの話は前振り部が異常に長くなる可能性が

…最初の内は『コラボか？』という状態になるかも…」

新規オリジナルキャラ設定（前書き）

ベースは少年陰陽師からです。

基本名付けは二人の名前の組み合わせからになります。

新規オリジナルキャラ設定

安藤家

安藤　若明（わかあき）
昌彰の祖父。
十二神将の本霊の主にして安藤家第二十四代目当主。
元第二十四代帝守護陰陽師（現在は引退状態）。それでも実力は現代における最高峰の陰陽師。

解説
名付けは晴明様＋若菜さん（少年陰陽師シリーズにおける晴明様の奥方）から。
性格はじい様をイメージ。

安藤　昌樹（まさき）
昌彰の父。
現役の第二十五代帝守護陰陽師。
十二神将は若明が存命のため主ではないが、神将達は昌樹の命にも従う。

解説
名付けは吉昌＋露樹（少年陰陽師の昌浩の両親）から。
性格は吉昌さんをイメージしたのですが…うまく掴みきれてない…

安藤　成昌（なりまさ）
昌彰の従兄。

宮内庁・第零課、陰陽寮に勤務する陰陽師。
昌彰を上回る予見と作歴の才を有する。陰陽寮の中では実力は最高クラス。

昌彰の実戦における術の師匠。昌彰が生まれるまで次期当主筆頭だったが、自分がそんな器ではないとどこかで感じていた。
昌彰が生まれたことによってその重圧から解放され、昌彰のサポートを行うことに全力を注ぐ。
しかし、仮に昌彰が花開院に婿入りした場合、順当にいけば当主となるので自らの研鑽は怠っていない。
昌彰が物心ついたころから本当の兄のように世話を焼き、術も正に手とり足とり教えた。

解説
名付けは成親＋昌親（少年陰陽師の昌浩の二人の兄）から。
性格も成親＋昌親をイメージ。

四国
榎本家

榎本（えのもと）　？斉（りゅうさい）
四国にある陰陽師の一派の頭領。穏健派として有名。
若明とは古くから親交がある。若明を言い負かすことのできる数少ない人物。
老体でありながらバイクを乗り回すほど活動的。

解説

晴明様の親友、榎?斉からです。名前がそのままなのは夫人の名前がないから…

道返の巫女から取ろうかと思ったけど…うまくできない…というわけでそのままという運びに。

性格やバイクに乗るといった設定は結城先生の書く少年陰陽師の現代パラレルの榎?斉をベースにしています。

オリジナルではないですが、風音さんの設定も入れておきます。

風音

道返大神の娘。

脩子内親王と親しく、また二代目の昌浩が帝守護陰陽師に叙されたのを機に安藤家と協力し、脩子を始めとした、皇族の守り神となる。

脩子が生涯独身を貫き、直系の血縁者が皇室から消えた時点で宮を去ろうとしたが、六合に引き留められ、彼の側にいるために思いとどまる。

以後、賢所に移り伯母である天照大神の巫女として生活している。

また、神の血を引いているために外見は二十歳前後から不老であるが、うまく誤魔化している。

珂神編での浄化が未完成な状態で復活したため完全な不死ではない。

解説

作者の独自解釈として、今の風音は十二神将と同じように、死ぬと記憶などを全て失い、新たな存在として再生するとしています。

第二十五夜　白昼夜　～交差する探偵と魔術師と陰陽師～（前書き）

今回は初めてのコラボ企画！
夢幻さんの『本格推理委員会』とのコラボになります！
ついにここまでたどり着きました！！長かったです。コラボをお受けして半年以上…
夢幻さんも長らくお待たせいたしました！
『本格推理委員会』で描かれた『コラボ事件！～孫と孫の血を継ぐものと白髪の魔術師～』の続編的なものとなります。
ただ自分の筆力ではまったく読んだことが無い人にわかるように書くのは少々厳しいものがありまして…
夢幻さんの本編を読んでいただいてからこちらを読んでいただくとわかりやすいかと思います。
こちらです←
『本格推理委員会』
ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ８３１８ｎ／
『コラボ事件！　～孫と孫の血を継ぐ者と白髪の魔術師～』
全八話。こちらからスタートです←
ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ８３１８ｎ／４７／

＊時系列というか時期というか…日付の設定がむちゃくちゃです。
向こうでは夏休み中の話なのにこっちでは夏休み前の設定です。
時系列は邪魅編くらいです。

事前にご了承ください。

第二十五夜　白昼夜　～交差する探偵と魔術師と陰陽師～

小中高一貫校…『木ノ花学園』。高等部だけで二千人近い生徒が在籍するこの学園には、他の学校には普通存在しえない委員会が存在する。

高等部四名、中等部一名、そして初等部二名。

合計七名の委員を擁し、高等部の理事長室を根城にするその委員会。

その名を『本格推理委員会』という。

全校生徒合わせて七千二百人余り、関係者を含めると一万人を超える人間が出入りする木ノ花学園。

そこで日々産み落とされる事件を解決するために、探偵の資質を持つ少年少女達を集めて組織された、それが『本格推理委員会』である。

その中に一人、探偵とは別の才を合わせ持つ者が存在する。

イギリス清教、第零聖堂区『必要悪の教会（ネセサリウス）』の一員、魔法名『ｈｏｐｉｓ６６６』…『我が存在が人々の希望とならんことを』

陰陽師と魔術師が交わる時、新たな物語が紡がれる。

―†―†―†―†―

「た、ただいま～」

バタンッ！キュ～…

そんな漫画みたいな音を立てて、ゆらは玄関に倒れ込んだ。

「ゆら、こんなところで寝るな。寝るなら布団に入れ」

続いて入ってきた昌彰は呆れたように言ってゆらの頬を軽くつついた。

「ふみゅ～…むにゃぁ…」

しかしゆらは完全に夢の世界に行っているのかくすぐったそうに反応するものの置きだす気配は無い。

「ま、あれだけの激闘が続けば仕方ないか…」

悪徳陰陽師との対決に、暴れ出した吸血鬼の殲滅。果てには…

（詳しくは夢幻さんの『本格推理委員会』の「コラボ事件！孫と孫の血を継ぐ者と白髪の魔術師」を参照してください）

そう呟いて昌彰はゆらの背と脚に腕を入れて抱え上げた。所謂お姫様抱っこという状態である。

もっともゆらは完全に眠りについており、気付くことはなかったが。

「朱雀、すまないが布団を敷いてくれないか？」

ゆらの部屋に入ると昌彰は朱雀を呼び出した。

『…俺は布団係か？』

金色の瞳に険を滲ませ、朱雀が顕現する。

「いや、誰でもよかったんだが弄るならお前が適任かなと」

『それだけのために呼ばれたのか！？』

「ま、それは置いといて早くしてくれ。いくらゆらが軽くても疲れる」

『……わかった…』

苦虫をかみつぶしたような顔をして朱雀が敷いた布団にゆらを寝かせ、そこで昌彰は手を止めた。

「……」

ゆらは帰ってそのまま眠ってしまったため、服装もそのままだ。

「……」

昌彰は布団の側に片膝をついたまましばらく沈黙していた。

頭の中では悪魔（情動）と天使（理性）が壮絶な戦いを繰り広げているのだが、傍から見たら完全に凍結（フリーズ）しているように見えただろう。

やがて脳内で決着がついたのか昌彰は黙ってお手上げだというように両手をあげた。

「天后、天一。ゆらの着替えを頼む」

『承知いたしました』

昌彰はそそくさと部屋を出る。時刻はまだ九時過ぎ。

そのまま寝るには少々早い。昌彰はお茶でも飲もうと台所に立った。

「しかし…これどうしたもんかな？」

湯気の立ち上るカップを手に自室に戻った昌彰はそう言いながら友人、速水零牙の忘れ物であるデジカメを見つめる。

「ゆらに見つかったら怖そうだし…」

その中に納められているのは昌彰の友人の零牙の想い人であり、ゆらの友人でもある少女、菅原雅の姿。

それだけなら何も問題はない。だが…見つかったら昌彰の命はともかく零牙の命は危ないかもしれない。

「うん。早いとこ返しに行こう…だけどその前にあれの封印処理についても考えなきゃいけないか…」

昌彰はそう言ってデジカメを引き出しに仕舞い、呪符入れから一枚の名刺を取り出した。

水晶の透かしの入ったそれに書かれていたのは…

『魔法使い派遣会社　アストラル』
代表取締役社長　伊庭　司
『あなたのご要望にあった魔法使いお貸しします』

先日、実家に帰省した際に渡されたものの一つだ。

パソコンを起動してメール作成のページを開いた。

名刺を見つつ、アドレスを打ち込み、仕事を依頼する旨を添えて送信した。

「今週末には片付けて来週末くらいに零牙のところへ行くかな」

昌彰は壁にかけてあるカレンダーを見ながらそう呟いた。

†††††

ところ変わって、不知木町一木ノ花学園

燦々（さんさん）と降り注ぐ夏の日差しが学園中央部に生えている巨大な樹の影を周囲に落としていた。

その影の中で幾多の蠢く者がある。この暑いなかスコップと鶴嘴（つるはし）を振るい、地面に人がゆうに五人は入りそうな大穴をあけている。

ここはＦＦＦ団（異端審問会）が構える異端審問の場。

「墓穴はまだか！？」

そこに会長を務める須山の声が響いた。

「あと少しです！放り込んだら即座に埋め立てられるように準備しております！」

「うむ！コンクリートも用意しておけ！」

「いや、『うむ！』じゃない！なんで今回は即座に埋められるんだ！？というか埋めるのが前提だよなコレ！？」

せっせと土が掻きだされていく穴の側で、白い髪のミノムシ…じゃなかった。ロープでぐるぐる巻きにされた『本格推理委員会』の主人公速水零牙が吠えた。

「だいたい、なんで相手方の主役のオレの扱いが登場からこんななんだ！？」

―コラボだからだよ零牙くん。キミの生みの親、夢幻さんからやっちゃっていいって許可は下りている。

「（あいつ…帰ったら覚悟しとけ！！）」

零牙が密かに作者（夢幻）暗殺を決意したその時、無情にもその命が奪われる瞬間がやって来た。

「会長！準備完了しました！」

「よし！それでは…速水…さよならだ…」

須山は寂しそうな声で言いつつ、満面の笑みを浮かべながら零牙から伸びたロープに手をかける。

「待て！待ってくれ！！せめて罪状を読みあげろ！大体、俺とミアの交際に関しては承認しただろうが！？」

零牙は必死で叫ぶ。今回に関しては周りの異端審問会のメンバーの殺気がこれまでの比ではない。

「ふむ。よかろう…早川審問官！こやつの罪状を読みあげてやれ」

「イェッサー！」

零牙を取り巻いた人垣が割れて、一人の青髪の男が進み出る。

「リュウッ！？」

零牙は親友の早川龍之介の登場に驚きで目を見開いた。

「なんでだお前？！この前お前はこいつらに裁かれたじゃないか！？」

この期に及んでまだ味方するのか！？と叫ぶ零牙を龍之介は華麗にスルーした。

「被告人速水零牙（以降この者を甲とする）は先日、クラスメイトにして彼女の菅原雅（以降この者を乙とする）と旅行に行くという背信行為を行っております！しかもお泊り込みの！！さらに部屋は一緒でダブルベッドだったと！！！！」

「どこまで調べた！？」

零牙の驚愕の声をＢＧＭに、周囲から物理的殺傷能力を持つほどの殺気が零牙の全身に突き刺さる。

「レイッ！お前という奴は…」

『なんてやつだ…』『恨めしい…』『もとい、羨ましい…』

嫉妬と怨嗟の呻きが周囲の人垣からさざ波のように聞こえてくる。

「ちょっと待て！それを言ったらこの前お前もオレ達と一緒に海に行っただろうが！？」

「あれは委員会の行事！今回のお前のは完ッ全にプライベートだ！！！」

零牙の抗議の叫びは龍之介に完全に一刀両断された。

「もういいだろう早川審問官。それではこれより速水零牙の処刑を行う！」

『『『『オオオオーッ！！』』』』

地の底から響くような声が唱和する。

「待て待て待てーっ！！」

♪～♪～♪～（運営の規定により歌詞は削除しました…）

突如として零牙の方からアップテンポな曲（少年〇陽師のＯＰテーマ、『笑顔〇訳』：曲名は平気なはず…）が聞こえてきた。

「な、何だ?」

「会長!携帯電話かと!」

(これは…白の方か…メールだな)

零牙は聞こえてきた曲に微かに安堵した。白い方の携帯なら見られてもさほど問題ではない。

黒の方はロックが掛っているから見ようと思っても見られないが…

「探知されると面倒だ。回収しておけ。ついでに返信もだ。犯行時刻が特定される恐れがある」

「了解しました!!」

意外と気のまわる須山の指示で龍之介は携帯を開いた。プライバシーのことなぞこの異端審問の場においては瑣末な問題だ。

「安藤昌彰という人物からのメールです。内容は今月末こちらに来るとのこと」

「ふむ…。都合が悪いとでも返しておけ。予定が決まったら連絡すると」

「あ、添付ファイルがあります。おおっ!?こ、この前撮った写真だそうです!」

そう言って龍之介は須山に零牙の携帯を渡した。

「！！こ、これは！！？」

ザワザワ、ヒソヒソ

先程とは違うざわめきが周囲の人垣に広がった。

（この前撮った写真って…あれか！！）

零牙はその反応に一つの活路を見出した。

開かれた添付ファイル。その画面に映し出されていたのは駅前に四人で並んだ零牙に雅、昌彰、そしてゆらだった。

「須山、今度来るのはその写真の二人だ。妹の方はミアの友達でな。みんなに紹介してやっても…「総員！この場で速水零牙を無罪とする！異論は！？」『ありません！！』…縄を解いてくれ」

最後まで言わずとも汲み取ってくれた須山は即座に零牙を解放した。

「やれやれ…リュウ？」

零牙は友を売った男、龍之介を睨みつけた。

リュウは顔を青くして打開策を探した。

「（！ヤバイ…）須山会長。もう一枚写真が…」

そして、みんなに一周して戻って来た携帯を見て、もう一枚の写真が添付されているのに気付いた。

「！（まさか…昌彰さん、あの写真も一緒に送ったんじゃ…）」

その言葉を聞いて今度は零牙が顔を青くする。

「！！！！…諸君！再び異端審問を開く！速水零牙を捕縛せよ！」

「…会長、もういません…」

龍之介が携帯を須山に渡す前に零牙は得意の神速でこの場から離脱していた。

後に残るのは解かれたロープとあまりの速さに呆然とするＦＦＦ団のメンバー。

「ふっふっふ…速水零牙よ…覚悟はいいな…？」

再び一同の間を巡る零牙の携帯。その画面を見て、ある者は怒りに拳を握りしめ、ある者は歯を軋らせ、またある者は凶器をその手に携えた。

「行くぞ諸君！異端者には死の鉄槌を！」

『サーチ　アンド　デース！！』

木霊するのは飢えた男達の叫び。怒涛の勢いを以て異端者、速水零牙の追跡が始まった。

その場に残されたのは打ち捨てられたスコップやロープ。そして零牙の白い携帯。

その画面にあるのはクレープを片手に頬っぺたについたクリームを雅に舐めとられている零牙の姿だった。

†††††

「はぁ…やっと解放されたよ～」

そう言って、前髪に花飾りをつけた少女はズルズルと壁伝いに座り込んだ。

ちらりと携帯を確認し、何の着信も無いことに不安で顔を曇らせる。

「レイの方は大丈夫だったかな？」

先程異端審問に引き出され、裁かれていた速水零牙の彼女でもある菅原雅である。

雅もついさっきまで美咲と杏をはじめとしたクラスメイトの女子に、この前浮世絵町に行った事を根掘り葉掘り聞かれていたのだ。

「なんとか安藤さんを紹介するってことで見逃してもらえたけど…」

ちょうどいいタイミングで携帯に四人で修に撮ってもらった写真が送られてきて無事に解放されたのである。

ちなみに自分で操作したため、もう一枚の方は見られていない。

「…でもやっぱ恥ずかしいな…」

もう一枚の方の自分と零牙が映った写真を見ながら雅は八重歯を見せて、はにかむように微笑んだ。

†††††

「いい加減に諦めろ！！」

その頃、零牙は未だにＦＦＦ団の追跡にあっていた。

『逃がすかー！！』『ウォォッ！！速水を殺せー！！』『二度と太陽を拝めると思うな！！』

クラスメイトが鎌やらマシンガンやらを振りかざして追ってくる光景はなかなかにシュールだ。

「っく…こうなったら！」

零牙はさらに走る速度をあげた。わき道にそれ、再び中央を目指す。

『山下！左翼を率いて回り込め！』

『了解！』

零牙は追い詰められないように巧みに包囲網の目を抜ける。

『早川！右翼の指揮を任せる！』

『イェッサー！』

そして追い込まれるように見せながら、最初にいた樹のところへ戻

って来ていた。

先程掘られた穴を飛び越え、少し離れた位置にあった小さな社の側を通過した。

「ここなら…」

振り返ってまだＦＦＦ団が視界に入っていないことを確認して、零牙は跳躍した。

『待てや　速水～！！！』『斬る！キル！ＫＩＬＬ！』

零牙の眼下を鎌とマシンガンを装備した軍勢が通過していく。

「ふぅ…助かった」

そう言って零牙は樹の枝の上で携帯を開いた。先程ちゃっかり回収したのだ。

表示されたままになっていた画像を保存し、本文を開く。

「『月末にそっちに行くから』か。何かあったのかな？」

再来週から夏休みに入る（※時間軸は気にしない方向でお願いします）。観光にでも来るのだろうか？

「ん？『Ｐ．Ｓ　大切なモノを忘れて行ったよね？』…！」

零牙は慌ててポケットその他、物が入れられるところ全てを探った。

「うわっ…なんで忘れてたんだオレ…」

目的のものを見つけられずに落胆する零牙。ちなみに探していたものは今現在昌彰の手の中にあるデジカメだ。

「うう…『お願いします。届けてください…できる限り早く…ホントに！』オレにとって命と同じくらいに…いや、それ以上に大切なモノなのに…」

メールを返信して零牙は携帯を閉じた。

「…あんまり遅くなるとミアが心配するからな…急ぐか」

零牙はそう呟くと枝から地面へと滑らかに降り立つ。

その際、何かが欠けているような気がしたのだが、意気消沈していた零牙はその違和感について深く考えることなくその場を後にした。

†††††

深夜一木ノ花学園、高等部校舎

「体育館から二階渡り廊下異常なし。後は…『…誰だ？』え？」

学園内を巡回していた警備員はいきなり脳裏へ響いた声に咄嗟に今さっき歩いてきた右側を振り向いた。

体育館から続く渡り廊下は窓から差し込む月明かりに満ちて白く輝き、先まで見通すことができる。

先程異常がないことを確認したばかりで特に不審な点はない。

「気のせいか？…っ！」

警備員が再び前を向いたその先。そこには白い…まるで死装束のような着物を纏った人影があった。

白い光の中でそれがもつ黒い髪が異常な闇のように浮かびあがって見える。

「な、な…」

振り返ったその影の顔、そこにあったのは鬼の仮面…

『わ…を……者は…誰だ？』

その影はひどく耳障りな、それでいて聞き取りづらい声で何かを呟いている。

そして、恐怖で身がすくんでいる警備員を尻目に廊下の角を曲がり、警備員の視界から消えた。

「ま、待てっ！？」

視界からその影が消えた瞬間、金縛りが解けたかのように警備員は駆けだした。

人影が消えた角まで走る。それにかかった時間はおよそ二、三秒。

「…いない？」

角を曲がった先に見えるのは無人の廊下。教室は実験室や教材室で鍵がかかっており、入ることはできない。

「おい！何かあったのか！？」

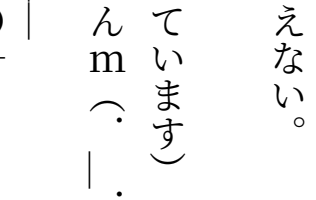
叫んだ声が聞こえたのだろう、三階から同僚の警備員の声が聞こえた。

「ああ！そっちに誰も来なかったか！？」

教室の廊下は長さ六十メートルほどある。二、三秒で向こうまで走り抜けるのはほぼ不可能だ。

唯一の逃げ場となるのは三階へと続く階段のみ。先程の女が逃げたのならばそちらしかありえない。

図解（パソコンで作成しています）
見にくかったらすみませんｍ（．＿．）ｍ



←：階段
●：人影
○：警備員

「何かあったのか？」

そう言いながら同僚は階段を降りてくる。

「さっきここに不審な女がいたんだ…そっちに来なかったのか？」

「いや、俺はお前の声を聞いてすぐに階段へ向かったが誰も来なかったぞ…」

同僚は待てと叫んだ声を聞いてすぐに階段に向かったらしい。

三階の廊下から階段の踊り場までは一目で見渡せる。気付かないはずが無かった。

「そんなバカな…実際にそいつは廊下に逃げるか、階段をのぼるしか逃げ道はないはず…」

ありえない現象に警備員の二人は沈黙した。特に直に目撃した方の顔は心なしか青ざめているようにも見える。

「と、とりあえず念のためもう一度巡回しよう。もしかしたらめちゃくちゃ足が速いのかもしれないし、まだ校舎内に残っているかもしれない」

「そ、そうだな。念のため応援も呼ぼう」

その後、二人は合流した先輩警備員達も含め、四人で校舎北棟、南棟、体育館それから事務管理棟等を徹底的に調べたが人はおろか、ネズミ一匹確認することはできなかった。

全てのドアも窓も内側から施錠されており、完全な密室という状況

だ。

「何もなかったな…」

「本当にそんな女がいたのか?」

後から応援に駆け付けた二人が疑わしげに振る舞う。

「確かに見たんです!死に装束みたいな白い着物を着て…鬼の仮面をつけていました!」

「…まるで夜叉だな。ホラー映画の見過ぎじゃないのか?」

必死で目撃した警備員は力説するが、応援に来た先輩警備員に軽く流される。

「だけど、あの威圧感は…」

「疲れが出たんだろう。明日は休暇を取るといい、幸い明日も私が責任者だ。問題ないように取り計らっておこう」

さらに言い募ろうとしたところで険悪になりかけた空気を最年長の警備責任者が抑えた。

「そう…ですね。少し疲れていたのかもしれません」

「そうだぞ。最近お前ずっと休日出勤とかが重なっていただろ?少しは休め」

目撃した警備員が無理やり自分を納得させてその日は警察が来るこ

ともなく終わった。

だが、話はそれで終わりでは無かった。翌日には管理棟の巡回担当が。

その翌日には中等部の校舎の担当者がそれぞれ鬼女の姿をした不審者を目撃することになる。

事態を重くみた警備担当は最初に鬼女が目撃されてから四日後、通常の三倍の人員を投入し、厳戒態勢を敷いた。

そして、その中に再び鬼女は現れた。場所は初等部特別教室棟、通称「風見鶏」の四階廊下。

追跡にあたったのは最初にその鬼女を目撃した警備員とその同僚。

確実に何人たりとも逃げることができない状況。しかしその鬼女は誰にも捕らわれることなく姿を消した…

この報告を受けた警備責任者は学校職員に通達を入れた。それにより今回の事件は学園上層部へと知らされることと相成ったのである。

人の口に戸は立てられぬとはよく言ったもので、その存在はいずれ生徒たちへも知られることになる。

第二十五夜　白昼夜　～交差する探偵と魔術師と陰陽師～（後書き）

琥珀「ついに始まりましたコラボ企画！！記念すべき第一話のあとがきには夢幻さんの『本格推理委員会』の主人公！速水零牙くんをお迎えして進行したいと思います！」

零牙「遅いですよ、朧月さん…」

琥珀「ゴメンね零牙くん。長いことお待たせしちゃって。企画には何度かゲストで出演してもらったけど」

昌彰「大体コラボを受けたのは約…七カ月前だろうに…」

琥珀「いや～、コラボの話受けた時に入れるなら邪魅編のとこで入れようと決めてたんだ。そこにたどり着くのにこれほど時間がかかるとは思ってなかった」

昌彰「まぁ、こうして辿りついて零牙とも話せているからいいんだが…遅くなってすまない」

零牙「気にしないでくださいよ昌彰さん。それより朧月さん…なんでオレの扱いが初っ端からあんななんですか！？」

琥珀「アハハハハハ…。けど、ＦＦＦ団からの処刑はあれでもマシな方だよ？」

昌彰「そう言えば…」

琥珀「夢幻さんからの提案は“『ジャーマンスープレックスリレー

×３０回』に加え、『コブラツイスト×２０回』くらいでいいでしょう”だからね」

零牙「…それに比べたらたしかにマシですね…それに…／／／」

昌彰「クレープとか…いつそんな写真撮る余裕があったんだ？」

琥珀「いや～さすがにバタバタ帰ったけどそれくらい楽しんでもいいかと…それに向こう（本格推理委員会）は今シリアスだから、甘目のものを少しでも入れたくて…零牙くんのためにね」

零牙「朧月さん…」

琥珀「でも、今から受けることを考えたらプラマイゼロかな…？」

零牙「え？」

昌彰「ところで零牙…その時に、なんか笑えない冗談が聞こえたんだけど…誰を紹介するって？（黒笑）」

零牙「え～っと…アハハハハ…」

昌彰「覚悟はいいか？」

零牙「待ってください！あの場合はああしないとオレの命が…」

昌彰「それは聞いている…だが、それとこれとは話が別だ！」

零牙「なんで剣の柄に手をかけてるんですか！？…そ、それよりゆらさんは！？」

昌彰「ゆらなら今、雅ちゃんのところにお話しに行っている。しばらく戻らない…」

零牙「朧月さん！助けてください！！」

琥珀「さて、次話以降の展開について話しておこうかな」

零牙「朧月さん！？」

昌彰「余所見してる場合かな？」

ギィンッ！！

琥珀「しばらくは前振りですから二人が絡むのがないのです。ぶっちゃけた話し、前振りの部分が長いかもしれません」

昌彰「はぁぁっ！！」

零牙「くっ！？」

ガチィッン！！

琥珀「ベースもオリジナル、そして少年陰陽師ですからぬら孫しか知らない方は違和感を覚えられるでしょうが読んで頂けると嬉しいです」

昌彰「これで！！」

零牙「飛天御剣流…龍追せ…」

ゆら「お兄ちゃん！！」

雅「レイッ！」

琥珀「およ？」

ゆら「何二人とも本気で戦ってるの！？」

雅「コラボ始まったばかりなんだからちゃんと仲良くしなきゃ駄目じゃない！！」

昌・零「「…すみませんでした」」

琥珀「さて、ヒロイン二人によって主人公二人も落ちついたところで…」

昌・零「「コラボ企画！」」

ゆ・雅「「『白昼夜　～交差する探偵と魔術師と陰陽師～』」」

一同「よろしくお願いします！！」

第二十六夜　白昼夜　～交差する探偵と魔術師と陰陽師～？（前書き）

コラボ第二話です！
コラボなのですが…コラボなのか？という状態に…
とりあえず楽しんでいただければ幸いです。
弁解はあとがきで…

第二十六夜　白昼夜　～交差する探偵と魔術師と陰陽師～？

†††††

―時間軸は最初に鬼女が目撃された夜に戻る―

「……」

ＦＦＦ団と共に零牙討伐に参加していた早川龍之介は息苦しさに目を覚ました。

首を巡らせて枕元の時計を見れば午前二時過ぎ…いわゆる丑三つ時である。

何故そんな時間に目が覚めたのか訝しりながら龍之介は身体を起こそうとした。だが…

「！？」

身体が全く動かない。いや、辛うじて首だけは動かせる。

だがそれ以外は文字通り指一本動かすことができない。

『我……か…？』

「っ！？」

そこに掠れた音…いや、声が聴こえた。

窓にかかったカーテンが風ではためく。

（おかしい…）

龍之介は必死で冷静さを保とうとした。

最近は熱帯夜でクーラーなしでは眠ることができないほどだ。

実際、今夜も窓を閉め、クーラーをかけて寝たはずだった。

『…を……ぬし…か…？』

「え…あ…」

カーテンの隙間から一瞬見えたのは白い着物。

闇にとけ込むような黒髪に…鬼の仮面。

ゴァッ！

「（うぁ…っ…）」

放たれたのは徒人の目に見えぬ霊圧。

それは一瞬で龍之介に迫り、声を上げる間もなくその意識を刈り取った。

窓の外にいた鬼女はしばらくその場に何をするでもなく佇んでいたが、やがて闇に呑まれるようにして掻き消えた。

†††††

―週末・布留部市―

京都と似た霊気。大地に流れる龍脈が富んでいるためだろうか…

そんな街を昌彰とゆらは歩いていた。

雑多なビルが立ち並ぶ中、ぽっかりと開いた空間に出た。

ビルの谷間に間違いのように建っている一件の古い洋館。

しかし、みる者がみればその洋館は堅固な結界で護られていることに気づくだろう。

そして門の脇に掲げられている古ぼけた青銅の看板の真の意味にも。

「着いた…」

「ここが…“アストラル”…」

昌彰とゆらは黙って洋館を見ていたが、やがてどちらからともなく一歩を踏み出し、洋館の庭へと入っていく。

コンッコンッ！

古めかしい扉についたノッカーを叩く。

「連絡通り未の刻きっかり…ようこそいらっしゃいました。安藤様、花開院様」

対応に出たのは灰色の髪と切れ長の目、常に平安風の羽織をまとった青年。

ただその足元や肩あるいは頭上にブチ、白、三毛、黒猫といったつごう四匹の猫が纏わりついていた。

「「……」」

あまりにも突拍子もない格好の人物の出迎えに昌彰とゆらは面を喰らった。

だが二人はすぐにその猫たちの正体に気付いた。ただの猫ではない、ゆらの貪狼や昌彰の十二神将と同じ式神だと。

「ああ、猫屋敷さん！いきなりそんな格好で出てったらお客さんだってビックリしますよ！」

その後ろから黒いスーツを着た高校生くらいの少年が出てきた。

「あ、安藤さんに花開院さんだね。初めまして、『アストラル』の代表取締役社長　伊庭いつきです」

そう言ってぺこりと頭を下げた。

「あ、初めまして。安藤昌彰といいます」

「花開院ゆらです。初めまして」

つられて昌彰達も頭を下げる。

「社長、お客様に立ち話させるのもなんやし。お通ししいや」

さらにその後ろから関西弁の女性の声が飛んできた。

昌彰達がそちらに目を向けると栗色の髪にアイスブルーの瞳を持ついつきと同じくらいの年頃の少女が奥から顔をのぞかせていた。

その頭には黒のとんがり帽子が載っている。

「穂波・高瀬・アンブラーや。お二人ともこちらへどうぞ」

穂波に促されて昌彰達は応接セットのあるオフィスへ通された。

――――

「!?」

オフィスに入った昌彰とゆらは驚きで足を止めた。

目の前ににふわふわとお盆に乗った紅茶のポットとティーカップが浮いていたからだ。

「いらっしゃいませ。ようこそアストラルへ」

そのお盆を操っているのはメイド服姿の幽霊だった。

「黒羽、みかんちゃん達は？」

いつきが幽霊課正社員の黒羽まなみに他の社員、葛城みかん、オル

トヴィーン・グラウツ、ラピスと言った年少メンバーについて訊ねた。（尤もオルトに関しては昌彰達と同じ年だが…）

「みかんちゃん達なら今オルト君に呼びに行ってもらってます。どうぞ」

そう言って黒羽は騒霊現象（ポルターガイスト）を駆使して、ティーカップを昌彰達の前におく。

「そうですか…では、御依頼の件について詳しく伺いましょう」

昌彰達の向かいのソファーに社長のいつきを中心に猫を纏いつかせた陰陽師、猫屋敷蓮、ケルトの魔女、穂波・高瀬・アンブラーが左右を固める。

「依頼はある妖怪―ダイダラボッチの封印です」

その妖怪の名を聞いて微かに猫屋敷と穂波の顔が揺れた。

「ダイダラボッチって…あの巨人の？」

いつきだけが素朴な疑問を口にした。

「社長…一応魔術結社の首領がそれは…いやまあ、妖怪関連の講義は後回しにしとったからしょうがないか…」

「ご、ごめん…」

穂波は溜息を禁じえない。

「ダイダラボッチというのは富士山や浜名湖を作ったと言われる妖怪ですよ」

猫屋敷が薄く微笑みを浮かべていつきに説明を入れる。

「国造りの神様ってする説もあるんだよ！」

「うわっ！？みかんちゃん！？」

そう言いながらいきなりいつきの後ろにピンクのツインテールの巫女服の少女が飛びついて来た。

「みかん、いつきにくっつき過ぎ」

その後から真紅の髪を持つ東欧系の少女がみかんを引っ張る。

「こらお前ら客がいるんだ、少しは大人しくしろ！」

さらにその後ろから亜麻色の髪に耳当て付きの帽子に皮のコートを纏った昌彰と同じ年頃の少年が入って来て二人を怒鳴りつける。

「ああもう三人とも落ちついて！」

そのまま口げんかに発展した三人の言い争いをいつきが止めにかかる。

「はぁ…いっちゃんは相変わらずなんやから…」

「まぁいいじゃないですか穂波さん。それより今回の依頼の報酬についてですが…」

神とも評される妖怪の封印。それはまさに神の封印に等しい。

「“協会”規定の準一級相当ＡＡランクの料金支払い。成功報酬にこちらでいかがでしょう？」

そう言って昌彰は呪符で封印を施した小瓶を机の上に置いた。

「これは…」

猫屋敷は普段から細い目をさらに細めた。

「これが本物だとすると…さすが安藤家といったところですか…」

「猫屋敷さん…その羽根…」

穂波もその羽根の放つ呪力に驚きを隠せない。

「ええ、その羽根を浸した酒を飲めば五臓六腑が焼け爛れて死に至るという幻の毒鳥…鴆の羽根です」

昌彰が鴆とあった際に譲り受けた彼の羽根だ。魔術においては最上級の呪物となる。

「こんな貴重な呪物、いまどきトリスメギストスのような専門の呪物商でも取り扱っていませんよ。日本では既に絶滅したとされていましたからね」

猫屋敷の目には喜色が伺えた。

「いかがでしょう？うちからの依頼受けていただけますか？」

†††††

―翌週・月曜日―

「暑い…」

「言うなミア…余計に暑くなる…」

木ノ花学園初等部の六年六組の教室では猛暑に耐えかねて生徒達がぐったりと机に突っ伏していた。

普段なら冷房があるのだが、気温三十七度という猛暑日に限って故障という不運に見舞われている。

「レイ～、なんかないの～？涼しくなる道具とかさ～」

「オレはドラ〇もんか！？さすがに準備してねえよ…。今日に限ってエアコンが故障だなんてな…」

さすがの零牙も想定外の事態に打つ手がないようだ。

「じゃあ涼しくなる話でもしよっか？」

そう話しかけてきたのはクラスメイトの藤井美咲と一ノ瀬杏子だ。

ショートカットで伊達眼鏡をかけた大人っぽい美咲と小柄でツインテールの幼げな杏子はタイプの違う美少女コンビである。

これに雅が入ることで六年六組の美少女トップスリーの完成だ。

「涼しくなる話って…怪談でもするのか？」

美少女三人に囲まれている何とも羨ましい状態でも零牙はぐったりしたままだ。

まあ、零牙は雅の彼氏であることは周知の事実なので周囲からのやっかみの視線は少ない。（ＦＦ団の殺視線は除く）

「二人ともあの噂はもう聞いた？」

「噂って？」

ようやく零牙が顔を上げた。

「聞いてない？最近学園内に不審者が出るって話」

「小萌先生が『最近変な人が出るらしいですから、皆さん気をつけて帰るんですよ～』って言ってたやつ？」

雅は担任の幼女（ロリ）教師の口真似でそう言った。（どこかから「誰が幼女ですか～！」という声が聞こえたような気がしたが気にしない）

「そ、夜中に先生達も帰った後に出るらしいよ。警備員の人が何人も目撃してるって」

「あれって学園内の事なの？」

杏子の言葉に雅は少し驚いた。普通不審者がどうこうと言われる場

合、通学中の事だと思っていたようだが…

「らしいよ。先週くらいから出始めて毎晩出てるんだって」

美咲の話によると、さすがに一週間を超えても出てきたらしく学校側も無視できないレベルになっているらしい。

「一週間も連続で出てたんなら普通捕まるんじゃない？」

雅の疑問も当然だ。いくらなんでも一週間も続けば何らかの対策を講じるはず。それで捕まらないはずがない。

「でもさ、それで警備の人が巡回を増やしたりしたらしいけど結局捕まらなかったんだって」

消えるのも現れるのも突然であるため、警備の人間は後手に回らざるを得ないのが実情だ。

「そこでもう一つの噂が立ったんだよ。その人は幽霊なんじゃないか？ってね」

「幽霊？」

雅は軽く首を傾げた。

美咲は一時期、ある理由から幽霊やオカルトに異常に執着した時期があった。

今では普通だが、多少そっち関連の話題には相変わらず詳しい。

「そ、幽霊。聞いた話だけどさ。完全に逃げ道を塞いだはずのところから消えたり、出入り口が施錠されている部屋にいきなり現れたりするんだって」

完全に逃げ道を塞がれながらも消えては現れる。その様はまるで亡霊のようであるとのこと。

「ふ～ん…」

雅はかつて自分の使ったトリックを思い出してみた。

あれはピアノの音だけだったからどうにかなったのだが、今回は姿を見られている。

「う～…もしかすると今度こそ本物の幽霊かもね？レイはどう思う？」

雅がいたずらっぽく笑って零牙を見た。

「幽霊ねぇ…」

零牙は曖昧に呟いた。仕事柄、実際に幽霊に遭遇したこともあるが、今回の噂は直接見たわけではないので判断できない。

「もうちょい詳しい話がわかればな…」

「聞いた話だと鬼のお面をつけてたらしいよ？」

ガタンッ！

「ん？どうしたんだ？リュウ」

「い、いや。な、なんでもねぇよ」

突如として後ろの席から響いた音に零牙は驚いて振り返った。

「あれ？リュウくん、もしかして怖いの？」

雅や美咲達がクスクス笑いながら、そちらへ視線を向ける。

「ば、馬鹿言え！こ、怖いわけねぇだろ！幽霊なんか！」

若干顔を赤くしてどもりながら龍之介は反論した。

ただ、その後に発した一言は余計だったかもしれない…

「だいたい幽霊なんかよりも、むしろミユの方が…」

「私がどうかしたのかな？リュ・ウ・ク・ン！！」

龍之介の背後から伸びてきた手が、グルンとそのまま顔面に喰い込む。

「ノガッ！！い、いえ！な、何でもないですミユ様！」

そこにいたのは笑顔（目は全然笑ってない）で長い黒髪を怒りのオーラで翻した、隣のクラス―五組の白石美雪である。

ちなみに彼女は自他（美雪本人とご両親）共に認める龍之介の許嫁であったりする。

ついでに言うと龍之介本人は決して認めようとしていないが…

「フ～ン…そっ！」

龍之介の頭に極められたアイアンクローが万力のように締められていく。

「ギャァァッ!!ちょっ、ミユ!割れる!頭割れるから!」

ギャアギャアといつも通りの痴話げんかを見ながら零牙は一つ溜息をついた。

「不審者騒動ねえ…（しかも幽霊の噂付きか…面倒なことにならなきゃいいが…）」

零牙の願いは残念ながら叶わぬ事となる。

無慈悲に響いた地獄からの呼び出し音によって…

※ちなみにこの後、学年美少女四天王を侍らせていた零牙と龍之介にＦＦＦ団の嫉妬の魔の手が襲いかかるのであった。

第二十六夜　白昼夜　～交差する探偵と魔術師と陰陽師～？（後書き）

琥珀「コラボ第二話目です！」

昌・零「……」

琥珀「え～…主人公二人が無言ですが、言いたいことはよくわかります。まずは言わせて下さい。ごめんなさい＞（＿　＿）＜」

昌彰「いくらなんでもこれは無いだろう！？話の中で俺たちが一切絡んでない！」

零牙「コラボというより別物の話を二つ並べただけじゃないですか！？」

琥珀「自分でもそう思うよ！でも前振りは結構重要な…」

昌彰「だとしても限度があるだろうが！だいたいなんでわざわざ『レンタルマギカ』まで引っ張ってくる！？」

琥珀「コラボの決着で使う術式の元ネタがレンタルマギカにあるんだよ…零牙くんはルーン魔術も使えるらしいからさ」

零牙「確かにステイルのを見てましたから使えますけど…」

昌彰「だとしてもここまで書く必要あったのか？」

琥珀「…実はこれでも削った方…下手したら模擬戦させるっていうプロットもあったから。具体的には昌彰＆ゆらＶＳ猫屋敷さん＆み

かんちゃんのタッグマッチとか、アディリシアさんのソロモンの魔神ＶＳ昌彰の十二神将＆ゆらの式神とか」

零牙「コラボの主眼がどっか行ってる…」

琥珀「だから自重したんだよ。一応ダイダラボッチの封印術式については書きたかったんだけどね…」

昌彰「ここで言っておけばいいだろう」

琥珀「…そうしようかな…。えっとダイダラボッチの封印は布留部市の龍“アストラル”の封印を応用した術式で、ルーンによる知覚遮断、四神相応、ストーンサークル、神道による浮世絵町の土地神様たちの協力によって封印を施しています」

昌彰「しかしなんで封印した？奴良組に加えてしまえばよかったんじゃ？」

琥珀「あまりオリジナルを加えるとパワーバランスが崩れるからね…。設定ではダイダラボッチはとても古い妖怪だから組の概念とかができる前に眠りについていて、枠組みに組み込むことができないということで一つよろしく」

昌彰「まあ読者の皆様が納得してくれるかが問題だが…」

琥珀「まあコラボだから！」

昌彰「それで押し通す気か！？」

琥珀「もし読者の方から要望があれば番外編として書く可能性はあ

る…」

昌彰「書くのか!?」

琥珀「あくまで要望があればね」

零牙「ところでいつになったらこっち（不知木町）に来るんですか？」

琥珀「ん～…っと次の次くらい？」

昌彰「大丈夫なのか？」

琥珀「ストック分があまりない…という現実…」

零牙「頑張ってくださいよ？」

琥珀「はい、それはもちろん」

昌彰「それでは読者の皆様」

零牙「また次回お会いしましょう！」

琥珀「台詞とられた!?」

第二十七夜　白昼夜　～交差する探偵と魔術師と陰陽師～？（前書き）

久しぶりの更新です…

遅くなって申し訳ありませんでした！！＞（＿＿）＜

第二十七夜　白昼夜　～交差する探偵と魔術師と陰陽師～？

†††††

―水曜・浮世絵中、生徒会室―

「さぁぁて期末テストも終わってウキウキだねぇぇ」

もはや清十字団の部室と化している生徒会室に清継の浮かれた声が響く。

「随分浮かれてるな清継…」

普段からテンションの高い清継だが、今日は輪をかけてうるさい。

「それはそうだよ！見てくれたまえこのメールを！」

そう言って清継は手に持ったノートパソコンの画面を昌彰達の方へ向ける。

「何々…『妖怪ハンター清継くんへ…』」

“清継くん！！助けて！！私の家に妖怪が出るの”

清継自作のＨＰ『妖怪脳』に寄せられたメールはそんな言葉から始まっていた。

“夜になると枕元に立つのよ！！お願い…お祓いしてもどーやっても解決しないの。数多くの妖怪をハントしたという清継くんしか頼

れないのよ!!”

全てを読み終えた後、昌彰とゆらの眉間にしわが寄った。

「清継くん何!?大ウソぶっこいてんじゃん!!」

昌彰達が口を出す前に巻が呆れたように清継に詰め寄る。

「こーした方が情報が入ってくることが最近判明したんだよ。多少の演出は必要悪!悪!」

…『必要悪』。悪ではあるが社会の状況においてやむを得ず必要とされる事柄。

この場合の清継の行動は完全に私利私欲であり、必要悪というよりも嘘も方便という方が適切だろう。褒められたことではないが。

「まさかその子助けに行くの?」「イタズラかもしれないじゃん」

「その心配はないよ。この地域に伝わる伝説とも符合する部分も多いしね!」

巻と鳥居が尤もな意見を言うが、清継は何故か自信たっぷりに言い切った。

「おい清継、それいつ行くんだ?」

昌彰は嫌な予感がして予定を尋ねる。

というか予定を立てるなら前もって相談くらいはしてほしいと思う

昌彰とその他の面々である。

「今週末だよ！もちろん安藤さんと花開院さんには特別軍事顧問として同行してもらうからよろしく！」

清継は晴れやかに言うがそれと同時に昌彰とゆらの顔が曇った。

「どうしたんですか昌彰さん？」

リクオはその微かな表情の変化を見逃さなかった。

「ん…ああ…。悪いな清継その日は先約があるんだ」

「んなぁ！？」

昌彰が断った瞬間、清継は変な声を上げて固まった。戦力として当てにしていた二人が両方来れないのだから仕方ないだろう。

「昌彰さん、先約って…」

「ああ、リクオは知ってるよな。ちょっとした忘れ物があって…」

昌彰は微妙にひきつった笑いを漏らした。

「というわけで清継、ちょっとゆらと出かけるんだ。今回は諦めてくれ」

昌彰はそれだけ言い残して、ゆらを連れて部屋を出ていった。

――――

その夜…

「異常はないみたいだな…」

「うん。これなら問題なさそうやね…」

『さすがは“アストラル”の“レンタルマギカ”。大した仕事だな』

昌彰とゆらは太陰と勾陣を伴ってダイダラボッチに施した封印の確認をしていた。

猫屋敷の四体の式神―玄武、青龍、朱雀、白虎を以て構築した四神相応を要として、オルトのルーン、みかんの神道、穂波のケルト魔術、ラピスの錬金術。サポートに黒羽の騒霊現象を用い、それらの魔術をいつきの妖精眼（グラムサイト）によって統合した合同術式。

一度成立してしまえば崩れることは滅多にない。これなら何も気にしないでこの浮世絵町を離れることができる。

他の地点に施された封印も確認し、昌彰達は太陰の風流で自宅のアパートの前に舞い降りた。

『…昌彰』

部屋に入る直前、隠形したままの勾陣が昌彰を呼んだ。

「ん？ああ…。ゆら、先に入っててくれるか？」

微かな気配を感じ取った昌彰もゆらに先に戻るように告げる。

「ん…どないしたん？」

ゆらは怪訝そうに首を傾げて振り向いた。時刻は既に零時を回っている。

「少し星が気になってな」

昌彰は空を見上げながらそう言った。

「もしかしてなんかあるん？」

ゆらは瞳に不安げな色を浮かべて昌彰を見つめた。

星見は昌彰の得意分野ではない。だがゆらは昌彰の占に全幅の信頼を寄せている。

「いや、大したことじゃない。みんなが行く依頼の件を見てみようと思っただけだ。すぐに終わるから」

まだ納得していないゆらを押し込むように部屋に入れると昌彰は玄関前に下りてきた。

「出て来いよ、リクオ」

人っ子一人どころか猫さえいない完全なる闇の中。そこに昌彰は呼びかける。

「よう昌彰。この姿で会うのも久しぶりだな」

闇の中から凝結するように白髪に緋色の瞳をもつ夜のリクオが現れる。

「具合はもういいのか？」

「おかげさまでな」

先日の戦いで負傷していながら普段と変わらない様子の夜のリクオに昌彰は軽く目を細めた。

昼のリクオが普通にしていたから怪我は既に癒えているとは思っていたが相変わらず驚異的な回復力だ。

「で、本題はなんだ？」

「いや、零牙のところに行くんだろ？」

リクオもただの近況報告に来たわけでもないので即座に話を切り替える。

「あいつには吸血鬼の件で借りがある。土産くらいは渡しておこうと思ってな」

そう言ってリクオは奴良組の代紋入りの風呂敷包みを差し出した。

「何だこれ？」

縦およそ四十センチ、横およそ二十センチの四角い包み。重さはそれなりにある。

「良太猫からの差し入れだ。あいつんとこも零牙には感謝してるからな」

先日の吸血鬼戦では浮世絵町全域が戦場となった。当然良太猫が場を構える一番街も例外ではなかった。

「そうか…わかった、よろしく伝えておく。お前は清継についていくんだろ？」

「ああ、昼のオレがほっとけないらしい。お前が来ないのは多少不安だがな」

リクオは薄く笑みを浮かべた。

「それに関しては多少言っとく事がある。今回の件、妖怪が関わっているのは確実だ」

昌彰はリクオに式盤を用いて占じた結果を伝える。

そこに出た結果は先日の事件と似たような卦。

「それと気をつけておけ。何か嫌な予感もする」

「忠告痛み入るよ。じゃあな昌彰」

そう言い残してリクオは再び闇に溶けるように姿を消した。

「嫌な予感か…俺たちの方も何も無ければいいんだが…」

昌彰はリクオが消えて本当に誰もいなくなった闇に呟いた。

昌彰はもらった包みを抱えなおすとゆらの待つ自宅へと足を向けた。

リクオに渡されたこの包みが不知木町にて一騒動引き起こすことになるのだが…

そのことを予見できた者はいなかった…

†††††

―木曜・木ノ花学園―

「というわけで、今回みんなには不審者捕縛作戦を実行してもらいたいと思います！！」

零牙は地獄からの呼び出し―もとい本格推理委員会の招集をかけられ、高等部の理事長室にいた。

ちなみに先程の台詞を叫んだのはこの部屋の主、高等部保健医にして理事長の木ノ花あざみ先生だ。

「あざみ先生。そう言うのは警備員さんの仕事だと思うのですが…」

零牙がまっとうな突っ込みを入れるが華麗にスルーしてあざみ先生は続ける。

「みんなも噂で知ってると思うけど、最近不審者の目撃証言が数多く上っているの」

先程まで座っていた理事長机から立ちあがってぐるぐるとその周り

を回るあざみ先生。

「ここ一週間だけでも毎日目撃されているわ。それも学園の校舎内で！」

ダンッ！とあざみ先生は両手を机に叩きつける。机にひびが走った様な気がするが気にしない。気にしたら負けだ。

「さすがに一週間も出てたら普通捕まるわよね？いくらうちの学校のセキュリティが甘かったとしてもさ」

空手部主将にして本格推理委員会の『国家権力を盾にした暴ｒｙ」作者（琥珀）、それ違うって言ったよね？（黒笑）」

―…失礼、本格推理委員会の『スケ番「それも違うって！」

―ゴハッ！？

菜摘は虚空に向け容赦なく拳を放ってきた。

「菜っちゃん、そろそろ止めてあげないと作者の命が危ないから…」

…瀕死の作者を見かねたのか委員長の桜森鈴音がなんとか菜摘を止めた。止めてくれた。

小柄な鈴音は菜摘に振り回されそうになるがなんとか押しとどめる。

「平気よ。いざという時は揉み消してもらうから！」

―こういうところが国家権力を盾にしたと言われるんだが…（注：

あくまでコラボです）。

ちなみに菜摘の親類は元警視総監の祖父の影響で司法官僚が多いらしい。

その伝手を使ってか学園の警備についてもいくらか情報を得ているようだ。

「でもそうだよね。大体部外者が夜中に学園の校舎内にいること自体が不可能なんじゃないかな。内部に協力者でもいない限り」

なんとか菜摘を抑えて鈴音が意見を出す。

「確かにそうですよね。あざみ先生、職員の方達の内部事情の調査は行っているんですか？」

中等部の木下梢があざみ先生に尋ねる。ちなみに彼女は修の幼馴染である椎（ただいま隣で爆睡中）の妹でもある。

性格はずぼらな椎と違ってとても几帳面であるが。

「いいえ、今回の事件発生の範囲が初等部から高等部まで広がっているから公には行ってないわ。初等部から高等部まで自在に動けるのは我が本格推理委員会しか存在しないから」

「それなら話は簡単ですね。先生が協力者…「なにか言ったかしら城崎くん？」…いえ、何でもないっす！」

あざみ先生の凄惨な笑みにあっさりと発言を撤回する城崎修。

ちなみに雅の従兄であり、小学生の時に『少年探…「作者（琥珀）、俺に菜摘先輩みたいなことをやらせるなよ？」

―…わかった、黒歴史は闇の中へ…

「修は『少年探偵団』を作っとったんやで」

「ッ！黙れ木下団員！」

黙っておいてやろうとした作者の気遣いを幼馴染の椎が粉砕した。

というかさっきまで爆睡していたはずなのにいつの間に起きてきた？

「（次余計なこと言ったらおまえんちのカレーに納豆投入するぞ？）」

「（んなっ！？そ、それだけは堪忍したって！）」

ちなみに椎は百パーセントの的中率を誇る超人的な勘の持ち主だったりする。

弱点は納豆と、典型的な大阪人だが。

「はいはい！夫婦漫才はそこまでにして」

「どこがや（ですか）！？」

修と椎による全力のツッコミがなされたが華麗にスルーされた。

あざみ先生がパンパンというよりズバンズバンと手を鳴らして全員の注目を集める。

「学園内を不審者が闊歩している！この状況を放置してはこの学園の平和を守る本格推理委員会の名が廃るというものよ！！」

あざみ先生は机の上に乗って踵を踏みならした。

「先生、そこ机ですから」

梢が冷静に突っ込む。

机が壊れないか非常に心配だ。決して先生が重いとか言ってるわけじゃないですよ？

「ならばよろしい」

「先生まで作者に突っ込まないでくださいよ…」

満足げに頷いたあざみ先生に零牙が疲れたように零す。

「収集つかなくなりそうだね…」

その隣で雅も小さく溜息をついた。

「それで先生。今回の任務は一体なにをすればいいんですか？」

委員長の鈴音が代表して訊ねる。

「最初に言ったじゃない！不審者の捕縛よ！」

あざみ先生が胸を張ってそう言い切った。

「…あの、あざみ先生…その不審者の噂は聞いてますけど、もう一つの噂もご存じなんですか？」

雅が恐る恐る訊ねる。即ち不審者＝幽霊の噂だ。

尤もあざみ先生の場合そんなことは露ほども気にしないだろうが。

「幽霊だって噂でしょ？大丈夫よ。今回の作戦の目玉は零牙くんにやってもらうから！」

「また俺ですか？」

前回の幽霊騒動の時も基督教徒で神父だから除霊できる知り合いでもいるでしょ？という強引な理屈で矢面に立たされた零牙であったが、再び白羽の矢が立った。

「前回もきちんと仕事してくれたし今回も期待してるわ」

あざみ先生がニコリと笑顔を向ける。それには有無を言わさぬ迫力があるわけで…

「わかりました…。一応その手の知り合いにあたりをつけてもらいますよ」

零牙は週末来ることになっている二人の陰陽師の顔を思い浮かべながら、巻き込んでしまうことに諦めるように溜息をついた。

†††††

「ということなんですけど…。何か心当たりのある事象とかありますか？」

その夜、零牙は理事長室で言ったその手の知り合い、安藤昌彰に電話していた。

普通の幽霊ならともかく、鬼の仮面をつけていた鬼女となれば日本土着の魔術師である陰陽師の昌彰に聞いた方が早いと判断したのだ。

『話だけじゃ何とも言えないな…可能性としては生霊とか地縛霊かもしれない。過去に似たような事例があったかを詳しく調べることができればいいけど』

「調べようと思えば調べられますよ？」

《黒いＰＣ》で警察のデータベースにアクセス（ハッキング）すればそれは可能だ。

『零牙…今なんかまずいこと考えてないか？過去って言っても数十年から数百年前の可能性もあるんだぞ？』

生霊なら文字通り生きている人間の霊魂の仕業だ。

だが、怨霊や地縛霊ならば数十年、下手したら数百年単位で遡らなければならないのだ。

「そこまではさすがに無理ですね…」

ネット上で拾える情報はネットワークが発達を始めた四十年ほど前からのモノが多い。

あるところに行けばあるだろうが、さすがに数百年前からの物はどうしようもない。

『でも、最近出るようになったってことは少なくともきっかけになる何かがあったはずだ。そこから調べていくこともできなくもないはず』

「最近会った事件ですか…」

零牙は一通り最初に不審者が目撃された日からの記憶を辿ってみた。

「（そういやあの日はＦＦＦ団に追われてたんだっけ…。関係ないけど）特にこれと言った事件は起きてませんね」

『そうか…。あまり考えたくはないが…もしかすると呪詛の可能性もあるかもしれない』

微かに詰まりながら昌彰は新たな可能性を示唆する。

「呪詛…ですか？」

簡単に言えば呪いである。古くからある丑の刻参りがその代表例といえるだろう。

『ああ。もしかすると呪詛の対象が曖昧で余波が鬼女の形を取っているのかもしれない』

呪詛をかける対象が曖昧だと呪いが自分に跳ね返ってくる可能性が増す。

普通の術師ならばそんな危険な真似はしないはずだが…

「レイ～、そろそろ行かないと準備とか間に合わないよ」

零牙と昌彰が考え込んでいるうちにいつの間にか、だいぶ時間が経っていたようだ。

「すみません昌彰さん。続きはまた後で」

『ああ、こっちでも少し調べておくよ。なんならそっちに来た時に手伝うさ』

零牙はそう言って昌彰との電話を切った。雅には下手な話は聞かせたくないからだ。

「そうだ、もう一か所…」

そう呟いて零牙は再び黒い携帯を操作した。

「さっきのは昌彰さんだったんだよね？今度は誰？」

「真優だ。夕食作れなくなったって伝えとかないと…『遅っ～い！！お兄ちゃんいつになったら帰ってくるの！？』…ゴメンゴメン真優」

つながったと思った瞬間いきなりの大声に零牙は顔をしかめた。

耳から携帯を遠ざけ、やり過ごすと事情を説明した。

「というわけなんだ真優。悪いが夕飯作ってやれそうにない」

『そ、そんな!?じゃあ私はどうやって一晩過ごせばいいのお兄ちゃん!?』

電話口で真優は悲壮な声を上げる。

「大丈夫だ。城崎さんのお母さんにお願いしておいた」

『そうなん…って、それの方が危ない気がするのはわたしの気のせいじゃない気がするんだよ…』

修の母親、城崎直子は古代中国を舞台にした時代小説を書く小説家だ。

特徴として挙げられるのは雅を超える超極度な人見知り。そしてもう一つは料理に関してだ。

彼女の料理を食した者は軽くて胃炎、ひどければ三日は寝込むという劇薬クラスの化学兵器を精製できるのだ。

「冗談だ。椎先輩達のお母さんに頼んであるよ。んじゃ今夜は遅くなるから戸締りしっかりな」

『ちょ、お兄ちゃんそれってどういう…』

零牙は真優が何かを言う前に通話を切った。

「いいの?レイ」

「大丈夫だ、問題ない。」

†††††

「ちょ、お兄ちゃんそれってどういうこと！？」

真優は電話の前で頬を膨らませていた。

「う～。たしかに木下おばさんの料理は美味しいけど…」

木下椎・梢の母親は「なにわ家」という料理屋を営んでいる。

大した名所のない不知木町になにわ屋目当てで来る観光客もいるくらいだ。

だがそれでも空腹でほったらかしにされていた真優の膨れっ面は治らなかった。

そこで真優は思い出した。今週末に零牙（兄）の友人が訪ねてくることを。

「フフフ…お兄ちゃん。妹を空腹で放置した罪は重いんだよ！」

真優は笑みを浮かべながら不吉な言葉を漏らした。

第二十七夜　白昼夜　～交差する探偵と魔術師と陰陽師～？（後書き）

琥珀「はぁっ…はぁ…。ようやく更新できたよ」

昌彰「お疲れ様。…とでも言うと思ったか？」

琥珀「ごめんなさい…ホントにもう…」

零牙「十日は長いですよ…」

琥珀「すみません…言い訳だけでも…」

昌彰「させると思うか？」

琥珀「思わないよ…」

零牙「昌彰さん、一応聞いてあげましょうよ」

琥珀「ありがとう零牙くん…」

昌彰「零牙がそういうなら…」

琥珀「ありがとうございます。実はバイト先で先日イベントがありまして…それの設営作業やら後片付けやらで本気で疲労困憊でして…」

零牙「お疲れ様です…」

昌彰「そういうことなら多少は考慮しよう。ちなみにイベントって

何やったんだ？」

琥珀「…そうめん流し」

昌・零「は？」

昌彰「季節外れじゃないか？」

琥珀「自分に言われても…。何気に本格的で竹を樋に使って竹の器で食べるという」

零牙「そうめんもそうして食べると風情がありますね…（遠い目）」

琥珀「なんか遠い目をしてるね零牙くん…。しかも台風の影響で雨が降る中で準備したりなんたりで…」

昌彰「ホントにお疲れだったな。じゃあこれからはもっとペースを…」

琥珀「あげたいよ！早いとこ不知木町に行かせたいよ！！」

零牙「今回も最後だけじゃないですか絡んだの…」

琥珀「次話は零牙くんの単独戦闘がメインになるから…」

昌彰「俺の出番はなしか？」

琥珀「ゴメンね？」

昌彰「別に許すがさっさと続きを書けよ？」

琥珀「頑張ります、はい。明日からは少しシフトに余裕ができますのでペースが…あがるといいなぁ…」

昌彰「それでは読んでくださってありがとうございます！」

零牙「次回も楽しみに待って頂けると嬉しいです！」

第二十八夜　白昼夜　～交差する探偵と魔術師と陰陽師～？（前書き）

またしても一週間以上かかった…

そんなに長くはないのに…

ううお待たせして申し訳ないです…

第二十八夜　白昼夜　～交差する探偵と魔術師と陰陽師～？

†††††

『零牙くん準備はいい？ミアちゃんをしっかり護るんだよ？』

無線越しに菜摘の声が聞こえてくる。

「言われなくてもわかってますよ」

今零牙と雅は初等部の校舎にいた。場所は二階の教室廊下の中ほどだ。

『何かあったらすぐにあざみ先生に連絡するんだよ？』

不審者の確保という荒事になる可能性があるため、今回は二人一組、武闘派とそれ以外が組む形で作戦にあたる。

チーム分けは、委員長と菜摘。当然ながらこのようなおいしいシチュエーションで菜摘が鈴音を手放すわけがない。

二人は退路を塞ぐという意味で一階の昇降口付近に控えている。

『なんでウチはこんな時に修なんかと…』

『静かにしろ椎。それは俺の台詞だ。たぶんお前の世話役だからだろうが…』

続いて椎と修の幼馴染コンビ。こちらは零牙のサポートとして三階

や四階を巡回している。

椎は雅や梢と組めずに不満全開だが…

『修さん、お姉ちゃんをよろしくお願いしますね』

本来なら梢も入るはずだったが、特に武闘派でない修に二人は荷が重いと判断してあざみ先生が梢を引き受けた。

シスコンでもある椎は断固として反対していたが…

ちなみにあざみ先生と梢は守衛室にいる。防犯カメラからの映像をリアルタイムで確認し、零牙達へ伝える所謂オペレーターだ。

『今のところ不審な点はないわ。みんな気を緩めないでね』

時計の針は既に深夜二時を指そうとしている。

零牙達の背後にある非常口の誘導灯の緑色の光が二人の影を廊下に細く伸ばしていた。

「レイ…大丈夫だよね?」

雅は不安げに手に持った懐中電灯をあちこちに向けている。

「大丈夫だミア。オレがついてる。信用できないか?」

「ううん、そうじゃないよ…ただレイが怪我しないかが心配で…」

(!ううう…そんな顔で見つめないでくれミア…ああ、なんでこんな

時にカメラがないいんだ！？）

零牙が表面上は冷静に、しかし心の中では激しく悶えていた。

暗闇の中でもはっきりと分かるほどの桃色の空気が辺りに満ちる。

『おい零牙…こんな時にいちゃつくな…』

無線から修の呆れたような声が入る。

無線は常時通話状態になっているわけではないのでおそらくは椎の勘で察知して釘を刺してきたのだろう。

「べ、別にいちゃついてなんか…」

『三人とも、そこまでよ。…出たわ』

雅の弁解を遮ったあざみ先生の言葉に零牙の纏う空気が変わった。

『場所は東側の渡り廊下の二階。話にあった通り白い着物姿よ』

位置情報を把握した零牙は即座に駆けだす。

「待ってレイ！」

雅も置いてかれないように慌てて追いかける。

「っ！？（なんだこの気配は…）」

だが零牙は突如として足を止めた。まだ相手の姿は見えない。だが…

『対象が移動。零牙くんたちのいる南校舎へ向かってるわ！修くんと椎ちゃんは援護に！』

『委員長と菜摘先輩は階段を抑えてください！』

『『了解！』』

あざみ先生と梢からそれぞれ指示が飛ぶ。

しかし委員長と菜摘のいる昇降口は西側、タイミング悪く修達も四階の北校舎にいた。到着までには多少時間がある。

スッ、と逆刃刀の柄に手をかけた零牙と雅の足下に黒影が伸びた。

「来たか…」

誘導灯の緑の光源を背後にした人影は逆光のせいで顔が見えない。だが…その頭には、二本の角らしきものが生えていた。

「ひゃっ…！？」

雅は手にしていた懐中電灯を取り落とした。光を向けた先に浮かび上がった鬼の仮面に驚いて。

風も無いのに鬼女の不自然なまでに闇と同化した黒髪がうねる。

（こいつは…ヤバい…）

零牙は今までにないような圧力を感じていた。

鬼女の放つ気配が歴戦の魔術師である零牙さえも威圧しているのだ。
ミアは腰が抜けたのか声も出せずにへたり込んでしまっていた。

†††††

「修！急ぎい！！」

「言われんでも分かってる！！」

何気に運動神経のいい椎が雅に対する想い（執着）も加わって修を引きずるようにして階段を駆け下りていた。

「はよせな！いくら零牙くんがおるゆうても二人とも小学生なんよ！」

二階分の階段を駆け降りた椎は最後の数段を飛び下りるようにして廊下へと降り立った。

「へ？」

「な、なんで二人がここにいるの？」

椎と修の目の前には菜摘と鈴音がいたのだが、二人とも驚いた表情で固まっていた。

「どうしたんですか二人とも？早くミアたちのところへ…」

そう言って廊下を見て修は気付いた。

「椎、ここ一階だぞ…」

「んなアホな！？確かにウチらは四階から二階に下りたはず…」

椎も慌ててあたりを見渡すが、窓の外に広がっている景色は間違いなく一階のもので…

修と椎は言葉も無く再び階段を駆け上がった。

今度は鈴音と菜摘も一緒に。だが…

「え！？」

「どうなってるの！？」

階段を駆け上がった四人の目の前に広がるのは二階ではなく三階の景色。

「あざみちゃん！二階の！雅ちゃん達の様子はどうなってるの！？」

菜摘が無線に向かって叫ぶ。

『ダメ！さっきから二階の監視カメラが全て映らなくなったのよ！』

だが返って来たのは無情にも監視カメラが機能しなくなったという事実だった。

†††††

（何だって言うんだこいつ…）

零牙は逆刃刀の鯉口を切りながら目の前の鬼女を睨みつける。

今まで幾多の霊魂を見てきたが、そのどれとも違う。

一番近いのは先日の浮世絵町でみた妖怪たちだが、それとは根源的に何かが違う。

『我…を……』

耳障りな声で鬼女が何かを呟く。はっきりとは聞こえないが言うならば本能的な畏怖…。

それを振り払うかのように零牙は抜刀しながら前に出た。

一瞬で間合いを詰め、八メートルほどの距離を零にし、その勢いのままに逆刃刀で相手の胴体を薙ぎ払う。

人間では避けることさえ不可能な一撃。その一閃は確実に相手を捉えたはずだった。

「なっ！？」

零牙が驚愕の声を上げる。逆刃刀が打ち込まれる寸前、鬼女の姿が掻き消えたのだ。

標的を失って零牙の一撃は空を斬る。

（チッ！一体どこに…）「レイッ！」

首だけで振り返った零牙の視界に雅とその目の前に立つ先程の鬼女の姿が映った。

「ミアッ！？」

零牙は即座に抜き身の逆刃刀を鬼女に向けて投擲しようとした。だが…

（ッ！ダメだ…）

鬼女はちょうど零牙と雅の直線上にいる。このまま逆刃刀を投げて、また消えられれば逆刃刀は雅へと向かうことになる。

（なら…！）

零牙は踏み込んだ脚に再び力を込める。力のベクトルを反対方向へ向けるために脚の筋肉が悲鳴を上げた。

鬼女が雅へとその手を伸ばす。

（させ…るかぁ！！）

零牙の白い髪が一瞬、ほんの一瞬だけ漆黒に染まった。両眼にも一瞬だけ紅い光が宿る。

――――

（え！？）

雅はいきなり目の前に現れた鬼女の存在に瞠目した。

さきほどまで零牙の前にいたはずだ。それが今は自分の目の前にいる。

「レイッ！」

雅は零牙の名を叫んだ。

『我を…目覚めさせた…のは…』

耳障りな声が雅の耳朶を打つ。

白い着物を纏った鬼女の腕が雅の首元へと伸ばされた。

「ミアッ！」

恐怖に揺らぐ雅の視界に映ったのは鬼女の左肩から右脇腹を切り裂いた逆刃刀。

その一瞬後には雅は零牙に抱えられ、さらに後ろへと飛びのいていた。

『我……せた…はお…か…』

その言葉を最後に、上体を両断された鬼女は塵となるように消え失せた。

「レイ…今の…なに？」

目の前でヒトが斬られ、さらにそれが消失すると言った事態に雅は半ば茫然となりながらも零牙に尋ねる。

「分からない…」

直接相対したものの零牙の目を以てしても相手の正確な正体は見抜けなかった。

零牙はゆっくりと膝を折ると、雅を下ろし、そのまま両手を着いて荒い息を繰り返した。

「でもあれは…人間じゃない」

正体こそ分からなかったが確実に人外のものであることは断定できた。

ほんのわずかな時間の接触であったが鬼女の放つ異質な気は零牙に酷い消耗を強いていた。

予定外に『肉体強化（ルシフェル）』の魔術を用いたのも堪えたのだろう…

「大丈夫？レイ…」

見かねた雅が零牙の頬へと手を伸ばした。

そこへ背後と正面からこちらへと駆けてくる足音が聞こえた。

「ミア！零牙！大丈…」

「ミアちゃん大丈夫やっ…」

「二人とも一体何が…」

「ミアちゃん無事…」

委員会の先輩四名が二人を心配して（うち二名はミアの方に重心が行ってるが）駆け付けたのだ。

だが四人は零牙と雅の姿を見ると完全にその場に凍りついた。

「どうしたんですか？」

零牙の言葉にいち早く我を取り戻した鈴音が暗闇でも分かるほどに顔をしながら言う。

「ふ、二人とも一体な、何があったの？」

その言葉に零牙と雅は改めて自分達の状態を確認した。

雅…へたり込んでいたところを抱えあげられたため、上着のボタンの下側数個が外れている。
しかもお姫様抱っこでそのまま床に降ろされたので若干服が上にずり上がっている。

零牙…（戦闘によって）息も荒く、雅の脇に両手を上にのしかかっているような状態。
しかも頬には雅の右手が添えられている。

傍から見たら零牙が雅を押し倒そうとしているような状態だったり

するわけだ。

「「!?!?!?!?」」

冷静に分析したところでようやく自分達がどのような体勢でいるのか認識した二人は慌てて離れようとした。

「うわっ!?」「きゃっ!?」

だが、双方が慌てていたためか雅の左手は零牙の右腕を払うような形になり、零牙は雅の上へ倒れ込んだ。

その結果…

ピキッ!!

何かが斬れるような音の三重奏が零牙の鼓膜を揺らした。

「零牙…たしかに付き合うのは認めたが…」

「零牙くん…それ以上はあかんで?」

「雅ちゃんに対してそんなことして…」

修と椎と菜摘が笑顔を浮かべる。

シスコン　ロリコン×2

三人の放つ負のオーラは先程の鬼女の比ではない。

唯一冷静な委員長はその三人の気迫に呑まれてオロオロするばかりで援護は見込めそうにない。

雅は煙が噴きでるんじゃないかと言うほど顔を真っ赤にして何やら呟いているしで…

速水零牙…孤立無援の状態である。

「ま、待った!!これは事故…」

「「「問答無用!!」」」

「俺は無実だ～～～～!!!」

第二十八夜　白昼夜　～交差する探偵と魔術師と陰陽師～？（後書き）

琥珀「さて…ようやく前振り部分が終わったかな？」

昌彰「いよいよ次話は不知木町へ行くんだな？」

琥珀「予定ではね。そういえば零牙くんは？」

昌彰「あっち…←」

修「待て零牙！」
椎「大人しく捕まりい！」
菜摘「ミアちゃんを押し倒したりして！」
椎&菜摘（羨ましい！！）

琥珀「……なんか若干私怨というか羨望というか嫉妬が見え隠れするんだがいいのか？」

昌彰「たぶん大丈夫なんじゃないか？零牙もＦＦＦ団で慣れてるだろうし…」

琥珀「もし今回の事がばれたりしたら…」

昌彰「想像したくないな…」

琥珀「それはそうと昌彰くん。またゲスト出演で『本格推理委員会』に出てるね」

昌彰「ああ、向こうは只今絶賛戦闘中だからな」

琥珀「夢幻さんもありがとうございます！」

昌彰「お前も続きを早く書け…」

琥珀「夏休みも終盤に差し掛かってるからね。書けるうちに書いとかないと。それでは読者の皆様、読んでいただきありがとうございます！」

昌彰「次回はいよいよ舞台が不知木町に移ります。ようやくだよ…」

琥珀「それでは次回も楽しんで頂けるように頑張りたいと思います！それでは！」

第二十九夜　白昼夜　～交差する探偵と魔術師と陰陽師～？（前書き）

学校…始まったなぁ…

第二十九夜　白昼夜　～交差する探偵と魔術師と陰陽師～？

「それじゃあ皆さん、明日から夏休みですね～」

六年六組に幼女（ロリ）教師、小萌先生の声が響いた。

普通なら歓声が上がるところだろうが何故か六組の教室には重い沈黙が…いや殺気が充満していた。

（速水…覚悟はいいな？）（包囲網はすでに完成している…逃がしはしない…）（（（（（コロス…！！））））））

「先生、ものすごい寒気がするので早退していいですか？」

その殺意の対象、速水零牙はさすがに冷や汗を流しながらこの場から逃れようとしたが…

「ダメですよ～。零牙ちゃん、今にも全力疾走できそうじゃないですか。むしろ先生が心配なのはリュウくんの方なのですよ」

小萌先生は零牙の申し出を即座に却下した。そしてむしろ零牙の後ろの席に座っている龍之介を気遣う。

「そういやどうしたんだ？リュウ」

いつもならば殺気を放っているＦＦＦ団の先頭にいるはずの龍之介が今日はいやに大人しい。

むしろ顔色も悪く目の下にははっきりとした隈が見て取れた。

左腕には何故か白い包帯が巻かれている。

「いや…ちょっとな…。なあ零牙、お前たちは例の不審者を追ってるん…人の話はちゃんと聞けよ…」

零牙は龍之介の話の最中に欠伸を噛み殺していた。

「いや悪い…昨日は夜遅くまでミアと学校に残っていたからな…」

ジャキンッ!!ジャラッ!!

静かな教室に二種類の金属音が響いた。

一つはSMG（サブマシンガン）にマガジンを装着する音。

もう一つは鎖鎌の分銅を引きずりだした音だ。

「大体いくら深夜にしか出ないからといって生徒を遅くまで校舎に残らせるのも…」

「レイ…お前な…少しは場所を考えようや？」

そこで零牙はようやく気付く。クラスの男子全員（ＦＦＦ団）が自分の周囲をぐるりと取り囲んでいることに。

「い、いや！委員会で残ってただけだ！ちゃんと先生や先輩達も一緒だった！！」

必死でいい逃れようとする零牙だったが…

『ピンポンパンポ～ン。零牙くん！雅ちゃん！今日も理事長室に集合よ！昨夜二人っきりの時に起きたこと、詳しく話してもらうからね！！』

まさに地獄からの呼び出し音によって零牙の目論見は砕かれた。というかピンポンパンポンってわざわざ口で言うのか？

「ええっと…」

零牙はなんとか逃れる道を探した。だが…

（（（（（（コ・ロ・ス…！））））））

周囲を囲むのは視線に殺気を漲らせたＦＦＦ団。ある者の手にはＳＭＧ。ある者の手には鎖鎌。

「み、皆さん少し落ち着いてくださいなのですよ～」

小萌先生が必死で留めようとするも体格で勝るメンバーを止められるはずもなく…

「どいてください先生…」「漢（おとこ）にはやらねばならない時があるのです…」

言ってることは男らしいが嫉妬に狂ったＦＦＦ団のどす黒いオーラが零牙をぐるりと取り囲む。

「くっ…こうなったら！」

零牙の手元で強烈な光が発生する。
光蟲と素材玉を調合してできるアイテム、閃〇玉だ。
「うわっ!?」「眩しっ!?」
強烈な閃光はＦＦＦ団の目を眩ませる。
「くそっ!!速水のやつどこに行った!?」
ＦＦＦ団が視力を取り戻した時には既に零牙の姿はなく…
「逃がすな!追えっ!!」
「「「「イェッサー!!」」」」
どす黒い負のオーラを纏い、夜叉と化したＦＦＦ団は黒い波となって教室から飛び出して行った。
「レイッ!」
「ダメだよ?」
追われる彼氏を追いかけようとした雅だったがガクンと後ろから引き留められた。
「ね～ミアちゃん」
「昨日の事…私達にも詳しく聞かせてもらえるかな?」

そこにいるのは美咲と杏子を筆頭にしたクラス女子全員だった。

「えっと…そ、その…」

「はいはいこっち行こうね～」

顔を赤くして言い淀む雅の両腕を捕まえ、クラスの女子全員がぞろぞろと移動を開始した。

「レ…レイ（とあざみ先生の）バカァ～～！！」

雅は思わず不用意な言葉を漏らした恋人（と余計な放送を入れた顧問）に悲痛な叫びを上げるのだった。

†††††

―同時刻―

「着いた…。ここが…」

「不知木町…」

二人の陰陽師が不知木町に降り立った。

「「特に何もないな（あらへんね）…」」

昌彰とゆらの第一印象はそれだった。

浮世絵町も名物になるようなものはないが、不知木町も同様だ。

「でも霊脈の流れはそれなりにあるな…」

「雰囲気的には布留部市に似てるかもしれへんね…」

そう言いながら二人は駅員の人に聞いた道筋を辿る。

「あ、アレと違う？」

ゆらが指差した先にあったのは一軒の居酒屋だった。

和風の外観はどこか京都の料亭を思わせる店構えだ。

「『なにわ屋』…となるとその二軒隣が修さんの家で、その向かい側が…」

ピンポーン

表札にある速水の文字を確認して昌彰は呼び鈴を押した。

「は～いどちら様ですか～」

家の中から聞こえてきたのは零牙ではなく少女の声。

パタパタと廊下を走る音が聞こえて黒の修道服を翻したショートカットの茶髪のシスターが出てきた。

「えっと…速水零牙くんを訪ねてきたんだけど…キミは？」

出てきたのが零牙ではないことに些か動揺しながら昌彰は聞き返した。

「あっ！もしかして安藤さんと花開院さんですか？お兄ちゃんから話は聞いてます！」

少女は目を輝かせてそう言った。

「お兄ちゃん？零牙くんに妹がおったん？」

ゆらが驚いて目を丸くするが、昌彰も初耳である。（※注．番外編での接触は無視する方針でお願いします）

「あ、はい！私、姫野真優って言います！お兄ちゃんの妹です！！」

少女は元気よくそう言ってぺこりと頭を下げる。

「そっか…初めまして真優ちゃん、もう知ってると思うけど花開院ゆらです」

「俺の事も知ってるみたいだね。安藤昌彰、ゆらの義兄だ」

昌彰とゆらも簡単な自己紹介を済ませた。

「それで真優ちゃん。零牙くんは今どこにおるん？」

「お兄ちゃんならまだ学校にいると思いますよ？本格なんとか委員会の集合がかかったとかで」

「ああ、確か…本格推理委員会かな？」

「そう、それです！昨日も夜中まで帰って来なかったんですよ！空

腹の妹をほったらかして…」

真優は頬を膨らませながらそう言う。特に後半は完全に恨み言になっていた。

「そうか…」

真優のその言葉に昌彰は昨日の電話を思い出した。

「お兄ちゃん…」

「ああ…。真優ちゃん、木ノ花学園までの道を教えてくれるかな？」

†††††

「ううっ…ミア～そろそろ勘弁…」

「レイ…あと五分我慢してね！」

にっこりと笑って雅は罰の延長を言い渡した。

ちなみに罰とは古式ゆかしく正座である。しかも膝の上には重石付きの。

「零牙くん…羨ましい…」

「ええな～零牙くん…」

しかしそんな零牙を菜摘（ロリコンの二人）と椎は羨ましげに見ていた。

「……」

それに対して零牙は何も言い返さない。いや、言い返せない。実際に喜んでしまっているのだから。

別に零牙がMという訳ではない。問題は膝の上に乗っている重石だ。

「♪～」

至福の表情を浮かべながら雅は零牙の胸に背を預ける。

そう。零牙の膝の上に乗っている重石とは雅自身。何も知らない他人が見れば恋人同士がいちゃついているようにしか見えない。

「二人ともそのままの姿勢でいいから聞いてね。まずは昨日の状況を報告するから」

あざみ先生はそんな雅と零牙を余所に部屋に積まれた本の奥からホワイトボードを引っ張り出してきた。

「鈴ちゃんお願いね」

あざみ先生からペンを受け取った鈴音がすらすらと昨日の現場である初等部の校舎の見取り図を描いていく。

「すご…」

その正確さに零牙は思わず呟いた。自らの瞬間記憶能力を使ったとしてもこうも正確に書くのは難しい。

さらには防犯カメラの位置も描き込んであった。

「ここが昨日、零牙くん達がいた場所」

そう言いながらあざみ先生は零牙と雅の顔が描かれたマグネットを二階の南校舎の廊下に張り付ける。

「椎ちゃんと修くんはここで、鈴ちゃんと菜っちゃんがここね」

さらにあざみ先生は四つのマグネットを北校舎の四階廊下と一階の昇降口に張り付ける。

「そして不審者が現れたのがここ」

最後に二階の東側の渡り廊下に鬼の形をしたマグネットが張りついた。

「で、ここからが再現。みんなあの時の動きをこれで再現してみて」

そう言われてまずは菜摘が自分達のマグネットを動かす。

「あざみちゃんから指示を受けて私たちはすぐにそっちに向かったわ」

菜摘達は南校舎一階の廊下を抜けて東側の階段下へ。

「俺たちは北校舎の四階にいたからな。東の渡り廊下を渡ってそのまま階段を下りてきた」

次に修が東側の三階へと自分達のマグネットを動かした。

これで階段は上下ともに物理的に塞いだわけだ。

「この間に不審者は南校舎の方へ移動。渡り廊下の防犯カメラから外れた後、何故か二階の防犯カメラは全て映らなくなった」

あざみ先生が鬼のマグネットを動かし、零牙達の方を向き直った。

「俺たちは二階に行こうとしたけど、何故か行けなかった。三階から階段を下りても何故か直接一階に着いちまったんだ」

「私達も同じだよ」

修と鈴音達も零牙達の方を向いた。

全員がこの事態が常識で測れないと感じ取っていた。

「あれは…」コンコンッ

零牙が話そうとした出鼻をくじくように理事長室の扉がノックされた。

「んもう…こんな時に…鈴ちゃん出て。『作戦会議中』ってプレートでも作ってかけておこうかしら…」

ぶつくさと文句を言うあざみ先生を尻目に鈴音が理事長室のドアを開けた。

そこにいたのは…

「リュウ？なんでここに…」

先程教室で一人取り残されていた龍之介がいた。些か真剣な面持ちなのが気になるが…

さすがにこうなると雅も零牙の膝から降りた。

零牙は血が通い出して痺れる脚に顔を顰めながらも立ち上がる。

「ああ…零牙…いや、本格推理委員会に依頼があって来ました」

そう言って龍之介は深々と頭を下げた。

「ちょ…えっと早川くん？顔を上げて！」

普段と違う龍之介の真剣な様子に戸惑ったように鈴音は声をかける。

「リュウくん。悪いけど今、厄介な案件を抱えてるの…その後で構わな「それに関係あることだとしたらどうです？」…話してもらえるかしら？」

あざみ先生の言葉を遮った龍之介の台詞に全員の顔つきが変わった。

「実は…」

龍之介の話を要約するとこうだ。

今から十日ほど前、正確には学園内で鬼女が目撃されるようになった日から、龍之介の部屋にも似たような女が現れるという。

最初の方こそ窓の外にいたのだが、ここ数日は室内に出るようになった。

「昨日に至っては…」

そう言いながら龍之介は左腕に巻かれた包帯を解いた。

「「「「「「「!?」」」」」」」

零牙を除く本格推理委員会のメンバーは思わず息をのんだ。

その腕には手の跡とはっきりと分かるほど痣が残されていたからだ。

（マズイな…）

零牙は一人心の中で呟いた。

『呪詛』…昨日昌彰から伝えられた言葉が現実味を帯びてきたのだ。

仮にこの呪詛が龍之介に向けられたものでその余波が学園内にも及んでいるとしたら…

（オレだけじゃ手に負えないかもしれない…）

コンコンッ

零牙が思考の海に沈もうとしたところで再び理事長室のドアがノックされた。

「…なんで今日に限ってこんなに来客が多いのかしら…鈴ちゃん、

関係ない人だったらちゃんと断ってね」

「は…はぁ…」

気の弱い鈴音に無理な注文をするあざみ先生。

再び開いた理事長室のドア。そこに立っていたのはあざみ先生の期待を裏切り、この事件の関係者たる人物達であった。

「失礼します。えっと、こちらに速水零牙くんがいると聞いて来たんですが…」

「昌彰さん！もう来れたんですか！？」

零牙は一瞬驚いた表情を浮かべたが即座に満面の笑みを浮かべた。

この状況で最も頼りとなる人物の登場に喜びを隠せない。到着は明日の予定だったから喜びも大きい。

「久しぶりだな零牙。それと雅ちゃんに修さんも」

昌彰は零牙と雅を見つけて笑いかけるとその後ろにいる修にも頭を下げた。

「こちらこそ！ゆらちゃんも元気だった？」

雅も昌彰の後ろにゆらがいるのを見とめて駆け寄っていく。

久しぶりの再会を喜ぶゆらと雅。そしてそれをニヤけながら見ている三人組とそのうちの一人に忍び寄る黒髪の少女…

「リュウ…なんでこんなところにいるの…？」

「…ハッ！？何でミユがここ…「フンッ！」…グハッ！？」

ゴキュリッと、明らかに人間の首から聞こえたらまずいような音がして、リュウの意識は闇に沈んだ。

第二十九夜　白昼夜　～交差する探偵と魔術師と陰陽師～？（後書き）

琥珀「再び遅くなってしまいまして申し訳ありません！！」

昌彰「初っ端から謝罪でスタートか…」

琥珀「ホントにごめんなさい！肉体の疲労にスランプも重なり…正直全然筆が進みませんでした！」

昌彰「はい、言い訳はそこまで。本編の話に入ろうか」

琥珀「はい…。ようやく不知木町に行けたね！」

昌彰「お前がさっさと書かないからだろうが…」

琥珀「仰るとおりです…あ、それと…今日のゲストは零牙くんではなく…」

美雪「どうも。ゲストで呼ばれた白石美雪です」

昌彰「ようこそ美雪ちゃん。ってなんで？零牙は？」

琥珀「あそこ…」

雅「♪～」

零牙（辛い…。理性が…）

昌彰「まだお仕置き終わってなかったんだ…」

琥珀「そう言うこと。それに理事長室までキミたちを案内したのは彼女なんだし」

昌彰「それはわかってるが、きちんと説明しとかないと読者のみなさんには唐突過ぎる登場だぞ？」

琥珀「ん、詳しく言うと教室訊ねたら誰もいなくて、たまたまいた隣のクラスの美雪ちゃんが道案内を買って出たって流れ。美雪ちゃんもこの後本編に絡んでくるから」

美雪「ミアはけっこうイベントが多いみたいですけど私は？」

琥珀「ん～と、痴話げんか？みたいなのが多いかな？でも雅ちゃんより先にメインイベントが起こるよ？」

美雪「メインイベントって？」

琥珀「それはお楽しみ。でも美雪ちゃんは影のヒロインみたいになるかも」

美雪「楽しみにしてます。リュウも楽しみだよね？」

龍之介「……」

琥珀「リュウくんは未だに気絶中か…。それと明日は…」

昌彰「間に合うのか？」

琥珀「努力する…。次話は企画です！それではまた明日お会いしま

しょう！」

9月23日　奴良リクオ誕生日企画（座談会）（前書き）

なんとか間に合った…
企画というかいつも通り座談会です

9月23日　奴良リクオ誕生日企画（座談会）

琥珀「本日は只今絶賛コラボ中の『本格推理委員会』の舞台不知木町、なにわ屋よりお送りいたします！」

昌彰「という訳で、誕生日おめでとう！リクオ」

ゆら「おめでとう！奴良くん」

零牙・雅「おめでとうございます！」

リクオ「ありがとうみんな！」

琥珀「ゴメンねリクオくん。せっかくの誕生日だというのに最近全然出せなくて」

リクオ「仕方ないですよ。ボクはあくまで原作の主人公。この小説の主人公は昌彰さんですから」

琥珀「リクオくん…なんて聞きわけのいい子なんだ…」

昌彰「二人ともせっかくの誕生日にそんなにしんみりしない！」

琥珀「そうだね。今後の展開でも語ろうかな」

リクオ「その前にいいですか？メイン全員揃っちゃってるみたいですけど誰が料理とかをしてるんですか？」

零牙「ああ、料理なら…」

木下『ほら修！さっさとしい！せっかくお客様が来とるんや！腕を振るい！』

修『分かってますよ！』

木下『梢！テーブルの準備はできとんのやろな！』

梢『終わってるよ。後はお姉ちゃん達が飾り付けやってる』

琥珀「なにわ屋の次期料理長と看板娘さんが頑張ってくれてるから」

修『誰が次期料理長だ！？』

木下『修！さっさと手ぇ動かしい！まだあんたに看板はやれん！』

修『いりません！！』

リクオ「な、なんかいいんですか？」

雅「大丈夫ですよ。お兄ちゃんと木下おばさんはいつもあんな調子ですから」

琥珀「修兄は小さいころから鍛えられてるからね。期待してていいと思うよ」

昌彰「俺も今度教えてもらおうかな…。っと、話を戻そう。次話は俺と零牙の共闘だよな？」

零牙「結局あの鬼女は一体…？」

琥珀「それも次話くらいには分かると思うよ。ただまた前振りというか会話部分が長くなれば次に持ちこしかも」

雅「ですよね…ゆらさんを虎視眈々と狙ってる人が二人…」

ゆら「今もなんか嫌な予感がひしひしと…」

琥珀「ああ、それは大丈夫だよ。ちゃんと対策は取ってくれるから（昌彰くんが）」

リクオ「大丈夫なんですか昌彰さん…」

昌彰「まあ、どうにかするしかないが…」

零牙「また長くなりそうですね…決着がつくのはいつになるのやら…」

琥珀「少なくとも後三話くらいはかかるかな」

リクオ「それまでボクは出番なしと…」

琥珀「う…ゴメンね？原作十八巻も出たことだし京都編後の設定もできつつあるから。ね？」

昌彰「どうするか決まったのか？」

琥珀「一応ね。重心は京都に置きつつ、浮世絵町にも戻るパターンで。問題は過去編（江戸時代）なんだよね…」

昌彰「ああ、設定じゃウチはまだ京都にいるからな…」

琥珀「出せないことはないんだけど…これまた決着待ちになる…」

ゆら「つまりはまた未定…ってこと？」

琥珀「うん…関わらせると昌彰くんも多少はそのことを知っている状態になるから矛盾が出そうで怖い」

零牙「（昌彰さん、朧月さんって意外とヘタレ？）」

琥珀「聞こえてるよ零牙くん。慎重と言ってくれないかな。まあ小説版の帝都鯉物語の方には参戦させようかな？とは思ってるんだけど」

昌彰「舞台は大正時代だからな。だがどう絡めるつもりだ？」

琥珀「その辺は全くの未定で…」

昌彰「まあ頑張れ」

琥珀「随分と投げやりだね…」

修「そろそろいいか？準備できたぞ」

琥珀「お待ちしてました修兄！ちなみにメニューは！？」

修「お前は喰い付きが早すぎるんだよ…リクオくん主賓は君だろ！こっちへ」

リクオ「あ、はい！」

修「今日のメニューは、突き出しに牛肉たっぷりのきんぴらゴボウ、前菜に和風大根のしゃきしゃきサラダ、メインが魚料理に子持ちカレイのあっさり煮つけ、肉料理は牛タンのまろやかシチュー、最後にデザートに杏仁豆腐だ」

一同『おおお～～～』

修「ま、前回のリベンジも兼ねてこのメニューにしてみたんだが…どうっすか？」

木下「ん、前回よりも進歩が見えるな…まあ六十二点ってとこやな」

琥珀「ちなみに採点基準は…
四十点で主婦合格
五十点で料理屋合格
七十点で一流料理屋合格らしいです」

木下「ちなみになにわ屋（ウチ）の看板預けるんやったら八十点は取ってもらわなあかんな！」

琥珀「他の委員の皆さんも飾り付けご苦労様でした」

椎・菜摘「ゆらちゃんのためやったらこんくらい朝飯前や（よ）」

昌彰「いや、リクオの誕生日なんだが…」

鈴音「ゴメンね、リクオくん。あの二人はかわいい子に目がなくて…悪気はないんだけど…」

リクオ「い、いえ…（氷麗連れてこなくてよかった…）」

あざみ「はいはい！それじゃ、皆さん揃ったところで…」

昌彰「リクオ！」

一同『誕生日おめでと～！！』

第三十夜　白昼夜～交差する探偵と魔術師と陰陽師～？（前書き）

また遅くなりました…
多少グダグダになっていますけど、目を瞑っていただけると幸いです。
それではどうぞ

第三十夜　白昼夜～交差する探偵と魔術師と陰陽師～？

「連絡をしてくれればよかったのに…（しかし助かりました…）」

「すまないな、急に電車の予約が取れたもんだから…（昨日の件か？）」

昌彰と零牙は雅や他の委員会のメンバーに気取られないように囁きかわした。

「零牙くん達、わたし達にも紹介してもらっていいかな？」

鈴音にそう言われて昌彰と零牙が周りを見回してみれば部屋にいる全員の視線が昌彰達に集中していた。

鈴音は今にもゆらと雅に飛びかかっていきそうな菜摘を抑えている。

尤も空手部のエースの菜摘に小柄な委員長は徐々に引きずられていたが…

「そうだな。俺たちも先輩たちを紹介したいし…（椎、今度の食事会は納豆フルコースにするぞ？）」

修も完全にエロ親父顔になっている椎の首根っこを掴んでいた。椎は後半に囁かれた台詞で生ける屍と化していたが。

「あ、はい。えっとこちらが…」

「安藤昌彰といいます。浮世絵中学で生徒会副会長をやっています。

零牙くんとは地元で協力して事件を解決しまして…その縁で連絡を取り合ってます」

そう言って昌彰が一礼する。

「花開院ゆらです。兄と同じく浮世絵中で生徒会会計をやっています」

ちなみにゆらを会計に決めたのは昌彰だ。実務のトップと財源さえ抑えておけば清継も生徒会予算を下手なことには使わないだろうと考慮してのことだ。

「へぇ～花開院って珍しい苗字やなぁー。たしか京都に同じ地名があったよーな」

納豆ショックから立ち直った椎が身を乗り出すが、再び修に抑えられた。

椎の母親は関西人なので親近感がわいたのだろうか？

「（いや、むしろ単にゆらを近くで見たかっただけという可能性の方が高いか…）」

椎と菜摘の視線からゆらを庇うように昌彰は前に出た。

「あざみ先生、今回の件、お二人に協力してもらってもいいでしょうか？」

ようやく落ち着きだした委員会のメンバーをみつつ零牙はあざみ先生にそう切り出した。

「もう分かってはいると思いますけど、今回の件は人間の仕業じゃありません…」

「だろうな」

「でしょうね」

零牙の言葉に修と菜摘は頷いた。

昨夜のような体験をすれば受け入れざるを得ないだろう。

「お二人は陰陽師ですのでこう言った事象にも詳しいですし…」

『昌彰、今戻ったわ』

零牙が説明していると、いきなり中空にツインテールの少女の姿形をした式神が現れた。

雅や零牙は以前見たことがあるが、鈴音をはじめとした他のメンバーは初めて見る魔法とも呼ぶべき現象に驚いた表情で固まっている。

若干二名の視線は完全に太陰をロックオンしているような気がしないでもない。

「太陰か。…白虎はどうした？」

昌彰は学園に入る際に、風将である太陰と白虎に周囲の警戒を命じていたのだ。

もっともその網に引っ掛かったのはゆらを盗撮しようとしたＦＦＦ団の面々だったわけだが…

『上空に残って監視するって…！？』

その報告をしていた太陰は背筋に殺気とは違う嫌な気配を感じた。

「「か…」」

「か？」

太陰の背後から聞こえた声に昌彰がそちらを見ようと体をずらした。

「「（お兄ちゃん…避けたがええと思う…）」」

「「かわいい～（ええ～）」」

『はぅわっ？！！』「うぉわっ！？」

先程から太陰に熱い視線を向けていた菜摘と椎は委員長と修の拘束を振り払い、飛びかかって来たのだ。

二人が突っ込んでくる方向に立っていた昌彰は慌てて飛び退く。

「…ええっと…」

間一髪で二人の突進を避けた昌彰は戸惑ったように視線を修達に向ける。

しかし、修と委員長は苦笑とすまなそうな視線を向けてくるばかり

だ。

梢は溜息を一つ吐いて明後日の方向を見やっているし、あざみ先生は相変わらず面白そうにそれを見ている。

雅はゆらと美雪を連れて、できる限りその二人から離れていた。

「（…昌彰さんわかってて太陰さんを呼びました？）」

零牙にそう囁かれて昌彰は零牙から聞いていた菜摘と椎のことを思い出した。

二人とも『可愛い子が好きな人』であるとかなりオブラートに包んだ言い方ではあったが…。

『ちょっと昌彰！助けなさいよ～！』

捕まっている太陰は必死でもがき、昌彰に助けを求める。人間相手に手は出せないにしても、隠形して霊符に戻ってしまえばいいのだが…

「キレ～な髪やな。撫でてて気持ちええわ～」

「うふふ、ツインテールっていうのもツボよね」

『ちょっ…なんなのよ一体～！？』

菜摘と椎、二人の暴走は止まる気配を見せない。太陰は為すすべもなく人形のように弄ばれている。

「…玄武、後は任せた」

完全に変態（ロリコン）と化している二人を見て、微かに頬を引き攣らせながら昌彰は新たに玄武を召喚した。

『承知した』

玄武は即座に応じて顕現する。この分だとほっといても勝手に顕現してきたかもしれない。

太陰をいじくりまわしている二人の元へてくてくと歩いていった。

――――

『二人ともそろそろ太陰を離してやってほしいのだが…』

「へ？」「うん？」

太陰に夢中になっていた菜摘と椎はその声でようやく太陰を撫でまわしていた手を止めた。

しかしそれと同時に視線も玄武へとロックオンする。

『太陰、今のうちに…「「かわいい～（ええ～）」」ぬぉっ!?』

太陰を小脇に抱えた変態達はそのまま玄武をも襲撃していた。

「ええな～うちもこういう弟がほしい！」

『ぬ…我はこう見えても…ワプッ!?』

玄武の言葉が途中で途切れる。菜摘が思いっきり玄武の頭を抱きかかえたからだ。

「いや～ん。かわいいのに口調は堅～い」

…太陰と同じように完全にお人形にされてしまう玄武であった。

――――

「…椎の奴、ロリコンだけじゃなくショタコンの素質もあったのか…」

幼馴染の新たな一面の発見に修はもはや苦笑するしかない。零牙が来た時にも多少その気があった様な気はしていたが…

「菜っちゃんも…空手部の人たちがこの姿を見たら泣くわね…」

鈴音は既に軽く涙を浮かべているように見えるのは気のせいだろうか？

椎の妹の梢は申し訳なさそうな何とも言えない顔をしている。

「（太陰と玄武を手玉に取るとは…あの二人、侮れないかもしれないな…）っと、それより話を進めたいんだけど…二人を戻してもいいかな？」

昌彰がどこかずれた感想を抱きながら零牙に訊ねた。

「（やめといたほうがいいですよ。引っ込めたら今度はたぶんゆら

さんに行きますから）」

ぼそぼそと零牙は囁き返す。昌彰は無言でそれに頷くしかなかった。

ちなみに太陰と玄武はというと…

――――

『玄武…あんたねぇ…』

『なんだ太陰？黙って見ているだけでなくなんとか脱出する方法を…フムッ！？』

『デレデレしてんじゃないわよ！！』

妙齢の女性二人を相手に下手に動けない玄武の頬を太陰が引っ張る。

「へぇ～」「ふむふむ、二人はそういう関係だったのね…」

神将二人を抱え込んだ変態二人はしたり顔になって太陰を覗きこんだ。

『なっ…そ、そんなんじゃないわよ！！』

太陰は、それはもう面白いくらい顔を真っ赤にして否定の言葉を口にする。

『太陰…手を放してくれうと助かるのだぐぁ…』

まだ頬を引っ張られたままの玄武はそのままの状態でなんとか言葉

を紡いだ。

『も、元はと言えば玄武が悪いんじゃない！』

さらに赤くなって玄武の頬を引っ張る太陰。

菜摘と椎はそんなことを気にせず二人をいじり続けるのであった。

†††††

「とりあえず詳しい説明をしますね」

太陰と玄武を弄くりまわしている菜摘と椎を余所に零牙は昌彰とゆらに昨日の状況も含めて説明を始めた。

「ああ、そうだな。頼む」

昌彰もこのままでは埒があかないと判断し、説明を聞くために応接セットのソファーへと腰を下ろした。

しっかりとゆらを内側に入れ、万が一にも菜摘と椎が襲ってきても対処できるようにしておくも忘れない。

「最初に出たのは先週のこと、高等部の校舎の巡回警備員が目撃したらしいわ」

そう言いながらあざみ先生は机の前に積んである資料の中から学園の地図を強引に引きずり出した。

ただ積んであった資料の山は当然雪崩をうって崩れ落ちる。

修は「またか」と言った顔で溜息をつき、鈴音は散らばった資料を片付けようとするが不器用なせいか積み上げてもまたすぐに崩れ落ちてしまう。

委員会の日常と理事長室の散らかっている理由が垣間見える光景だ。

「今まで出たのは五か所。こうして見るとホントにバラバラですよね」

梢があざみ先生の広げた地図に今まで出た場所をペンでマークしていく。

高等部校舎、中等部校舎、事務管理棟、初等部校舎、特別教室棟風見鶏。

これら五か所はやや中央寄りではあるものの均一に散らばっている。

「そして傾向なんだけど、今まで一度も連続して同じ場所に出た事はないそうよ」

あざみ先生が出てきた順に五か所を指で辿った。

「ん？」

その動きに昌彰は見憶えがあるような気がして首を傾げた。

「先生、もう一度出てきた順番教えてもらっていいですか？」

「ええ。えっと…高等部、管理棟、中等部、初等部そして風見鶏の

順だけど…」

もう一度あざみ先生が地図の上をなぞる。その指の動きはあるカタチを創っていた。

「まさか…」

「！昌彰さん、もしかして…」

二回目で零牙もそれに気づいた。

「ああ…すみませんペンを貸してもらっていいですか？」

昌彰は梢からペンを受け取り、地図上に直線を記していく。

高等部から管理棟へ、管理棟から中等部へ、中等部から初等部へ、初等部から風見鶏へ…そして風見鶏から高等部へ。

「やっぱり…」

「これは…」

そこに現れたのは五芒星。洋の東西を問わず破邪の印、魔術の紋章として扱われる力ある象徴（シンボル）。

「昨日の隔離現象と言い、リュウの所に出た鬼女と言い、ホントに呪詛なんじゃ…」

明らかに魔術的な痕跡に零牙は呟いた。下手をしたら龍之介に害が及ぶ可能性がある。

「待て零牙、その話は初耳だぞ？」

昌彰とゆらは昨日の捕縛作戦前までの情報しか聞いていない。

零牙は手短に昨日の捕縛作戦とついさっき龍之介が持ちこんできた相談について説明した。

「……」

「昌彰さん？」

新たな二つの情報を聞いてから昌彰は呪詛かもしれないという自分の仮説に疑問を持った。

呪詛ならば相手に害を為すことを目的としているはず。しかし話を聞く限りではさほどの実害は出ていない。

さらに対象が龍之介だとはっきり分かっているのなら校舎の方に出てきた鬼女の方が説明できない。

仮に余波が鬼女として実体化したとしても何故出た学校なのかという疑問も残る。

かと言ってこれほどまでに類似した現象が個別に起こるとは考えにくい。

「っ～…ダメだ。考えても埒があかない。零牙、あざみ先生。今日もその作戦やることはできますか？」

行き詰った昌彰はそう提案を出した。実際に自分で見てみれば何かわかる可能性は十分にある。

「問題ないわ。どうせ今日もやる予定だったし、人手が増えるのもありがたいしね！」

あざみ先生は微笑みながら即断で許可し、他のメンバーからも反対意見は出ることも…

「あ、あざみちゃん。私パス！」

「うちもや！」

反対意見は出なかったが欠席願いがまだ太陰と玄武を弄んでいる二人から飛び出した。

「ちょ、先輩！？」

零牙が焦った声を上げる。

他の委員会メンバー中随一の武闘派の菜摘に、超能力に等しいまでの直感を持つ椎が抜ければ戦力の大幅な低下は免れない。

「ゴメンね。けどこんな良質な素材放っておけるわけないでしょ！行くよ椎ちゃん！」

「了解や！！」

しかし無情にも椎と菜摘は理事長室から飛び出して行った。

…太陰と玄武を抱えて。

「「「「……」」」」

あまりの速さに昌彰達は呆然と見送ることしかできなかった。

「はぁ…。まあいいわ。昌彰くん、今のうちに細かい作戦を詰めていくわよ」

あざみ先生が気を取り直したように今後の方針を決めようとする。

「ええ、構いませんよ。それで零牙、あれはだいじょうぶなのか？」

皆が昌彰の指差した方を見れば、そこには全身に足跡がついて気絶したままの龍之介が転がっていた。

「「「「あ…」」」」

美雪に気絶させられた後、どさくさにまぎれて放置されていた上に先程椎と菜摘に踏まれたのであろう。

『昌彰様…一応治療を…』

昌彰の背後に静かに天一が顕現した。零牙以外の委員会メンバーは新たな式神の登場に目を白黒させている。

これが青龍あたりだと怯えてしまうだろうが…

「天一さん、ほっといていいですよ。そのうち復活するはずですから」

昌彰が何か言う前にいつもの事だと零牙が流す。

『では意識が戻るまではこうしておきますね』

そう言って天一は神気を用いて龍之介を運んでくると床に腰を下ろし、その頭を自らの膝に乗せた。

「……（ジー）」

その様子を食い入るように見つめる美雪。やがて何か決心したように天一の側へ行くと話しかけようと口を開いた。しかし…

『天貴…そういうことは俺以外にするな…』

龍之介に向けて限りなく殺意に近い怒気を滲ませた朱雀が割って入った。

『朱雀…「う、う～ん。あれ？ここは」気がつかれましたか？』

そして最悪のタイミングで龍之介が目覚めた。

『起きられますか？まだ気分が悪いようでしたら…』

龍之介の目の前にあるのは人外の美貌を持つ金髪碧眼の天一の微笑み。

しかも、後頭部から伝わって来る体温は、どう考えても膝枕されていることを龍之介に自覚させた。

「えっと…も、もう少しこのままでもいいですか？」

まあ、思春期に差し掛かった男の子としては正常な反応だろう。

うん、美人のお姉さんに膝枕されて微笑まれているのだからそれを拒否するはずがない。だが…

ピキッ！

ブチッ！！

周囲の状態がまずかった。部屋の中に鈍いイヤな音が二つ響く。

一つは朱雀が額に青筋を走らせた音。

もう一つは美雪がキレた音だ。

美雪に至っては完全に目がイってしまっている…

『それでは…』

天一がそのままで、と促すのを遮って朱雀は龍之介を天一から引き剥がす。

『美雪と言ったか？これはやる。好きにしろ』

そのまま襟首を掴んで美雪の前に吊り下げた。

「ありがとうございます、朱雀さん。リュウ、さぁ逝こうか」

「え、えええっ?!ちょっ、ミユさん字違うよね?このままだとオレ死んじゃうから!」

バタバタと暴れ出す龍之介を無視して美雪は懐から呪符を取り出した。

「さっき花開院さんからいいものもらったから試してあげるね!」

「ねぇっ、ミユ!?」

美雪は龍之介の首根っこを掴んだまま理事長室のドアへ向かう。

「それでは失礼しました」

バタンッ!

「…ゆら…いったい何を…[ぎぃゃぁぁっ!!!!]…渡したんだ?」

ドアの向こうから凄まじい絶叫が聞こえてきた気がしたが昌彰は敢えて無視して訊ねた。

「ん?護身用の呪符や。素人でも使える奴。例えるなら『三枚のお札』」

民話に出てくる願いを叶えてくれるというお札。それの護身用バージョンと言ったところだろう。

「えっと…護身用ってことは死にはしませんよね?」

雅が心配そうに尋ねる。

龍之介の身を案じたのか、美雪が前科持ちになるのを案じたのかはこの際おいておこう。

「心配せんでええよ。まあ、強めのスタンガンくらいの電流を浴びせかけるだけやから」

あっさりとゆらは答えるがそれでも十分凶悪な気がする…。

「それを三枚？（リュウのやつ、やっぱり死ぬんじゃないのか？）」

零牙も一応友人である龍之介の身を案じずには居られなかった。

第三十夜　白昼夜～交差する探偵と魔術師と陰陽師～？（後書き）

琥珀「……すみませんでした＞（＿　＿；）＜」

昌彰「…はぁ…」

ゆら「なんと言うか…」

昌・ゆ「「呆れてものも言えへんな」」

琥珀「…仰るとおりです。はい」

昌彰「言い訳はいいぞ。活動報告で既にしてるんだから。二度目はくどい」

琥珀「はい…」

ゆら「さて、楽屋ネタはここまでにして本編の話に入ろか？」

昌彰「そうだな…しかしいいのかゆら？呪符をあんな使い方して？」

ゆら「かまへん。婚約者を無下にするような男にはちょうどええ薬や」

琥珀「ちなみに呪符を渡したのは案内してもらった時だよ」

ゆら「そん時に色々話したんや…お、お互いの婚約者の事とか…／／／」

昌彰「なっ…！？」

琥珀「いや～、惚気合戦だったねあれは…聞いてるこっちがムズ痒かったよ」

昌彰「…しかし結局前回言った通り戦闘は次話に持ち越しだな」

琥珀「きりのいいところで切ったからね。またミユちゃん×リュウくんオチだけど…」

ゆら「零牙くんの見せ場も用意したってな～。それと雅ちゃんのも。本格推理委員会《向こう》じゃシリアスまっただ中やし…」

琥珀「頑張ってみるよ…。さて次回はいよいよ今回の事件の核心に迫ります！」

昌彰「いよいよか…」

琥珀「零牙と昌彰―魔術師と陰陽師の前に現れた鬼女の正体とは！？」

ゆら「次回もお楽しみに！」

第三十一夜　白昼夜～交差する探偵と魔術師と陰陽師～？（前書き）

またしても…
このままではいけない…

第三十一夜　白昼夜～交差する探偵と魔術師と陰陽師～？

―深夜二時―

赤煉瓦に緑の洋瓦を乗せた洋館―風見鶏―の四階ホールに三つ―黒髪、白髪、青髪―の人影があった。

「『二人とも準備はいい？』」

無線越しにあざみ先生の声が聞こえる。

「ええ、こちらは抜かりなく」

零牙がそれに応える。既に風見鶏は昌彰と零牙が造った結界の陣に囲われている。

禹歩をベースに魔を捕らえるために特化した結界だ。

元が単純なため探知するのは著しく困難だ。そのため発動するまでは敵に気づかれる可能性はないと言っていい。

「ゆら、そっちは大丈夫なんだろうな？」

「『今のところ大丈夫。こっちには勾陣もおるし』」

ゆらは今回他の委員会メンバーの護衛に回っている。

風見鶏の防犯カメラの映像は全て初等部の守衛室に送られるため、あざみ先生を始めとした委員会メンバーと美雪達もそちらに詰めて

いる。

美雪は「婚約者の事ですから」と笑顔で押し切って参加してきた。

昌彰や零牙が止めても聞くはずもなく、龍之介も美雪に懇願されて（正しくは呪符で脅されて）渋々認めざるを得なかった。

「『そろそろよ…』」

あざみ先生が昨夜と同じ時刻になることを無線で告げてくる。

その瞬間、ぶわりと不自然な風がホールを吹き抜けた。

窓は全て施錠されているので風が吹き込むはずがない。即ち…

『昌彰！零牙！来たぞ！』

朱雀の声に昌彰と零牙が視線を巡らせればエレベーターの扉の前に白い着物の人影が佇んでいた。

「『オン…』」

昌彰は即座に刀印を結び、風見鶏を覆う結界を起動させる。

零牙は逆刃刀の柄に手をかけて構える。

それらに動じることなく鬼女は漆黒の髪をうねらせ、その眼光で零牙と昌彰の方を射抜いた。

「っ…」

その瞬間鬼女の纏う空気が変わった。その変化に思わず昌彰は息をのむ。

今までのが凪ぎだとするならば今のそれはまさに嵐。

それほどの霊力が鬼女の身体から放たれる。

『昌彰、呑まれている場合じゃないぞ！』

「わかってる！」

白虎に叱咤されて、昌彰は刀印を構えなおした。

「『オン、アビラウンキャン、シャラクタン！』」

真言で叩きつけられる霊力を撥ね退ける。それを受けてさらに鬼女はその霊気を爆発させ、瞳から血の涙を滲ませた。

ゾクリ…

寒気が昌彰の背中を走る。昌彰はそれに思わず身を震わせる。

恐怖故にではない。強いて言えば“畏れ”…。

（だが、どこか違う…）

リクオ達妖怪の放つものとはどこか違う。昌彰も先日の零牙と同じく違和感を覚えた。

もしこの場にリクオがいれば気付いただろう。鬼女の放つ畏れが…

昌彰が四国勢との戦いのさなかに放った畏と酷似していることに。

――

昌彰が真言を唱えると同時に零牙は『肉体強化（ルシフェル）』を使って、鬼女目掛けて間合いを詰めていた。

勢いそのままに右足を踏みこみ、逆刃刀を抜き放つ―飛天御剣流、双龍閃。

相手が人でないとわかっている以上出し惜しみはしない。

その初撃は神速の抜刀術。昨夜の刃を風に例えるなら今回は迅雷のごとき一閃。だが…

（なっ！？）

鬼女はその爪で過（あやま）たずに逆刃刀による一撃を受け流したのだ。

それでも零牙は左足を踏みこみ、鞘による二撃目を放った。

鬼女はそれを霊力の障壁で以て弾く。その眼は既に零牙を見ていない。

視線の先にあるのは立ちつくす龍之介の姿。それ目掛けて鬼女は駆ける。

「『禁』！」

その間に昌彰が割って入った。刀印で床に真一文字に線を引き、障壁を築く。

鬼女の振るった爪と障壁が拮抗し、耳障りな嫌な音を立てる。

「朱雀！白虎！」

『『承知！』』

障壁で足を止められた鬼女に左右から朱雀の大剣と白虎の鎌鼬が迫る。

鬼女は朱雀の大剣を左手の爪で受け止め、白虎の鎌鼬を霊力を爆発させることで相殺した。

その間も右手で目の前に張られた障壁を突き破らんと爪を突き立て、昌彰の方を睨みつける。

その瞳に宿っているのは怨嗟の念…。

「っ…零牙！」

その視線に一瞬ひるんだものの、昌彰は零牙の名を叫ぶ。

「飛天御剣流…九頭龍閃！」

剣術における九つの攻撃箇所―唐竹、袈裟斬、右薙、右斬上、逆風、左斬上、逆胴、逆袈裟、刺突。

九頭龍閃はそれぞれに同時に攻撃を仕掛ける乱撃術にして突進術。
さらにそれぞれが一撃必殺の威力を持つがゆえに回避も防御も不可能。

その一撃が障壁と神将の攻撃で身動きを封じられた鬼女を捕らえる。
いや、捕らえたはずだった。

「なっ!?」「くっ!?」

昌彰と零牙は驚愕と焦りに声を漏らした。鬼女の姿が突如として掻き消えたのだ。

そうなれば当然のように零牙の刃は昌彰の障壁に突き刺さる。
鬼女によって限界近くまで削られていた障壁は零牙の刃を止められるはずもなく…

「うわっ!」

術を破られた反動によって昌彰は衝撃で後ろへと吹き飛ばされる。

『昌彰!』

壁に叩きつけられる直前で白虎が昌彰を受け止めた。

――――

昌彰と零牙の迎撃をかわした鬼女は再びその姿を現した。

『我が…社（やしろ）……のは…お主か…』

その目の前にいる龍之介は恐怖故にか、棒立ちになったままだ。その喉仏へと鬼女は爪を伸ばした。

―しかしよく見れば気付いただろう。鬼女の目の前にいる龍之介の表情があまりにも静かなことに。

鬼女の爪が喉笛を貫くと同時に、龍之介の姿は掻き消え、一枚の呪符が宙を舞った。

「『オン…』」

昌彰の一言で呪符は光の網となり、鬼女を拘束する。

それに気づいた鬼女は髪を振り乱し、結界を貫かんと爪を振るうが光の網はそれを弾く。

「飛天御剣流…」

そこに逆刃刀を鞘におさめた零牙が迫る。

鬼女がそれに気づき、逃れようとしたが…

「奥義…天翔龍閃（あまかけるりゅうのひらめき）！」

飛天御剣流は神速の抜刀術。

奥義・天翔龍閃は抜刀時にさらに鞘側の足を踏み込むことによって、神速を超えた『超神速』の剣となる。

天空が創り、昌彰が退魔の力を付与した逆刃刀は昌彰の織りなした縛魔術ごと鬼女を一刀両断せしめた。

「『ナウマクサンマンダ、バザラダン、センダマカロシャダ、ソワタヤ、ウンタラタカンマン！』」

両手で印を組んだ昌彰の詠唱が轟く。

「『臨める兵、闘う者、皆陣列れて前に在り』！」

昌彰は左手で作った鞘から刀印を抜き放ち、こちらを睨みつける鬼女目掛けて振り下ろす。

「『万魔拱服』！」

裂帛の気合が白銀の爆裂を巻き起こした。

――――

「消えた…」

「倒したんですか？」

零牙が何とか立ち上がって歩みよってくる。

奥義・天翔龍閃の負担が零牙の身体を蝕んでいるのだろう。

微かに膝が震え、立っているのもやっとといった状態だ。

既に肉体強化も解けてしまっている。

「わからない…確かに術は当たっていたはずなんだが…」

術による白銀の爆裂に呑まれた鬼女は確かに消滅していた。

しかし鬼女が消えゆく際に覚えた違和感。それが昌彰の手に残っていた。

龍之介の姿を映した式を囮に使い、確実に捕らえ、逃げる隙を与えずに最速で滅する。

神出鬼没の相手に張った策は成功したと見てよいだろう。だが…

「なにかが気になるんだよな…」

確かに昌彰の術は効力を持っていた。捉えた手ごたえもあった。しかし何か違和感がぬぐえない。

「……」

同様の違和感を零牙も覚えていた。昨日といい、今日といい確かに相手を斬った手ごたえはあった。

しかし、どこか違和感が付きまとう…

『俺も何か違和感があったな。どうも普通の悪霊の類とは違う雰囲気というか…』

朱雀もそう言うが正確な正体が見定められているわけではないよう

だ。

『…昌彰、先程の鬼女について占じてみた方が良いのではないか？』

全員が何かしらの違和感を覚えている。

白虎の言葉に昌彰は頷くと音楽室の扉の横に置いていった鞄から筮竹を取り出してきた。

細い竹の束であるそれは持ち運ぶにしても大してかさばらない。

さすがに式盤を持ち運ぶわけにはいかないので念のためにと持ってきたものだ。

「まずは今回の件について大雑把に占じてみるか…」

ザラザラと筮竹を手の中でかき混ぜ、一本を抜きだして横に置き、残りを扇状に広げる。

それを左右に分け、幾本かずつ数えとり、反対の手へと渡す。

それを数度繰り返し、一通りの卦がでた。

「何かわかりましたか？」

静かに昌彰の作業を見守っていた零牙が訊ねる。式盤の卦もそうだが、筮竹も結果は陰陽師にしか読み解けない。

「…天沢履（てんたくり）…？」

意味は「虎の尾を踏んでしまったが礼を尽くして慎めば吉」というものだ。

『どういうことだ？』

朱雀が首をひねる。地縛霊や悪霊その他の魑魅魍魎の類による霊障ならばこのような卦が出るはずがない。

「……」

無言で昌彰は再び筮竹を束ねた。今度はより明確に正確に、何かに急き立てられるように昌彰は手を動かす。

それでも体にしみこませた動作は狂うことなく占の結果を導き出した。

「……っ！？」

その結果を見て昌彰は凍りついた。そこに現れたのはあってはならないことが示されていた…

「昌彰さん…なんて出たんですか？」

黙り込んでしまった昌彰を零牙は促す。

「か…の…逆…」

「え？」

あまりにもか細い声に零牙は再び聞き返した。

「神の…逆鱗…」

あの鬼女は悪霊でも怨霊でも、ましてや妖怪でもない…

何処かの神、そのものだと…

昌彰の退魔術や零牙の逆刃刀が効かないのも当然だ。相手は「神」であって「魔」ではないのだから。

「っ！！」

昌彰はゾクリと身を震わせた。

「なんで…まさか！？」

零牙もある種の魔術の反応を感じ取って視線を上げた。

「ゆら！」「ミア！」

二人の視線の先にあったのは初等部の校舎を覆い尽くすほどの先程の鬼女の霊力が織りなした結界だった。

†††††

「！映像戻りました！二人とも無事みたいです！」

「…よかった」

風見鶏からの映像が復旧し、雅は安堵のため息を漏らした。

「リュウくんの式が消えとる…やっぱり狙いはリュウくんやったんか…」

ゆらはそう呟いてちらりと龍之介の方を見やる。

「リュウ…もう大丈夫だよ」

「あ、ああ…」

美雪が息を詰めて画面を見つめていた龍之介の手を握り締めた。

（なんや…？）

復旧した映像を見ていたゆらは昌彰の表情が曇っているのに気がついた。

「レイ…？」

同様に雅も零牙の表情が優れないのに気付いたようだ。尤も零牙がかなりふらついているのでそれの心配もあるのだろうが…

連絡を取ろうと無線へと手を伸ばす。

その伸ばした先に漆黒の影が差した。

「っ！？（なんで！？）」

その影の持ち主を見てゆらは驚愕に目を瞠った。それは先程昌彰達が討ち果たしたはずの鬼女だったから。

唐突過ぎるその出現にゆらも咄嗟の対応が遅れる。

その隙に鬼女は周りにいるゆらや雅達には目もくれず、その爪で龍之介の喉笛を切り裂かんと飛びかかった。

刹那、爪と筆架叉が交差し、火花を散らす。

隠形していた勾陣が即座に顕現し、美雪と龍之介を庇うように立ち塞がった。

左手の筆架叉で鬼女の右手の爪を抑え、右手は鬼女の左手を掴んで鍔迫り合いに持ちこむ。

『ゆら！今のうちだ』

「う、うん！みんな外へ！」

勾陣の叫びで我に返ったゆらと、一度遭遇しているために比較的動揺の少なかった雅を先頭に守衛室から廊下へと逃れる。

「なっ！？（ウソ…やろ？）」

守衛室の外には鬼女の放つ霊力が満ち、霧が実体化したような獣が待ち構えていたのだ。

「みんな下がって！『貪狼！武曲！』」

『御意！』

ゆらは己の式神を用いて鬼女と相対する。間髪をいれずに霧の獣はゆら達へ襲い掛かって来た。

「『禁』ッ！」

ゆらは目前まで迫っていた霧の獣を障壁で弾き返す。

弾き飛ばされた獣は武曲が槍で一刀両断した。

しかし斬られた獣はそのまま再び霧となって周囲に満ちた霊気と同化していく。

さらに何かが弾けるような音がゆらの耳朶を打った。見れば背後からも獣は襲い掛かって来ていた。

辛うじて昌彰の護符がそれを退けている。

「くっ…貪狼！」

ゆらは貪狼を差し向けるがいつまでももたないことが目に見えていた。

倒された霧の獣は周囲に満ちた霧から再び生まれ出てくる。これでは千日手だ。

バゴンッ！！

派手な音を立てて守衛室の壁が内側から吹き飛んだ。

そこから勾陣と鬼女が縺れあったまま飛び出してくる。

「（あかん…このままやと…）廉貞！」

ゆらは新たな式神、廉貞を呼びだす。

「式神改造、人式一体！」

この獣を止めるには大本を叩くしかない。そう考えてゆらは照準を勾陣と相対する鬼女へと合わせた。

―ゆらはまだ知らないが、相対している鬼女の正体はこの地に宿る神そのもの。

―つまりこの地に存在する地霊はその使役下にあるのと同義だ。

「黄泉送葬…」

ガシャァンッ！！

ガラスが砕け散るような音を立てて、初等部の校舎を覆っていた鬼女の結界が砕け散った。

「ゆら！撃つな！」

それと同時に窓をぶち破って昌彰と零牙が飛びこんできたのだ。

†††††

「昌彰さん、神の逆鱗ってどういうことですか？」

白虎の風の中で零牙は昌彰に問いただした。昌彰が快癒の呪(まじない)を施し、止痛の符を貼ったことでどうにか普通に動けている。

「あれはおそらくもともとこの地にいた神だ」

そう言って昌彰は学園の中央部を見やる。正確にはそこに生えている桜の古木を。

「それじゃあの鬼女は…“荒魂(あらみたま)”？」

神の霊魂には二つの面がある。一つは『和魂(にぎみたま)』、人々に恩寵を与える慈悲に満ちた面。

そしてもう一つが『荒魂』、天変地異を引き起こし、祟りを為す。荒ぶる怒りに満ちた面。

「おそらくな…（弱っていたところに社を破壊されて荒魂となったか）」

龍之介の式へ向けた鬼女の叫びから昌彰はそう推理を進める。

神籬として十分な機能を果たす桜の古木。そしてこの地に流れる霊脈。

どちらを取っても神が座しているには十分な条件だった。

だが昌彰も、そして零牙も気付けなかった。あまりにもその存在が希薄だったのだ。まるで眠っていたかのように…

『昌彰…やはり内部には入れぬようだ…』

白虎の声に昌彰は思考の海から引き揚げられた。

昨夜の修達の時と同じく、入ろうとすると反対側にはじき出されてしまうのだ。

昌彰と零牙は白虎の風を解き、結界の前に降り立った。

「…天一」

『ここに…』

結界を睨み、一瞬逡巡した後に昌彰は天一を呼びだした。

「結界に結界をぶつけて相殺する。やってくれるな？」

『承知いたしました』

天一はそう答えると静かに目を閉じた。放たれる神気で金色の髪が翻る。

金属同士が擦れ合うような音が辺りに満ちる。鬼女の結界と天一の結界が拮抗しているのだ。

天一の端正な顔に苦悶の色が混じる。

「天一…」

昌彰がやめさせようと声を発すると同時に鬼女の結界が砕け散った。

天一はそのまま糸が切れたように崩れ落ちる。

「天い…『天貴！』」

咄嗟に顕現した朱雀がそれを抱きとめる。通力を消耗しすぎたであろう天一は完全に気を失っていた。

「朱雀、天一を頼む」

『…言われるまでも無い。早く行け！』

一瞬昌彰を睨んだ朱雀だったが、即座にそれを打ち消して二人を促した。

その言葉を背に昌彰と零牙は走り出す。自らの護るべき人を護るために…

†††††

窓をぶち破って突入した昌彰の前ではゆらが今にも鬼女へと攻撃しようとしているところだった。

「（マズイ…！）ゆら！撃つな！」

あの鬼女は神、それも荒魂だ。下手に攻撃すれば確実に祟られる。

昌彰は入って来た瞬間に自分に向けられたさっきからそう判断した。

その予想は違わず、先程まで龍之介を狙っていた地霊たちは一斉にその矛先を昌彰へと向けた。

咄嗟に零牙が縦になるように逆刃刀を振るうがその動きにキレがない。捌ききれなかった地霊が昌彰に襲い掛かる。

「『オンキリキリバザラ…』っ！」

咄嗟に真言を叩きつけようとした昌彰だったが、相手が神の使役であることを思い出して詠唱を止めた。

下手に攻撃すればさらに怒りを買いかねない。目の前に迫ってくる地霊を昌彰は寸でのところで身を捩ってかわした。

『昌彰！』「お兄ちゃん！」

勾陣とゆらの意識が昌彰の方へと集中する。

ほんの刹那の隙。その隙をついて鬼女は動いた。

鍔迫り合いになっていた右手で勾陣の左手の筆架叉を撥ね退ける。

『ぐっ…』

呻く勾陣を尻目に鬼女はその右手を龍之介に向けて咆えた。

聞いたものの魂をすくませるような咆哮は霊力を纏って呪詛の念となり、龍之介へと襲い掛かる。

雅達に渡した昌彰の護符が反応し、幾重にも障壁となるが地霊たちに削られた障壁が耐えられるはずもなく、鬼女の霊力の前に瞬く間に突破された。

「リュウッ！」

昌彰もゆらも零牙も誰もが間に合わないと思った。しかし…

龍之介の傍らにいた美雪がその身を鬼女の祟りの前に晒したのだ。

結果として美雪は龍之介が受けるはずだった呪いをその身に受け、声も無く床へと崩れ落ちた。

「ミユッ！？おい！しっかりしろ！！」

龍之介は目の前で起こったことが信じられずに倒れ伏した美雪を抱き起す。

美雪はぐったりとうめき声すら漏らさず、完全に気を失っていた。

――――

「ミユちゃん！（このっ…）」

ゆらは頭に血がのぼるのを感じた。一瞬の油断から友人を傷つけられた。

「『臨める兵　闘う者　皆陣列れて…「ゆら落ちつけ！手を出すな！」」

怒りにまかせて真言を叩きつけようとしたゆらを昌彰の叫びが止めた。

「なして止めるんや昌彰！」

ゆらは苛立ちを隠さず昌彰に怒鳴り返す。

「あいつはここの神だ！下手に手を出せば祟られるぞ！！」

「えっ？」

予想外の言葉にゆらは動きを止めてしまう。

その決定的な隙を敵が見逃すはずもなく、昌彰を狙っていた地霊の一部がゆらの方へと躍りかかる。

『そうはさせん！』

再び顕現した白虎の風が地霊たちを薙ぎ払う。

『ゆら、お前は護りに専念しろ。あいつは昌彰が相手をする』

「！わかった！」

白虎にそう言われてゆらは雅達の方へ駆け寄った。

零牙がそちらに行こうとする地霊たちを押しとどめているが、雅達を護るものは今何もないのだ。

『昌彰よ、詳しく説明してくれ…るんだろうな？』

勾陣が鬼女を抑えながら振り返らずに昌彰に問いかける。

「詳しいことは後だ。今は…」

縛魔術で地霊たちを抑え込んだ昌彰は勾陣越しに鬼女に対峙する。

昌彰を目にした鬼女は勾陣を振りほどかんと暴れるが、勾陣が己の神気でどうにか拘束する。

「さて…」

昌彰は静かに鬼女（神）に視線を向けた。両手を拝の形に合わせ、拍手（かしわで）を打った。

「『幸魂（さきみたま）、奇魂（くしみたま）、安らげ鎮まり給え』」

昌彰が祈念の詞（ことば）を紡ぐごとに地霊の攻撃思念が霧散していく。

「『和魂、荒魂、平らげく治まり給え…』」

勾陣と組みあっていた鬼女の姿が掻き消え、周囲を覆い、荒れ狂っていた霊気が嘘のように鎮まった。

「ふぅ…」

昌彰は思わず安堵の息を漏らした。

冗談抜きで神は祟るのだ。これ以上戦闘を続けていては下手をすれば末代まで祟られていた可能性さえある。

完全に鎮まったわけではないが今日中に再び出てくるようなことはないだろう。

「ミユッ！」「ミユちゃん！！」

「っ…（まだ終わってない…か）」

聞こえてきた悲痛な叫びに昌彰は緩みかけていた気を再び引き締めた。

龍之介に放たれ、美雪が受けた祟りはまだ無効化されていなかったからだ。

第三十一夜　白昼夜～交差する探偵と魔術師と陰陽師～？（後書き）

あとがき

琥珀「ええっと…」

昌彰「（今回は弁護の余地がないな）」

ゆら「（さすがにね…）」

琥珀「およそ三週間ぶりです…お待たせしてしまってごめんなさい」

ゆら「（最近あとがきでごめんなさいって多くない？）」

昌彰「（更新速度がガタ落ちだからな…隔週どころか月一に落ちそうだ）」

琥珀「完全にスランプに陥っておりました。その上大学の実習まで始まる始末…」

昌彰「はいはい、言い訳はそこまで。今話の話に入ろうか？」

琥珀「はい…」

ゆら「今回でようやく戦闘シーン。そして鬼女の正体がわかったわけやけど…」

昌彰「なんか違和感があるというか、強引じゃないか？」

琥珀「スランプど真ん中で書いたもので…。諸々のグダグダは目を瞑っていただけると嬉しいです。はい…」

ゆら「しかもまだ終わってへんのやろ？」

琥珀「ええ、次話は呪いを肩代わりしたミユちゃんの話です。それでこの夜の話は終わりかな？」

昌彰「ハァ…無事に終幕させられるんだろうな？」

琥珀「きちんと最後のところは出来てるんだよね…。後三～四話くらいかな？ただ流れがうまい具合に行かないと所々省略するかも。物語上の時間で残り二日なんだけど」

ゆら「ちゃんとミアちゃんとミユちゃんのイベントもやってやってな？」

琥珀「それはもちろんやるよ。終盤の怒涛のコメディーパートで」

昌彰「ちゃんと締まるんだろうな？最後までコメディーでやったらさすがに…」

琥珀「大丈夫最後はちゃんとシリアス（？）で締めるから」

ゆら「（？）がめっちゃ不安なんやけど？」

琥珀「残りはシリアスとコメディー、三対七くらいの比率になるかな？」

昌彰「コメディー比率高くないか？」

琥珀「イベント消費を後回しにしてたらこうなった…」

ゆら「ハァ…。で、今後の更新はどうなるん？」

琥珀「……非常に言いづらいのですがさらに不定期になる可能性が否定できません…下手するとしばらく更新できないかも…」

昌彰「……また試験か？」

琥珀「はい…。よくわかっていらっしゃる…」

昌彰「大体そうだろうが！お前は！試験前になると更新ができなくなるパターン！」

琥珀「すみません…一番早いと思われるものが十一月十日に在ります…その後はまだ告示されてないですが四つほど…」

昌&ゆ「「ハァ……」」

琥珀「すみません…＞（＿　＿）＜」

昌彰「読者の皆様、またしばらくこの作者が使い物にならなくなるみたいですのでご容赦ください」

琥珀「学生の方ならわかってくれるでしょうけど…テストなんて嫌いだ～！！」

ゆら「作者が壊れて来たので今回はこの辺で…それでは読んで頂いてありがとうございます！」

昌彰「今後も不定期更新でしょうが読んで頂けると嬉しいです」

昌&ゆ「「それではまたいつになるかわかりませんがまた次回お会いしましょう」」

第三十二夜　白昼夜～交差する探偵と魔術師と陰陽師～？（前書き）

いよいよ終盤です。
多少、いやかなり無理やり感が…
細かいことにこだわらずに読んでいただけると嬉しいです…

第三十二夜　白昼夜～交差する探偵と魔術師と陰陽師～？

（くっ…これじゃあ手が出せない…）

零牙は美雪の状態を見て歯がみした。

本来なら龍之介にかけられていたはずの祟りが、美雪が受けたことにより変質してしまっているのだ。

「ミユっ！頼む、目を開けてくれ…」

龍之介も美雪をかき抱いて呼びかけるが美雪は微かに呻くだけで反応がない。

「マズイわね…」

保健医でもあるあざみ先生が焦ったように呟いた。

美雪の呼吸は荒く、顔色も蒼白と言った状況だ。

「お兄ちゃん、どうにかならへんの？」

そう言ってゆらは昌彰を見上げる。ゆらの術も戦闘に特化しておりこの状況では為す術がないのだ。

「くっ…（考えろ…何か手はあるはずだ…）」

昌彰は打開策はないかと必死に思考を巡らせる。

鬼女が消えたのは昌彰の祈念の詞（ことば）を受けたためであって、怒りが鎮まったわけではない。

そもそもそんな簡単に神の祟りを鎮めることができるなら苦労はないのだ。

しかも美雪にかけられた祟りは、本来龍之介が受けるはずだったもの。それを美雪が肩代わりしたために解呪するには完全に神の怒りを鎮めるしかない。

「せめて本来の対象にかけられたものならどうにかなるんだが…」

「昌彰さん…リュウに戻せば…確実に解呪出来ますか？」

昌彰の呟きに零牙が反応した。その眼はわずかではあるが希望を見出したように輝いている。

「…一つだけ心当たりがある」

昌彰は先日見たある術式を思い出した。出来ないことはないだろうがうまくいくかは賭けだ。

だが難しかろうとやらなければ美雪の命が危ない。

零牙は昌彰に頷くと静かに目を閉じた。

「リュウ、首にかけている“ソレ”。使わせてもらうぞ…」

零牙は皆に気づかれないようにさり気なく美雪の左手と龍之介の首元に手を翳す。

二人の持つ対となる環が魔力を帯び、それが繋がり、糸（パス）となる。

魔力の糸で結び付いた二人の内側は部分的とはいえ、美雪と龍之介お互いに無防備に晒される。

本来ならば当人同士の了解のもとに行うべきだが、今はそのようなことを言っている状況ではない。

糸を通じて龍之介の意識は美雪の意識へと重なっていった。

†††††

（なんだ…これ…）

首にかけていた指輪が光り出した途端、龍之介は未知なる感覚に襲われ、困惑した。

自分が自分でないような奇妙な浮遊感。

だが目の前にいる美雪の姿を見た途端その困惑は消え失せる。

目の前にいる美雪は“何か”を胸の奥に抱え込むようにしてもがいている。

その“何か”が美雪を苦しめているのだと龍之介は直感した。

『ミユ！そいつを放せ！』

龍之介が美雪の腕をどかそうとするが美雪はその腕を振り払う。

『ミユ！？』

龍之介の叫びに美雪は薄く目を開けて首を横に振った。

『ダメ…』

途切れがちになりながらも美雪は言葉を紡ぐ。

『今…放したら…リュウの…ところに行っちゃう……そんなの…ダメ』

美雪も自身を襲っている苦痛は“ソレ”を抱え込んでいるからだと気付いていた。

手放せば苦痛から解放されるということも。

だが美雪は手放さない。手放せばその苦痛が龍之介に向かうとわかってしまったから…

『ミユ…』

『あの時…リュウは私を助けてくれた…だから…今度は私がリュウを助けるの…！』

自分が苦しいのはリュウが助かっている証だと思えば耐えられる…

そう美雪は苦痛に顔を歪めながらも微笑んだ。

『…か…』

『リュウ…？』

呟いた言葉が聞こえずに美雪は龍之介を見つめた。

『バカかっつってんだ！』

『っ…』

龍之介のあまりの剣幕に美雪は身をすくめた。

『オレは…オレはそんなこと望まない…』

龍之介はそう呟いて美雪の上に身をかがめる。

『俺は…お前の苦しむ姿なんか、もう見たくないんだ…』

『！…』

重なった二人は糸を通じて一つの儀式となる。

美雪は自分を襲う苦痛が嘘のように引いていくのがわかった。

（リュウ！ダメっ！）

美雪は必死で抵抗しようとした。だが龍之介は苦痛に顔を歪めながらも美雪を放さない。

（お前はオレが助ける。何度だって…だから…）

その言葉を最後に龍之介と美雪の意識は静かに、穏やかな闇に沈んでいった。

†††††

「『アカキ、キヨキ、ナオキ、タダシキ…』」

昌彰の打ち鳴らす神楽鈴の音色が周囲に満ちる。

それと同時に玉串がゆらの手の中で震えた。

陰陽道よりもさらに神へと通ずることに特化した技法、神道の術式。

「『とほかみ、えみため、とほかみ、えみため、かんごんしんそんりこんだけん』」

昌彰の祝詞が響くごとに、美雪と龍之介を取り巻く怨嗟に満ちた神の呪力が浄化されていく。

ゆらが舞い、玉串が空を切り裂くごとに、神の呪力が鎮まっていく。

「『はらいたまい、きよめたまう』」

最後の神楽鈴の音色が消えると同時に龍之介は美雪と重なったまま崩れ落ちた。

「リュウくん!?」

あざみ先生が慌てて龍之介を抱え起こす。

慌てる周囲を余所に龍之介も美雪も穏やかな寝息を立てていた。
先程までの苦悶の表情など嘘のように。
「（うまくいったみたいですね…）」
「ああ…」
零牙の言葉に昌彰は人知れず額の汗をぬぐった。
葛城の宗主に伝わる魂鎮（たましずめ）の秘儀。先日の依頼の際に見たその術の応用だったのだが、うまくいくかは賭けだった。
神そのものを鎮めるわけではないので多少は無理がきいたが、それでも難易度は高い。当然成功したことによる安堵も大きくなる。
「それよりこれからどないするん？」
ゆらが玉串を片手に問いかける。
「ああ…とりあえず、ゆらは一旦みんなと一緒に戻れ。俺と零牙は少し残って色々と調べないと…」
†††††
「方角と建物の配置から見て…ここですね…」
昌彰と零牙は学園中央にある樹の下にいた。
先日、零牙が生き埋めにされそうになった場所の近くだ。

地面を見れば、石による台座と砕かれて散乱した木片が多数見える。

「白木だな…おそらく間違いないだろうが…随分と朽ちかけていたみたいだな」

昌彰が散らばった木片を調べてそう呟く。

「確かに随分と古い感じはしましたね…」

零牙も自分の記憶にあるものを思い浮かべて頷いた。

少なくとも定期的に手入れがなされていたようには見受けられず、そのまま朽ちていくのが自然の流れであるように思えた。

「だが随分と立派な社だったみたいだぞ?」

境内の区切りとなる石でできた欄干の名残を見る限り約一間（約一・八メートル）四方はある。

以前はきちんと祀られていたのであろう。鎮めるにはきちんと社を再建する必要があった。

「直せますか?」

零牙がそう問うと昌彰は思案顔になった。今から宮大工に頼んでも一両日で完成させるのは人間業では不可能だろう。

「白虎…使いを頼めるか?」

昌彰は若干躊躇いながら白虎を呼ぶ。

『承知した』

ただ一つだけ当てがあった。問題は間に合うかどうかだが。

「今日のところはこれまでだな。早く戻った方がいいだろうみんなも心配するだろうし」

†††††

「ゆらさん…二人とも大丈夫でしょうか…」

雅が布団を持ったままゆらにそう聞いた。二人の、というより零牙の心配をしているのが表情からありありと読みとれる。

そんな雅に苦笑しながらもゆらは言葉をかける。

「大丈夫や。詳しくはわからんけどあの神様は零牙くんを気に入ってるみたいやし」

ゆらも心配して昌彰に尋ねたのだが昌彰はそう言って零牙と共に残ったのだ。

そう言いながらゆらは布団を零牙の家の客間に運び入れる。

昌彰達は零牙の家に泊まる予定なのだが、龍之介や美雪もいて布団が足りないので城崎家から運んでいるのだ。

まだ不安げな表情を見せる雅にゆらはさらに言葉を続けた。

「まあ一時的とはいえ、きちんと鎮めたからそこまで心配せんでもええと思うよ」

「う～…そう…ですね…」

ゆらのその言葉に雅はようやく安心したのか、気を取り直したように布団を抱えなおす。

（ええ子やなぁミアちゃん…）

ゆらはまるで妹を見るような目で雅を見ていた。

「あ、でもミアちゃんは別の心配をせなあかんかもしれんな…」

「？どういう意味ですか？」

怪訝そうな表情で首を傾げる雅に、悪戯っぽい笑みを浮かべてゆらは爆弾（雅限定）を投下した。

「あの神様は、女神や」

「へ？」

雅は怪訝そうな表情のまま布団を取り落とした。

第三十二夜　白昼夜～交差する探偵と魔術師と陰陽師～？（後書き）

あとがき（という名の小劇場）

琥珀「あとがきのネタがない…」

玄武＆太陰『我ら（私達）は無視か（なの）！？』

琥珀「おお！玄武に太陰！無事だったんだ！って！？何その純白のタキシードとドレス！？」

太陰『あの二人に着せられた…』

玄武『サイズを間違えて買ったとか言っていたが…』

椎「フフフ…やっぱ可愛えな～。小さな花嫁、花婿さんや！」

菜摘「零牙くん達に着せようとしたらサイズ間違えて注文してたのよね～。でも結果オーライ！」

玄・太『……／／／』

琥珀「二人とも…かなり、いや凄く可愛いからいいじゃない」

玄武『まあ、太陰のこの姿が見れたのは正直嬉しいが…』

太陰『ちょっと玄武！何言ってんのよ！？』

琥珀「（ああまた始まったよ…）ところで椎ちゃん。昌彰と零牙く

ん達が見当たらないんだけど…」

椎「ああ、ミアちゃん達ならあそこや」

†††††

雅「さ～てレイ。これは一体何なのかな？」

零牙「！み、雅さんそれを一体どこで？」

昌彰「あ…零牙がこの前忘れていったデジカメ（雅ちゃんのパジャマ、寝顔、私服、メイド服、水着、常盤台の制服の画像入り）…」

ゆら「お兄ちゃんの荷物から出てきたんやけど？」

昌彰「待てゆら、俺は何も関係ないぞ？だから呪符を取り出すのはやめてくれ…」

雅「レイ！きっちり説明してもらうからね！」

零牙「ミア、話せばわかる…だから…」

昌彰「零牙、その台詞は死亡フラグ…」

雅「問答無用！ゆらさん！」

ゆら「了解や！いくで貪狼！禄存！二人を捕まえりー！」

零牙「来るなぁぁあぁっ！！」（猛ダッシュで逃走）

昌彰「零牙!?落ちつけ!」（同じく逃走）

雅「逃がさないよレイ!」

ゆら「追うんや!貪狼、禄存!」

†††††

琥珀「ああ、そう言えば不知木町に来た最初の目的は零牙くんが忘れたデジカメの返却だったね。すっかり忘れてた…。返す前に雅ちゃんに見つかったのか…零牙くん動物苦手なのに…ご愁傷様」

菜摘「まあ苦手じゃなくてもあれだけ大きいのに追いかけられたら逃げるわよね～」

琥珀「で、あなた方二人はいつまでその二人を抱きしめているつもりですか?」

椎「ええやん。あと少しでコラボも終わってまうんやろ?それまでくらいは」

琥珀「ああ、ようやく終わりが見えてきましたよ。次が最後になるかな。長かったです。まさか三カ月近くかかるとは…」

菜摘「最後の方は随分進行が荒っぽくなってる気がするけど?」

琥珀「ごめんなさい。何故か書いているうちに辻褄が合わせにくくなるところが出てきて…やや強引になった感は否めません」

椎「むう…まあ最後はきちっと締めてな?」

琥珀「大丈夫だと思います…一応ちゃんと用意はあるから。それでは読者の皆様今回も読んでいただきありがとうございます！」

椎・菜「コラボ編も残すところあと一話！最後までよろしくお願いします！」

第三十三夜　白昼夜～交差する探偵と魔術師と陰陽師～？（前書き）

遅くなって申し訳ありません！ｍ（＿＿）ｍ
学生の敵（試験）やら実習やらで書く時間（と気力）が足りず…

さて、いよいよコラボ編最終話です！
楽しんで頂けると幸いです。

第三十三夜　白昼夜～交差する探偵と魔術師と陰陽師～？

「これで、よし…」

昌彰は立ち上がって膝についていた土を払った。

「こっちも準備完了です。それにしても…」

昌彰と零牙の目の前にあるのは切妻造り(きりづま)の白木でできた社だが…。

最早、社というより小さい神社と言った方が似合うほどの代物だ。

『愛宕天狗の匠達の作だ。かつて頭領が見た伊勢神宮の本殿を模したらしい…』

運んできた白虎も苦笑している。昨夜白虎に京都の愛宕天狗の里へ飛んでもらい至急作ってもらった品だ。

「始めるぞ、零牙。朱雀と天一も…」

社の正面に立った昌彰の言葉に零牙は無言で頷くとその隣に並ぶ。

その後ろに朱雀と天一が控えている。

「『天照皇大神(あまてらしますすめおおがみ)の宣(みたまわ)く、人(すなわ)は則(あめがした)ち天下(みたまもの)の神物なり、須(すべ)く静謐(しずまること)を掌(つかさど)る心は則ち神明(かみとかみ)との本主(もとのあるじ)たり！』」

昌彰の祝詞が霊脈の歪みにより凝っていた呪力を浄化する。

凝った呪力が消え失せた霊木は神籬としての本来の器を取り戻す。

「天一、朱雀」

『畏まりました』『承知』

天一の土の神気が此の地に流れる霊脈に干渉する。

歪んだ流れをただすために天一は神気を放出し続ける。隣で支える朱雀は自らの神気を天一に注いでいた。

火生土、五行相生の理に則り火将朱雀の神気が天一の神気を補い増幅する。

流れの戻った霊脈の呪力が正常に取り込まれ、神木は神籬としての機能を取り戻す。

「『汝は夏、汝は法則、汝は収穫。さればあるがままに為せ、イェーラ』」

零牙の呪句によって霊木の四方に埋められた石板に力が宿る。

？《イェーラ》―それは収穫を表すルーン。

零牙の魔力を纏ったルーンは生命を育み、成長させる力を宿す。

四方を囲むそれらによって再生を促された霊木は本来の器、機能、そして力を取り戻した。

「っ…ご苦労だった二人とも」

『…このまま戻って構わんな？というか戻らせてもらうぞ』

朱雀は昌彰のねぎらいの言葉を聞くと、許可を求めつつも勝手に天一を抱え、隠形した。

「まだ完全に終わったわけじゃないんだがな…」

苦笑を漏らしつつ、昌彰は拍手を打った。

「『祓いたまい、清めたまう…』」

昌彰は境内を念入りに祓う。夜の闇を切り裂くように霊気が研ぎ澄まされていく。

そして紙垂（しで）をつけた榊を玉串として社の榊立てに据えた。

榊は神籬（ひもろぎ）。神を迎えるための依り代だ。

境内の四隅に幣（ぬさ）を立て、祓詞（はらえことば）で内部を浄化する。

そして浮世絵町から持ってきた包みを解いた。

出てきたのは一本の酒。奴良組が持つ酒蔵の中でも最高級にあたる妖銘酒の大吟醸だ。

このクラスになると妖酒というよりも霊酒となって、神酒（みき）として供えるに値する。

「『かけまくも…』」

両手を拝の形に合わせて、祝詞を唱え終えると拍手を打ち、昌彰は大きく息を吐いた。

これで準備は整った。

「『――あはりや、あそばすともうさん、あさくらに…』」

昌彰の招神の秘言が独特の韻律を以て夜の学園に響き渡る。

「『…桜花の神よ、降りましませ…』」

“桜花”―それが木ノ花の神木に宿る神の名。

学園の書庫に埋もれていた古文書より探し出した忘れ去られた名だった。

最後の秘言が闇に溶けると同時に、凄烈な神気が神木から立ち上る。

玉串の上に降り立ったのは痩身の儚げな女性の姿。

漆黒の髪は鬼女の時のような禍々しさはなく、黒い絹糸のような光沢を帯び、微かに神気を孕んで翻る。

その身から放たれる神気は彼女が紛れもなく神であることを昌彰達に知らしめる。

『正しき手順をもっての勧請、ゆえに我は応じた…何用だ陰陽師』

その鋭利な蒼天の双眸が昌彰を見下ろした。

「…知らぬこととはいえ、先日無礼を仕ったお詫びを申し上げに参上した次第…」

昌彰は一瞬その畏に呑まれかけるも、拳を握り締めてそう言い、膝を折って頭を垂れた。

「私からも友の致した非礼な行いについて謝罪を申し上げたく…」

零牙も続けて頭を下げた。昼のうちに龍之介に詰問してみれば、やはり先日のＦＦＦ団の追跡の際にこの神の社を破壊していたことを白状したのだ。

『……』

「願わくはそのお怒りを鎮めていただきたく…」

沈黙に耐えきれず零牙が言葉を重ねた。無言の神に対して頭を下げ続ける二人の背に脂汗が伝う。

『……くくっ』

重苦しい沈黙を破ったのは桜花の押し殺した笑い声だった。

『クッハハハ…速水零牙、似合わぬ殊勝な態度はやめたらどうだ？ククククッ…』

先程までの厳格な空気など既に霧散している。

『護るために戦う、たとえ相手が神であろうと最後まで抗う。それ

がお主だろうに？』

「…まるで俺の事をいつも見ていたような口ぶりですね？」

己の過去を見透かしたような桜花の言葉に零牙は微かに眉を顰めて問い返した。

『当然だ。我を目覚めさせたのはお主だからな…』

口元に笑みを湛えたまま、桜花は零牙を見つめていた。

元々桜花は、天津神でも国津神でもない、この土地に宿り、この学校の生徒たちを見守って来た土地神である。

土地神は人々の信仰を力に変える。逆にいえば信仰を失えば力を失うということだ。下手をすれば存在そのものが消滅してしまう。

桜花の場合は神籬となる神木が霊脈の力を得ていたため、消滅することはなかったが、その存在は人々の記憶から薄れ、時の流れの中に埋もれていった。

時が流れれば人は変わる、街も変わる。大規模な区画整理などによって龍脈の流れもまた変わってしまった。

『力を失った我は霊木に宿ったまま眠りについた…。そして長い時の中で我の眠りは妨げられた』

力ある魔術師の来訪。それが眠っている桜花の意識を揺り起こした。

その魔術師こそが零牙。零牙が魔術を使うたびに、力を振るうたび

に桜花は徐々に覚醒していったのだ。

そしてその繋がりを通して桜花は見てきた、零牙の過去を、そしてこの学園で友と歩んだ軌跡を。

『速水零牙、お主はここで何を得た？』

桜花は慈愛のこもった瞳で零牙を見据えた。母のように、あるいは姉のように。

「…俺は……」

零牙はそこで言葉を切った。己に課された命令、立場としがらみが自らの想いを抑え込もうとする。

「零牙…」

かけられた声に零牙が昌彰の方を見れば穏やかに微笑む昌彰の顔があった。

『昌彰さん…俺は中には入れません…』

書庫を捜索する際、零牙は決して中に入ろうとしなかった。

イギリス清教から零牙に課せられた命令は『木ノ花グループの機密事項を奪取すること』。

命令に忠実に従うなら情報の宝庫である書庫に入れることを拒むはずがない。

「オレは…」

微かに頷いた零牙は桜花へと向き直る。

「…オレはここで、この学園で…共に歩む仲間を、共に闘う戦友を…」

零牙の脳裏を過るのは龍之介を始めとしたクラスメイト、修達本格推理委員会のメンバー、隣にいる昌彰やゆら、リクオ。

「…そして愛する人を見つけることが出来ました…」

そして、己を愛し、自らが護ると誓った少女。雅の笑顔…

「だから…この学園を、ここにいるみんなを護りたいんだ」

今までこの学園で築いてきた思い出。その思い出の中に偽りなどは何一つない。

零牙のその澄んだ眼差し、その瞳の奥に宿る意思。

その光を見て、桜花は笑みを深める。

『その言葉、確かに受け取ったぞ。速水零牙…』

そう言って桜花は身を翻した。

『我が力が必要な時は呼ぶがいい…。その言霊が真ならば、我は呼びかけに応じよう…』

桜の葉がざわめく音。それを背景に桜花はそう言い置いて神木へと還っていった。

残された零牙と昌彰はただ静かに桜花の身体たる神木に頭を下げ続けていた。

†††††

「で…なんでこうなってるんですか？昌彰さん…」

帰宅した零牙と昌彰を出迎えたのは魚河岸の鮪よろしく転がっている本格推理委員会＋αのメンバーだった。

梢はソファーの隅で横になっており、それを押しのけるように椎と菜摘がそれぞれ太陰と玄武を抱きしめて眠っている。

ダイニングの方にいた修は圧力鍋相手に何かを語っており、ちょっと近づき難い。

まあ、テーブルに突っ伏している勾陣とあざみ先生。そして大量にあるグラスと床に転がっている空の妖銘酒の瓶から何が起こったのかは想像できなくもないが…。

妖銘酒で悪酔いしたあざみ先生にみんな飲まされたんだろう…。

（あざみ先生を抑えるために勾陣に渡しておいたはずだが、先に勾陣が潰れるとは…）

【注：妖銘酒にアルコール分は含まれておりません。含まれた呪力で酔っているような状態です】

【未成年の飲酒は法律で禁止されております！また飲酒運転は絶対にしてはいけません。同乗者にも罰則が掛けられます。飲酒運転、ダメ！絶対！】

「レ～イ～」

唯一零牙達の帰宅に気づいた雅はさっきから零牙に抱きついていた。

しかも何故かメイド服で…。

「ミア！？なんでメイド服！？（いや…たぶん真優のやつがけしかけたんだろうな…）」

雅の着ている服に見憶えのある零牙はそうあたりをつける。

最後までついてくると言い張った雅の足止めを真優とゆらに頼んでいたわけだが…

「とりあえず零牙、お前は雅ちゃんを休ませろ。他のみんなはこっちでどうにかしとくから。白虎、天后頼む」

そう言って昌彰は白虎と天后を呼び出した。

『御意』『承知いたしました』

（え～っと、ゆらは…）

昌彰は他のメンバーを白虎達に任せ、ゆらを探す。

リビングには見当たらない。そう言えば零牙の妹の真優も見当たらない。

「（ん…？地下室か…）ゆら…ここにいるの…か…」

扉を開けた瞬間、昌彰はその動きを止めた。

部屋の中には予想通りゆらと真優がいた。そこまではいい。

部屋の中には大量の衣装が保管されていた。（注：零牙の趣味です）これもいい。（オイ

真優は普段の修道服のまま隅っこで丸まって寝ていた。ここまでも問題はない。

ゆらはチャイナドレスを着ていた。しかも丈が異様に短い。

さらにそのまま眠っている…。つまりは、その色々とギリギリなわけだ。

再び昌彰の頭の中で天使と悪魔が言い争いを始める。

今度の勝負は長引き、訝しんだ天后が地下室にやってくるまで昌彰はフリーズしていた。

――――

「ほら、ミア」

「イヤ…」

零牙は雅を布団に寝かせて部屋を出ようとしたのだが、雅が零牙の服を掴んで引き留める。

「（参ったな…）なあ、他のみんなも休ませなきゃならないから手を話してくれませんか雅さん？」

零牙は雅から顔を背けつつ説得する。そうしなければ危ないのだ。主に理性とか理性とか理性とか…

それほど雅のメイド服姿の破壊力は凄まじいものがあったのだ。

「一緒にいてくれなきゃ…ヤダ…」

「～～～ッ！（ミア…勘弁してくれ、これ以上は理性が…）わ、わかった…眠るまで一緒にいてやるから…」

恋人から上目遣いでそんな言葉を言われては拒むことなどできるはずもなく…

零牙は雅の布団の横に腰を下ろした。

すかさず雅が左手を伸ばして零牙の右手を握ってくる。

「ねぇレイ…」

「ん？どうした」

軽く手を引っ張られて、零牙は雅を上から覗き込むような格好になる。

「今夜は…一緒に寝て？」

「んなっ！？」

確かに今まで泊りがけで出かけて一緒に寝たことはある。だが、今回は話が違う。

零牙の自宅だ。つまり雅の家の真ん前。

「（万が一、岳（がく）さん（雅の保護者）にばれたら…間違いなく殺される！）いや…さすがにそれはな…」

若干顔をひきつらせながら零牙は逃げ道を探した。

「じゃあ……キスして…」

いつの間にか雅は普段と変わらない様子に戻っているが、零牙それに気づく余裕も無い。

それほどまでに零牙の理性は追い込まれているのだ。

雅は既に目を閉じている。いつの間にか掴まれていた手も緩んでいた。

「ミア…」

静かにそう呟くと零牙はそっと雅の唇に己の唇を重ねる。

誓いでもなんでもない…ただ想いを伝えるための口づけを…

†††††

―翌日―

「すみません昌彰さん、ほとんど何も出来なくて…」

都心へと向かう電車のホームで零牙と雅は昌彰とゆらの見送りに来ていた。

他の面々は復活にもうしばらく時間がかかりそうなのでまだ眠ったままだ。

「気にしなくていいよ。元々デジカメを返すために来たわけだし…データは消されちゃったけど…」

今回の訪問での本来の目的のデジカメであったが、返す前に雅とゆらに見つかり、データ抹消の憂き目にあっている。

「ハハハ……また撮りますからそれこそ気にしないでください」

力なく零牙は苦笑した。

「ああ。それとお土産ありがとうな」

そう言って昌彰は紙袋を持ち上げる。

中身は昨日の解決祝いに出されるはずだった料理だ。

ちなみにそのせいで朝食もかなり豪勢なものだった。

「今度また、ゆっくりできる時に来てください。文化祭の時とか」

「ああ、その時はまたよろしく頼む」

そう言って昌彰と零牙は拳をぶつけあった。

「ゆら、そろそろ出るぞ」

昌彰は向こうで雅と話しているゆらを呼ぶ。

「あ、うん！じゃあねミアちゃん！（頑張るんよ！）」

ゆらは雅に何事かを囁いてこちらに駆け寄って来た。

ゆらが乗り込むと同時に発車を告げるアラームが鳴り響く。

「じゃあまたな！零牙、雅ちゃん！」

「またねミアちゃん！零牙くんも！」

「もちろんです！昌彰さん、ゆらさんもお元気で！」

「ゆらさん、昌彰さんまた会いましょう！」

窓から身を乗り出すようにして別れを惜しむ四人。

電車は徐々に速度を上げ、やがてお互いの視界から消えていった。

――――

「そう言えばゆら、雅ちゃんと何を話してたんだ？」

ボックス席に座りなおした昌彰はゆらにそう聞いた。

「ん？ああ、おまじないを教えとったんや…悪いものが寄ってこないようにするおまじない」

「ああ、あれか…」

とてもいい笑顔でそう言うゆらに昌彰は苦笑すると携帯を開いた。

――――

「行っちゃったね」

少し寂しそうな声音で雅はそう呟いた。

「そうだな…。そろそろ戻った方がいいかな。たぶん他のみんなもそろそろ起きだすだろうし…」

「そうだね…」

零牙に促されて雅は改札の出口へと足を向ける。

「えっと…『ナウバギャバティアミリティアランジャヤタタギャタウン』」

零牙は歩きながら雅が呟いた呪文を聞き咎めた。

「ミア…その呪文…」

以前同じ呪文を昌彰が唱えていたのを聞いたことがあったから。

「あ、コレ？ゆらさんに教えてもらったんだ。レイに悪いものが寄り憑かないようにするおまじない」

嬉しそうにそう言って雅は再び呪文を唱える。

「『ナウバギャバティ…』（悪しきものが近寄ってきませんように…）」

一語一語に願いを込めて。

「『アミリティアランジャヤ』（怪我をしませんように）」

ただ愛しい人に危険が訪れることがないように。

「『タタギャタウン』（そして…レイが無事に帰ってきますように…）」

最後には必ず自分の許に帰って来てくれるように…

ただ一途な願いを込めて…。

（…確か、この呪文って悪いムシを寄せ付けないようにする呪文じゃなかったけ？）

以前昌彰から教えてもらった時のことを思い出して零牙は口元がヒクつくのをどうにか抑え込んだ。

それと同時に白い方の携帯が鳴る。

（昌彰さんから？…何か忘れ物でもあったのかな？）

そう思いながら零牙はメールを開いた。

『同じ呪文でも込められた想いで結果は変わってくる。大切なのは唱える心だよ。雅ちゃんの想いがそのまま効力になる』

まるで零牙の心の内を見透かしたようなメール。それを読んで零牙は苦笑した。

「（想い…か…）『ナウバギャバティアミリティ…』」

零牙は先程雅が唱えた呪文を反芻する。

「『アランジャヤタタギャタウン』」

ミアは絶対にオレが護るという決意を込めながら…

第三十三夜　白昼夜～交差する探偵と魔術師と陰陽師～？（後書き）

琥珀「コラボ編ついに終幕です！」

昌彰「異常に遅くなったのはこの際置いておこう。無事に終わったことが第一だ」

零牙「長かったですね…」

琥珀「ハハハ…コラボをお受けして約一年くらいになるかな？」

昌彰「長すぎだっての…」

琥珀「まあ、きちんと完成させられて一安心です。この最終話は途中で着陸地点を見失って迷走したりしたから」

零牙「一番の難所はどこでした？」

琥珀「やっぱり桜花の神との対話のところだね。キミの過去がまだ完全に明らかにされたわけじゃないから」

昌彰「かなり強引な仕上げだよな？」

琥珀「そう言わないで…自分でも多少無理やりだなって思ってるから」

零牙「けど最後のところはその…」

琥珀「雅ちゃんからの要望があったからね。出来る限り甘目を目指

してみた。ベタかもしれないけど…」

昌彰「ベッタベタだろう…」

琥珀「自分にはこれが限界だった…」

零牙「そして最後は微妙にまた繋がってますよね？」

琥珀「そう！実は再び昌彰とゆらが不知木町へ行っているのです！詳しくはこちら！←」

『本格推理委員会』桜花祭編　桜花祭・桜花祭での攻防？～？
ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ８３１８ｎ／７６／

昌彰「向こうでは再び戦闘、厄介な敵だな『天地逆転』…」

零牙「お二人に来てもらってホントに助かりましたよ…」

琥珀「ホントに活躍してるよね。二人とも」

昌彰「こっちではどうなるんだ？」

琥珀「そうだね。次はいよいよ京都編！の前に過去編だね。いよいよあの二人がやってくるよ！」

昌彰「とうとう来るのか…あのシス○ンが…」

零牙「たしかゆらさんのお兄さんでしたよね？シ○コンなんですか？」

琥珀「まあ、解釈によっては?さあて頑張って書こう」

昌彰「今年中には入れるのか?」

琥珀「まだ何とも…色々と現実も忙しいしね…」

零牙「それでは読者の皆様、コラボ編『白昼夜　～交差する探偵と魔術師と陰陽師～』、これにて終了になります。読んでいただきありがとうございました!」

琥珀「コラボを申し出ていただいた夢幻さん、遅くなりましたが本当にありがとうございました!未熟者ではありますが、今後ともよろしくお願いします!」

【番外編】初夢（前書き）

今年初めての更新です。元日に更新したかったんですが…
まあ初夢は一日から二日にかけて見る夢という説もあるからこれでもいい…かな？

【番外編】初夢

ピピッ、ピピッ！ピピピピピ…ガッ

目覚ましの音で目が覚める。日付は一月一日、時刻は午前五時半。
寝たのは三時過ぎだから睡眠時間は二時間ちょっと。

さすがに寝たりない…。もう一度寝なおすか…

寝返りを打って再び睡魔に意識を委ねた。だが沈もうとする意識をパタパタとスリッパが床を蹴る音が引き止める。

「昌彰、起きとる？」

起こしに来たであろうゆらの声が聞こえてくるが、無視だ。

総会に出て寝てないのだからもう少し寝かせてほしい…。

「しゃーないな～…二人ともお父さんを起こしてきてな」

反応のない俺に諦めたのか再びスリッパの音を響かせてゆらが去っていくのがわかった。

「（…ん、後一時間くらい）わ！？」

突如腹部に襲い掛かる二つの衝撃。それによって俺の意識は強制的に覚醒させられた。

「父さん！」「お父様！」

俺はその正体に気づいて身を起こした。

「…二人とも、起こすならもう少し優しくしてくれ」

布団の上に転がっているのは黒髪の双子。一人はゆらに似た女の子、もう一人は俺の幼少期によく似た男の子だ。

「今度からね～」「ね～」

二人の頭を撫でていると再び睡魔が襲ってきた…

「二人ともお父さん起こし…って、何しとるん…」

双子を抱きかかえたまま眠りにつこうとしたところで再びゆらが戻って来た。

「ほら二人とも着替えておいで。今日はおじいちゃんの所にも行くからね」

「「は～い」」

ゆらに言われて子どもたちは元気よく部屋を飛び出していった。

「まだ六時前じゃないか…七時にはちゃんと行くから…」

欠伸を噛み殺しながらベッドから出て着替えを始める。

「新年祝賀の儀に職場のトップがそれじゃ部下に示しがつかんのと違う？」

そう言いながら差し出してくる背広に袖を通して装備を確認する。

「それに先にあいさつに行っとかなお義父様からもなんか言われると思うけど？」

「ああ…そうだな」

仕込んである呪符と呪具を確かめ終えて降魔の剣を背へと収める。

「じゃあ行こうか、ゆら」

「うん！あなた」

†††††

『起きろ昌彰』

『いつまで寝てんのよ！いくら正月だからって遅すぎるわよ！』

腹部への二つの圧迫で昌彰は目を覚ました。

「玄武…？太陰？」

小柄な神将の二人が昌彰の上に乗っかっていた。

昌彰が首をひねって時計を見れば日付は一月二日の午前六時。

「え…っと、あれは…夢？」

徐々に昌彰の頭が覚醒し始めた。

『ん？初夢でも見たのか？陰陽師の夢はただの夢ではないが…どうした昌彰』

途中から真っ赤になった昌彰に玄武は訝しげに首を傾げた。

「いや、何でもない」

昌彰は熱くなった顔を振って熱を逃がすと布団から出る。

『今日は若明から一般参賀の警護を命ぜられてるんでしょ』

「そうだった」

太陰の言葉に昌彰は焦ったようにクローゼットからスーツを取り出した。

今日の仕事に当たり実家から送られてきたものだ。

手触りで上等なものだとわかる生地だが、さらに守りの呪（しゅ）も折り込まれている呪的防御も高い代物だ。

ゆらの方にも送られていたがそちらの方の中身は確認してない。

「ゆらの方はどうなってる？」

袂や懐に呪符と呪具を仕込み、それを着込むと昌彰はゆらの部屋へむかいながら朱雀に問う。

『今、天貴と天后が着付けている』

「ん？着付け…？ゆら準備済んだか？」

昌彰がそう疑問を呈する前にゆらの部屋の前へと到着する。

「お、お兄ちゃん！？ちょ、ちょっと待って！」

部屋の中からゆらの焦った声が聞こえてくるが天一が扉を開け放った。

『昌彰様、どうぞ』

満面の笑みを浮かべた天一に促されて昌彰はゆらの部屋へと足を踏み入れる。

「え…」

『いかがですか昌彰様』

一言発して固まった昌彰に天后がゆらの背を押して昌彰の前に進ませた。

「えっと…どう？お兄ちゃん」

そう言ってゆらはくるりと一周回って見せた。晴れ着の袖が風を孕んで翻る。

ゆらが纏っているのは白地に濃紺のグラデーション、それに紫の胡蝶蘭をあしらった振袖だ。

「に、似おうてへん？」

固まった昌彰に不安になったゆらはそう上目遣いで問いかける。

「あ、ああ…すまん、似合ってるぞ。凄く…」

昌彰が言葉に詰まった理由、それは夢に出てきたゆらの着物。

それが今着ているゆらの物を留袖にしたものだったから…

【番外編】初夢（後書き）

明けましておめでとうございます。
お正月ということで初夢ネタです。
時系列とかはあまり気にしないでください。

今年の抱負としては過去編、京都編を終わらせたいと思います。
二月の中旬くらいまでは試験の影響で更新が難しいとは思いますが
極力更新したいと思っております。

それでは、本年もよろしくお願いします。

※ちなみに「振袖」は『未婚の女性』の、「留袖」は『既婚の女性』
の礼装とされています。つまりはそういうことです。

第三十四夜　新たな陰陽師の来訪（前書き）

ようやく本編の更新です。
遅くなりましたm（＿＿）m
戦闘描写…進歩したかなぁ…？

第三十四夜　新たな陰陽師の来訪

リクオが若頭として四国の妖怪勢を返り討ちにしたことは妖怪任侠の世界では急速に広まっていった。

弱まっていた奴良組の“畏”の威光は再び回復を見せる。一時奴良組を離れていった者にも帰る者が増えた。

そしてもう一つ…あらたな噂が流れた。

“四国との百鬼夜行大戦の最中に、陰陽師の介入があった”

本来なら妖怪を滅するはずの陰陽師が奴良組の妖怪たちと肩を並べて闘ったという噂が流れ出したのである。

妖怪たちの間で囁かれるこの噂も奴良組の勢いを加速させる材料となった。

敵対勢力の妖怪たちはリクオの勢いを脅威と感じていた。

そして――

†††††

―浮世絵町、とある洋館―

廃墟と化した洋館の中で長身の影と小柄な影がその身に纏った黒い外套を翻した。

「ゆらと連絡はついたか？」

背後で妖怪の上げる断末魔をＢＧＭとしながら小柄な方―竜二は相方の魔魅流に問いかける。

「…いやまだ」

長身の影―魔魅流は表情一つ変えることなく短く答えた。

「あいつまさかこんな読み読みの手ェ使う奴らにまんまとやられたりはしてねーだろうーな」

竜二は口を歪めながら呟く。

（だが…あいつ《・・・》もいるか…）

竜二の脳裏をよぎるのは黙って出ていった妹を追っていった男の顔。

それを思い出して微かに不安が薄れるのを感じ、竜二は苦々しげに首を振ると魔魅流の方を振り返った。

「行くぞ魔魅流。ゆらを探すぞ」

竜二と魔魅流、二人の陰陽師は夜の浮世絵町へと足を踏みだした。

†††††

町外れの廃ビル。普段から人気もなく近隣の住民からも「お化けビル」などと呼称されている。

実際、ここには若い（妖怪基準で）現代妖怪たちが巣食っていた。

しかし、今はそれら人外の住人すらもいない。針の落ちる音すら聞こえそうな完全なる静寂がそのビルを覆っていた。

そしてその場に対峙する二人の人影。一方は白い狩衣を纏った小柄な少女。

もう一方は黒い狩衣を纏った痩身の少年。二人の間に流れる空気は極限まで張りつめていた。

「貪狼！」

突如として、静寂の中にゆらの声が響く。呪符入れから一枚の呪符を抜き放った。

その声に応えるように放たれた呪符は巨大な狼へと変貌する。

貪狼が眼光を向けた先にいるのは昌彰。

「勾陣！」

静かにゆらと対峙していた昌彰も己の式神を呼び、行動を起こした。

『承知』

一直線に昌彰へと飛びかかる貪狼の前に二振りの筆架叉を携えた勾陣が立ちはだかる。

ギィンッ！！

貪狼の爪と筆架叉が宵闇の空気を切り裂き、火花を散らした。

容赦なく急所を狙ってくる貪狼の爪を勾陣は筆架叉で防ぎ、時には身を捻ってそれを躱す。

『っく！？』

勾陣はゆらから何かが飛んでくるのを視界の隅に認めた。しかし回避しようにも貪狼がそれを許してはくれない。

首元を狙った貪狼の爪を剣腹で受け止め、腹部に突き立てられようとした牙を峰で凌ぐことで身動きを取れない勾陣の下に数枚の呪符が飛来する。

「『爆！』」

飛来した呪符はゆらの一声で発動した。瞬時に勾陣を取り囲み、ほとんど同時に爆裂を引き起こす。

避けようのない一撃。しかし勾陣は自らの神気を爆発させ、後方の爆発を相殺し、押してくる貪狼の力に逆らわずに跳躍することで距離を取っていた。

「…っ！貪狼！」

それに気付いたゆらが未だに爆発の土煙に覆われている貪狼に追撃を命じる。

空中で身を翻して体勢を立て直した勾陣はその牙を真っ向から受け

止めた。

「『困々々、至道神勅、急々如塞、道塞…』」

「（縛魔術！？）ッ、式神　巨門！」

こちらに昌彰が向かってくるのを見たゆらは一旦距離を取って、もう一体の式神を解き放つ。召喚されるは随一の巨体を持つ象の式神、巨門。

残っていた廃墟の塀は、巨門に踏み潰されて完全に瓦礫の山と化した。

「『…不通不起、縛々々律令』！」

昌彰が放った呪は縛鎖となって、ゆらを守るように立ちはだかる巨門を地へと縛り付ける。だが…

ビキッ…ピシッ！

「なっ！？」

鎖がひび割れる音に昌彰は驚きの声を漏らす。巨門はその巨体でもって縛魔の鎖を引きちぎったのだ。

「…朱雀！白虎！」

一瞬の動揺の後、昌彰は即座に次の行動に移った。即ち新たな式神の召喚。

『『承知！』』

巨門の目の前に顕現した朱雀が大剣でその牙を受け止める。

巨門はその鼻で朱雀を払いのけようとするが朱雀は力でそれを押しとどめた。

『白虎！』

『わかっている！』

神気を孕んだ風が巨門を抑え込まんと吹き下ろした。

『これで！』

風が新たな鎖となり、巨門は逃れようともがく。手負いの獣のようなその抵抗に朱雀は両腕に力を込め、白虎は鎖の強度を上げることでどうにか封じ込めた。

「式神　廉貞！人式一体！」

その一連の攻防の間にゆらは廉貞を召喚し、自らの腕と一体化させた。

「『放たるる風、さながら白刃のごとく』！」

その隙を突くようにして、昌彰も風の刃を放った。名もなき風神の刃が空を切り裂き、ゆらの下へと飛来する。

「武曲！」

『御意！』

ゆらの一声に応じて武曲は迫る風の刃を槍で払い、鎧で受け止め、弾き返す。

「黄泉送葬水銃ー！」

武曲が昌彰へと突っ込むと同時にその脇からゆらの砲撃が叩き込まれる。

「玄武！」

『承知！』

昌彰も黙ってやられはしない。顕現した玄武の波流壁がゆらの放った砲撃を受け止めた。

だが、武曲の歩みは止まらない。波流壁を槍で切り捨て、昌彰へとむかう。

それに対して昌彰も自ら間合いを詰めた。

『御覚悟！』

昌彰の行動に一瞬焦りを見せた武曲だったが、その剛腕で槍を振るう。

残光たなびく一閃が昌彰の肩口に吸い込まれ…

ギィンッ！

金属同士のぶつかり合う音を響かせて、武曲の槍は横へと逸れた。

昌彰の手に握られているのは両刃の剣、刀身の鋼そのものに退魔の力を封じ込めた“降魔の剣”だ。

『くっ…』

武曲は懐へと潜り込んだ昌彰に咄嗟に石突を横に振り抜いた。懐に入られては槍は使いにくい。

昌彰は身を低くすることでそれをかわす。そして一声呟いた。

「天后」

背後に回った昌彰に武曲は巧みに槍を操り、突きを繰り出す。だが…

『ぐぅっ！？』

槍を振るう腕が、いや全身が水で絡め取られてしまった。

左右には天后に玄武、二人の水将がこちらに手を翳して水を操って武曲を抑え込んでいる。

『助かりました玄武』

天后の言葉に玄武は黙然と頷いた。

周囲に水がない状況では空気中の水分を凝集させて水を呼び出すの

だが、玄武はゆらが放った水銃の水を流用したのだ。

『後は…』

そう言って玄武は背後を見やった。

――――

「くっ！」

ゆらは廉貞から昌彰にむけて水銃を連射する。

ザンッ！

「『裂破』！」

それでも昌彰の歩みを止めることはできない。

先程からゆらは手数で圧倒的に押しているのだが、昌彰はそれを剣で斬り、あるいは術で相殺し、あるいは身を捌いて凌いでいる。

もう既にお互いに出せる式神は出し尽くした。残るは術者同士の直接対決のみ。

「（やっぱり正面から撃っても効かへんか…）でも…これならっ！」

ゆらは廉貞に手を添え、短く唱えた。

「術式改造、散！」

再び廉貞から水銃が放たれる。昌彰は真正面から飛来するそれを斬ろうと刃を正眼に構えた。

だが…

「なっ！？」

ゆらの放った銃弾は飛翔の途中で九つに割れた。銃弾一つ一つは小さくなっているものの、それでも十分な威力を持つ。

慌てて身を捩ってかわした昌彰だが、続けざまに二射、三射目が放たれる。

「っ、『禁』！」

体勢を崩されている昌彰は障壁を張り、防御に回ることしかできない。

豪雨の如く叩きつけられる水銃の散弾に昌彰はその場に釘付けにされる。

「っ…はぁっ…はぁ…」

ゆらの息が乱れ、絶え間ない弾幕となっていた砲撃が一瞬止んだ。

まだ完全に散弾化を制御できていないためか消耗が激しいように見える。

昌彰はそれを好機と見たのか、一気に間合いを詰めにかかる。

散弾は接近してしまえば、十分に広がりきれずにその威力を発揮できない。

（これで最後や…）

正面から突っ込んでくる昌彰に再びゆらは銃口を向けた。

放たれる水銃。飛翔する銃弾は再び九つに割れて昌彰を襲う。

昌彰は動じることなく自分に当たる軌道の弾のみを斬り、ゆらへと突っ込む。

ゆらは続けざまに三発の水銃を放ち、袂を翻した。

三発の銃弾は割れることなくそのまま昌彰の元へと飛来する。

昌彰は冷静に弾道を見切り、身を捌いてそれをかわした。だが…

「『爆』っ！」

次の瞬間背後からの爆裂が昌彰を襲った。

「がっ！？」

銃弾の陰に隠れるようにして飛来した呪符。昌彰の背後に回ると同時にゆらは呪符を起爆させたのだ。

「（やった…？）なっ！？」

勝ったかと、ゆらが気を緩めた次の瞬間、昌彰の身体が急激に燃え上がった。焼け焦げた霊符がヒラヒラと宙を舞う。

「（式…ってことは本体が…）っ！？」

ゆらが気づいた時には既に身体が宙に浮いていた。

「ぐっ！」

咄嗟に受け身をとったゆらだったが、衝撃に思わず呻きを漏らした。

目を開けた時にはその喉元に降魔の剣が突き付けられていた。

「……っ…参りました…」

見下ろす昌彰にゆらは負けじと睨みつけていたが、そう言うと全身の力を抜いた。

「ああ、お疲れ様ゆら。立てるか？」

昌彰も刃を収めると張りつめていた緊張を霧散させ、ゆらを抱え起こした。

†††††

『どうだい？みんな見つかったかい？花開院さんと安藤さんは！！』

「あのねー！！浮世絵町中を探すったって広いんだからムリだよ～」

無線越しに聞こえる清継の声に巻が怒鳴り返す。

鳥居はゴミ箱を覗き込んでいるが猫じゃあるまいし…

『そんなことないよ!!あきらめなければいつかきっと通じ合えるさ。早くしないと夏休みが終わってしまうよ』

そう言って清継は一方的に通信を切ってしまう。

「無茶言うよな～清継くんは…みんなでゆらちゃんと安藤さんを探すなんて…」

「妖気でも感じ取れればいーんだけどね～」

そう話す巻と鳥居を尻目に氷麗は消えたリクオを探して視線を巡らせた。

（リクオ様…一体どちらに…？）

†††††

（やっぱりまだ勝てへんか…）

ゆらは溜息を吐きつつ自分の両手を見下ろした。

「ほい、ゆら」

「ひゃうっ!?」

いきなり頬に冷たい感触が襲い、ゆらは小さく悲鳴を上げた。

「あ、ありがとうお兄ちゃん…」

ゆらは差し出されたスポーツドリンクを受け取った。

その隣に昌彰も腰を下ろす。

「散弾か…よく考えたな、ゆら」

微笑みながら自分のペットボトルを口に運ぶ。

「でも…」

結局は勝てなかった…。全力ではないとはいえ、ここ数日にわたる修行の模擬戦では一度もたりともゆらが昌彰に勝てた試しがなかった。

「仕方ない面もあると思うが…」

元々ゆらと昌彰の戦いの相性が良くないというのもある。

「やっぱ接近戦の訓練もすべきなんかな…」

ゆらとて最低限の体術は身につけている。

とはいえゆらの戦いのスタイルは中距離に特化している。

前衛は完全に式神に任せているため式神を無力化されればかなり厳しい。

「…そうでもないだろ。ゆらは攻撃的な術に特化してるんだ。強み

を生かす方がいい」

「でも…」

ゆらの脳裏に甦るのは、先日の戦いで対峙した妖怪―玉章。そいつの持つ異様な刀だった。

ゆらの式神はその一閃で無力化されてしまった…。

（あの時…あいつがおらんかったら…）

あの時、妖怪の総大将―リクオが割って入らなければ確実にゆらと昌彰の命はなかった。

『そんなのお前の兄貴が望むわけねーだろーが！』

妖怪の総大将から言われた言葉…まるで昌彰の事をよく知っているような台詞だった。

その時も、学校でも、最初に会った一番街の時も…昌彰と共に、肩を並べて闘った。

「ゆら？」

黙り込んでしまったゆらに昌彰は視線を向ける。

「なあ…お兄ちゃん…。お兄ちゃんは…あいつの事を「やっぱりこっちにいたんですか。昌彰さん、花開院さん」…奴良…くん？」

ゆらの問いかけはリクオが現れたことで遮られた。

「よくここがわかったなリクオ」

相手がリクオだとわかって警戒を解いた昌彰は苦笑混じりにそう問いかけた。

「なんとなくですけどね。学校にほとんど来てないらしいから心配しましたよ」

「最低限の出席日数は確保してるからな…。一人か？」

昌彰は氷麗の姿がないことに疑問を浮かべ、そう問いかけた。

「ええ、清継くんの提案で手分けして二人の事を探してて…。また旅行の計画を立ててるみたいで」

「また無断で…まああいつらしいと言えばあいつらしいが…」

そう言って清継に対して苦笑を漏らす昌彰とリクオを見て、ゆらの脳裏に四国戦の折に感じた疑問が再び甦った。

（あいつの言葉…お兄ちゃんをよく知ってるみたいやった…それにあの時…）

巨大な狸妖怪と共に現れたリクオの祖父―ぬらりひょん。あの状況で無関係であるとは考えにくい。

（アカン…一度疑うと悪い方に辻褄があってまう…でも…）

「ゆら」

ふとその場に新たな人間の声が割り込んだ。

「やっと見つけたぜゆらぁ…」

残された塀の残骸の影から現れたのは黒いコートを纏った小柄と長身の二つの影。

「…竜二兄ちゃん…？」

ゆらの兄にして昌彰の義兄…花開院竜二の姿だった。

第三十四夜　新たな陰陽師の来訪（後書き）

琥珀「今回は術師同士の戦闘をメインにしてみました」

昌彰「必要だったか？コレ」

琥珀「いや、蛇足かな？と思ったけどせっかく二人なら実戦形式の修行にしようって考えたんだよ」

昌彰「で、中途半端なところで切ったわけだが」

琥珀「ちょっと難しいところに入ったからね。出来たところまで。…筆が進まない」

昌彰「さっさと書け、と言いたいところだが…」

琥珀「ごめんなさいｍ（＿　＿）ｍ試験前だから勘弁してください」

昌彰「はぁ…聞き飽きたぞその台詞」

琥珀「自分も言い飽きたよ！でも試験は無情にも迫って来るんだよ」

昌彰「はぁ…読者の皆様、このバカ作者を蹴り飛ばしてでも書かせますのでまたしばらくお待ちください」

琥珀「頑張ります…それでは、また次話お会いしましょう」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3110p/

浮世絵町　孫と孫の血を継ぐ者

2012年1月14日01時51分発行